

# 奥古墳群

1985年3月

島根県 鹿島町教育委員会

おくさい

# 奥才古墳群

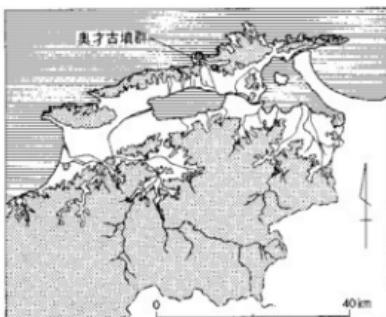


1985年3月

鹿島町教育委員会

おくさい

# 奥古墳群



1985年3月

鹿島町教育委員会



卷頭圓版 上；14号墳第1主体内行花文鏡・方格渦文鏡・紡錘車形石製品、下；34号墳捩文鏡・石銅

# 序

この報告書は、鹿島町が昭和56年度から58年度まで3箇年にわたって実施した奥才古墳群発掘調査の記録であります。

鹿島町には、宝庫といわれるほど数多くの文化財があります。縄文時代の史跡佐太講武貝塚、弥生時代の古浦砂丘遺跡をはじめとして、数多くの遺跡・古墳は、郷土の未来を考える上での指針となると同時に、町民の誇りとするところでもあります。

今回の発掘調査は、鹿島町土地開発公社が住宅団地を造成するに先立って実施しましたが、当初の予想を全く覆す大規模な古墳群であることなど重大な発見が相次ぎ、広く各界の注目を集めることとなりました。こうした糺余曲折を経た調査も、ここに発掘調査報告書を刊行することによって、ようやく一段落の運びとなりました。奥才古墳群は、当鹿島町ばかりでなく、出雲地方の古代史を解き明かしていく上で、きわめて貴重な資料を提供したものといえましょう。調査にあたっては、調査指導者団の先生方の度重なるご指導をいただきましたが、住宅団地造成という事業の性格から、この遺跡を原形で保存することができなかつたことは残念であります。しかし、鹿島町土地開発公社のご理解を得、また関係者の尽力により一部を縁地として保存することができましたことは、ささやかながらも救われた感がいたします。

この報告書が各方面で活用され、多少とも文化財に対する理解が深まるならば、これにまさるよろこびはありません。

最後になりましたが、調査にあたってご指導・ご協力を賜りました関係諸機関、各位に厚くお礼申し上げて、報告書発刊のごあいさつとさせていただきます。

昭和60年3月

鹿島町教育委員会

教育長 加 納 益 雄



# 例　　言

1. 本書は、島根県八束郡鹿島町大字名分<sup>なまべ</sup>に所在する奥才古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大字名分地内にある丘陵上に計画されたオノ丘住宅団地造成にともない、鹿島町土地開発公社の委託を受けた鹿島町教育委員会が、島根県教育委員会の指導・協力のもとに行った。
3. 奥才古墳群は、総数約50基の古墳群と考えられるが、このうち最終的に26基が発掘調査の対象となり、昭和56年8月から昭和58年8月まで、3箇年度にわたって発掘調査を実施した。
4. 発掘調査にかかる経費は鹿島町土地開発公社が、調査後の整理および、報告書刊行の経費は鹿島町が負担した。
5. 調査にあたっては、木村静夫氏など地元の方々をはじめ、関係諸機関の献身的な協力をいただいた。記して謝意を表したい。
6. 調査実施にあたっては、国土座標を基準として10×10mを1単位とする方限を設定した。よって挿図中の矢印は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。したがって、磁北より7°12'、真北より0°32'東の方向を示している。ただし、第134図のみは矢印は磁北を示している。
7. 本書の編集・執筆は、調査員、調査補助員、事務局員が行い、文責は日次に記すとおりである。また、上記以外にも下記の方々にも原稿執筆を依頼し、ご寄稿いただいた。

（敬称略、順不同）

井上晃孝（鳥取大学医学部法医学教室助教授）

沢田正昭（奈良国立文化財研究所遺物処理研究室長）

三島欣二（島根県立松江北高等学校教諭）

8. 揭載図面の縮尺は、等高線図1/200、遺構図1/40、土層図1/100、出土土器1/3、玉、鉄器1/2を原則としているが、これに従えないものもあり、それについては、その都度縮尺を明記するようにした。
9. 出土遺構・遺物の整理、実測、製図、写真撮影等は調査員、調査補助員が行い、X線写真については、財團法人元興寺文化財研究所、島根県立工業技術センター、島根医科大学医学部付属病院放射線科で撮影していただいたものである。



# 目 次

第1章 調査に至る経緯 .....	曾田 .....	1
第2章 調査の経過 .....		2
第1節 調査経過 .....	三宅 .....	2
第2節 調査体制 .....	松本 .....	6
第3章 位置と歴史的環境 .....	赤沢 .....	8
第4章 調査の概要 .....		12
第1節 支群構成 .....	三宅 .....	12
第2節 第Ⅲ支群 .....		15
(1) 1号墳 .....	赤沢 .....	15
(2) 2号墳 .....	タ .....	28
(3) 3号墳 .....	タ .....	28
(4) 4号墳 .....	タ .....	31
(5) 5号墳 .....	三宅 .....	34
(6) 6号墳 .....	タ .....	39
(7) 7号墳 .....	広江 .....	40
(8) 28号墳 .....	赤沢 .....	41
(9) 8号墳 .....	広江 .....	42
(10) 9号墳 .....	道上・広江 .....	46
(11) 10号墳 .....	タ・タ .....	47
(12) 積穴住居状遺構 .....	三宅 .....	51
(13) 第Ⅲ支群出土遺物 .....	赤沢 .....	52
第3節 第Ⅳ支群 .....		59
(1) 11号墳 .....	広江 .....	59
(2) 29号墳 .....	赤沢 .....	62
(3) 階段状遺構 .....	タ .....	64
(4) 30号墳 .....	三宅 .....	68
(5) 38号墳 .....	広江 .....	68
(6) 12号墳 .....	タ .....	73
(7) 31号墳 .....	タ .....	80

(8) 第IV支群出土遺物	赤沢	82
第4節 第V支群		87
(1) 39号墳とその周辺遺構	三宅	87
(2) 39号墳	タ	87
(3) 麒麟墓	タ	93
(4) 土塚1	広江	94
(5) 13号墳	三宅	97
(6) 炭化物土塚	赤沢	105
(7) 14号墳	三宅	106
(8) 石蓋土塚	タ	124
(9) 33号墳	タ	128
(10) 34号墳	タ	130
(11) 35号墳	広江	136
(12) 16号墳	赤沢	140
(13) 15号墳	タ	142
(14) 第V支群出土遺物	タ	143
第5節 第VI支群		145
(1) 17号墳	道上・赤沢	148
(2) 18号墳	タ・タ	155
(3) 第VI支群出土遺物	赤沢	158
第6節 第VII支群		161
(1) 32号墳	赤沢	162
(2) 43号墳	タ	165
(3) 第VII支群出土遺物	タ	165
第7節 第I支群	三宅	167
(1) 19号墳	タ	168
第5章 小結	三宅・広江・赤沢	169
第6章 特別寄稿		181
第1節 出土人骨	井上晃孝	181
第2節 出土鏡の非破壊分析	沢田正昭	187
第3節 奥才古墳群の石材について	三島欣二	190

## 挿図目次

第1図 奥才古墳群とその周辺の遺跡	8
第2図 佐太前遺跡出土遺物実測図	9
第3図 志谷奥遺跡銅鐸・銅劍出土状況復元	9
第4図 名分丸山古墳群測量図	10
第5図 講武岩屋古墳実測図	10
第6図 講武地区条里制地割図	11
第7図 奥才古墳群配圖	13
第8図 1・2号墳墳丘測量図	14
第9図 1号墳土層図	15
第10図 1号墳竪穴式石室実測図	17・18
第11図 1号墳石室内遺物出土状態実測図	19
第12図 1号墳埴輪出土状態実測図	20
第13図 1号墳溝内遺物出土状態実測図	21
第14図 1号墳石室内出土遺物実測図	23
第15図 1号墳出土埴輪実測図(1)	24
第16図 1号墳出土埴輪実測図(2)	25
第17図 1号墳北側溝出土土須恵器実測図	26
第18図 3号墳墳丘測量図	29
第19図 4・5号墳墳丘測量図	30
第20図 4号墳土層図	31
第21図 4号墳主体部実測図	32
第22図 4号墳西溝底土壤実測図	32
第23図 4号墳階段状遺構実測図	33
第24図 5号墳第1主体実測図	34
第25図 5号墳第1主体出土遺物実測図	35
第26図 5号墳第2主体実測図	35
第27図 5号墳階段状遺構実測図	36
第28図 5・6号墳土層図	37
第29図 6・7・28号墳墳丘測量図	38

第30図	6号墳主体部実測図	39
第31図	7号墳土層図	39
第32図	7号墳主体部実測図	40
第33図	28号墳土層図	41
第34図	8号墳出土状態実測図	42
第35図	8号墳墳丘測量図	43
第36図	8号墳土層図	43
第37図	9・10号墳墳丘測量図	44
第38図	9・10号墳土層図	45
第39図	9号墳斜面土師質上器出土状態実測図	46
第40図	9号墳斜面出土遺物実測図	47
第41図	10号墳古墓実測図	48
第42図	10号墳古墓出土十五輪塔実測図	48
第43図	10号墳第1・第2主体実測図	49
第44図	10号墳出土遺物実測図	50
第45図	10号墳第3主体実測図	50
第46図	堅穴住居状遺構実測図	51
第47図	第Ⅲ支群出土遺物実測図(1)	54
第48図	第Ⅲ支群出土遺物実測図(2)	55
第49図	第Ⅲ支群出土遺物実測図(3)	56
第50図	第Ⅲ支群出土遺物実測図(4)	56
第51図	11・29号墳土層図	59
第52図	11・29号墳墳丘測量図	60
第53図	11号墳主体部実測図	61
第54図	11号墳主体部出土遺物実測図	62
第55図	29号墳第1主体実測図	63
第56図	29号墳第2主体実測図	64
第57図	11号墳北東階段状遺構実測図	65
第58図	29号墳西隣段状遺構実測図	66
第59図	30・38・12号墳墳丘測量図	67
第60図	30号墳主体部実測図	68

第61図	30・38号墳溝実測図	69
第62図	38号墳溝内遺物出土状態実測図	70
第63図	38号墳溝内出土遺物実測図	71
第64図	12・31号墳土層図	72
第65図	12号墳第1主体実測図	74
第66図	12号墳第2・第3主体実測図	75
第67図	12号墳第3主体遺物出土状態実測図	76
第68図	12号墳第1・第3主体出土遺物実測図	77
第69図	12号墳土師器壺出土状態実測図	78
第70図	12号墳1号壺実測図	79
第71図	12号墳2号壺実測図	80
第72図	31号墳墳丘測量図	81
第73図	31号墳主体部実測図	81
第74図	第IV支群出土遺物実測図(1)	83
第75図	第IV支群出土遺物実測図(2)	84
第76図	39号墳とその周辺構造実測図	87
第77図	39号墳第1・第2主体実測図	88
第78図	39・13・14号墳墳丘測量図	89・90
第79図	連結甕出土状態実測図	92
第80図	連結甕実測図	93
第81図	土壤1実測図	94
第82図	土壤1出土遺物実測図	94
第83図	39・13・14号墳土層図	95・96
第84図	13号墳第1主体実測図	99・100
第85図	13号墳第2主体実測図	101・102
第86図	13号墳土師器壺出土状態実測図	103
第87図	13号墳土師器壺実測図	104
第88図	13号墳出土石器実測図	105
第89図	炭化物土壤実測図	105
第90図	14号墳甕出土状態実測図	107・108
第91図	14号墳第1主体実測図	111・112

第92図	14号墳第1主体遺物出土状態実測図	113
第93図	14号墳第1主体石棺外出土遺物実測図(1)	114
第94図	14号墳第1主体石棺外出土遺物実測図(2)	116
第95図	14号墳第1主体石棺内出土遺物実測図	118
第96図	14号墳第2主体実測図	121・122
第97図	14号墳第2主体出土遺物実測図	123
第98図	石蓋土壤実測図	125
第99図	33・34・35号墳墳丘測量図	126
第100図	33・34号墳土層図	127
第101図	33号墳主体部実測図	129
第102図	34号墳上師器および下師器内遺物出土状態実測図	131・132
第103図	34号墳土師器壺実測図	134
第104図	34号墳土師器壺内出土遺物実測図	135
第105図	35号墳土層図	136
第106図	35号墳主体部実測図	137
第107図	15・16号墳調査前墳丘測量図	138
第108図	16号墳調査終了時墳丘測量図	139
第109図	16号墳土層図	140
第110図	16号墳墳壁主体部実測図	140
第111図	16号墳溝状遺構実測図	141
第112図	16号墳土壙1実測図	142
第113図	16号墳土壙2実測図	142
第114図	第V支群出土遺物実測図(1)	143
第115図	第V支群出土遺物実測図(2)	144
第116図	第VI支群地形測量図	146
第117図	17・18号墳墳丘測量図	147
第118図	17号墳第1主体出土遺物実測図	148
第119図	17号墳第1主体実測図	149・150
第120図	17号墳第1主体石棺材加工痕拓影図	151
第121図	17・18号墳土層図	152
第122図	17号墳第2主体実測図	153

第123図	17号墳第3主体部実測図	154
第124図	18号墳主体部実測図	155
第125図	18号墳主体部出土白玉尖測図	156
第126図	18号墳主体部出土白玉法量分布図	156
第127図	第VI支群出土遺物実測図(1)	159
第128図	第VI支群出土遺物実測図(2)	160
第129図	32・43号墳墳丘測量図	161
第130図	32・43号墳土層図	161
第131図	32号墳主体部尖測図	163
第132図	32号墳主体部出土遺物実測図	163
第133図	32号墳石棺材加工痕拓影図	164
第134図	第VII支群出土遺物実測図	166
第135図	19号墳墳丘測量図	168
第136図	19号墳土層図	168
第137図	奥才13・14号墳蓋石比較図	169
第138図	奥才古墳群墳丘・主体部相關図	171
第139図	奥才古墳群主体部頭位一覧図	172
第140図	17号墳第1主体部出土頭蓋骨図	183
第141図	内行花文鏡のX線分析	189

## 表 目 次

第1表 1号墳出土土器観察表	27
第2表 第Ⅲ支群 遺構に伴わない遺物観察表(1)	57
第3表 第Ⅲ支群 遺構に伴わない遺物観察表(2)	58
第4表 第Ⅳ支群 遺構に伴わない遺物観察表(1)	85
第5表 第Ⅳ支群 遺構に伴わない遺物観察表(2)	86
第6表 18号墳出土白玉計測表	157
第7表 奥才古墳群遺構一覧表(1)	176
第8表 奥才古墳群遺構一覧表(2)	177
第9表 残存歯牙とその箇列	184
第10表 性別・年齢別の身長	185
第11表 発光分光分析による多元素同時測定	186
第12表 内行花文鏡のX線分析	188
第13表 X線強度比と回帰直線	189
第14表 参考資料2面の組成とX線分析値	189
第15表 1号墳石室石材一覧表	190
第16表 箱式石棺石材一覧表(1)	190
第17表 箱式石棺石材一覧表(2)	191
第18表 主体部床面の円礫一覧表	191
第19表 34号墳土師器壺中の礫質一覧表	192

## 図版目次

卷頭PL. 1	… 14号墳第1主体內行花文鏡・方格渦文鏡・紡錘車形石製品、34号墳擬文鏡・石劍
PL. 1	… 航空写真 奥才古墳群周辺
PL. 2	… 1・2・3・4・5・6・7・8・28号墳遠景、1・2・3号墳近景
PL. 3	… 1号墳全景、1号墳周溝内須恵器出土状態
PL. 4	… 1号墳竪穴式石室、1号墳竪穴式石室内遺物出土状態
PL. 5	… 1号墳竪穴式石室構築状態①、②、③
PL. 6	… 4・5・6・7・8・28号墳遠景調査前 4・5・6・7・8・9・10・28号墳遠景調査後
PL. 7	… 4号墳全景、4号墳主体部
PL. 8	… 5号墳第1・第2主体部、階段状遺構
PL. 9	… 6号墳墳丘土層断面、6号墳主体部
PL. 10	… 28号墳全景、7号墳主体部
PL. 11	… 9号墳全景、9号墳遺物出土状態
PL. 12	… 10号墳全景調査前、10号墳全景調査後
PL. 13	… 10号墳遺物出土状態五輪塔、10号墳古墓・第1主体部
PL. 14	… 10号墳古墓遺物出土状態鉄器・歯牙、10号墳第2主体部
PL. 15	… 10号墳第3主体部、竪穴住居状遺構
PL. 16	… 11・29・30・38号墳遠景調査前、11・29・30・38・12号墳遠景調査後
PL. 17	… 11号墳主体部、11号墳主体部遺物出土状態
PL. 18	… 11号墳主体部・階段状遺構、階段状遺構
PL. 19	… 11号墳・29号墳周溝内土層断面、29号墳上階段状遺構
PL. 20	… 29号墳第1・第2主体部、29号墳第1主体部
PL. 21	… 30号墳全景調査後、30号墳全景
PL. 22	… 38号墳全景調査後、38号墳周溝内遺物出土状態
PL. 23	… 12号墳全景調査前、12号墳第1・第2・第3主体部
PL. 24	… 12号墳第1主体部、12号墳第1主体部礫除去後
PL. 25	… 12号墳第1主体部遺物出土状態（刀子）、12号墳第1主体部遺物出土状態（鎌） 12号墳第1主体部礫床断面
PL. 26	… 12号墳壺棺、12号墳第2・第3主体部

P L.27	12号墳第3主体部、12号墳第3主体部遺物出土状態
P L.28	31号墳全景調査後、31号墳主体部
P L.29	13・14号墳遠景
P L.30	39号墳全景、39号墳第1主体部
P L.31	連結甕出土状態、連結甕
P L.32	13号墳全景、13号墳第2主体部上石材出土状態
P L.33	13号墳第1・第2主体部
P L.34	13号墳第1・第2主体部
P L.35	13号墳第1主体部、13号墳第2主体部
P L.36	13号墳墳丘上遺物出土状態土師器
P L.37	13号墳墳裾蔽石等出土状態、13・14号墳間土塙
P L.38	13・14・33・34・35号墳遠景調査後、14号墳全景調査前
P L.39	14号墳第1・第2主体部、14号墳第1主体部
P L.40	14号墳第1主体部、14号墳第1主体部遺物出土状態
P L.41	14号墳第1主体部副室、14号墳第1主体部副室断面
P L.42	14号墳第1主体部遺物出土状態素環頭大刀・鉄槍・劍
P L.43	14号墳第2主体部
P L.44	14号墳第2主体部遺物出土状態劍・鉄鎌、14号墳石蓋上塙
P L.45	33・34・35号墳遠景調査前、33・34・35号墳調査後
P L.46	33号墳主体部上面、33号墳主体部
P L.47	34号墳土師器出土状態、34号墳土師器内襯出土状態
P L.48	34号墳土師器内遺物出土状態鏡・石剣、34号墳土師器内遺物出土状態勾玉
P L.49	35号墳主体部、16号墳全景
P L.50	16号墳墳裾主体部、16号墳土塙1
P L.51	17号墳全景調査前、17号墳全景調査後
P L.52	17号墳全景、17号墳第1主体部
P L.53	17号墳第1主体部、17号墳第1主体部石棺内人骨・刀子出土状態
P L.54	17号墳第1主体部石材加工痕・第1主体部石材接合部
P L.55	17号墳第2主体部幕襯出土状態、17号墳第2主体部
P L.56	17号墳第3主体部、18号墳全景調査前
P L.57	18号墳全景調査後、18号墳主体部

P L.58	F IX遺物出土状態須恵器・棗玉、K区全景
P L.59	32号墳全景調査前、32号墳全景調査風景
P L.60	32号墳全景調査後、32号墳主体部
P L.61	32号墳主体部遺物出土状態鉄剣、32号墳墳丘上遺物出土状態須恵器
P L.62	19号墳遠景、19号墳墳裾
P L.63	1号墳主体部出土遺物 刀・刀子・管玉
P L.64	1号墳主体部出土遺物 須恵器蓋杯
P L.65	1号墳出土遺物 墳輪
P L.66	1号墳出土遺物 墳輪・須恵器甕
P L.67	5・7・9・10号墳出土遺物
P L.68	38・11号墳出土遺物
P L.69	12・39・32号墳出土遺物
P L.70	12号墳出土土師器壺
P L.71	13号墳出土土師器壺
P L.72	14号墳第1主体部棺内出土遺物
P L.73	14号墳第1・第2主体部出土遺物
P L.74	14号墳第1主体部出土 剣、大刀、鐵槍(X線・細部)
P L.75	34号墳出土土師器壺
P L.76	34号墳出土遺物
P L.77	17・18号墳、第VI支群出土遺物
P L.78	第III支群出土遺物
P L.79	第IV支群出土遺物
P L.80	第V・VI支群出土遺物
P L.81	第V・VII支群出土遺物
P L.82	14号墳第1主体部、17号墳第1主体部出土人骨



## 第1章 調査に至る経緯

鹿島町土地開発公社は、優良住宅用地の確保により地域の発展と町民の生活環境の向上をはかるために、鹿島町大字名分地内で住宅団地造成事業を計画し、島根県知事あてに開発協議書（昭和56年2月1日付）を提出した。当時、鹿島町文化財包蔵地台帳には、この造成予定区域内にいわゆる周知の埋蔵文化財の記載はなかった。しかし、3月19日の島根県土地利用調整会議を経て、同月24日付「土地利用調整会議にかかる開発事業と埋蔵文化財保護との調整について」で、島根県教育委員会から事前の遺跡分布調査実施の指示があった。

一方、数年来同町講武平野の遺跡調査を行って来た島根大学考古学研究会も注目するところとなり、3月30日、「佐太・講武地区における遺跡目録」を本町教育長に提出している。

そこで、鹿島町教育委員会は4月7日、県教委に依頼をして町土地開発公社の立会いのもとに遺跡分布調査を実施した。その結果、開発予定区域内に古墳4基と砦跡（後に古墳と判明）2箇所、区域外に古墳3基を発見し、町土地開発公社は遺跡発見通知書（4月13日付）を文化庁に提出した。

以後、関係者間で度々協議を重ね、5月7日に県教委の指導のもと、鹿島町・町土地開発公社・町教委の4者で取り扱いについての協議を行い、開発事業に先立って調査を実施することで合意に達した。次いで町土地開発公社は埋蔵文化財発掘通知書（5月14日付）を、町教委は埋蔵文化財発掘調査通知書（7月1日付）を文化庁に提出し、7月25日には、町と町土地開発公社の間で、調査費は事業者負担という埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。

7月下旬には鹿島町文化財保護審議会の意見を聞き、8月4日の調査指導者の会では調査計画、調査方法について指導を受け、8月5日に調査員1名で発掘調査に着手した。

調査開始後も立木伐採が進むにつれて新たに古墳が発見されてきたが、最終的には開発予定区域内で古墳30基中26基及び横穴推定地等を、2箇年をかけて発掘調査するに至った。また、事業者町土地開発公社の理解を得て、2・3・15号墳の3基を現状保存、19号墳1基を一部保存している。

## 第2章 調査の経過

### 第1節 調査経過

本遺跡の調査は、1981年8月4日から1983年8月4日まで、丸2年をかけて実施した。

調査を実施するにあたって、調査対象地区全域に国上座標を基準とする $10 \times 10\text{m}$ を1単位とした方眼を設定した。方眼の設定は次の順序で行った。まず丘陵中央部の北辺に沿わせて、基準となる東西軸を設定し、その線上に、西から東方へ $10\text{m}$ 間隔で0・1・2……33と数字を付した。次に東西軸の0を基点として南に延びる南北軸を設定し、基点から南へ $10\text{m}$ 間隔でA・B・C……Zと付した。そして各地点から基準線に対し直角に軸線を下ろし、その交点をもってグリッドの呼称とした。

調査は伐採の終了した地域内の墳丘測量を縮尺100分の1で行い、その後、墳丘中央で十字に交差するように土層観察用畦を設定し、遺構の検出に努めた。

**1981年度調査** この年の調査は道上康仁を担当者として、8月から'82年3月末まで実施した。9・10・17・18号墳の計4基を発掘した。9号墳からは主体部を検出し得なかったが、10号墳からは主体部3と古墓1、17号墳からは主体部2、18号墳からは土壙1を検出した。

**1982年度調査** この年の調査は三宅博士を担当者として再開したが、再開にあたり鹿島町土地開発公社から、工事の関係上9月下旬までに工事対象地区内の全調査を完了してほしいとの要請があった。同地区内には20基以上の未調査の古墳があり、さらに横穴の存在も予測されたため、要請に応えるのはとうてい不可能と考えられたが、調査は4月12日から再開された。調査はまず工事再開の際に最初に消滅すると考えられる17号墳の精査を行い、新たに第3主体を検出した。

その後開発公社より13・14号墳から調査を行うよう要請があった。当初の計画では、第IV・第V支群の削平で得られる土量によって谷間をうずめ、造成を行うことになっており、13・14号墳の調査結果如何では、造成計画の変更も想定された。両古墳は各支群の配置から見ても扇の要的位置を占めるものであり、その築造時期と内容は、本古墳群の形成等の鍵を握るものと目されていた。この調査は5月上旬から着手した。好天に恵まれたものの、墳丘頂部の土が乾燥のあまり亀裂が生じ、土色が全く観察できない状態となつたため、墳頂部に塩化カルシウムと水を散布し、湿気を与えたうえで遺構を検出する方法をとった。結果、13号墳墳頂南西隅から古式土師器大壺1個体分を検出し、また中央とやや南寄りに箱式石棺2基が埋置されていることが判明した。

7月14日、開発公社から'82年度第I期工事と'83年度第II期工事の着工と入札が公表され、発掘

作業を急ぐ旨の要請があった。第Ⅰ工事の造成地にあたる第Ⅲ支群の6号墳以来の6基、第Ⅳ支群の全6基、第V支群の39号墳から35号墳までの6基、第VI支群の全2基の計22基を、'82年度内に完了するようにとの事であった。

13号墳墳頂部の調査と平行して行っていた13号墳北側テラスでは、平面「コ」の字状の溝で墓域を区画する39号墳を検出した。また、39号墳の東側では甕棺墓と考えられるもの1と、用途不明の土壙1を検出した。

これらの調査と平行して、7月下旬から約1ヶ月に亘って33~35号墳の調査を行った。33号墳は狭長な二段掘土壙、36号墳もほぼ同様な規模の深掘り土壙であった。両墳の間にある34号墳では墳丘中央で土師器を埋納した土壙1を検出した。この土師器の取り上げは急を要したため、次のような方法で作業を行った。まず平面図にレベルを記入し、さらに土師器と土壙の立面図を現地で作成し、その後、亀裂の生じた土師器を和紙に梱包し、網をかけて天秤棒で釣り上げて移動し、室内で解体することとした。取り上げに急を要したのは、以下のような事情による。13・14号墳東側斜面で横穴の存在が予想されていたが、その調査時に出る多量の排土の捨場の適地が決まらなかつた。当初、斜面下方の林が考えられたが、この地は木買取地であり共有地でもあるため早急に承諾が得られそうもなかつた。そこで14号墳と33号墳との間に排土運搬用の大溝を切り、西側の谷に捨てる方法がとられることとなり、33~35号墳の調査終了が急がれたのである。

この間14号墳の調査も平行して実施した。ここでは表土除去時に指頭大の礫が散見されたので、この時点では、箱式木棺の床面に礫を敷きつめた主体部が樹根によって破壊されたものであろうと判断された。しかし、その出土状態に疎密性が認められたため、表土を除去しながら1点ずつ礫の平面分布と垂直分布を記録することとした。この方法によれば、主体部は破損していても埋納位置を推すことが可能になるとえたからである。そして9月15日、14号墳は13号墳と同様な箱式石棺2基が検出され、前述した礫は主体部上面掘り形をおおう形で散布されたものであることが知られるに至つた。13号墳側に位置する第1主体部は非常に入念な造りで、棺外で鉄剣、素環頭大刀等、棺内で内行花文鏡、方格渦文鏡等が副葬されており、第2主体にも鉄剣、鉄鏃等が副葬されていた。また、両者とも礫床をもつていた。

第Ⅲ支群の32号墳の調査では溝1条と箱式石棺1基を検出した。

9月27日、室内へ持ち帰った34号墳の土師器壺の梱包を解体したところ、壺内には肩部あたりまで礫が詰めこまれており、その上面に石劍・摸文鏡・勾玉が納められていた。

14号墳および34号墳の調査の結果、各古墳は古墳時代前期後半から順次築造されていったものであろうと推測される資料を得、またその内容も前期大形古墳にみられる副葬品に劣らぬものであつた。

10月7日町教育委員会で開催された調査指導の議場において、山本清（県文化財保護審議会委員）、門脇俊彦（松江市津田小学校教諭）、田中義昭（島根大学文学部助教授）各氏から、①これまで古墳といえば畿内においても地方においても、大規模なもののみが研究対象とされてきたきらいがあったが、今回の調査結果によって、古墳そのものの再考が必要となったこと、②地方のこのような実例によって古墳文化の実態がさらに明らかになるという点で、重要な意味をもつこと、③奥才古墳群の位置する講武平野では、最も古いものであろう、等の指導を得た。それに加えて、遺跡の取り扱いについては文化庁の指導も十分考慮した上で行うようにとの助言があった。

10月の調査によって、これまで山径によって主体部等そのほとんどが損われているものと考えられていた第IV支群は、38号墳を除いて、他の5基は主体部が残存していることが判明した。12号墳では主体部3を検出し、第1主体部北西隅から土師器窯、第3主体部から珠文鏡・管玉が出土した。11号墳では狹長な二段掘土壙中央に砾床構造の土室部1を、29号墳では砾床構造の土壙、素掘土壙各1を、30号墳では砾床構造の土壙1を、31号墳では二段掘土壙を検出した。さらに11・29号墳間の溝北端では階段状の造構を検出した。なお38号墳では主体部は損されていたものの、墓域を区画する溝の南端で古式須恵器蓋杯1対、土師器高杯5が出土した。

10月9日、19号墳頂部に工事用造方が設定されているのを確認したので工事関係者に札したところ、古墳とは知らずに行ったもので、浄化装置場所はこの地しかないとのことであった。早速町教委・開発公社および業者が協議を行った結果、西側墳壙の一部について調査が必要と判断された。そして19日から26日の調査で、墓域を区画する浅い溝とみられる落ち込みを検出した。

翌27日から、作業員人数・重機等の確保が困難なため約2ヶ月近く遅れて、横穴の存在が予想されていた13・14号墳東側斜面の表土除去作業を開始する。しかし、表土に混じって石器・須恵器杯・古鏡等を得たのみで、横穴の検出にはいたらなかった。

11月2日、文化庁河原純之調査官を現地に迎え、調査方法等の指導を得た。13・14号墳の取扱いについては、これまでの経緯から現状保存は困難であると考えられるので、十分な調査期間を確保するようとの助言であった。

11月下旬第IV支群調査完了、12月6日、13号墳墳丘断割りとともに、32・39・13・14号墳の各石棺を解体し梱包を行う。なお、13・14号墳の各石棺は、町内東小学校校庭に移築するがすでに決定していたため、その日の内に運搬を終了した。

12月10日、第IV・第V支群で工事者側の削平作業始まる。

その後、調査の主力を第III支群に移すこととし、8~10号墳の再査から実施した。6号墳では素掘土壙1、7号墳では砾床構造の上壙1を検出したが、8・28号墳では埋葬施設の検出はできなかった。8号墳南裾では竪穴式住居跡と思われる落ち込みが認められた。

1月上旬、数日の補足作業を行い、「82年度の発掘調査を終えることとした。開発公社からは、3月末まで工事対象地区内にある未調査の1～5号墳の発掘調査を実施するよう要請を受けたが、県教委からの調査員の派遣は本年度のみとされているため、残りの2ヶ月半は発掘調査の報告書作成の基礎作業を行うこととした。

2月22日、本調査の5号墳墳頂部に重機が入る。開発公社および業者に厳重に注意する。

ところで、この間、開発公社と町教委は今後の調査日程等について再三協議を行った。問題は、第Ⅲ支群の盟主墳ともいえる2・3号墳の取り扱い、調査員の確保、調査費の捻出、調査期間の短縮等であった。特に2・3号墳はその位置が工事予定地の西隅にあることから、この部分について設計変更が行えるものならば、2・3号墳の現状保存ができ、かつ調査期間もかなり短縮できるのではないかと考え、町教委は開発公社と協議を重ねた。

3月14日、開発公社は当初調査指導の請場においても指導のあった2・3号墳の現状保存を条件に、1・4・5号墳の調査にかかる調査員の派遣を県教委に要請した。

1983年度調査 2・3号墳の現状保存を高く評価した県教委から、宍道年弘等の派遣を得、4月12日から1・4・5号墳の調査を実施することとした。

第Ⅲ支群の最西端に位置する1号墳は、当初墳丘上面で石材が認められていたので、簡単な箱式石棺と想像されたが、調査の結果、小規模な竪穴式石室が検出された。石室の上面北縁には円筒埴輪が配され、石室内には須恵器蓋杯・下類・直刀が副葬されていた。また、2号墳の南隅に接する溝中央には須恵器甕が掘えられていた。

4・5号墳は第Ⅲ支群のほぼ中央に位置し、4号墳は中央で土壙1を、5号墳では難床をともなう狭長な二段掘り土壙1、不整形な土壙1を検出した。また、両古墳を区画する溝の北端では、下方に向かう階段状遺構を検出した。これらの調査は5月28日終了した。

15・16号墳破壊にともなう調査 工事対象地内の調査を終了して間もない6月16日、15・16号墳に重機が侵入していることが発見された。当初の工事計画によれば、16号墳墳頂部に給水塔が設置されることになっていた。これについては、「81年度の段階で、墳裾外に外すよう設計変更を開発公社に要請し、位置等が具体的になれば、町教委と協議の上実施する旨の了解が得られていた。にもかかわらず、協議等諸手続を行わないまま重機によって破壊が強行されたため、急遽町教委・開発公社・県教委と協議の結果、県教委及び文化庁へ始末書・願求書を提出し、その後新たに発掘通知書を提出して発掘調査を実施することとなった。

調査は7月15日から8月4日にかけて実施し、16号墳の精査から着手したが、重機によって著しい搅乱を受けており、墳頂部では埋葬施設の確認はできなかつたが、西側墳裾において土壙1を検出した。

## 第2節 調査体制

調査は、1981年度から'83年度まで3箇年度にわたって実施した。各年度の関係者は、下記の通りである。

### 1981年度

- 調査指導 山本 清（島根県文化財保護審議会委員）、賀川光夫（別府大学教授）、池田満雄（島根県埋蔵文化財調査員）、門脇俊彦（同）、横山純夫（同）、朝山芳園（鹿島町文化財保護審議会委員）、勝部 昭（文化課埋蔵文化財係係長）、卜部吉博（文化課主事）、川原和人（同）、松本岩雄（同）、片寄義春（同）  
事務局 矢野義雄（鹿島町教育委員会教育長）、門田正幸（同教育次長）、曾田 稔（同社会教育主事）  
調査員 道上康仁（鹿島町教育委員会嘱託）、杉原清一（島根県埋蔵文化財調査員）  
調査補助員 青山 嶽、栗焼憲児（別府大学学生）、土居和幸（同）、前島秀張（同）、藤村真佐子（鳥根大学学生）

### 1982年度

- 調査指導 山本 清（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（鳥根大学法文学部助教授）、池田満雄（島根県埋蔵文化財調査員）、門脇俊彦（同）、横山純夫（同）、朝山芳園（鹿島町文化財保護審議会委員）、勝部 昭（文化課埋蔵文化財係係長）、石井 悠（同）、卜部吉博（文化課主事）  
事務局 矢野義雄（鹿島町教育委員会教育長）、門田正幸（同教育次長）、曾田 稔（同社会教育主事）  
調査員 三宅博士（県立八雲立つ風土記の丘資料館職員）、広江耕史（同）、赤沢秀則（鹿島町教育委員会嘱託）  
調査補助員 青山 嶽、藤村真佐子、岩田 靖、福間克美、橋本修治、上川晃弘、原 俊二（国学院大学学生）、山本幸美（鹿島町土地開発公社）  
遺物整理 福井美和子  
調査協力 柳浦俊一、松江北高等学校考古学部、園山和男、丹羽野裕

### 1983年度

- 調査指導 山本 清（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（鳥根大学法文学部教授）、池田満雄（島根県埋蔵文化財調査員）、門脇俊彦（同）、横山純夫（同）、朝山芳園（鹿島町文化財保護審議会委員）、勝部 昭（文化課埋蔵文化財係係長）、石井 悠

(同)、松本岩雄（文化課主事）

事務局 矢野義雄（鹿島町教育委員会教育長）、井上 稔（同教育次長）、曾田 稔（同社会教育主事）

調査員 宍道年弘（文化課主事（兼）、富田修治（同）、三宅博士（県立八雲立つ風土記の丘資料館職員）、赤沢秀則（鹿島町教育委員会嘱託）

調査補助員 山本幸美（鹿島町土地開発公社）

遺物整理 松本美和子

調査協力 広江耕史（県立八雲立つ風土記の丘資料館職員）、中浜久喜

なお、発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々から有益な指導・助言を賜わった。ここに深甚の謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

穴沢咲光、石野博信、泉森皎、今尾文昭、岡崎雄二郎、岡田博、小田富士雄、落合めぐむ、河原純之、黒崎直、小林謙一、真田廣幸、白石太一郎、宍道正年、菅谷文則、杉山晋作、橋山林綱、鈴政泰子、瀬戸谷皓、田中琢、寺村光晴、中藤隆次、中原齊、西出守夫、西山要一、根鈴輝雄、花谷浩、土生田純之、東森市良、樋本誠一、前島己基、間壁亥子、三木文雄、水野正好、村上泰樹、村上勇、室賀照子、本村豪章、森下哲哉、山本三郎、和田晴吾、渡辺貞幸、渡辺昇

### 第3章 位置と歴史的環境

奥才古墳群は、松江市を北西に約10kmの八束郡鹿島町大字名分の丘陵上に位置している。遺跡の地番は大字名分字奥才1,460番地他で、調査前の地目は山林であった。東西約500m、南北約300mの馬蹄形の丘陵上に約50基の古墳が所在する。この丘陵は講武平野の西端近くに位置し、丘陵最高所である標高54mの13・14号墳頂からは講武平野のほぼ西半分を見わたすことができる。講武平野は島根半島部の谷あいに開けた平野で面積約140ha、半島部では持田・川津平野とならぶかなり広い耕地面積を有する。この平野は谷奥から流れ出す多久川（現講武川）によって形成された沖積平野で、古くから水稻耕作地として格好の条件をそなえていたものと考えられる。

鹿島町は、島根半島のほぼ中央部に位置しており、日本海に面する恵曇・御津といった漁業を中心とする集落、講武平野を中心とした講武・名分・佐陀本郷といった農業を中心とする集落からなっている。しかし、松江市に隣接するため、近年は同市の通勤圏、商業圏に含まれているといつ



第1図 奥才古墳群とその周辺の遺跡 (1/50000)

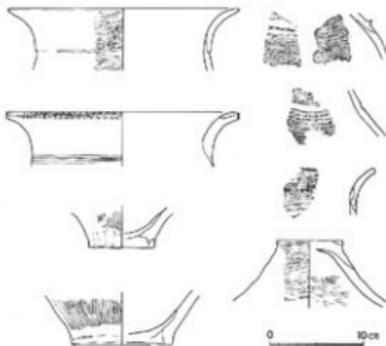
- A. 佐太講武貝塚 B. 佐太前遺跡 C. 古浦砂丘遺跡 D. 志谷奥遺跡 1. 奥才古墳群 2. 脊瀬山古墳群  
3. 名分丸山古墳群 4. かまの古墳群 5. 面古墳 6. 中尾谷山古墳群 7. 狐屋古墳 8. 秋葉山古墳群  
9. 白煙古墳 10. 中ノ空古墳 11. 向山古墳群 12. 岩屋古墳 寺の奥横穴群 14. 寺尾横穴群  
15. 貝塚横穴群 16. 恵谷横穴群 17. 嵐廻横穴群

てよい。こうした動向により、主に農村部では農業化が進み、1960年には153世帯を数えた専業農家が、1980年にはわずか18世帯に減少している。一方、第2種兼業農家も817世帯から561世帯へと減少しており、相対に農業離れが進んでいるものと考えられる。人口はこの間に10,065人から9,094人と漸減傾向にある。なお、1974年には片町地区に建設された島根原子力発電所が操業を開始している。現在、新たに2号機の建設が開始されている。

奥才古墳群周辺の遺跡に目を転じると、縄文時代の佐太講武貝塚が現在知られる最も古い遺跡であり、1933年に史跡指定を受けている。貝塚は汽水性のヤマトシジミを主とし、ここから出土する縄文土器は早期末から前期初頭の条痕土器がその大半を占めている。土器の他に各種の石器・骨角器の出土を見ている。

弥生時代に入ると、前期から奈良・平安時代に至る集落遺跡と考えらえる佐太前遺跡、やはり同じ位の時期幅をもつと考えられ、集落址と墳墓が存在することが確認されている古浦砂丘遺跡が知られている。これら両遺跡の実態は必ずしも明らかではないが、前期から一貫して低湿地を水田として開発していたと考えられ、こうして高められた生産力が奥才古墳群など数多くの古墳群を築く原動力となったと考えられる。その他銅鋒2、銅劍6を出土した志谷奥遺跡がある。銅鋒は、外縁付鉢1式四区袈裟櫛文のものと、扁平鉢式四区袈裟櫛文のもので、銅劍はいずれも中広形に属する。周辺の集落での祭祀に使用されたものと考えられる。偶然の機会に発見されたものであるが、調査によって埋納壙が検出されている。

古墳時代には前記2遺跡の他には集落遺跡の存在は知られておらず、住居の実態は依然不分明であるが、水田を見おろす丘陵上には奥才古墳群をはじめ、墨々と古墳群が築かれている。古墳は前期から後期までを通じての



第2図 佐太前遺跡出土遺物実測図

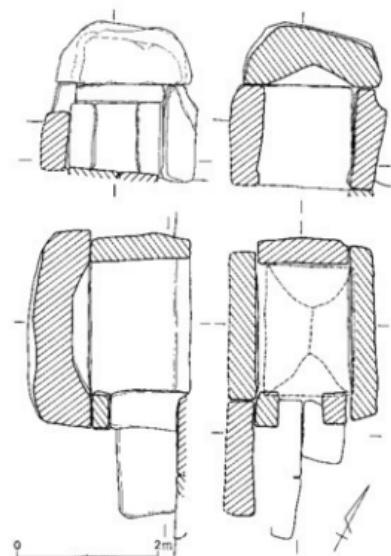


第3図 志谷奥遺跡銅鋒・銅劍出土状況復元

築造が確認できる。奥才古墳群と水田を挟んで向かい合う独立丘陵上には10余基からなる鶴澤山古墳群<sup>11</sup>が知られている。この古墳群中には柄鏡形の墳丘をもつ前方後円墳があり、前期にまで溯る可能性がある他、群構成も奥才古墳群と類似しており注目される。さらにこの北の丘陵上には、7基からなり、全長約40mの前方部の大きく開く古式の墳丘をもつ前方後方墳を含む名分丸山古墳群<sup>12</sup>が知られており、高い密度で古墳の分布することが明らかになりつつある。これらをはじめ、周辺の古墳群で主体部の判明するものでは奥才古墳群と同様に礫床や箱式石棺あるいはその両者を採用するものが多く、箱式棺を有し、鐵劍等を出土した中ノ空古墳など、前期から後期前半代にまで古墳群毎に若干の時期差を有しながら築造されており、非常に強い齊一性を示している。これらの古墳群は、講武平野をとりかこむ山塊上に営まれており、その規模も大きい。その他の地区では単独墳が主で群をなすとしても、2～3基程度のよう、安定した水田を有する講武地区が卓越した生产力を有していたものと考えられる。後期に至ってもこの傾向は変わらず、やはり講武平野に横穴式石室を有していたと伝えられ、鐵劍や須恵器子持壺を出土した向山古墳、切石造りの石棺式石室である岩屋古墳<sup>13</sup>などの首長墓が築かれる一方、各地に横穴墓が営まれる。20穴以上からなる寺の奥横穴群<sup>14</sup>、丸天井形の寺尾横穴群<sup>15</sup>、整正家形の恵谷横穴群<sup>16</sup>などはじめ、非常に多い。



第4図 名分丸山古墳群測量図



第5図 講武岩屋古墳実測図

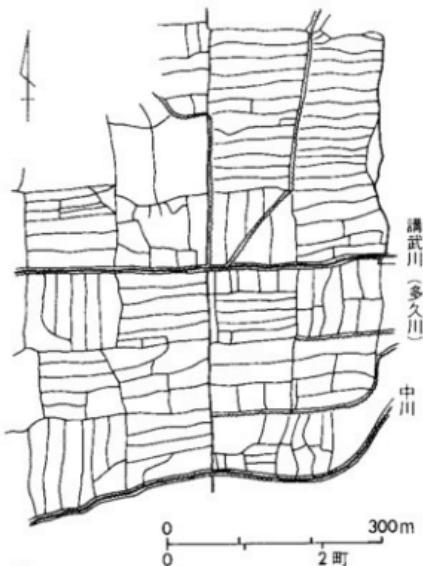
古墳時代以降、『出雲國風土記』の著された8世紀代には当町は島根郡、秋鹿郡にまたがり、講武平野は島根郡の余戸里や生鳥郷の一部に含まれるようである。<sup>16)</sup> この後、10世紀の『倭名類聚抄』には余戸里は多久郷として郷に昇格しており、この間に平野の開発がさらに進み、人口の増加もあったのであろう。この頃に前後して講武平野には条里制が敷かれ、三ノ坪、八ヶ坪といった字名が残っている。<sup>17)</sup>

平安時代末には、佐太神社の周辺は安楽寺院が寄進され、佐陀荘が成立するが、講武平野も西半はこの荘園に含まれていたようである。佐太神社は、出雲國一宮である杵染大社（現出雲大社）に次ぐ二宮であり、古代末から中世にかけて大きな勢力を誇っていた。

鎌倉時代初期に佐陀荘の下司職に補任された朝山氏は、承久の乱後、佐太神社神主を兼ね、荘園支配の実務にあたったと考えられる。<sup>18)</sup> この朝山氏は佐陀氏を名のり、南北朝期には佐陀城（芦山城か）に拠り、戦乱に加わっている。佐陀荘は戦国末期には、尼子氏にかわって勢力をはった毛利氏の支配下に入り、毛利氏家臣による所領分割によって蚕食され、荘園としての体制は失われていくようである。南北朝期から戦国期にかけての戦乱に際して、この一帯にも多くの山城が築かれており、殿山・海老山・大勝間・芦山・池平城跡など相当の規模をもつものもある。<sup>19)</sup> このうち大勝間山城は、史料としての信憑性は低いが、『陰徳太平記』<sup>20)</sup>といった軍記物に名前が見えている。

この頃には農・漁業の他に海岸部の恵塙地区では製塩が行われていたことがわかる他、船便を利用した交易もあったことがわかっており、多様な生産・交易の舞台ともなっている。

近世には宍道湖から日本海へ抜ける人工の河川である佐陀川の開削<sup>21)</sup>がなり、宍道湖沿岸の水害が緩和されると同時に、流域の水田開発に大きく寄与した他、宍道湖岸との水運による交易が開け、この地域に経済的発展をもたらすことになった。



第6図 講武地区条里制地割図

## 第4章 調査の概要

### 第1節 支群構成

奥才古墳群は説武平野を見下ろす標高約50m、水田からの比高約35mを測る馬蹄形をなす独立丘陵上に営まれている。この丘陵には自然の起伏を利用して、比較的大きい古墳を中心に小規模な古墳数基が従う形で各支群が構成されている。古墳群は7支群、50余基で、今回調査の対象となったのはⅠ・Ⅲ～Ⅶ支群の計26基であった。各古墳には、調査の対象となったものから順次号数を付した。以下、丘陵西端部の支群から順次その構成を記すこととする。

第Ⅰ支群は丘陵西側端部に位置する支群で、19・42・20～26号墳の計9基で構成される。中でも21号墳は本古墳群中最大の規模を誇る円墳である。22～26号墳は、北に向かって延びる尾根をそれに直交する数本の深い溝によって画し、一辺8～9mの方形墓域を形成する。ほとんど盛土を施さないもので、21号墳に追従する形で連なっている。

第Ⅱ支群は本古墳群の北西部に位置し、27号墳を中心とし37・40・41・36号墳の計5基で構成されている。27号墳を除く他は、尾根を溝によって画して墓域を形成するもので、さほど高まりは認められない。

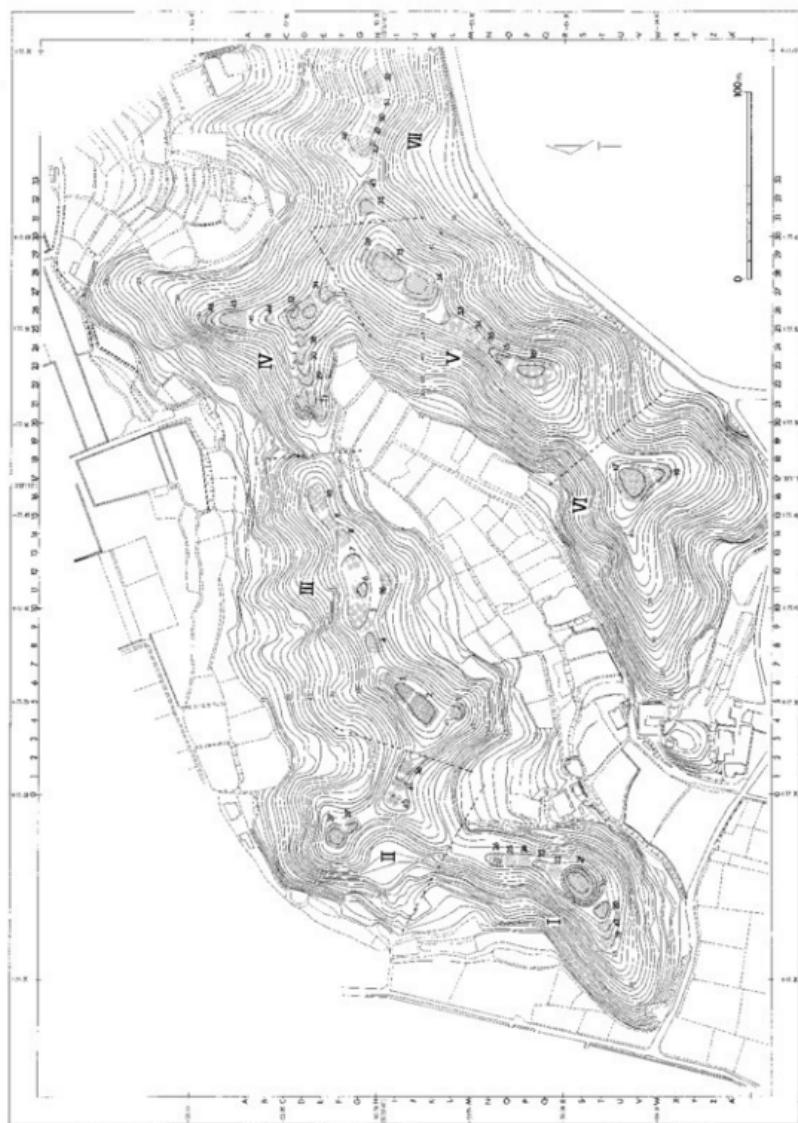
第Ⅲ支群は第Ⅱ支群の東側に位置し、1～10・28号墳の計11基から構成されている。立面上に眼につくのは1～3号墳および9・10号墳で、他は深い溝で方形墓域を画しあんど盛土を施さないものである。

第Ⅳ支群は馬蹄形の丘陵の最も奥の部分に位置し、第Ⅲ支群の東端部とは尾根が互いに下降している。ここでは11・12号墳を中心に29・30・38・31・41・45・46号墳の計9基で構成されている。29・30・38・31号墳は尾根をそれと直交する溝で方形墓域を画すものである。

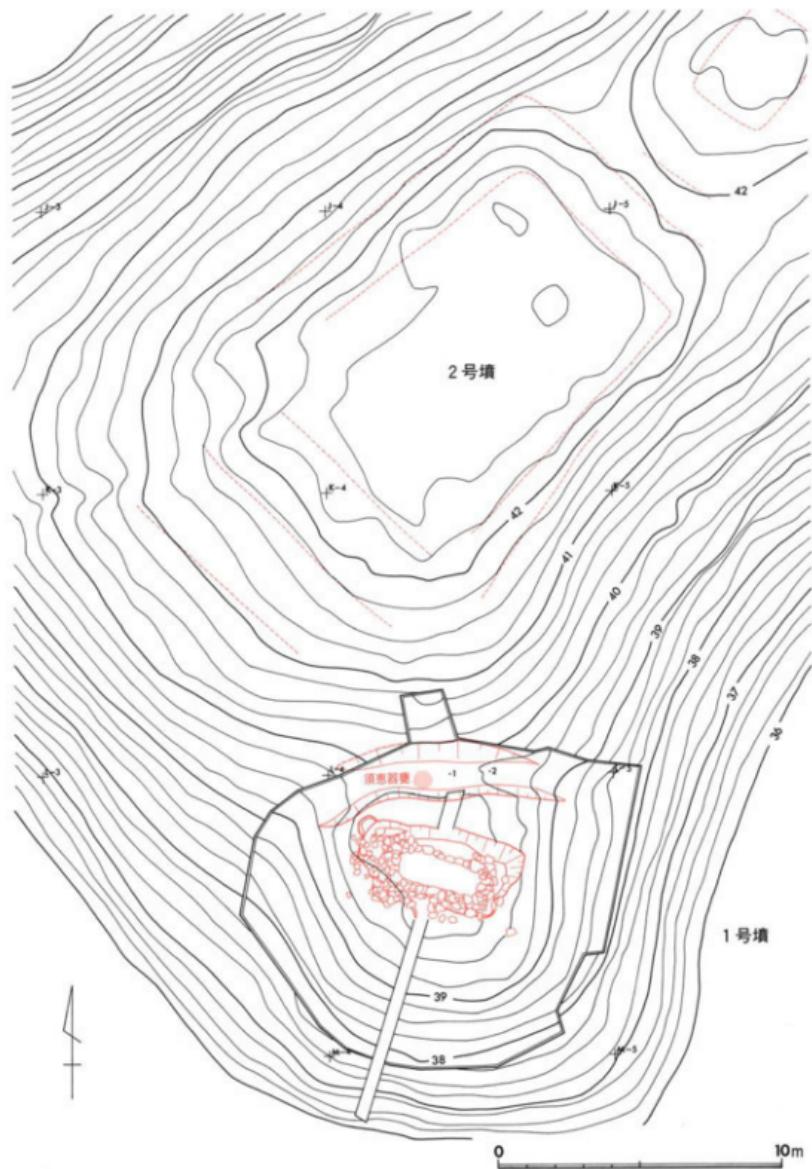
第Ⅴ支群は第Ⅳ支群のほぼ南東に位置し、磁北にはほぼ45度東へふれる形で走る尾根上に築かれている。本古墳群で最大規模の方墳13号墳と、円墳14号墳を中心として、39・33～35・15・16号墳の計8基で構成されている。33～35号墳が馬背状の尾根を直交する溝で方形墓域を画す点は、第Ⅲ・第Ⅳ支群の例と類似している。

第VI支群は16号墳南にある鞍部を隔てて営まれ、立面上な17号墳とそれに続く18号墳の2基で構成されている。

第Ⅶ支群は13号墳の東側から北東に延びる尾根に営まれている。現在32・43号墳を始め8基以上を確認しているが、山径によって墳形等不明なものも含まれている。



第7図 奥才古墳群配置図 (1/3000)



第8図 1・2号墳 墳丘測量図

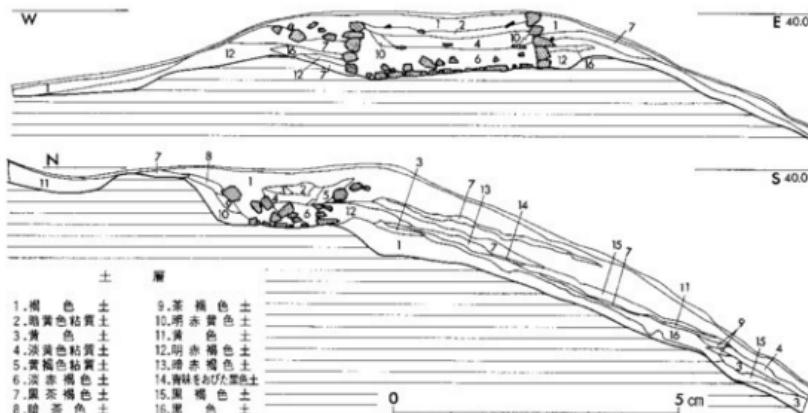
## 第2節 第Ⅲ支群

ほぼ東西にのびる約150mの尾根上に1~10号墳および28号墳の計11基が位置している。尾根は2・3号墳のあたりを最高所とし、標高約42.5mである。この高所から東へ次第に低くなってゆき、東端の10号墳では約37mである。この地点で尾根は一端途切れ、さらに東へのびて第Ⅳ支群に至る。2~10号墳は尾根上に造られているが、1・28号墳は尾根がわずかに突き出す地点に築かれている。わずかな緩斜面を利用するため、その墳丘は多くを盛土することによって造られている。

### (1) 1号墳

第Ⅲ支群最高所の2号墳墳裾からわずかに南へ尾根が突き出す地点に築かれている。この墳丘を築く際に2号墳の墳裾を削っており、2号墳は1号墳に時期的に先行するようである。墳頂平坦面で標高約40mを測る。本墳は、調査前には明らかな円墳と考えられたが、2号墳との鞍部に設けられた溝はかなり直線的で、方墳の可能性も考えられ、墳形は判然としない。墳丘さし渡しは約10m、墳頂平坦面は約5mである。高さは東西墳裾との比高は約1.5m、南側墳裾とは約4mを測る。

墳丘はその多くを盛土によって築かれており、その中央部に竪穴式石室が構築されている。緩斜面に石室基底面を掘り込んでいるため、北側では地山を大きく掘りくぼめる掘方が検出されているが、南側では旧表土からのわずかな掘方が検出されたにすぎず、石室の構築に従って盛土を施し、墳丘としている。緩斜面といふ立地のために、変則的な石室の構築方法を採用しているようである。また、墳丘上面に円筒埴輪を有し、墳丘北側区画溝内に須恵器甕を埋置していた。



第9図 1号墳土層図

**堅穴式石室** 墳頂平坦面中央に、E = 21° - Sと主軸をほぼ東西とする堅穴式石室が構築されている。内法長3.15m、同幅は東側で1.05m、西側で0.95mである。深さは東側で0.90m、西側で0.95mを測る。

石室各壁は30×20×20cm程度の石材を積み上げている。下方の石材にわずかに大きめのものを使用しているようである。北側の壁は約7割の石材が石室内に崩落した状態で検出された。崩落することなく残存していた南側壁では殆ど持ち送りは認められないが、東壁では約20cm、西側では10cm程持ち送りが認められた。石材はおおむね横目地が通るように積まれているが、東壁のように石材を立てて使用した例もある。また、壁下段では石材は土のう積を意図しているようではあるが、上段に進むに従って練瓦積の部分もまま見られ、縱目地が通る個所もかなりある。

石室床面には偏平な板石が敷かれており、この床石にも壁と同質の石材が用いられている。床の東側では主に大形の石材を使用し、中央部付近では小形の石材を使用している。厚さは10cm前後とほぼ均一であるが、石室基底面が西側より東側で約0.25m高く掘り残してあり、石室床も同様の傾斜を有している。また、石敷の床面と四隅壁の間に隙間があり、石室基底面の地山が露出している。東側ではさほど隙間はなく、床石は側壁最下部の石材と接している。

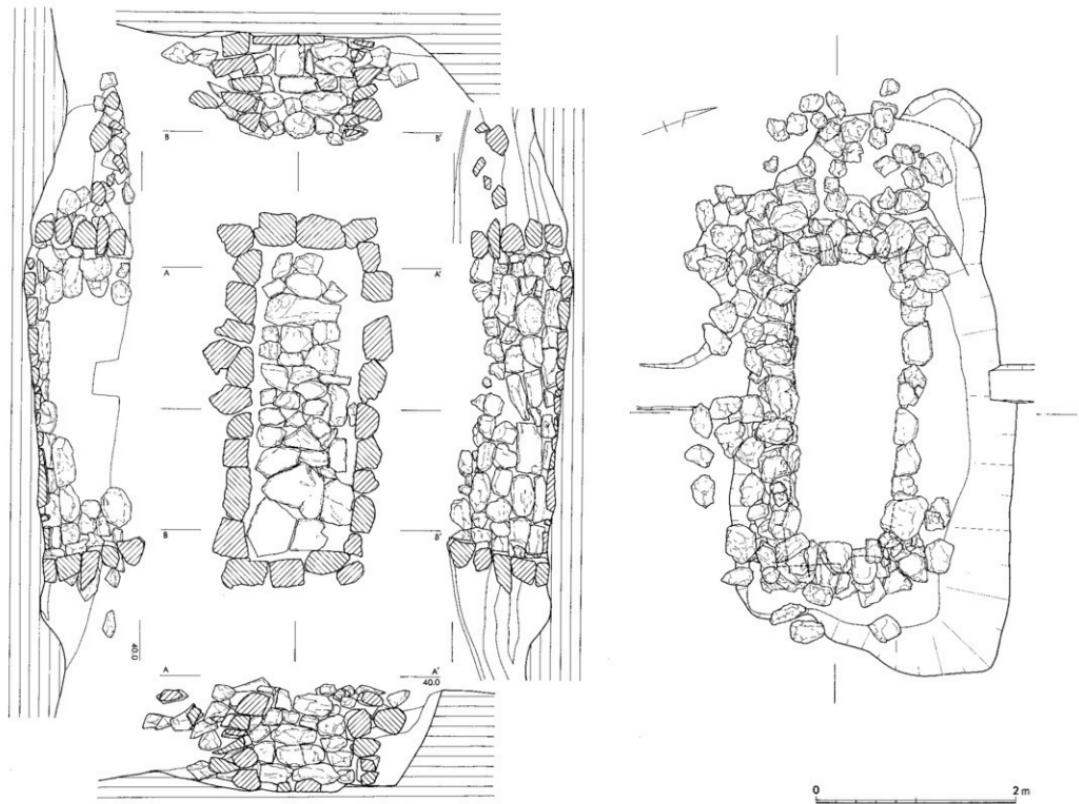
この石室は天井石を有さず、木板のようなもので石室をおおっていたものと考えられる。

斜面を利用して構築されているため、土塙掘方は北側でのみ明瞭に確認され、その長辺は約5.6m、深さは約1mを測る。この掘方と石室の間の石材はわずかしか認められず、ひかえ積などはほどこさない石室のようである。しかし、石室上端とほぼレベルを等しくして、主に石室西側に多くの石材が検出されており、これらの石材の使途は不明である。

この石室は、堅穴式石室としては小規模で各壁に使用する石材も極めて人形であり、天井石を有さず、ひかえ積などはもない。さらに石材を積む際にも縦目地が通る壁があるなど、粗略な石室であるといわねばならない。それは、後述の遺物からもわかるように、堅穴式石室としては最終末の時期のものであるためと考えらえる。

**石室内遺物出土状態** 堅穴式石室内からは須恵器蓋杯セット計6個体、管玉4、切子玉1、鉄刀1、刀子1が検出されている。

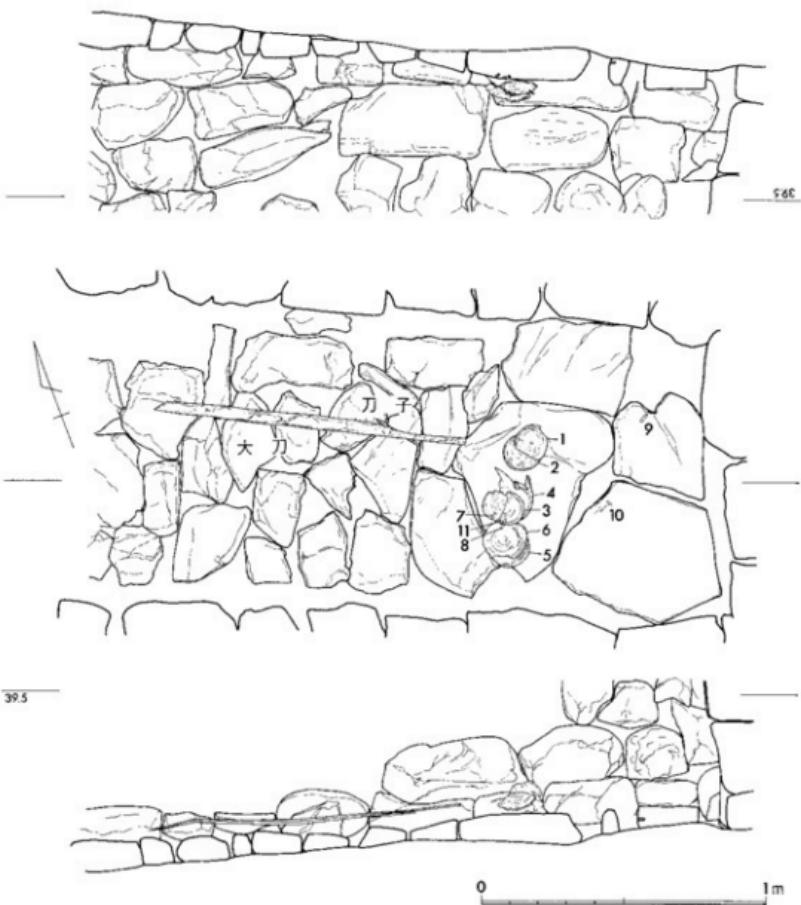
須恵器蓋杯は、石室東側の最も大きな床石上に横一列に3セットが並んで検出された。蓋杯はいずれも伏せた状態で副葬されている。北側の蓋杯のセット1・2・3・4は伏せた状態の杯に蓋をかぶせ、南側のセット5・6は伏せた状態の蓋5に杯身6をかぶせている。いずれの蓋杯も容器として使用されたものではなく、出土地点から推察して被葬者の枕に転用されたものであろう。頭位が東を向くことは、石室床石が西よりも20cm高くなっていることにも矛盾しない。さらにこの須恵器4・5の接する位置で、須恵器の内側に入りこむようにして培玉製の管玉2と水晶製の切子玉1



第10圖 1号墳堅穴式石室実測図

が検出された。また、もう 2 本の管玉は、東側に隣接する石材の下にもぐりこむようにして検出された。いずれも被葬者の身につけていたものが転落、散乱したものと考えられる。

石室主軸に沿ってやや中央から北寄りで、切先を西に刃部を北に向けて鉄刀 1 が検出された。この鉄刀の下、<sup>15</sup> 間部分と交差するように刀子が出土している。切先はほぼ北西に向いている。須恵器蓋杯を枕とする頭位ならば、被葬者の右腕に沿って副葬されたものと考えられる。



第11図 1号墳石室内遺物出土状態実測図 (1/20)

**埴輪出土状態** 墳丘各地点で多くの埴輪片が採集されており、8本以上が樹立されていたものと考えられるが、埴輪基底部の残存により本来の樹立地点が知られるものは、下図の5本にすぎない。

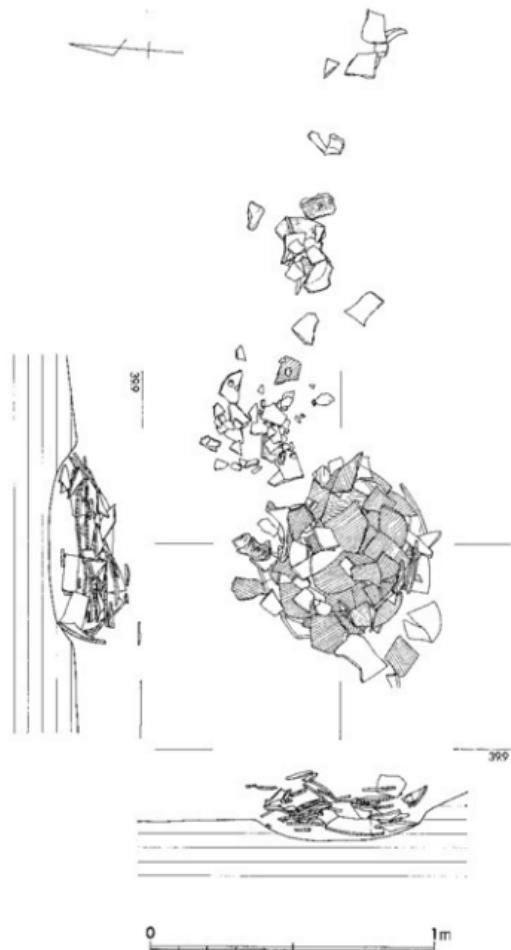
この5本の埴輪は、石室側壁が崩落した際に若干移動している可能性もあるが、基底部の出土状態からおむね本来の樹立地点に近いものと考えらえる。石室との位置関係も側壁崩落のため明確ではないが、残存する石室と考え合わせると、石室北側壁の上面付近に石室主軸と平行するように立て並べられていたものと思われる。標高は39.9m前後を測り、石室上面よりいくらか低くなっている。これは石室北側壁の崩落の際に陥没したものであろう。

その他の破片は墳丘各地点に散乱しているが、特に墳丘北側および墳丘西墳裾付近で数多く検出されている。墳丘北側の破片は石室上面の基底部を有するものとの接合資料が多いが、西側墳裾のものはそれ自体で個体となり、完形に近い状態で転落したものと考えられ、その出土地点から、石室北側壁上面と同様に西側上面にも立て並べられていた状態が推測できる。



第12図 1号墳埴輪出土状態実測図 (1/30)

溝内遺物出土状態 墳丘北側には幅約0.2mの溝が掘られて、1号墳墳丘と2号墳墳丘を区画している。この溝内やや東寄りに須恵器甕が、その西側に須恵器短頸甕がいずれも破片となった状態で検出され、溝内に転落した状態の埴輪片も検出された。



第13図 1号墳溝内遺物出土状態実測図 (1/20)

須恵器甕は径0.8mの浅い掘り込み内に埋設されている。復元の結果、底部および口縁端部を欠失しているが、底部付近の破断面が掘り込みの底部に接しており、底部と考えられる破片も認められないことから、意図的に甕底部を打ち欠いた状態で溝内に掘えられていたものと考えられる。頭部および口縁部付近の破片は土圧で甕内に落ち込んだ状況を呈しており、口縁端部の破片が認められないことから、口縁部もやはり打ち欠いた状態で溝内に掘えられたものと考えられる。内面のタタキメは丁寧に消してあり、石室内の須恵器の年代観とはほぼ一致し、古墳の造営と時を同じくして掘えられたものと考えられる。

短頸甕は溝底部に接して発見されているが、破片が

やや散乱した状態であった。

出土遺物 石室内からは須恵器蓋杯3セット、管玉4、切子玉1、刀子1、鉄刀1が、墳丘からは埴輪8本以上、須恵器大甕1が出土している。

蓋杯(1)～(6)はいずれも口径の比較的大きなもので、天井および底部のヘラケズリの面積が広い。蓋は体部直立に近く立ち上がり、内面端部は段をなすが、やや鋸さを欠いている。杯は立ち上がりが高く、内面端部がかすかにではあるが段をもつ。杯(4)は外面部に「X」字状のヘラ記号をもっている。(3)～(5)は焼成不良で、殊に(3)は著しく、細部の観察は不可能であった。これら蓋杯は、以上の特徴から山陰の須恵器編年Ⅱ期に属するもので、この須恵器を出土した1号墳は、奥才古墳群中時期の判明しているものでは、最も新しい時期のものである。

管玉は4本とも緑色凝灰岩製と考えられ、淡い緑色を呈する。(7)は他のものより短く2.1cmであるが、(8)～(10)はいずれも3.0～3.1cmを測るものである。径はいずれも0.8cm程度のもので、穿孔は一方から行なっている。外面は丁寧な研磨がなされ、縦方向の研磨の痕跡が残っている。

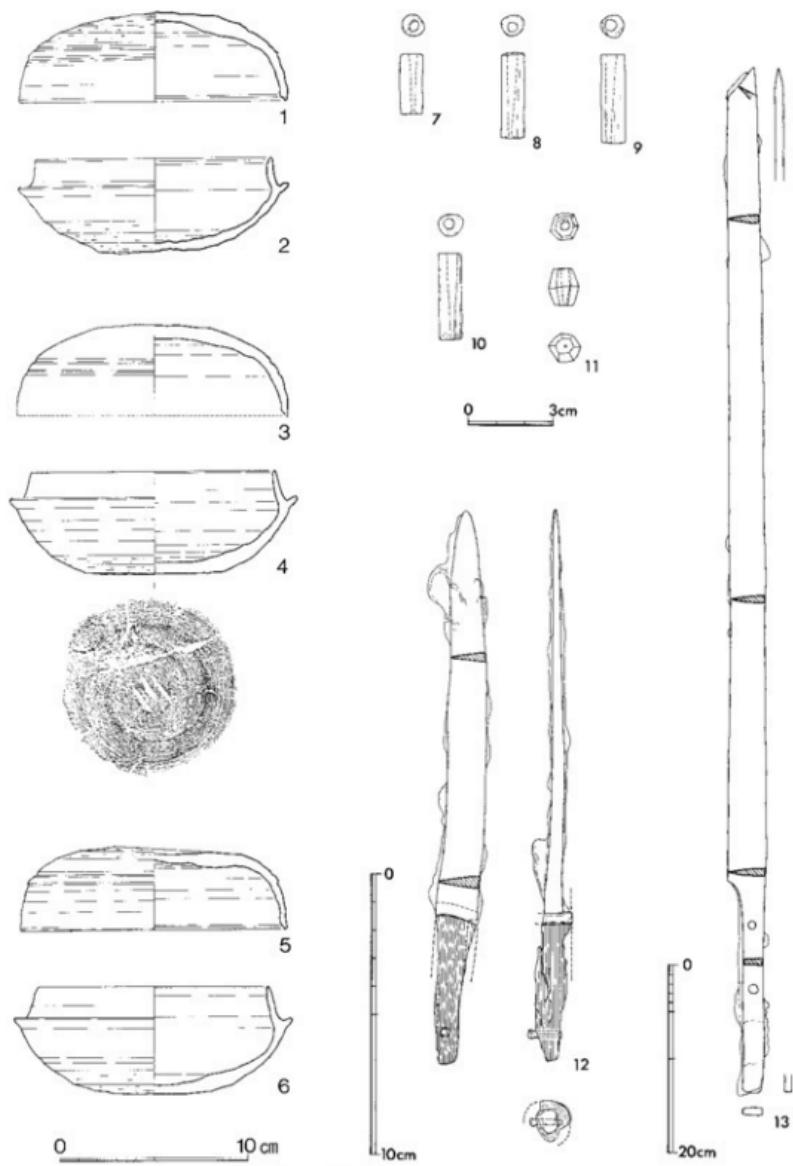
切子玉(1)は水晶製のもので、截頭六角錐を2つあわせた通有の形を呈する。長さは1.3cm、最大径1.1cmを測る。穿孔は一方からのものである。水晶の透明度は高い。

刀子玉(2)は長さ19.6cmを測るもので、刃部は長さ13.8cmを測り、断面縦長の三角形を呈している。関付近にはリング状に金具が残存しており、柄のせめ金具と考えられる。刃部には背闊が認められ、茎は長さ5.1cmを測る。木質が付着していることから、柄を有していたことが知られた。茎端部近くには目釘が残存している。

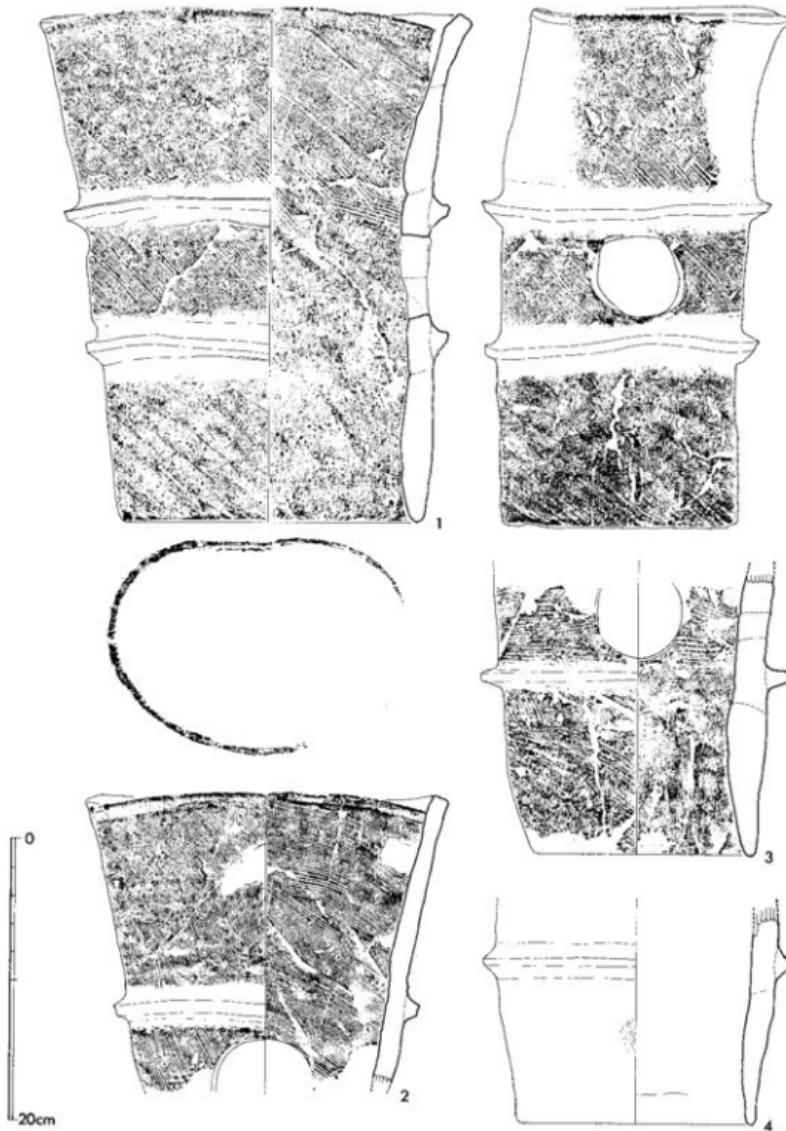
鉄刀は(3)は、全長109cmを測る重量感のある直刀で、刃部長86.5cm、茎長22.5cmを測る。身幅は3.8cmで、断面は縦長の三角形を呈している。峰は平たく、幅0.8cmを測る。切先は鈍錐形を呈し直線的なつくりである。茎での身幅は2.1cmを測り、2つの目釘穴をもっており、間に近いものから径0.8cm、1.0cmである。外面に木質などは残存しておらず、外装は外した状態で副葬された可能性がある。

埴輪は8個以上が確認できており、焼成では須恵質のものと土師質のものがあるが、土師質の焼きあがりを呈するものにも、黒斑を有するものは1片もなく、いずれも窯窓で焼成されたものと考えられる。全形の判明する(1)では焼成時の変形著しいが、器高36cm、底部径18cm程度で、2段のタガを有するものである。他には全形の判明するものはないが、基本的にはこの埴輪と同様の規格を有するものと考えられる。中段対向する位置に1対の円形の透しを有する。口縁はいずれもシャープな面をなし、タガは横ナデによって調整され、(4)・(12)以外は突出度が高い。

外面の調整は、基本的には右上がり斜めのハケをもつが、これはタガの上下で連続しており、タガ貼付以前に施す1次調整である。2次調整としての横ハケを行なうのは(3)・(5)・(12)のみで、(5)の横



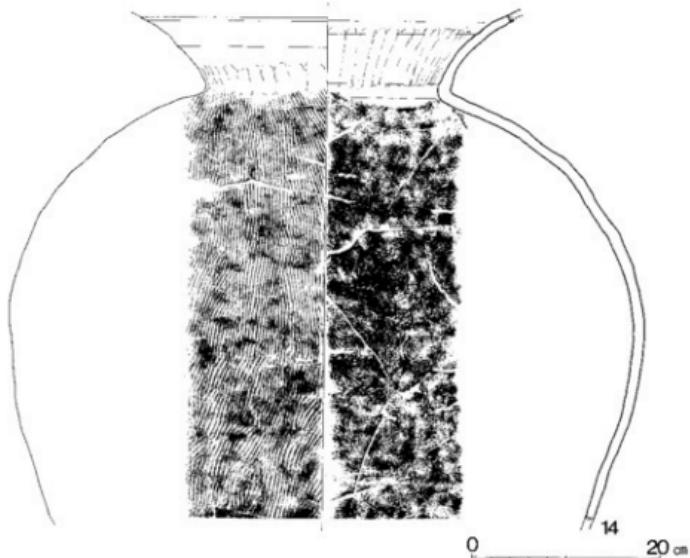
第14図 1号墳石室内出土遺物実測図 (1~6は1/3、7~12は1/2、13は1/6)



第15図 1号墳出土埴輪実測図(1) (1/4)



第16図 1号墳出土埴輪実測図(2) (1/4)



第17図 1号墳北側溝出土須恵器実測図 (1/6)

ハケはハケの条線は太いが工具自身は狭い。横ハケの施し方は明瞭にはわからないが、B種あるいはC種横ハケと考えらえる。最下段には左上がり斜めのナデが見られる。このナデには幅の広い(1)・(8)と狭い(3)・(6)がある。幅の広いナデは稜を明瞭に残しており、ケズリの可能性をもってはいるが、砂粒の動きは認められない。内面の調整は上半のみ斜め右上がりのハケで、下半は斜めあるいは縦方向にナデ上げる。内面下端付近は断面が薄くなっている、全体が完成してから倒立させて再調整を行なっていると考えられ、その際の押圧痕が内面に残る。この底部調整のうち(3)は内面に板状工具による圧痕をわずかに留めており、特異な調整方法として注目される。また仰は工具による押圧痕を内面に有している。粘土紐は、幅の明瞭にわかる個体はないが、粘土紐の傾きはいずれも内面に低く、外間に高くなっている。

これらの埴輪はタガ間に2個の円孔を有し、底部調整をもつものである。外面調整はほとんどが2次調整を欠くものであるが、わずかにB種あるいはC種横ハケを2次調整として有するものがある。これらの特徴から、1号墳出土の埴輪は、川西編年<sup>20)</sup>V期に含まれるものと考えられる。

須恵器大甕<sup>21)</sup>は墳丘北東溝底で検出されたものである。底部および口縁端部を予め打ち欠いて掘られたものと推測される。体部は球形を呈し、体部中位で最大径68cm、頭部で径26cmを測る。体部外面には縦方向のタタキメ、内面にもなでて消しているが同心円状のタタキを施す。

第1表 1号噴出土器観察表

排団 番号	器種	法 量(cm)	形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
14-1	杯 蓋	14.1	口径大きく、大井部平ら。口唇邊部の段は比較的シャープ。大井部器壁厚い。	暗灰色	石英・長石などや多い。	良 好 一般灰被り。	
3		14.0	外面／大井部ヘラケズリ。ロクロ回転石。体部圓紙ナデ。	灰白色	砂質	不良	
5		13.9	内面／大井部中央ナデ調整。以下圓紙ナデ。	暗灰色	石英・長石など。	良好	
2	杯 身	12.4	5.1 口径大きく、立ちあがり高い。口唇内側にかすかな段。 外面／底面円鉛ヘラケズリ。ロクロ回転石。体部圓紙ナデ。	灰 色	石英・長石など多い。大粒のもの昌立つ。	良好。外面部灰被り。	
4		12.8	5.5 内面／底面ナデ調整。はド回転ナデ。	暗灰色	石英・長石などわずかに含む。	不良	外面部にX印のヘラ記号。
6		12.1	5.8	暗灰白色	長石の大粒の砂粒多い。		
15-1	埴輪	最大 30.1	2段のタガを有する。タガの突出度高い。	暗灰色	長石の大粒の砂粒多い。	良好。頗恵質	窯業者しく、平置格円形を呈する。
30.3		20.3	第2段に円形2方向の透しを有する。				
最小 18.1		14.6	外面／被下段左上り前筋に指でなであげる。第2・3段で連続する。タガ部・口輪部ヨコナダ。				
2		25.4	内面／被下段から第2段半ばまで施力方向でなであげる。それ以上はななめのハケメ。	暗青灰色	長石などの砂粒含むが密。	良好 備恵質	
		-	直線的に聞く最上段。しっかりしたタガを有する。円形2方向の透し。	赤褐色	石英・長石その他の大粒の砂粒多い。		
		-	外面／左上りの間に近いハケメ。近く施される。左唇部・右脇ヨコナダ。				
3		15.0	内面／左上りの間に近いハケメ。	赤褐色	石英・長石その他の大粒の砂粒多い。		
		-	器壁厚く、タガ大きく突出する。円形2方向の透し。				
		-	外面／最下段上半ななめのハケメ。下半でハケメを消す。第2段ヨコハケ。				
4		-	内面／最下段たてになであげる。下筋に工具の押圧痕残る。第2段よこ・ななめのハケメ。	赤褐色	石英・長石など大粒のもの多。	不良 土脚質	
		-	底部器壁薄い。タガ突出度低い。				
		-	外面／被下段かすかにたてのハケメ。				
5		-	内面／不明。				
		-	基底部。しっかりしたタガを有する。5・7・8は円形2方向の透しをもつ。	赤褐色	石英・長石などや多い。	不良 土脚質	
		-	外面／被下段上半ななめのハケメ。下半でなでなめになであげる。	暗青灰色	砂粒含むが密。	良好 備恵質	
6		-	第2段左上りななめのハケメ。5のみはその中にヨコハケを施す。	赤褐色	石英・長石など大粒のもの多。	不良 土脚質	
		-	内面／たての指ナデ。5のみ被下部に指による削整。	赤味がかった灰白色	砂粒やや多い。	普通	外面部と内面は復原質に施けるが、外面部は土脚質を呈する。
		-	各部被片・端部をもつ被片は平坦面を有する。タガはしっかりしているが、12のみは低い。	赤褐色	石英・長石の良好、白いごく秋質の石を含む。		
7		-	外面／左上りななめのハケメをもつ。12.1はこののちヨコハケを施す。タガおよび端部はヨコナダ。	赤褐色	石英・長石などわずか。	普通 土脚質	
		-	内面／左上りななめのハケメをもつ。10.1はこののち工具による押圧痕を残す。11.1はこののち工具による押圧痕を残す。12.1はこののち工具による押圧痕を残す。	赤褐色	外面部／赤味の強い質褐色。	良好 備恵質	
		-	内面／暗灰色				
8		-	13.8	赤褐色	砂粒やや多い。	普通	No.3と同一個体か。
		-	各部被片・端部をもつ被片は平坦面を有する。タガはしっかりしているが、12のみは低い。	赤味がかった灰白色	石英・長石の良好、白いごく秋質の石を含む。		
		-	外面部／底面は圓形2方向の透し。	赤褐色	石英・長石などやや多い。	普通 土脚質	
9		-	外面部／左上りななめのハケメをもつ。12.1はこののちヨコハケを施す。タガおよび端部はヨコナダ。	赤褐色	石英・長石の良好、白いごく秋質の石を含む。		
		-	内面／左上りななめのハケメをもつ。10.1はこののち工具による押圧痕を残す。11.1はこののち工具による押圧痕を残す。12.1はこののち工具による押圧痕を残す。	赤褐色	外面部／赤味の強い質褐色。	良好 備恵質	
		-	内面／暗灰色				
10		-	赤褐色				
		-	外面部／赤味の強い質褐色。				
		-	内面／暗灰色				
11		-	赤褐色				
		-	外面部／赤味の強い質褐色。				
		-	内面／暗灰色				
12		-	赤褐色				
		-	外面部／赤味の強い質褐色。				
		-	内面／暗灰色				
13		-	赤褐色				
		-	外面部／赤味の強い質褐色。				
		-	内面／暗灰色				
17-14	甕	胴部 最大 径 67.3	L口徑大きく開く。肩部丸みを帯びるが、胴部下半は直線になる。	淡青灰色	石英などを含む良好、が比較的よく磨擦されている。	普通 土脚質	口縁および底盤を失す。
			L口縁ヨコナダ。肩部とL口縁部接合の際のたてのナデが内外面に残る。胴部外面は平行のタクキ。内面は同心円のタクキを施すが、なでて大半を消す。				

2・3号墳は当初工事対象地内に含まれていたが、関係者の尽力・理解を得て現状のまま保存されることとなった。よって、ここでは墳丘の現況についてのみ報告する。

## (2) 2号墳

第III支群中最高所に位置する方墳で、隣接する前方後方墳である3号墳とともに、立地・規模とともにこの支群の盟主墳と考えられるものである。

墳丘は平面長方形を呈し、丘陵尾根方向に長い。尾根方向長軸で17m、短軸11.5mを測る。しかし、墳丘南西側短辺では尾根の分岐点にあたっているためか大きく広がっており、約15mになるものと考えられる。墳丘南のコーナー付近は1号墳築造の際に削り取られており、先にも述べたが、1・2号墳の先後関係を示している。1号墳は山陰の須恵器編年<sup>37)</sup>Ⅱ期の遺物を出土しており、2号墳が1号墳より遅った時期の築造であることは確かであろう。墳丘西側のコーナーには後世の道が走り、ややセンターが乱れている部分もあるが、全体に整美な墳形がよく保存されている。

墳頂は広い平坦面を有し、長辺12m、短辺8.5mを測る。墳頂部の標高は42.5mで、墳裾からの比高は東側で0.5m、西側で0.8mを測る。

西側墳裾にはテラスが残っており、2号墳墳丘を削り出した際に土砂を除去した跡であろうと考えられる。13号墳北東に遺存する39号墳も同様のテラスで、平坦面上に周溝をめぐらし、わずかな盛土を持っていたと考えられており、この地点でも同様の遺構の存在が推定される。このテラスは2号墳短辺沿いに長さ約9m、幅約3mを測る。テラス上面の標高は41.5mである。

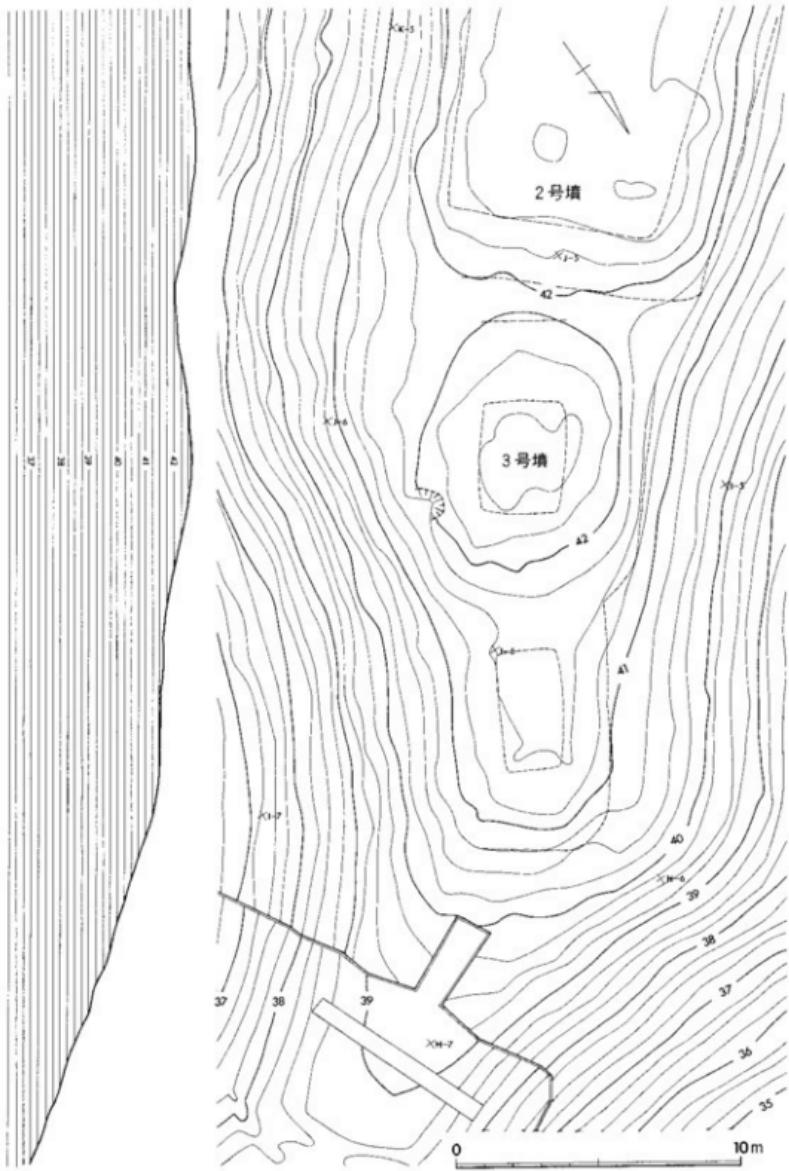
## (3) 3号墳

2号墳の東側に隣接する前方後方墳である。丘陵尾根に溝を設け、地山を削り出すことによって墳丘としている。こうして造られた墳丘であるため、本来一続きの尾根である2・3号墳墳頂はほぼ等しい標高値を示している。この溝の幅は、現状では上端6.5m、下端で1.5mを測る。

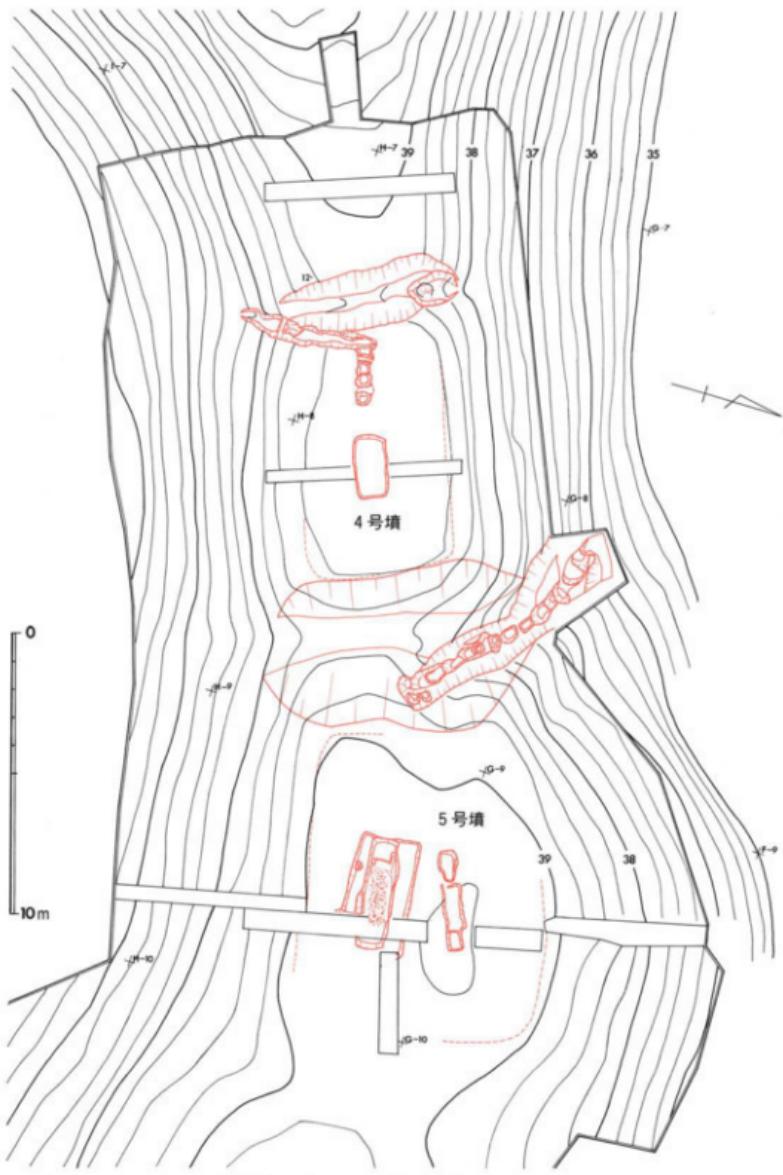
墳丘は主軸沿いに全長19mで、後方部長10m、前方部長9mである。南東斜面の墳端が明瞭でないでの幅は明らかでないが、後方部で約9m、前方部で約6mを測るものと考えられる。

後方部は斜面の傾斜が緩やかで、墳頂平坦面は4×3mと狭い。墳頂の標高は42.6mで、西側溝底との比高は0.5mである。前方部はくびれ部から端部まで開かず、高さも、後方部の傾斜変換点からほとんど変らずに前方部上端に至っている。しかし、墳裾の標高は大きく異なり、2号墳側の墳裾の前方部墳裾とは約1.3mの高低差がある。傾斜をもつ尾根上に築かれた墳丘であるためと考えられる。

この3号墳は本古墳群中唯一の前方後方墳であり、大形の方墳である2号墳とともに注目される存在である。



第18図 3号墳 墓丘測量図



第19図 4・5号墳 墳丘測量図

#### (4) 4号墳

2・3号墳の位置する高所が大きく降り、5号墳墳頂で再びピークを迎えるまでの丘陵鞍部に位置する古墳である。墳頂の標高は38.75mである。

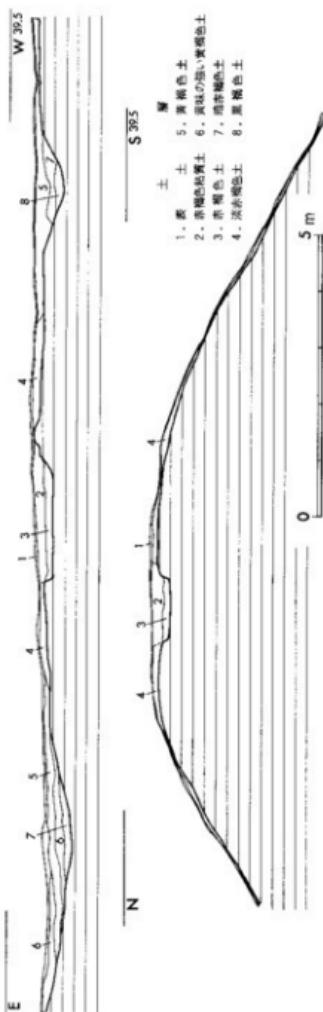
丘陵尾根に東西2本の溝を設けて方形台状の墳丘を区画し、東西長辺11m、南北短辺8mの規模を有している。本来は若干の盛土を施していたものと考えられるが、そのほとんどが流出しており、表土下わずかで基盤層となる。この基盤層は墳丘中央やや西寄りで、わずかに盛り上がりを見せる。墳丘南北の斜面には加工の痕跡は認められず、それぞれの自然傾斜のまま降っている。

墳頂平坦面は東西長辺8.5m、南北短辺5.5mで、東側溝底との比高は0.4mである。墳丘東西を区画する溝は、東側溝で幅6m、深さ0.4m、西側溝で幅2m、深さ0.35mを測る。この溝内には黒褐色土がつまており、この覆土中からは須恵器片が採集されている。

墳頂平坦面はば中央に小規模な素掘りの墓域が掘られているほか、墳丘南斜面から4号墳西側溝をかすめるように階段状遺構が登っており、墳頂平坦面で屈曲して途切れる。また西側溝底北端で指頭大の円礫を含む浅いビットが検出されている。調査区内では、本墳に伴うと考えられる遺物の出土は見ていない。

なお、4号墳西側にも緩斜面が統いており、遺構の存在が推定されたので、この部分についても調査したが、須恵器細片を採集したにとどまり、何らの遺構も検出されなかった。

**主体部** 墳丘のはば中央に掘り込まれている素掘りの土壙で、平面形は隅丸の長方形を呈する。主軸を丘陵尾根に一致させ、E-23°-Nとはば東西を向く。検出面での規模は東西2.2m、南北1.2m、深さ0.15m



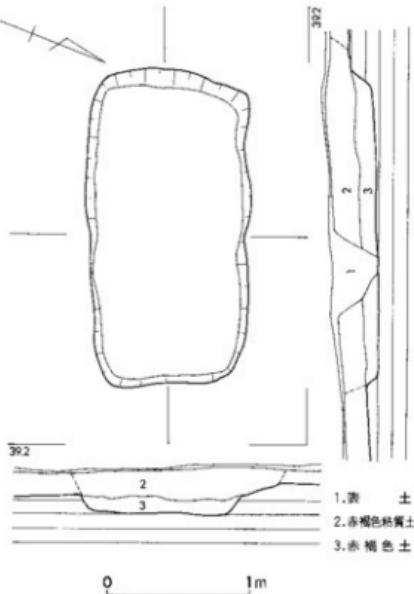
第20図 4号墳土層図

である。

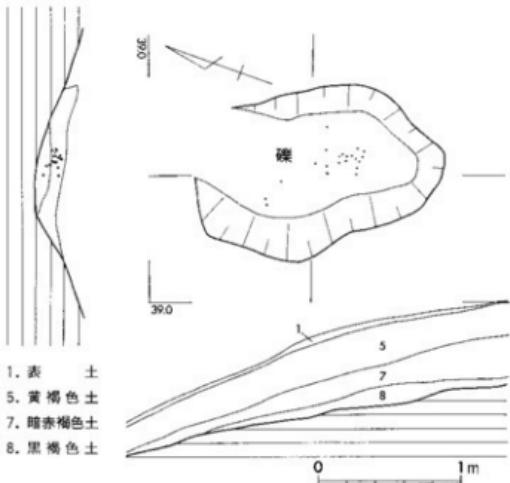
墳丘上面の土砂が流出しているため、土壌の下部のみが残存しているが、墳丘縦・横断面図を見ると、主体部西・南側で地山が大きく盛り上がる部分があり、この部分も含めて考え得るならば、この主体部は二段掘りのものであった可能性がある。墳丘は主に地山の削り出しによるが、この部分でわずかに二段掘りの状況が残り、盛土をしている他の部分では検出できなかったと考えられる。墓室底面は西側が $0.09m$ 高くなっている、頭位は西に向くものと考えられ、主に東を頭位とするこの古墳群中では特異な存在である。床面で木棺の痕跡などは検出されず、また副葬品等の遺物もなかった。

西溝底土壌 墳丘西側溝北端で指頭人の円跡を含む土壌が検出されている。溝の底をわずかに掘りくぼめただけのもので、長辺 $1.7m$ 、短辺 $1.2m$ を測る。底面は不整形な梢円の平面形を呈する。深さは約 $0.2m$ を測るが、北側で掘方は途切れ、墳丘斜面の傾斜に続いている。土壌内の覆土は溝最下層の黒褐色土であった。

礫は約20個が検出されているが、遺構の性格は不明といふほかはない。



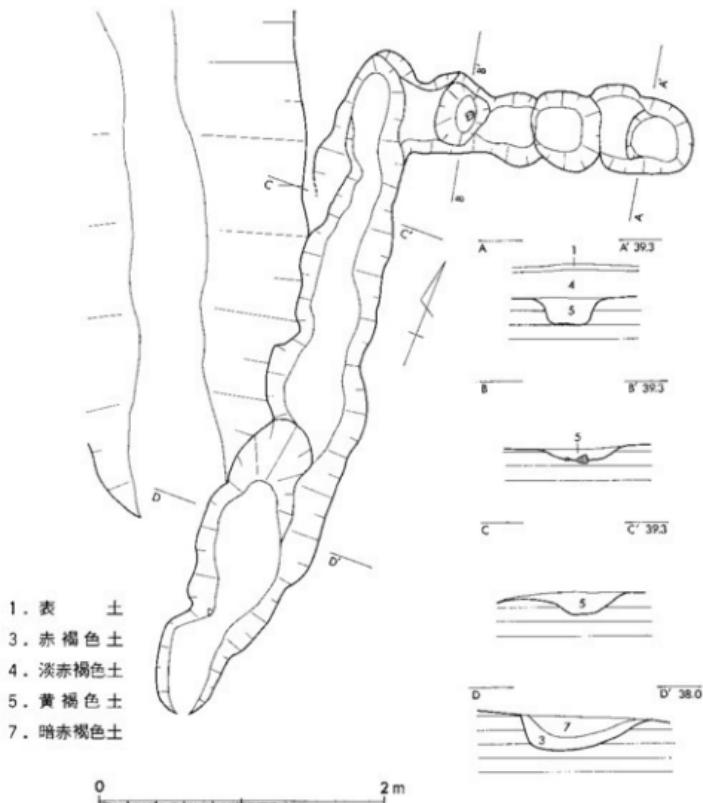
第21図 4号墳主体部実測図



第22図 4号墳西溝底土壌実測図

**階段状遺構** 墳丘南斜面から西側溝をかすめるようにして登り、墳頂平坦面で大きく東方へ屈曲して途切れています。全長は約7.5m、幅は0.5~0.8mである。階段状遺構と呼んでいるが、墳丘上では「階段」というよりも土壙の列、墳丘斜面でも浅い溝とでも呼んだ方がふさわしいものである。覆土は、斜面下方で赤褐色系の土壙だが、それ以上の部分では黄褐色土となっている。覆土中に地山の角礫をわずかに含んでいる。斜面の部分にはほとんど段は認められず、この遺構の性格も不明といわざるを得ない。

なお、この遺構が4号墳西側溝を一部壊して設けられている点、遺構下部でわずかに須恵器小片を含んでいる点などから、第1主体築造後一定の期間を経た後に造られたものと考えられる。



第23図 4号墳階段状遺構実測図

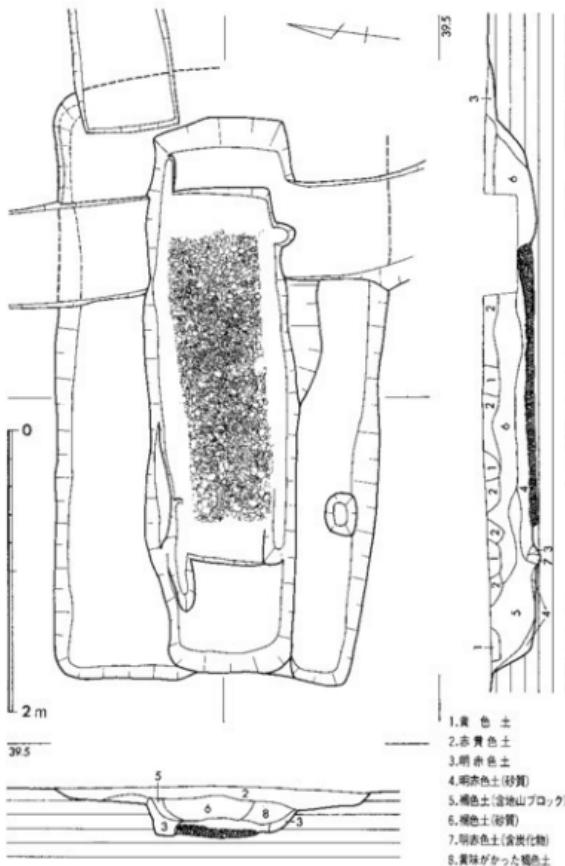
(5) 5号墳

4号墳の東に接して営まれるもので、尾根に直交する溝によって方形墓域が区画されている。墳丘は東西約16m、南北約15mを測り、墓域を区画する溝は、西側は4号墳と、東側は6号墳とそれ共に共有している。西側を区画する溝は長さ10.0m、幅5.5m、深さ0.4mを測り、東側もほぼ同様な規模と思われる。

2条の溝に狭まれた墓域上面の表土は、調査以前に重機によって削平されているため明らかにし  
えなかつたが、墳丘測量

時には目立った高まりは  
認められなかつた。地山  
は全体に明褐色を呈し、  
重機による擾乱のため、  
遺構の検出にはきわめて  
困難な土質であったが、  
墳頂部で交差するサブト  
レンチを2本設定し、2  
基の主体部を検出した。

第1主体 墳丘中央や  
や南寄りで検出したもの  
で、主軸はE-7°-N  
を測り、墳丘主軸および  
尾根方向と平行である。  
構造は長さ4.2m、幅2.4  
m、深さ約0.3mを測る  
土壤の中央に、内法長2.1  
m、幅約0.6mを測る箱  
式木棺を埋置した後、床  
に指頭大の礫を敷きつめ  
ている。土壤内には、北  
長手沿いに幅0.5m、南  
長手沿いに幅0.4mのテ  
ラスが設けられ、南側テ



第24図 5号墳 第1主体実測図

ラスでは径約0.25mの土壙1が検出された。

疊床の幅は東側で0.62m、西側で0.52mを測り、被葬者の頭位は東方を指すものと推定された。また、副葬品は疊床北東隅で鉄製刀子片1が出土した。

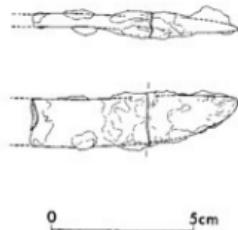
第1主体部出土遺物 鉄製刀子は茎部を欠損し、全体に錆化が著しいが、残存長7.2cm、幅2.8cmを測る。

12号墳第1主体出土の刀子に似たものと思われる。

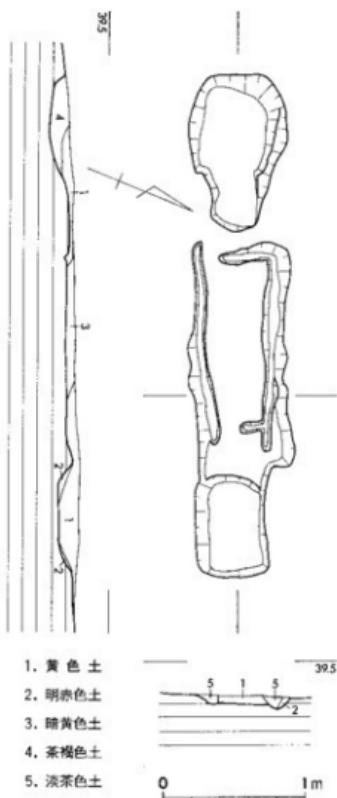
第2主体 第1主体の北側に、尾根方向に穿たれた狭長な素掘りの土壙である。この土壙は、土層観察用畦の一部が重機の擾乱からまぬがれていたため、その掘り込み面を確認することができた。表土直下約10cmの所から掘り込まれており、その面から掘り込まれていたとしても、土壙床面まで6cmを測るに過ぎないものであった。しかし、これでは被葬者を埋葬するにはいさか浅く、本来はいま少し上面から掘り込まれていたものと推定される。また、墳丘が形成されている付近の地山は極めて軟弱であることから、上部は流れ去った可能性も考慮されよう。

検出した主体部は、E-23°-Nを測り、ほぼ長方形の土壙を3つ連ねたような形である。中央の土壙は長さ1.6m、幅0.7m、深さ0.06mを測り、底部壁沿いには棺材を固定したとみられる浅い溝が四方に認められる。長手板を仕組んだとみられる1.4mの2条の溝は、南西側が北東側より広い造りとなっており、このことから、被葬者の頭位は南西側であると推定された。また妻板らしき痕跡もあるが、両妻板間の長さは1.1mと非常に短いものである。

南西側の土壙は長径1.1m、短径0.7m、深さ0.14mを測る不整形なもので、やや丸味のある平底である。北東側の土壙は平面方形を呈し、長さ0.7m、幅0.5m、深さ0.14mを測り、底はほぼ水平である。

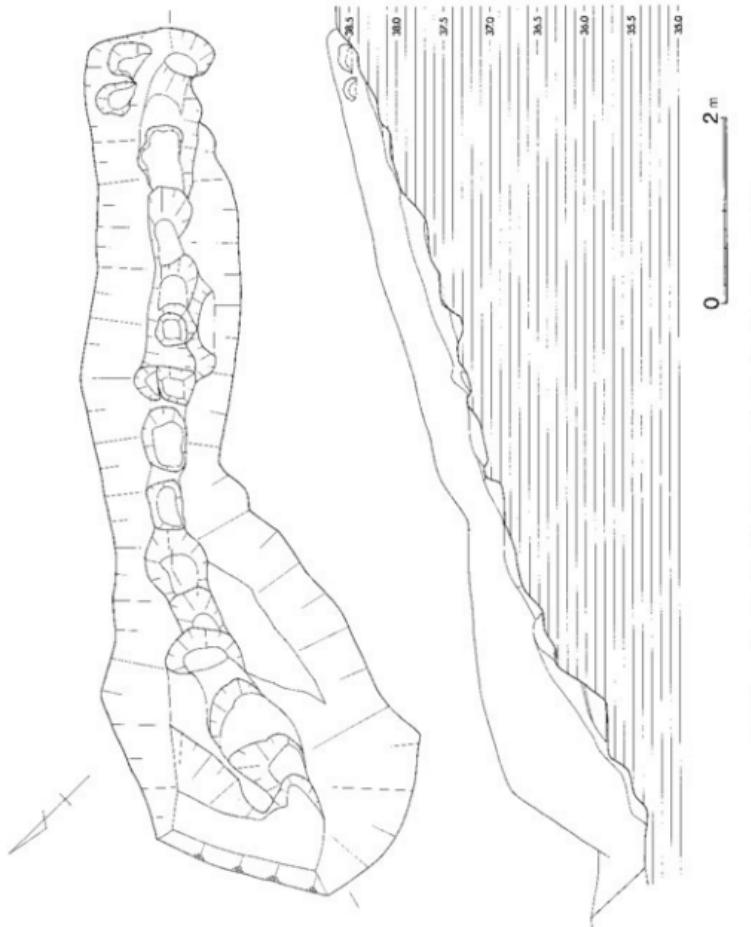


第25図 5号墳第1主体出土遺物実測図



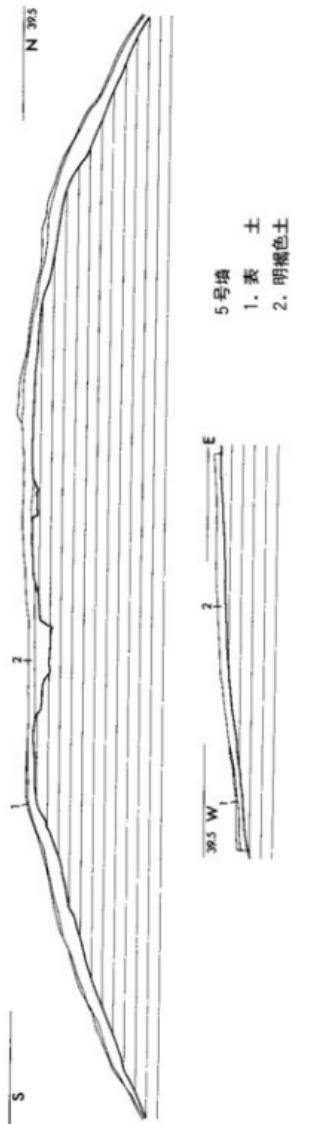
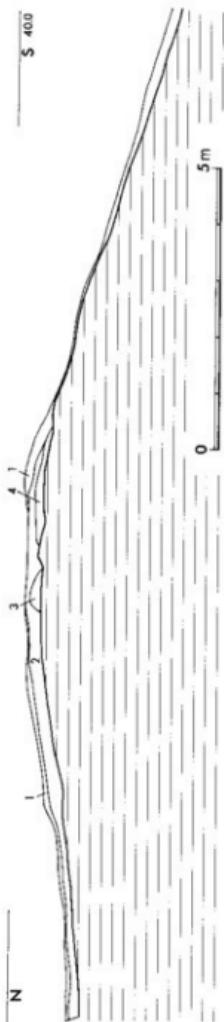
第26図 5号墳第2主体実測図

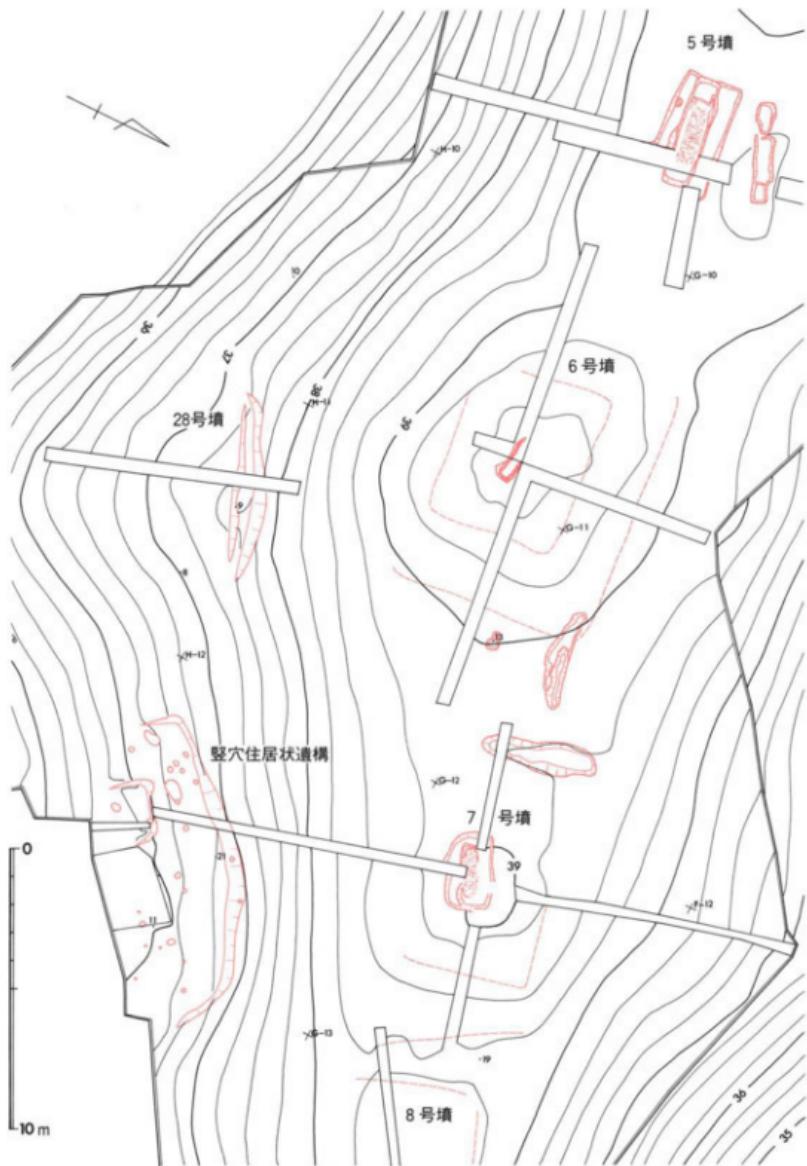
**階段状遺構** 5号墳西側の北側斜面で検出されている。斜距離で9.7m、幅は上端付近で1.35m、下端では2.90mとなっている。検出面からの深さは上端で0.30m、下端では1.30mと深くなる。階段の段は比較的明瞭で22段を数え、さらに調査区外に続くと考えられる。なかには「段」と呼ぶよりも土壙と呼ぶ方がふさわしい部分もある。横断面は底の平らなV字状を呈する。この階段状遺構は北側斜面を登り、4・5号墳を区画する溝を一部破壊して設けられており、4・5号墳築造後に造られたものと考えられる。付近で点々と須恵器が採集されていることも矛盾しない。



第27図 5号墳 階段状遺構実測図 (1/60)

第28圖 5・6号墳土層図





第29図 6・7・28号墳墳丘測量図

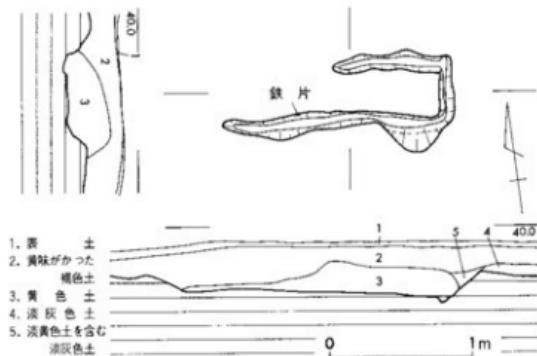
#### (6) 6号墳

5号墳の東側に隣接し、尾根に直交する2本の溝によって方形墓域が画されている。西側の溝は5号墳と、東側の溝は7号墳とそれぞれ共有する形となっている。墳丘は、東西13m、南北11mを測り、わずかにだが高さ0.7mが認められる。標高は39.8mである。

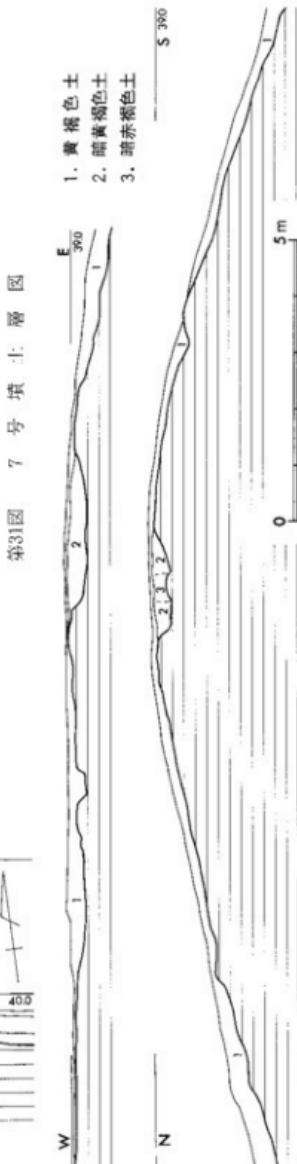
本墳が第Ⅲ支群の第4号墳以東の中で立地的に見えるのは、立地が比較的高位にあることに加え、後述するよう、盛土が施されていた可能性があることも関係する。

調査は、尾根筋中央とそれに直交する土層観察用畦を設定して実施し、腐蝕土を除去すると、下は黄褐色の軟弱な地山であった。墓域を画す溝はその地山に掘り込まれているが、溝の掘り込みや肩の稜線は不明瞭で、溝に向かって緩やかに下降する縁は、溝底に達すると隣接する墳丘に向かって再度緩やかに上昇していく。

墳丘中央で検出された主体部は平面では「コ」の字状を呈し、半周する溝状のものである。これは、木棺の長手板および妻板を仕組んだ痕跡であろうと判断された。残存規模は、長手板の痕跡は長さ1.5m、幅0.05m、妻板の痕跡



第30図 6号墳主体部実測図



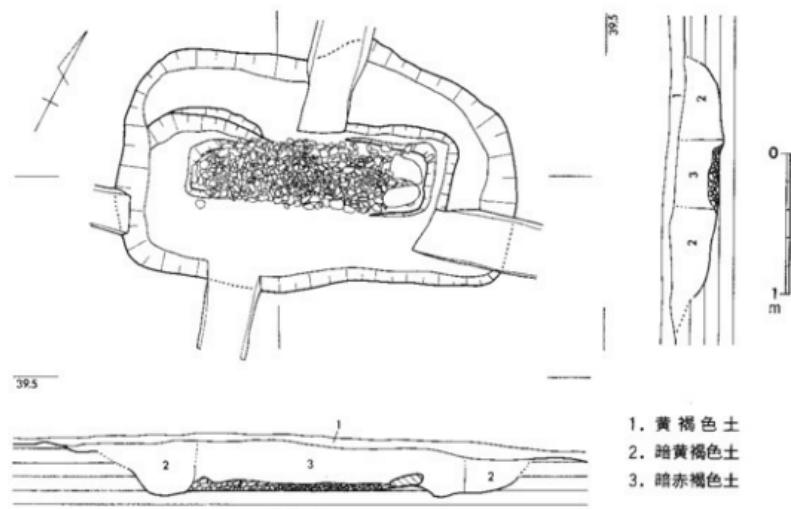
は長さ0.4m、幅0.03mを測り、深さはいずれも0.04m前後である。棺の痕跡から、主軸方向はE-7°-Sと推定される。この痕跡は表土下30cmの位置にあり、埋葬をおこなうにはいささか浅すぎると考えられ、本来はもう少し上面から掘り込まれていたものと推定される。したがって、墳丘成形時には盛土が施されていた可能性が考えられる。

主体部としたものの、床面は疊を敷く等の行為はなされていない。なお、床面のレベルは西方がやや高くなっているものの、2本の長手板痕の幅は東方が少し広くなっている。被葬者の頭位がどちらを向くのかは判断しえないが、本古墳群では東位をとるものが大半を占めることから推すとあるいは東位をとるものかもしれない。

**出土遺物** 主体部内側の長手板沿いで1辺1cm前後を測る薄い鉄片を得た。鉄片は図示しえないほどの小片で、その性格等は不明である。

#### (7) 7号墳

6号墳の東側に接して営まれており、6号墳との比高差は0.7mで6号墳より低い。前述したように、6号墳との間の溝は不明瞭である。古墳は丘陵の尾根上に築造されており、8号墳との間に幅3.1mの溝を掘り、地山の削平により墳丘を造り出している。墳丘は方形で、長辺12m、短辺10m、高さは東側の溝底から測って0.8mである。



第32図 7号墳主体部実測図

墳丘の中央部から主体部を検出した。地山面から長辺2.8m、短辺1.6m、深さ0.3mを測る土壌を掘り込み、その中央に内法長1.65m、幅0.45mの箱式木棺を埋置した後、床に礫を敷きつめている。土壌の底面は、箱式木棺が安定するように方形に掘り残してある。土壌内の覆土の観察により、木棺のあった部分の土層は暗赤褐色土で、その周囲は暗黄褐色土が入っている。

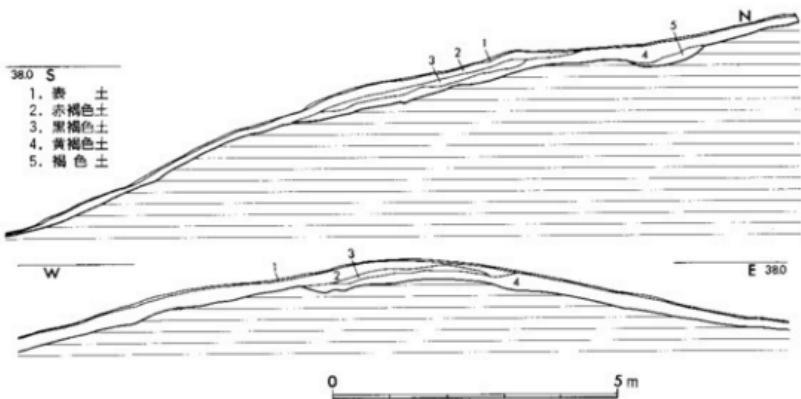
土壌底面の掘り残した部分には、径3~5cm程の扁平な礫が厚さ約4cmでほぼ水平に敷きつめられており、他の礫床の礫に比べて非常に大きいことが注目される。礫床の東側には、25×14×7cmの枕石2個が「ハ」の字状に置かれており、被葬者の頭位は東に向くものと考えられる。また、主軸はE-15°-Nである。

主体部からの副葬品は出土しなかった。しかし本墳に直接ともなうとは考えられないが、東側周溝内より須恵器片が、また北東側の墳裾より紡錘車形鉄製品が出土している。

#### (8) 28号墳

第Ⅲ支群の位置する東西に延びる尾根が、わずかに突出している6号墳の南側斜面に築かれていたと考えられる。標高は第Ⅲ支群の他の古墳よりも約2.5m低く、37mである。調査前にはわずかにマウンド状の高まりが認められていたが、調査を行なっても主体部を検出することはできなかつた。地山はなだらかな傾斜をもって降つており、本来墳丘のほとんどは盛土によるものであったと考えられる。この盛土内に設けられた主体部は盛土の流出とともに失われたものと考えられる。

しかし、わずかに北側で溝が検出されており、これがこの古墳の北側を区画するものであったと思われる。溝はほぼ直線的に掘られ、本来は方墳を意図したものようで、溝の残存長6.7m、幅



第33図 28号墳 土層図

約1.2m、検出面での深さ0.2mを測る。この溝の長さが墳丘一辺の長さにはほぼ等しいものとすると、一辺10mにも溝たない小規模な古墳であったと考えられる。溝内には褐色土が堆積しており、この覆土内に須恵器小片を含んでいるが、時期を決定できるものではない。

そのほか、墳丘各地点で、山陰の須恵器縦半II期の須恵器蓋杯が採集されている。この遺物をもって28号墳の時期と考えうるならば、同一支群中の1号墳と同時に築造され、奥才古墳群中では最も新しい時期のものと認めることができる。この古墳と1号墳はともに丘陵尾根から突き出した支脈上に立地し、さらに墳丘のほとんどを盛土によって築成しているなど、多くの共通点を有している。また、1号墳同様、丘陵尾根上の古墳群の築造が終了した後に付け加えるように築造されたものと考えられる。古墳の立地としては非常に劣悪な地点に、わざわざ盛土してまでも墳丘を築造しなければならなかつた理由などは不明である。

#### (9) 8号墳

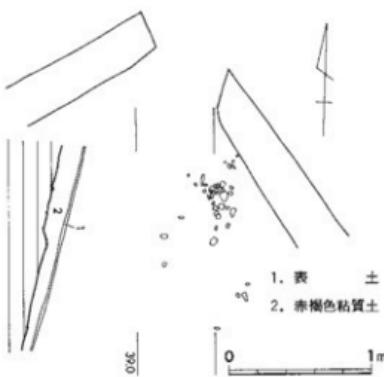
7号墳の東側に隣接し、丘陵がやや北寄りに折れ曲がる尾根上に築造されている。標高は38.6mで、7号墳との比高差は0.5mである。7号墳との間には幅3.1mの溝を掘り、地山削平により墳丘基盤を造り出し、その上に赤褐色の盛土を施している。盛土は0.2mしか残存していないが、築造当時はかなり厚かったと思われる。主体部はこの盛土内から掘り込まれ、地山上面を墓壙底としたものと考えられる。9号墳との間はやや離れており、緩斜面が続いている。

墳丘は、原形をかなり損っているが、方形を呈していると思われる。長辺12m、短辺10mで、高さは西側の溝底より1.5mを測る。

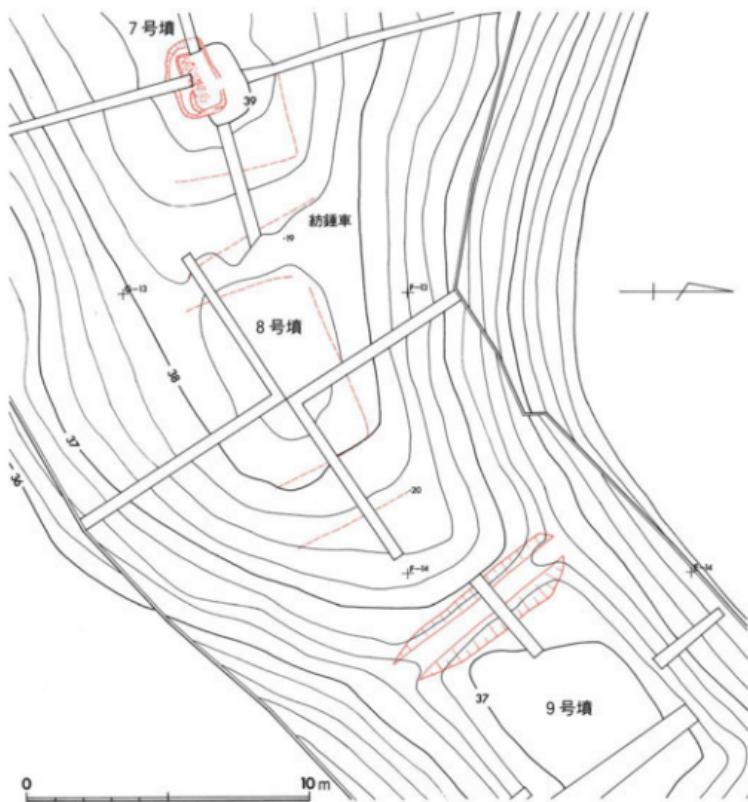
墳頂部北東寄りで、北側と南側の2箇所で指頭大の砾分布が認められた。北側で0.5×0.3m、南側で0.6×0.4mの範囲に分布しているが、地表面に加工が残るのは南側のみで、この南側のものが主体部底の砾床の一部が残ったものと思われる。砾の分布がまばらなため、頭位等もつかめない。

主体部は盛土内から掘り込まれていたが、この盛土が後世流出し、その上耕作や樹根等によって著しい擾乱を受けたため、その残存状態は極めて悪く、検出にも数本のトレンチを入れてやっと確認できたものである。

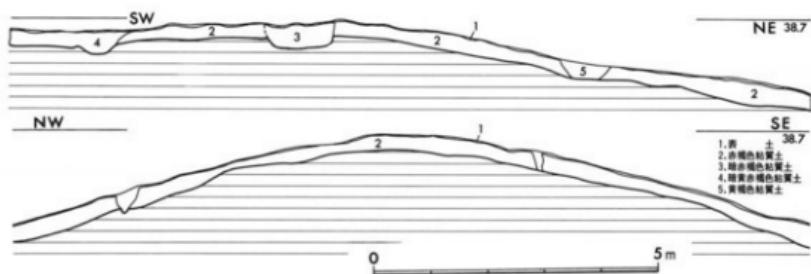
この古墳にともなうと考えられる遺物は出土しなかつた。



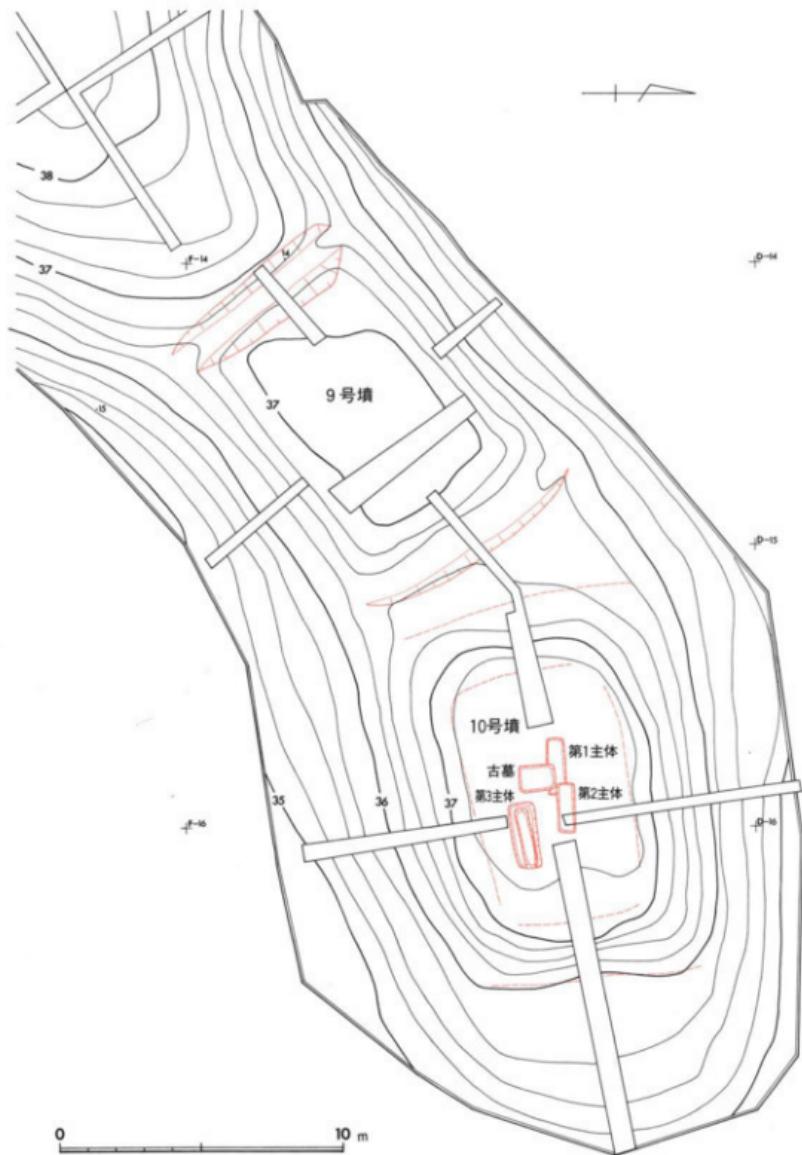
第34図 8号墳砾出土状態実測図



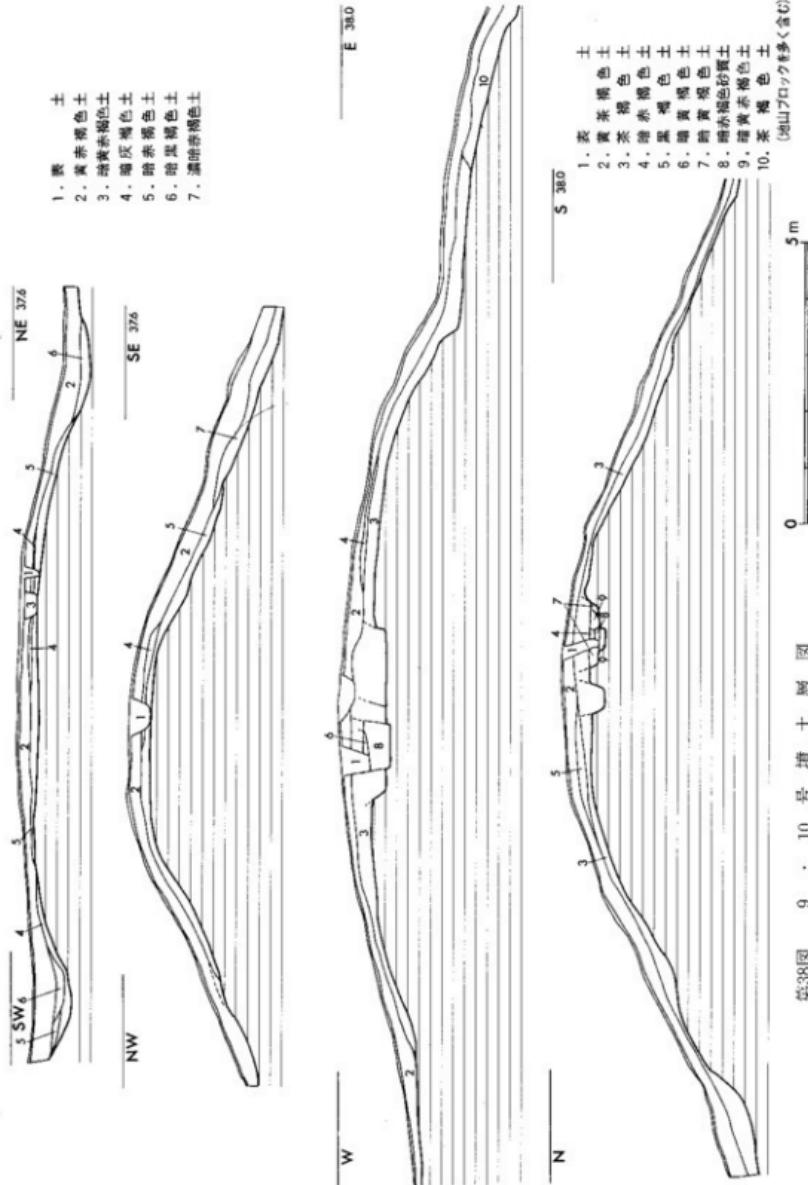
第35図 8号墳 墓丘測量図



第36図 8号墳 土層図



第37図 9・10号墳丘測量図



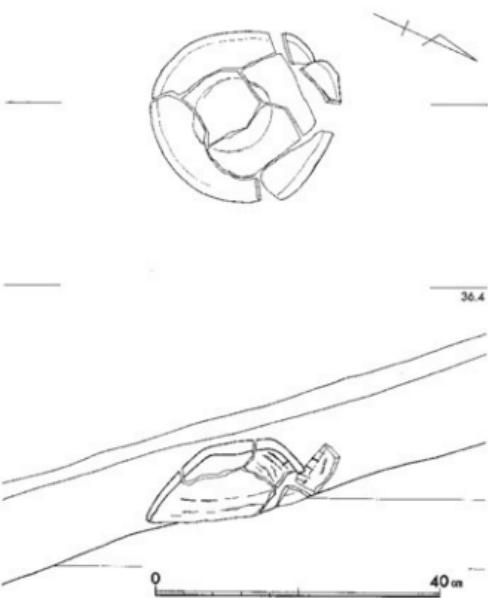
第38图 9·10号填土層圖

## 10) 9号墳

8号墳と10号墳の間、第Ⅲ支群の尾根が東へ向けて8号墳から降った場所に位置する。調査前より、9・10号墳は長方形を呈する方墳で高まりをもっていることは確認できた。第Ⅲ支群中の5～8号墳と比較しても規模もやや大きく墳丘も高い古墳で、周囲から見ても容易に確認できた。

9号墳の西側は、8号墳より尾根が一段と降った後平坦になる所に浅い溝を掘っており、東側の10号墳との間に、幅2.5mの溝が掘られている。丘陵斜面の裾は不明瞭で墳丘と尾根との区別は容易ではないが、36mのセンターが回るあたりで斜面の傾斜が緩やかになっており、裾と考えて良いと思われる。

調査は、墳丘主軸方向にベルトを設け、中心部分とそれに直交するようにベルトを設け精査を行なった。しかし、地山が赤褐色の軟弱な土のため、表上から0.35m掘り下げたが主体部が検出できず、ベルトに沿って幅0.5mのトレーナーを入れて土層の観察を行なった。墳頂部では、表上の下に0.2mの厚さで黄赤褐色土、その下が0.15mの厚さで暗赤褐色土、その下が地山となっていた。主体部は検出されなかつたが、これは地山の上が軟弱なために盛土とともに表面が流失したか、本来主体部があったにもかかわらず、ベルトの土層を観察しても掘り方と思われる土層の変化を確認し得なかつたものと思われる。

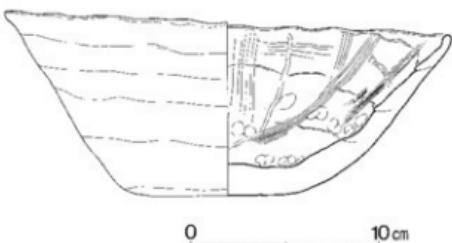


第39図 9号墳斜面土師質土器出土状態実測図

墳丘は地山を切削加工しており、整美な造りの方墳である。墳丘の長辺11m、短辺10m、北東側の溝底から測った高さは1mである。墳頂部の平坦面は長辺8m、短辺6mを測る。

墳頂部からの出土遺物はなく、南側墳裾から表土除去時に上師質土器1が出土している。墳丘斜面の地山面に貼り付くように伏せた状態で出土した。

出土遺物 上師質土器（第40図）は鉢というべき形態のもので、底部は平底で、体部から口縁部へ向け緩やかに広がって行き、口縁部がやや内傾している。端部



第40図 9号墳斜面出土遺物実測図

りがあると思われるが、他に類例がないため、時期の断定は困難である。

#### (1) 10号墳

第Ⅲ支群の東端、9号墳の東側に位置する方墳である。9号墳との間には幅2.5mの溝が穿たれており、11号墳との間は径により切断されているが、丘陵自体は本来緩やかな傾斜で統一していたと思われる。

本墳の南側の丘陵を下った位置に12.5×5.0mの平坦面があり、墓地となっていた。本墳の東側には、幅4.0mのテラス状の平坦面が造り出されている。墳丘は地山を切削加工しており、東西長14.0m、南北長9.0m、西側の溝底から測った墳丘の高さは0.7mである。9号墳と同様に極めて整美な造りの方墳であり、遠望しても方墳であることが明瞭に確認できるものである。

墳頂部には7.5×5.5mの平坦面があり、墳丘の長辺と平行するように第1・第2主体が検出され、第1主体の南側にはこれらと平行して第3主体が検出された。また、第2主体と切り合って直交するように土壙が穿たれている。この土壙上には五輪塔が3個並んで出土しており、第2主体よりも後に古墳を再利用して古墓であろうと思われる。

**古墓** 表土除去後、古墓の北東コーナーを斜めによぎるように、五輪塔の水・地輪が3個並んで出土した。これらは同一のレベルにより出土しているが、本来は土壙上に重ねて積まれていたと考えられる。この五輪塔を取り除いて精査したところで墓壙を確認した。赤褐色の地山に穿たれた素掘りの土壙で、長辺1.2m、短辺0.8m、深さ0.54mである。土壙の四壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ水平である。

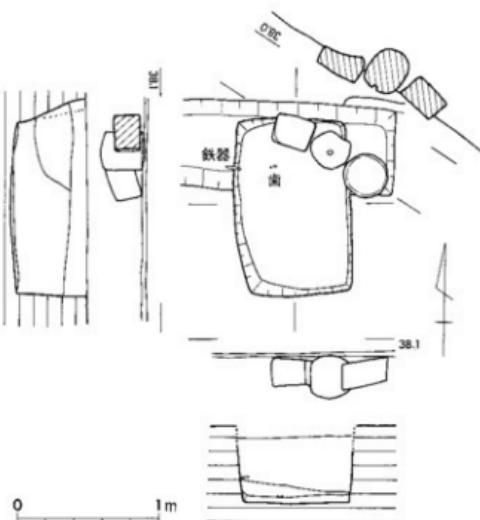
土壙内からは歯牙1と不明鉄器1が出土している。この鉄器は土壙の床より0.16m浮いて、第2主体にもかかったような位置にあり、古墳にともなうのか第2主体にともなうのか断定しかねるものである。

**五輪塔** 古墓の上面において、水輪1、地輪2が並んで出土している。本来は積まれていたものであろうが、セットとしては空・風・火輪を欠いている。

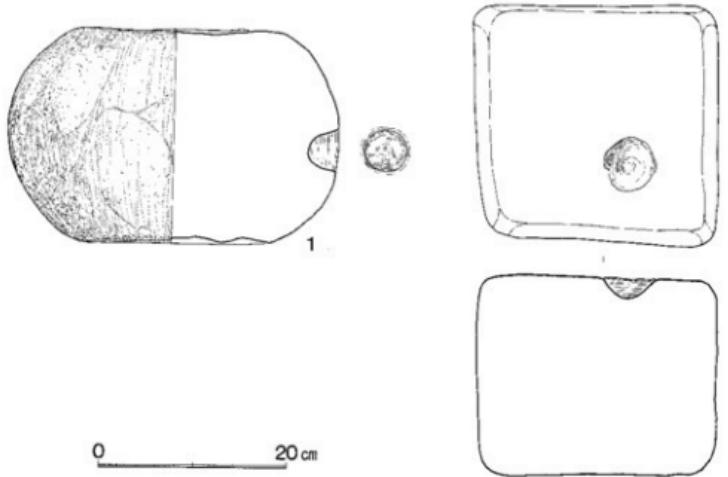
は丸味をもつ。表裏には粘土紐の巻き上げ痕が残り、指頭により整形している。その巻き上げ痕と直交するように、底部より口縁部へ向け強くナデ上げている。口径24cm、底径9cm、器高10cmを測り、黄味がかった赤褐色を呈す。

この上器は古墳と時期的な隔た

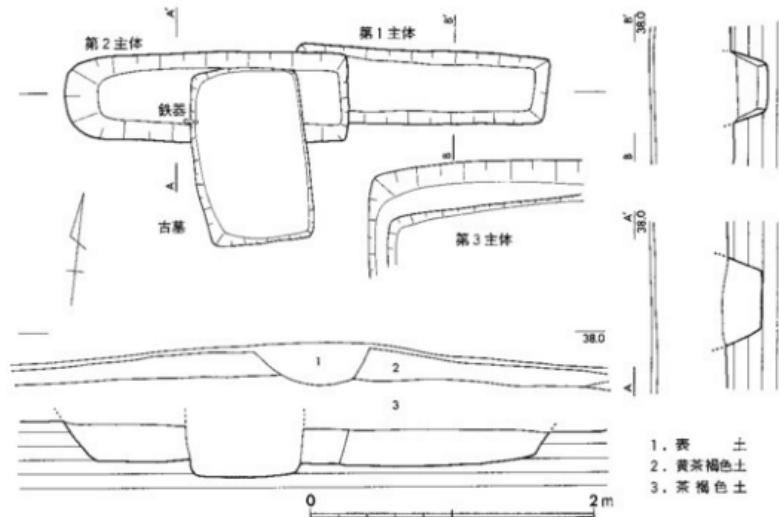
水輪（第42図1）は高さより上下の平坦面の径がやや短いものである。上面の径21cm、下面の径20cm、高さ23cm、最大径35cmを測る。側部に丸みをもち、径4.5cm、深さ3.2cmの穴が穿たれているが、この穴は各輪を重ねる際に役目を果たさないことから、二次的なものと思われる。地輪（第42図2）は立方体を呈し高さより幅がやや広い。最大幅26cm、高さ21cmを測る。上面の中心より多少角寄りに径6cm、深さ2cmの穴が穿たれているが、これも1と同様に二次的なものと思われる。（地輪がもう



第41図 10号墳古墓実測図



第42図 10号墳古墓出土五輪塔実測図 (1/6)



第43図 10号墳第1・第2主体実測図

1点出土していましたが、プレハブ移動の際に紛失してしまったことを、ここにお詫びする次第であります。)

**第1主体** 墓頂部のほぼ中央に位置し、東西方向に長軸を持つ素掘りの土壙である。

長辺1.8m、短辺0.5m、深さ0.25mを測る。土壙床面は東側の方が0.06m高くなっている、東に頭位をもつと考えられる。土壙の壁は床面から緩やかに立ち上がっている。床面からは木棺の痕跡等は検出されていないが、土壙の幅が狭く長さがあり、本来は土壙に沿うように木棺を入れていたと考えられるものである。

**第2主体** 墓頂部の第1主体と主軸を一にし、東側で第1主体と切り合っており、中央から東側にかけては後世古墓が穿たれている。

土壙は地山に掘り込まれており、長辺2.00m、短辺0.65m、深さ0.25mを測る。床面は西側の方が0.04mほど高くなっている、西側に頭位を持つとすると、第1主体と頭位が全く反対になるという位置関係になる。床面からは木棺の痕跡等は検出されていないが、第1主体と同様に土壙の四壁に沿うように木棺を入れたものと思われる。

土壙の床面中央部より鉄器が1点出土している。この鉄器は、古墓検出の際西側の壁より一部分が出土しており、第2主体と古墓のどちらにともなうものかは断定しかねるものである。

第1・第2主体部の切り合ひ関係から、第1主体(古)→第2主体(新)という新旧関係が知られるが、墓縁が切り合っているのは、奥才古墳群の中でも、39号墳とこの例だけである。

第2主体出土遺物 用途不明の鉄器で、中央が折れて途中を欠失しており、接合できない。

板状を呈し両端は丸味を持っている。一方の端は一部を欠いており、もう一方は小さな突起が付いている。両端は刃部とはならず、横断面は長方形を呈する。残存長10.5cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る。

第3主体 第1主体の南側に位置して穿たれている二段掘りの土壙で、第1・第2主体とはほぼ同方向を示し、E-13°-Nを測る。

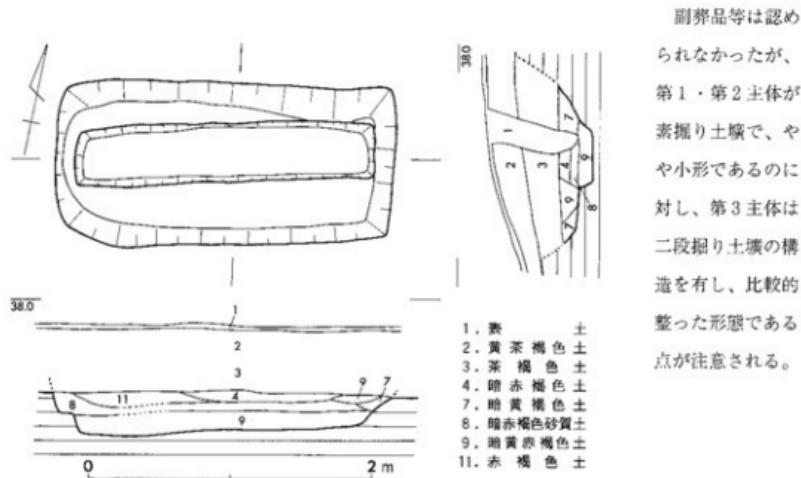
土壙の長辺2.4m、短辺1.1m、検出面からの一段目の深さは0.14m、二段目の長辺2.1m、短辺0.54m、深さ0.12mである。二段目の土壙は一段目の土壙の北側下端にわずかに寄せて設けられ、東北隅は両者が接する形となり、南側は長さ2.2m、幅0.3mを測るテラスが造り出されている。土壙の壁は、二段目が垂直に近く立ち上がり、一段目は緩やかに立ち上がる。

この主体部の床面は、西側に比して東側が0.05m高くなってしまっており、このことから被葬者は頭位を東にして埋葬されたものと思われる。



第44図 10号墳出土遺物実測図

0 5cm



第45図 10号墳第3主体実測図

副葬品等は認められなかったが、第1・第2主体が素掘り土壙で、やや小形であるのに對し、第3主体は二段掘り土壙の構造を有し、比較的整った形態である点が注意される。

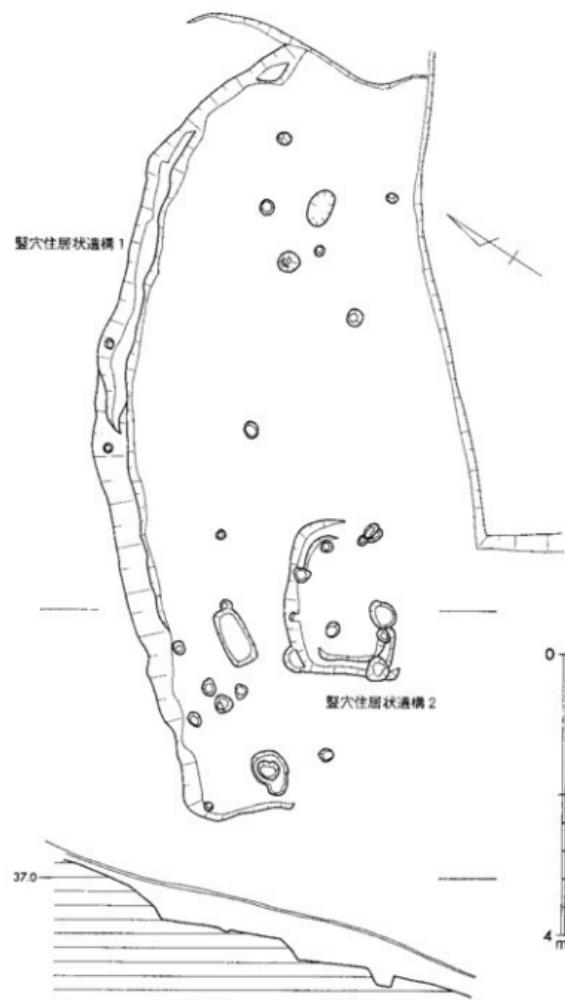
### 02 壁穴住居状遺構

7号墳下の南側斜面に位置し、狭いテラスと柱穴状の落ち込みからなる。この遺構は、7号墳の南側墳裾線を追う過程で検出したものである。

7号墳頂から2.5m下にあって、斜面は墳裾から約15°の傾斜で下降し、谷底に至る。谷底からの比高は約15mである。

調査は、7号墳南側斜面の精査中に細かい炭化物が認められたために急速調査区を拡張するという形で行なった。墳裾下の斜面の表土を除去して降ると、尾根に沿うようにして走る落ち込み掘方を検出した。

この落ち込みの壁は約50°で掘り込まれ、弓なりに弧を描いており、壁面の中央から東端には幅0.2mの狭いテラスが長さ4.5mにわたって設けられている。壁の中央部には2つの柱穴状のビッ



第46図 壁穴住居状遺構実測図 (1/80)

トがあり、いずれも径0.15m、深さ0.10mを測るものであった。この落ち込み内の覆土中には、米粒大の炭化物が多く認められ、この覆土を除去することによって、壁穴住居状遺構が検出されたの

である。

床面は、東西長10.8m、南北幅4.0mを測り、平坦ではあるが谷に向かって約8°傾斜しており、水平ではない。床面では、大小17個からなる柱穴状ビットとともに隅丸長方形プランの土壙1、楕円形土壙1、さらに三方を溝で囲む落ち込み1を検出した。大小の柱穴状ビットはほとんど径0.2m前後、深さ0.10m前後を測るが、中には床面西方端にみられるように、二段掘りで径0.60m、深さ0.25mの規模をもつものもある。隅丸長方形プランの土壙は西方端から約2.0mの位置で検出され、長さ0.85m、幅0.40m、深さ0.10mを測る。平面楕円形の土壙は床面東寄りで検出され、長径0.60m、短径0.30m、深さ0.05mを測る。この2つの土壙覆土巾には多くの炭化物が認められた。

三方を溝で囲む落ち込みは中央やや西寄りで検出され、幅0.3mの溝によって区画されており、東西2.2m、南北1.5mを測る。床面はほぼ水平で、この落ち込みが掘られている広い床面との落差は0.25mである。溝に囲まれた中に大小9個からなる柱穴状ビットが検出された。径0.15~0.45m、深さ0.2~0.4mを測り、覆土に米粒大の炭化物が認められたことは前述した例と同様である。

この遺構は、弧状の掘り込み線や柱穴状土壙等から丘陵斜面に構築された住居跡を思わせるものがある。しかし、床面に穿たれている柱穴状ビットの相互関係を認められず、プランも極めて不整形であり、遺構のもつ性格は不明と言わざるを得ない。ただ注意すべきは、この遺構が南の谷を向く形となっており、冬期の北風を避ける位置にあるとともに、遺構復土中にまんべんなく炭化物が認められたにもかかわらず人が生活をしたことを示す痕跡が認められないことである。積極的根拠があるわけではないが、あるいは埋葬にかかわる儀式等に関係する遺構である可能性も考慮されよう。

### (13) 第Ⅲ支群出土遺物

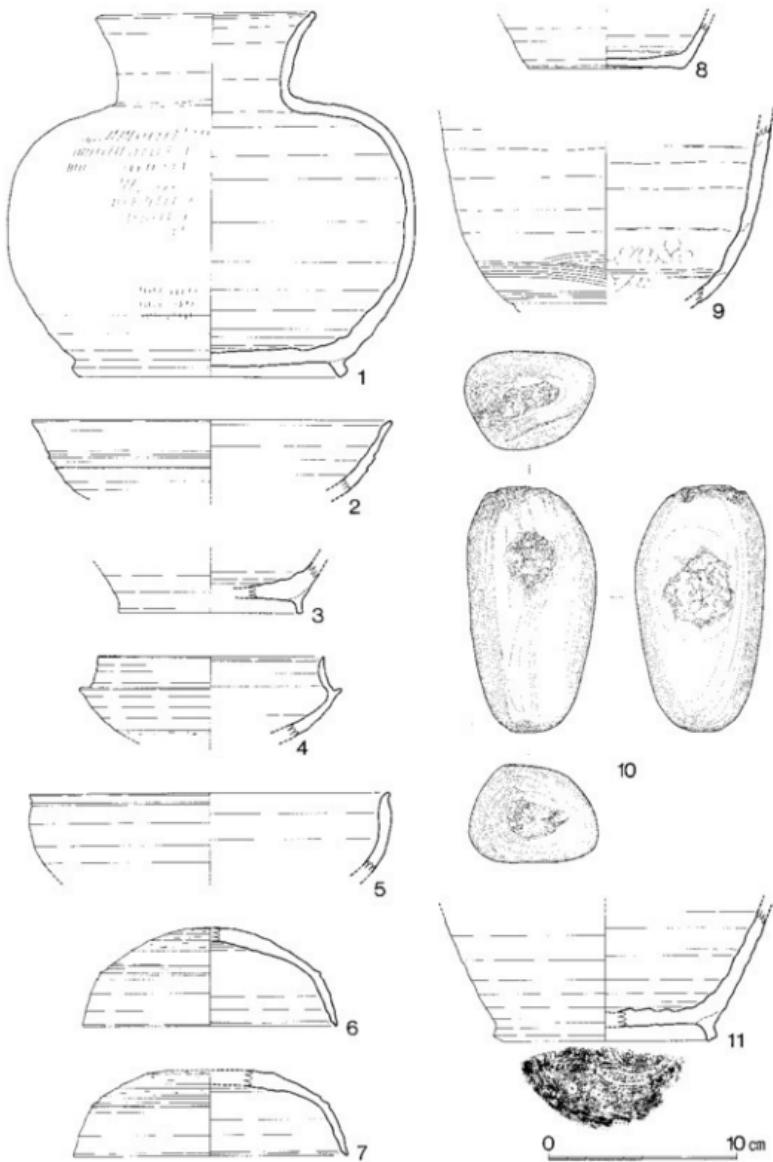
遺物は須恵器・石器のほか、五輪塔残欠などの石製品、紡錘車様の鉄器が出土している。(1)~(3)は1号墳周辺、(4)~(9)は28号墳周辺、(10)・(13)は6号墳周辺、(11)は竪穴住居式遺構周辺、(12)・(22)は4号墳周辺、(14)~(17)・(23)・(24)は9号墳周辺、(20)・鉄製品(21)は7号墳周辺、石製品(25)~(28)は10号墳南側から出土したものである。

須恵器短頸壺は、大きく張る胴部に短い頸部をもつもので、底部に高台を有している。体部外側には回転ナデの下に縱方向のタタキメが残っている。高杯(2)は口縁部の破片で、外面に2段の稜をもち、口縁端部には平坦面をつくる。杯(3)は高台を有するので器壺はやや厚く、壺底部の可能性もある。底部は回転糸切りで切り離した後に高台を貼付けている。杯(4)は高い立ちあがりを有し、立ちあがりの内面端部は段を有している。外面底部はわずかに回転ヘラケズリの痕跡をとどめる。高杯(5)は口縁部の破片で、杯部が内削し端部でわずかに外反する。蓋(6)・(7)はともに開きながらさ

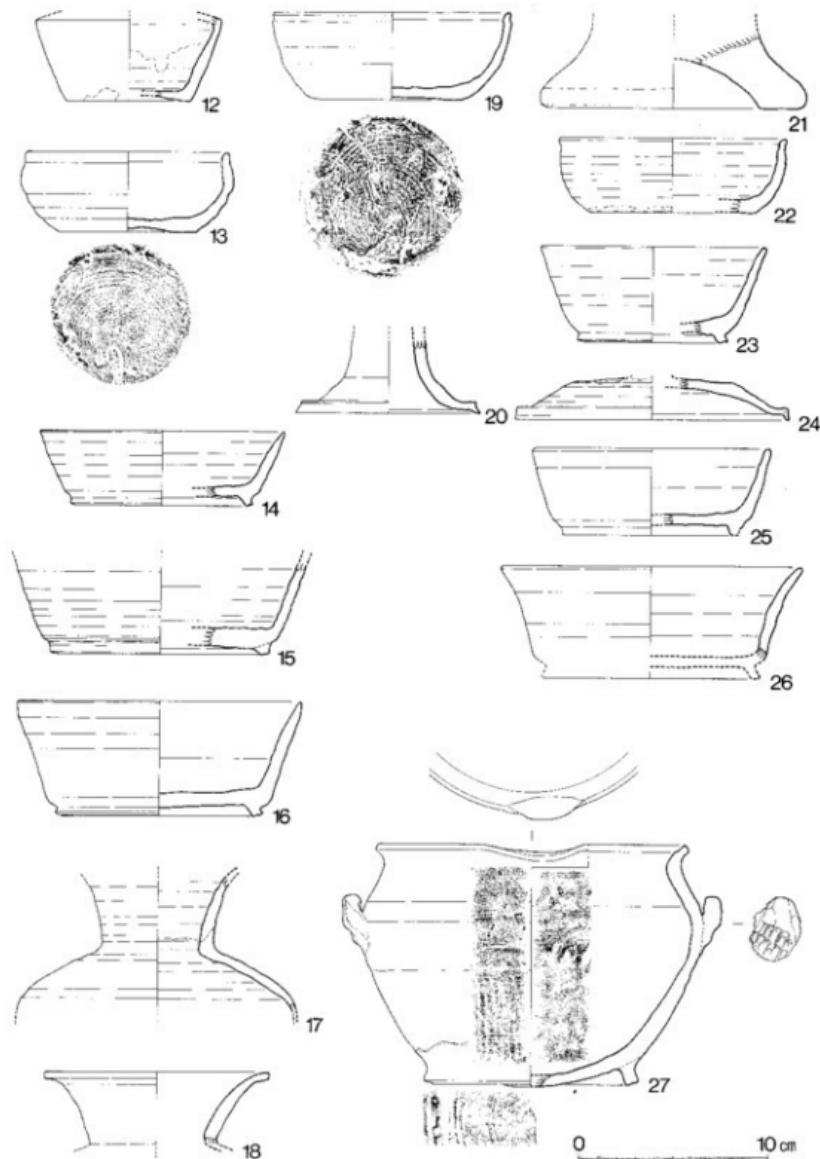
がる口縁部を有する。天井部1/2以上に回転ヘラケズリを施す。天井部と口縁部の境の稜はあまり突出せず、口縁端部内面にはわずかに段を有する。杯⑧は底部で、回転糸切りで切り離す。(9)は壺などの底部と考えられる破片で、円筒状の体部をもつと思われる。外面底部にはカキメをもち、内面底部には指彫圧痕を残す。断面で粘土紐の接合痕が観察できる。敲石⑩は棒状を呈し、表面2面と両端面の4箇所に打痕をもつ。それ以外は加工痕はなく、なめらかな自然釉である。壺⑪は高台を有する底部の破片で、高台から直線的に開く体部に至る。底部は回転糸切りで切り離す。小壺⑫は肩部で鋭く屈曲するもので、底部は上げ底気味の平底である。内外面とも厚く暗緑色の自然釉がかかる。杯⑬は体部が内済し端部でわずかに外反する。底部は回転糸切りで切り離す。杯⑭・⑮・⑯はともに低い高台をもつもので、いずれも高台から屈曲して直線的に立ちあがる体部を有する。底部は回転糸切りで切り離す。壺⑰・⑱はともに口縁部付近の破片で、⑲の頸部内面には、体部と口縁部の接合痕を残す。杯⑲は体部丸味をもって立ちあがり、端部で外反する。底部は回転糸切りで切り離す。高杯⑳は脚部の破片で、裾部で大きく開き、端部で下方に折り曲げて面をつくっている。土製支脚㉑は端部で大きく開き、底部は上げ底となる。この1点のみ土師質の遺物である。杯㉒は体部内済して立ちあがり、端部で外方に折り曲げる。底部は回転糸切りで切り離す。杯㉓は低い高台を有し、体部は直線的に立ちあがる。壺㉔は器高低く、口縁端部は下方に折り曲げて直立する。天井部は回転ヘラケズリを残す。杯㉕・㉖はともに高台を有するもので、直線的に立ちあがる体部を有する。広口壺㉗は底部に高台を有し、丸味をおびた体部をへて、わずかに外反するだけの口縁部に至る。体部最大径付近に1対の把手を貼付け、口縁の1箇所を折り曲げて注ぎ口としている。体部内外面はタタキメをもつが、ナデで消している。

石製品は、五輪塔残欠と地蔵かと考えられる浮彫を施したものである。㉘～㉚は五輪塔空風輪である。㉘は上方でわずかに広がる円筒形を呈し、空風2輪は浅い溝をめぐらすのみで区画される。風輪下部には火輪の柄穴にはめこむための半球形の突起が削り残されている。石材はいわゆる米待石で、突起付近は工具痕が残る。㉙は円筒に三角錐を重ねたような空輪をもち、空風2輪はやや深い溝で区画される。風輪下部には、火輪にはめこむための長い突起が削り残されている。㉚は破損著しく、空風輪を区画する溝付近のみが残存する。㉛・㉜とも石材は来待石である。㉝・㉞は水輪残存部である。㉝はやや偏平で上下とも内くぼみとなる。花崗岩質の石材で風化著しい。㉞はやや大形のもので、上下面とも火・地輪との組み合わせのため深く掘り込まれている。㉞は地蔵尊のようなものを浮彫にしたもので、風化著しいが、胸で合掌した手の表現はかすかに認められる。

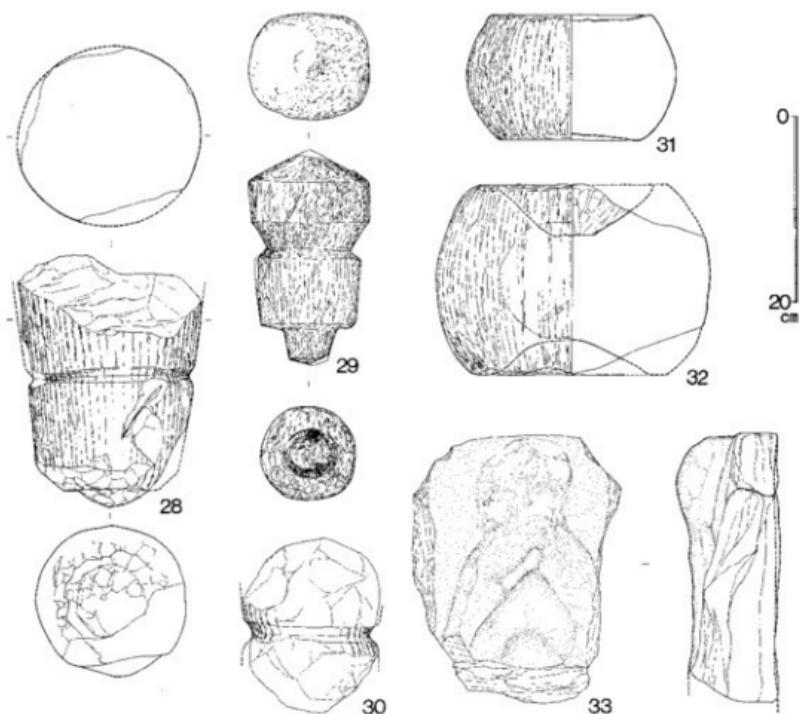
紡錘車形鉄製品㉟は、円盤の部分径4.5cm、厚さ0.3cmを測り、中央を貫通する軸は両端が欠損するが、1.6cmを残している。



第47図 第III支群出土遺物実測図(1)



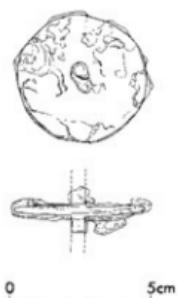
第48図 第Ⅲ支群出土遺物実測図(2)



第49図 第Ⅲ支群出土遺物実測図 (3) (1/6)

以上の遺物の時期は、須恵器では(4)・(6)・(7)が日本編年Ⅱ期、(19・24)が国庁編年第3形式、柳浦編年第3式、(13・23・24)が国庁第4形式、柳浦第4式、(4)が国庁第3形式、柳浦第4式、(8)は国庁第5形式、柳浦第5式、(14)・(16)・(24)が国庁第5形式、(11)が国庁第3形式あるいは第4形式と考えられる。

石器(10)は敲石と考えられるもので、古墳の築造に先立つ時期の遺物の可能性がある。



五輪塔ほかの例～(3)は中・近世の墳墓にともなうものと考えられる。

第50図 第Ⅱ支群出土  
遺物実測図(4)

第2表 第III支群 遺構に伴わない遺物観察表(1)

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	厚さ					
47-1	短甕器	11.5	14.0	19.7	高台がつくタマネギ形の胴部に無い張筋がつく。 胴部外面にタタキ目が残るが、目起ナゲで斯ど消える。底部かすかに切りはなしした痕跡残る。	赤味をおびた灰白色	石英・長石など微細なもの多い。全体に砂質	不良	
2.高杯カ		19.0	-	-	口径大きい。端部は平坦面をなす。 外面は2ヶ所で段をなす。	青灰色	石英・長石など細かいもの含む。	普通	
3.底部		-	9.7	-	きゃしゃな高台をもつ。 底形、開口無。	暗灰色	長石の微細なもの含む。	良好	
4.杯身		12.0	-	-	高い立ちあがりを有し、その箇部では段をもつ。 底部回転ヘラケズリ、ロクロ回転右。		精選され密	普通	
5.高杯カ		19.0	-	-	丸味をもった口縁部。口縁端部は外反しながら丸くおさまる。口縁外唇に鋒い突筋がめぐる。内外両とも回転ナデ。	灰抹青緑色	繊密	良好	
6.杯身		13.5	-	5.3	体部直線的な立ちあがり、天井部丸美。灰色をおびやや高い。口唇内面に段をもつ、がシャープではない。 外面／天井部ヘラケズリ、ロクロ回転右。は下回転ナデ。 内面／天井部ナテ調整。以下回転ナデ。		細かい石英、長石をわずかに含む。	普通	口縁部の一部焼けひずむ。
7.		14.6	-	-	口径やや大きき、直線的に「ハ」の字に聞く体部を有する。口唇内面にかすかな段をもつ。 外面／天井部全面に回転ヘラケズリ。以下開口ナデ。 内面／天井部中央ナテ調整。以下回転ナデ。	明灰色	石英・長石の小砂粒をや多い。	普通	
8.杯カ		-	8.3	-	平原な底部からやや聞いて立ちあがる体部をもつ。底部回転無。	暗青灰色	石英・長石など、やや大粒のもの多い。	良好	
9.蓋カ		-	-	-	円筒状の胴部から丸くすぼまって底部に至る。 外面／回転ナデ。底部近くにカキ目。 内面／回転ナデ。底部近くに指印压痕。 粘土接合部もある。	暗灰色	石英・長石の大粒のもの多い。特に長石片立つ。	普通	
11.		-	10.8	-	高台をもち、直線的に立ち上がる胴部。外面／墨灰色 をもつ。底部回転無。胴部内外両面／灰色	石英・長石の大粒のもの多い。	良好	外腹一部に自然釉。	
18-12.小蓋カ		-	6.6	-	肩部張り、器高低い胴部。 底部へづおこし。	灰色	精選され密		外腹暗緑色の自然釉厚くかかる。
13.杯身		10.6	7.4	4.3	底部からゆるやかに立ち上がり、肩部に向け内済し、堆塑直立する。 底部回転無。外面内外両とも回転ナデ。 内面底部ナテ調整。		細かい砂粒含み、全体に粗い。		
14.		13.0	9.2	4.0	高台をもち、底部から直線的に立ち上がる体部を有する。 底部回転無。体部内外両とも回転ナデ。内面底部ナテ調整。	灰白色	精選されるが砂質		

第3表 第III支群 遺構に伴わない遺物観察表(2)

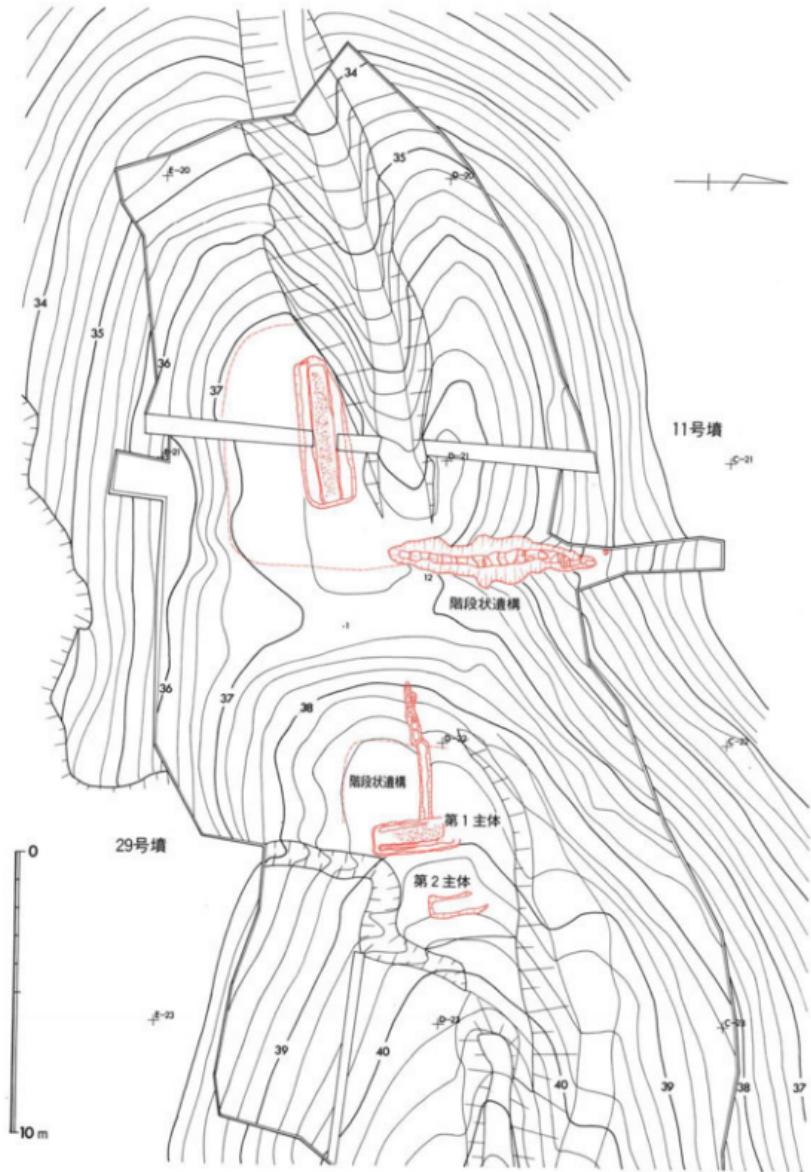
拂國 番号	器種	法 量(cm)	形 態・手 法の特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
	口径 底径 器高						
48-15	杯 身	- 10.8	- 低い高台をもち、直線的に高く立ちあがるが体部をもつ。杯底部は平ら。底部回転糸切り。体部内外面とも回転ナデ。内面底部ナデ調整。	灰白色	長石の砂粒が目立つ。		
16		15.0 10.2 6.2	平坦な底部に低い高台がつき、口縁へ向けて直線的に立ちあがる。底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。内面底部ナデ調整。	暗灰色	砂粒少なくさめ細かい。		
17	壺	- -	- 傾り出す肩部から小さく窪く頸部に至る。内外面とも回転ナデ。頸部内面に口縁部と脚部の接合痕を残す。		長石の細砂粒が多い。		
18		12.0 -	- ゆるやかに広がる口縁部。端部でわずかに折り曲げる。内外面とも回転ナデ。口縁部と脚部の接合面で剥離する。	青灰色	やや大粒の砂粒わずかに含む。	良 好	
19	杯 身	12.4 7.2	4.7 底部から口縁に向かうやかに立ち上がり、端部でわずかに外反する。底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。内面底部ナデ調整。	灰 色	長石をわずかに含む。		
20	高 杯	- 9.8	- 横に向かうやかに広がり、下方に向けて折れ曲がる。内外面とも回転ナデ。	青灰色	砂粒わずか。		
21	十 字 支 脚	- 15.4	- 横ひろがりとなり、底部内面は内ぐりとなる。底部内面ヘラケザリか。	明るい黄褐色	さわめて粗い	不 良	土師質
22	杯 身	12.0 8.8	4.0 平坦な底部、丸味をもった体部を有する。端部わずかに外反する。底部回転糸切り。体部内外面四転ナデ。内面底部ナデ調整。	青灰色	長石の細砂粒目だつ。	普 通	
23		11.8 7.2 5.2	低い高台から直線的に立ちあがる体部。底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。内面底部ナデ調整。	外側／青灰色 内側／淡褐色	長石の砂粒多い。	普通。内面は火のまわり悪く、もらい。	
24	杯 壺	14.4 -	- 幅平等な壺。端部近くで外反し、端部は下方に折れ曲がる。外側／天井部回転ヘラケザリ。内側／天井部ナデ調整。以下四転ナデ。	暗灰色	長石・石英など大粒のもの多い。		
25	杯 身	12.4 -	4.7 平らな底に低い高台がつく。体部直線的に立ちあがる。底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。内面底部ナデ調整。		きめ細かい。		
26		16.0 -	直線的に開く体部を有する。内外面とも回転ナデ。	明るい茶灰色		良 好	
27	把手付 壺	16.2 10.2 13.0	高台のつく丸底からゆるやかに立ちあがり、頭部にかけてくびれ、口縁部は外反する。把手は肩部最大径に貼り付ける。口縁を上に所片口状に折り曲げ、仕上げとする。体部内外面タタキで成形し、なでその痕跡を消す。口縁部回転ナデ。内面底部ナデ調整。	灰 色	長石の砂粒をわずかに含む。		9号墳・38号 埴輪近傍集の ものが接合。

### 第3節 第IV支群

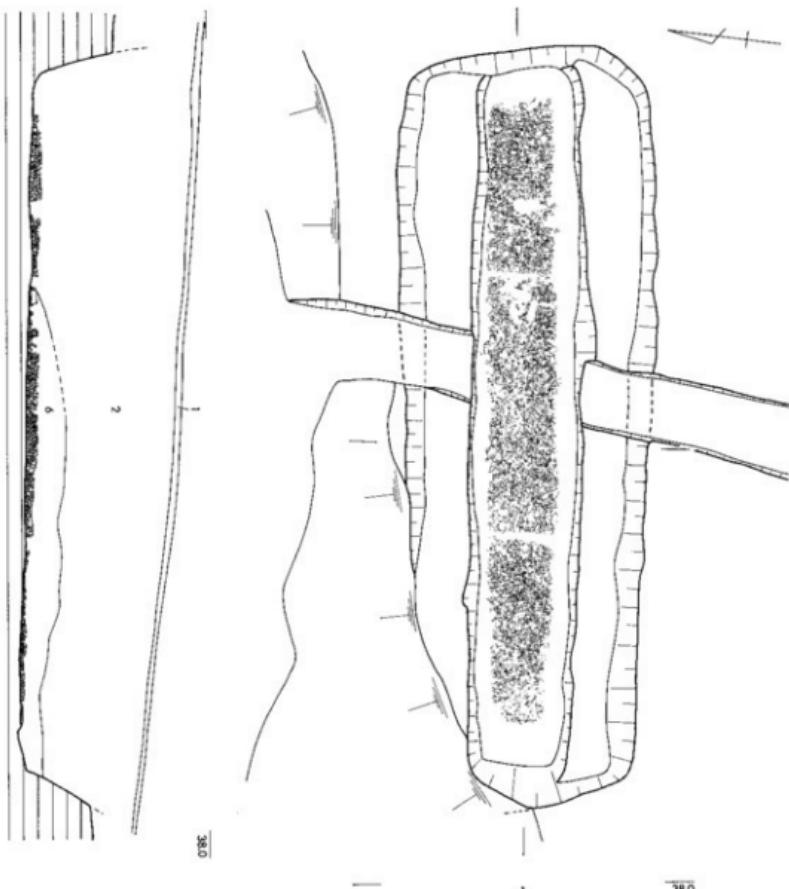
(1) 11号墳



第51図 11・29号墳土層図



第52図 11・29号填 塚丘測量図



1. 表 土  
 2. 赤褐色土  
 6. 赤褐色土  
 (地山ブロックを多く含む)

第53図 11号墳主部実測図

第IV支群中最も西側に位置し、墳丘の中央よりやや北側を東西に走る徑によって削平されている。墳頂の標高は37mである。東側に位置する29号墳との間には尾根と直交するように溝が掘られており、墳頂からの北高は0.3mと浅いが幅は2.5mと広い。また溝の覆土も0.8mに及んでいる。墳丘は地山を方形に削り出しており、東西15.5m、南北10.0mを測る方墳である。

この古墳の埋葬施設は、墳丘のやや南側より検出された。遺構の確認が困難なため墳丘中央部に南北にトレンチを設け、その壁面において主体部を確認した。また、墳丘北東部の斜面には階段状遺構が存在している。

地山面に二段掘りの土壙が掘り込まれており、主体部は主軸をE-13°-Nにとる。土壙は北西部分を道により削り取られているものの長方形を呈している。規模は、上面で長辺5.35m、短辺1.8m、2段目で長辺5.05m、短辺0.75m、深さは2段目までは0.20~0.43m、壙底までは0.15~0.26mである。1段目の壁は緩やかな傾斜だが、2段目の壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。

土壙の底には指頭大の砾が敷かれ、砾の周辺部分が直線的になることから、土壙内には木棺の埋置が考えられる。また砾床は2箇所切られた所があり、その幅は約0.06mである。これは2枚の長手板の間に仕切板2枚を入れ、3室に仕切ったものと考えられる。砾床は全長4.4m、幅0.45m、東側から各々の長さは1.20m、1.78m、1.30mに分かれている。中央の室東側に、長さ16cm、幅8cmの大きめの偏半な砾を2個「ハ」の字状に置き、枕石としている。壙底も西側より東側の方が0.16m高くなっていることから、頭位は東を向くと考えられる。砾の厚さは0.01~0.07mで、東側の方が厚く敷かれている。砾除去後の床面は平坦になっていた。砾床の東側区画から不明鉄器3点が出土し、この主体部の副葬品と考えられる。

出土遺物 1は刀子の刃部の破片であり、先端部分が残ったものである。残存長3.2cm、厚さ0.2cmを測る。

2は刀子の茎の一部で、断面は方形を呈している。残存長1.3cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmを測る。

3は鉄鎌の茎の先端部分と考えられ、断面正方形を呈している。残存長1.7cm、厚さ0.4cmを測る。

## (2) 29号墳

第IV支群11号墳と30号墳の間に位置する。墳丘西側では11号墳と区画する溝が残っているが、東側ではこのような施設は検出されなかった。北側斜面は道によって変形し、南東側は道によって削平され、水路状の溝が蛇行するように残っているが、本来の墳丘は東西10m、南北12mの方墳であったと考えられる。墳頂の標高は約39mで、西側墳裾との比高は2mである。



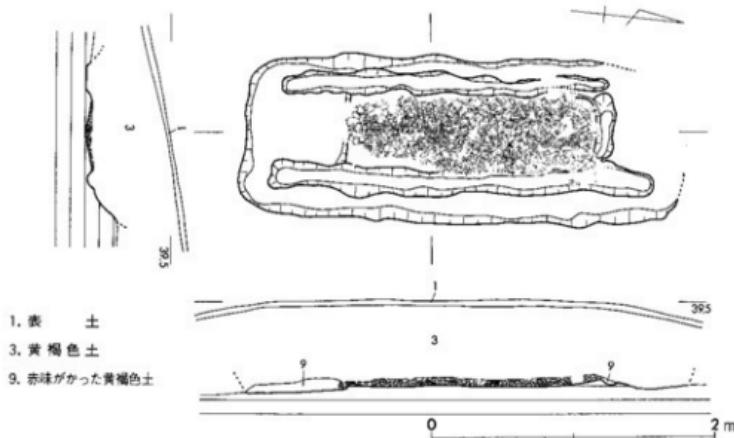
第54図 11号墳主体部出土遺物実測図

墳頂には約 $7 \times 7$ mの平坦面があり、礫床を有する第1主体と素掘り土壙の第2主体が、主軸を南北にして並んでいる。また、墳頂から西側斜面にかけて階段状の遺構が残っており、29号墳墳裾で一端途切れるが、これは、11号墳北東部の斜面の階段状遺構に続くものと考えられる。

**第1主体** 墳丘上面は著しく擾乱を受け、29号墳西側斜面の階段状遺構はこの第1主体を破壊するように設けられており、階段状遺構床面で、礫が若干検出された。墓壙は礫床上面で初めて検出できた。主軸はN-16°-Wとほぼ南北を向くものである。墓壙は北側で掘方が不明瞭な部分もあるが、長辺3.05m、短辺1.15mである。墓壙内には木板で箱形に棺が組んでいたものと考えられ、板の痕跡が残っている。この痕跡から、長手板は東側で2.6m、西側で2.2m、妻板は北側で0.4m、南側で0.5m程度のものであったことがわかる。棺の内法は長辺1.75m、短辺0.55mで、側板が南北にそれぞれ約0.4mずつ張り出していることになり、棺の両妻手側にそれぞれ空間をもっていたことが知られる。

棺の内側底部は地山を約0.04m削り残して台状にし、その上面に礫を敷いている。礫床は棺の内法にほぼ一致し、幅は北側で0.5m、南側で0.4m、厚さは北側で0.04m、南側で0.02mを測る。礫床上面でも北が南よりも0.04m高く、頭位は北を向くものであったことが知られた。礫床は周辺部では径5cm前後の比較的大きな礫を使用しているが、中心部では非常に小粒な小豆大の礫を使用しており、この部分は被葬者を横たえるためか、若干くぼんだようになっている。

第1主体からの出土遺物はなかった。



第55図 29号墳 第1主体実測図

## 第2主体 第1主体の1.8m

東に位置する素掘りの土壙である。主軸はN-11°-Wで、第1主体とはほぼ平行である。

北側および南西側で墓壙掘方は擾乱されているが、長辺2.15m、短辺0.75mを測る。検出面からの深さは0.14mである。墓壙底面は南側が0.15m高くなっている、南に頭位を向けるものとすると、第1主体と第2主体は全く頭位を逆にすることになる。

また、床面には木板の痕跡などは残っていないほか、遺物を検出されなかった。

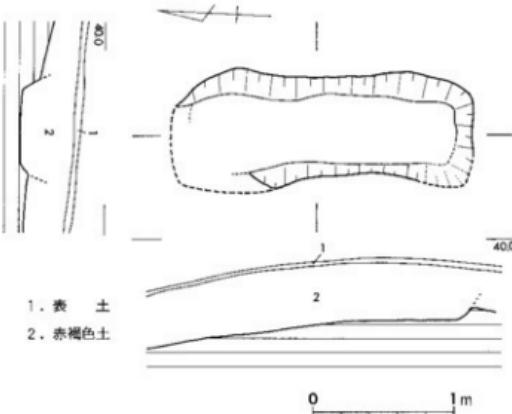
### (3) 階段状遺構

11号墳北東部斜面と29号墳西側斜面の2カ所で検出されている。両者はそれぞれ途切れていますが、互いにつながるものとすれば、第IV支群のある丘陵を北から登って11号墳墳頂あたりで大きく屈曲し、29号墳斜面を登り墳頂部で途切れる道筋が考えられる。

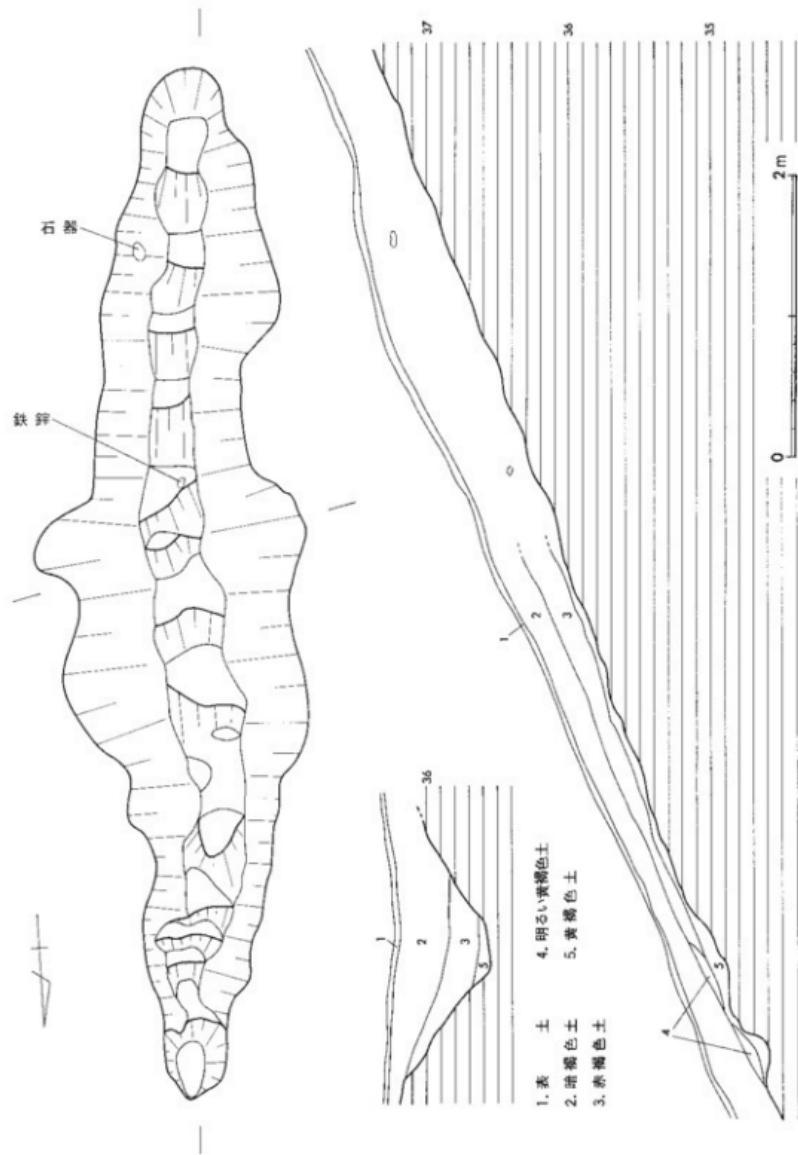
11号墳北東部斜面の階段状遺構は主軸をほぼ南北にとり、標高35mから37.3mにかけて検出され、これ以下では途切れで検出できなかった。全長は斜距離で約8m、中心部で幅1.6m、検出面からの深さ0.5mを測る。断面は底の平らなV字形を呈している。階段状の段そのものはそれほど明瞭ではないが、16段を数えることができる。斜面に掘った溝にわずかに段を設けることによって階段としたものようである。この階段状遺構が途切れた下方に径約0.2m、深さ0.3mの土壙が1つ検出されている。この土壙および階段状遺構の下半の覆土は炭化物を多く含んでいる。

また、階段状遺構の上半覆土中から、蔽石状の石製品と鉄錐1が採集されている。いずれも遺構床面から浮いた状態での検出であり、この遺構にともなうものとは考えられない。

29号墳西側斜面の階段状遺構は主軸をほぼ東西にとり、標高38mから39.2mにかけて検出された。全長は斜距離で6.2m、幅は0.3~0.55m、深さは検出面から約0.5mを測り、全体に前述のものより小規模なものとなっている。階段状の段は斜面の部分のみに7段存在しており、墳丘平坦面の部分では溝状になる。この遺構覆土中にも炭化物を多く含み、2片の石材も検出されている。さ



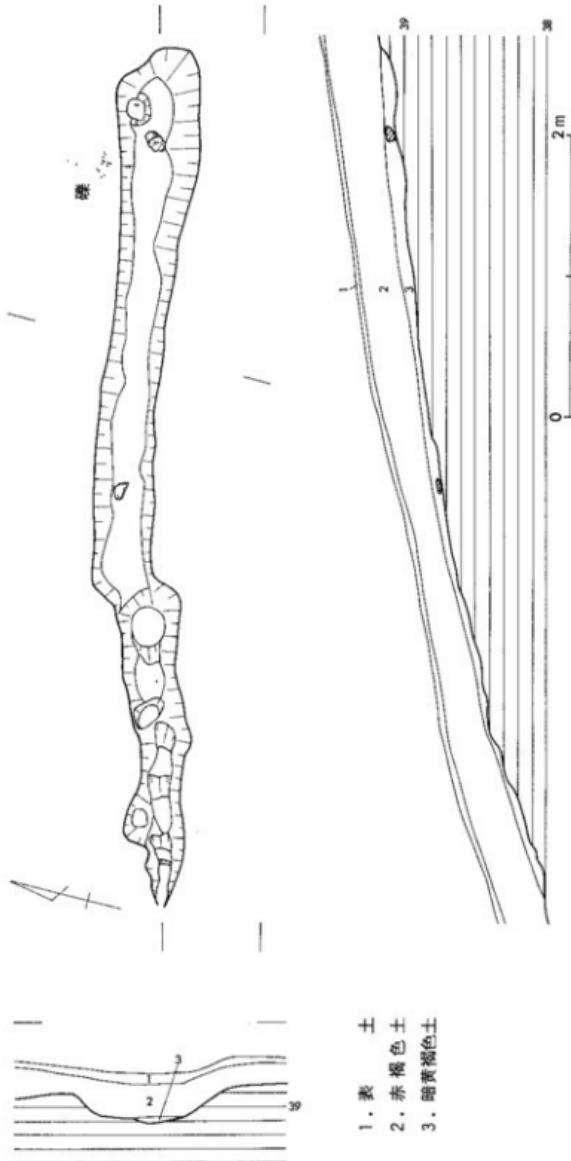
第56図 29号墳第2主体実測図



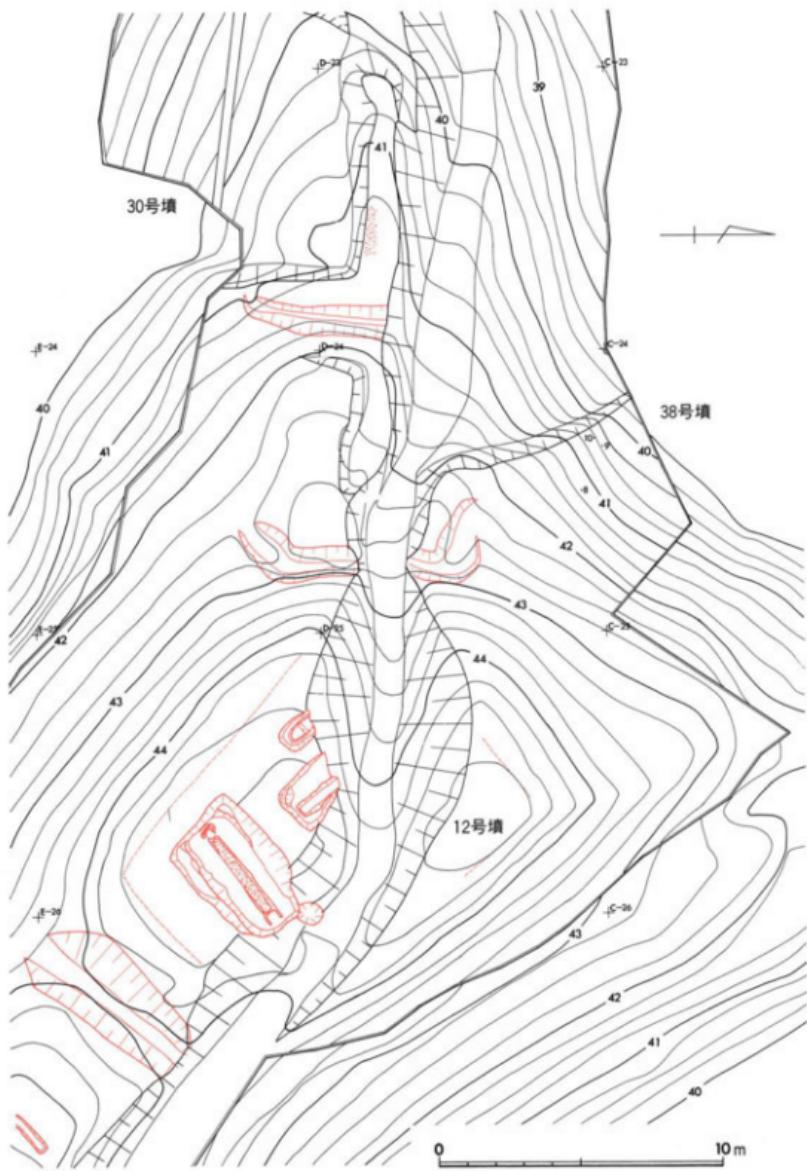
第57図 11号墳北東階段状遺構実測図

らにこの端部は29号墳第1主体直上で途切れ、溝端部底では礫が多く検出された。この階段状遺構は29号墳第1主体を一部破壊して設けられており、このことから階段状遺構は29号墳の邊界にともなうものではなく、後世に掘削されたものであろうと推定される。

先にも述べたが、2本の階段状遺構が結びついで道として機能するものならば、古墳の築造後に付設されたものと考えられる。



第58図 29号墳西階段状遺構実測図



第59図 30・38・12号墳墳丘測量図

#### (4) 30号墳

29号墳と38号墳の間につくられた古墳で、山径と畑によって大きく損われているが、 $8 \times 8\text{ m}$ 程度の方墳と考えられる。38号墳と墳丘を区画する溝を共有している。

墳丘中央付近のわずかに残った高まりで、長さ $1.80\text{ m}$ 、幅 $0.45\text{ m}$ の櫛床が検出された。主軸はE- $1^{\circ}$ -Nにとる。標高は $41.3\text{ m}$ で、擾乱のため墓壙は検出できなかった。蹠は指頭大よりやや大きく、東側に長さ $18\text{ cm}$ 、幅 $8\text{ cm}$ の偏平な大きい蹠 $2$ 個

が「ハ」の字状に配され、枕石と考えられた。この枕石から頭位は東を向くものと考えられる。

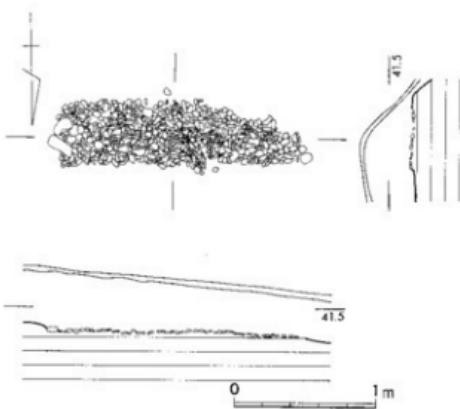
櫛床の北側長辺が直線状になることから、蹠は木棺の床面に敷きつめられたものであろうと判断されたが、墓壙や棺の痕跡が残っていないため、どのような木棺が使用されたかは不明である。

この主体からの出土遺物はない。

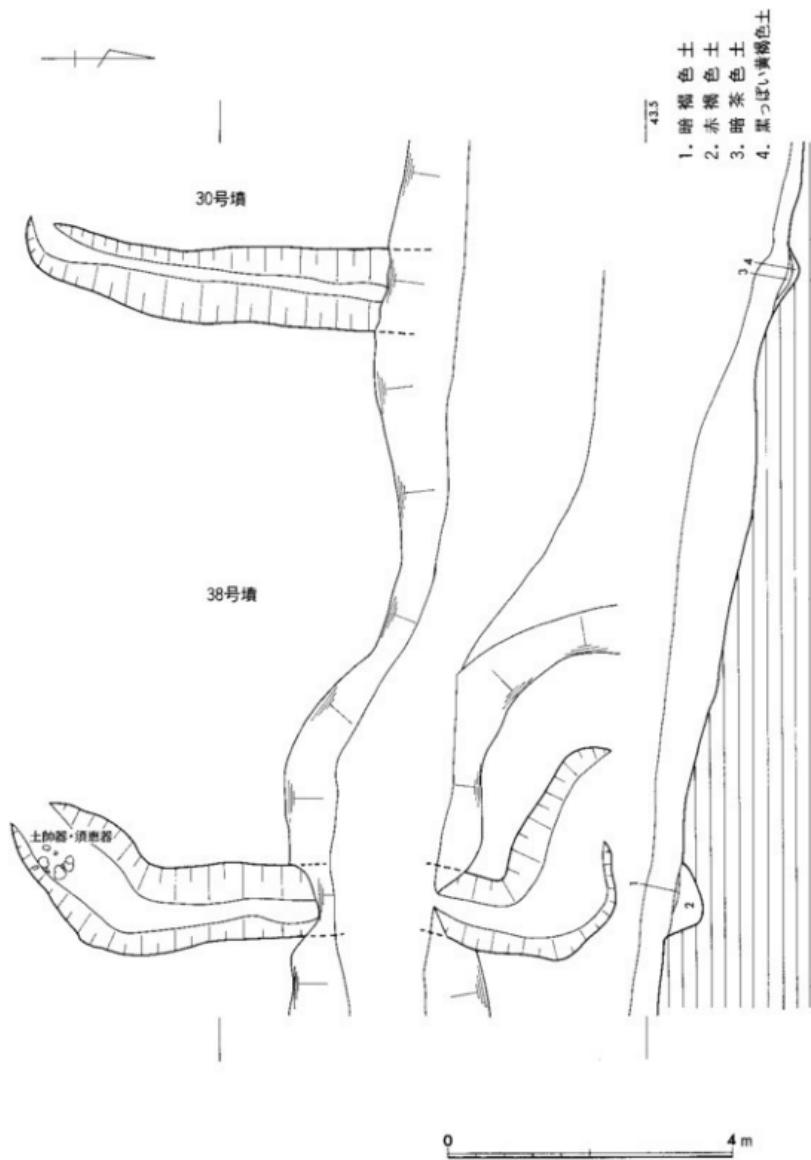
#### (5) 38号墳

30号墳の東側に位置し、東西に走る尾根と直交するように溝を掘り、墳丘を造り出している。墳丘中央部はそれを縦断する後世の道により削り取られ、また、南側も畑として耕作されていた。墳丘自体も後世かなり削り取られており、調査前には明瞭な墳丘の高まりは認められなかつたが、道に削られた断面の精査の結果、溝状の落ちこみが検出され、墳丘を両側東側溝の確認ができるのである。この東側の溝は「コ」の字状に周り、南北の長さは約 $7.5\text{ m}$ 、中央部での上端幅約 $1\text{ m}$ 、下端幅 $1.5\text{ m}$ 、深さ約 $0.4\text{ m}$ である。西側の溝は38号墳の溝より30号墳の溝としてとらえた方が良いと思われる。主体部は、以上のような状況のため検出し得なかつた。

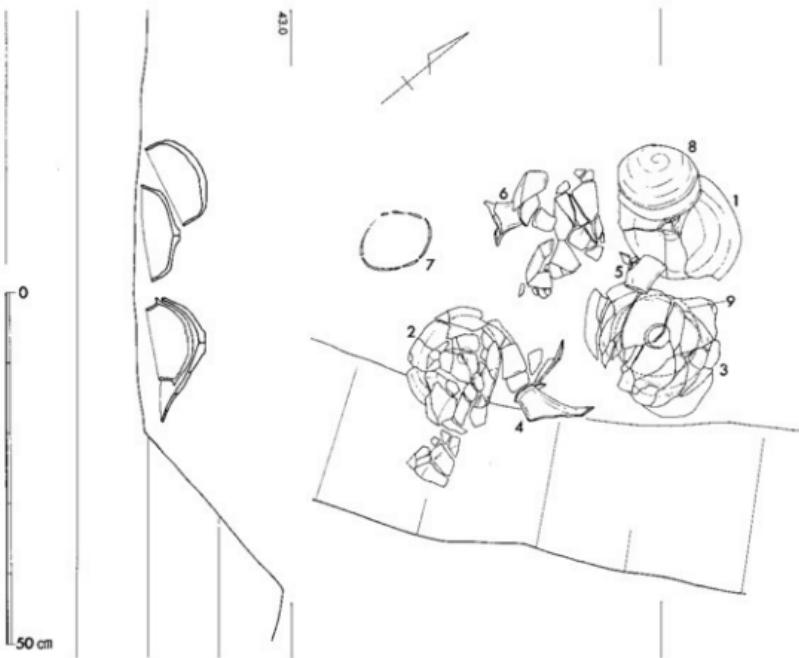
東側溝の南隅からは、土師器の高杯 $5$ ないし $6$ 、土師器碗 $1$ 、須恵器の蓋杯各 $1$ が出土している。これらはすべて口縁を下に向け、伏せた状態で出土している。特に須恵器杯(9)は伏せた後に、土師器高杯(3)をかぶせており、注目された。上器は溝の底辺に密着しており、溝を穿った後余り時間を見ない内に供献されたものと思われる。主体部からの出土遺物ではないが、溝の底面より出土しており、本墳の築造時期に近いものと思われる。また、東側の溝は12号墳の北西コーナーの一部を切るように掘られていることから、12号墳(古)→38号墳(新)という関係が認められる。



第60図 30号墳主体部実測図



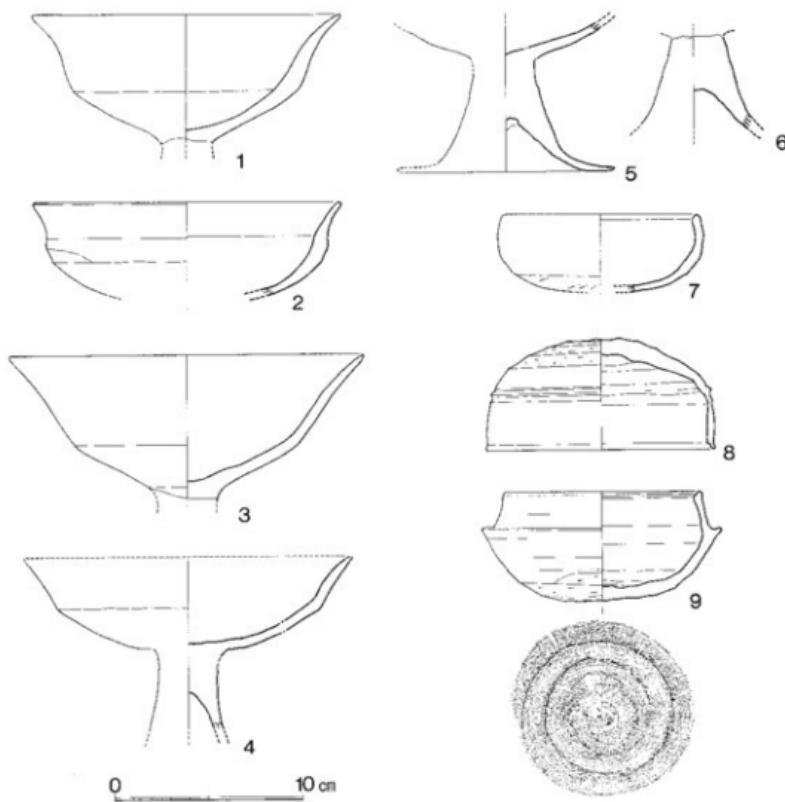
第61図 30・38号墳溝実測図 (1/80)



第62図 38号墳内部出土状態実測図 (1/8)

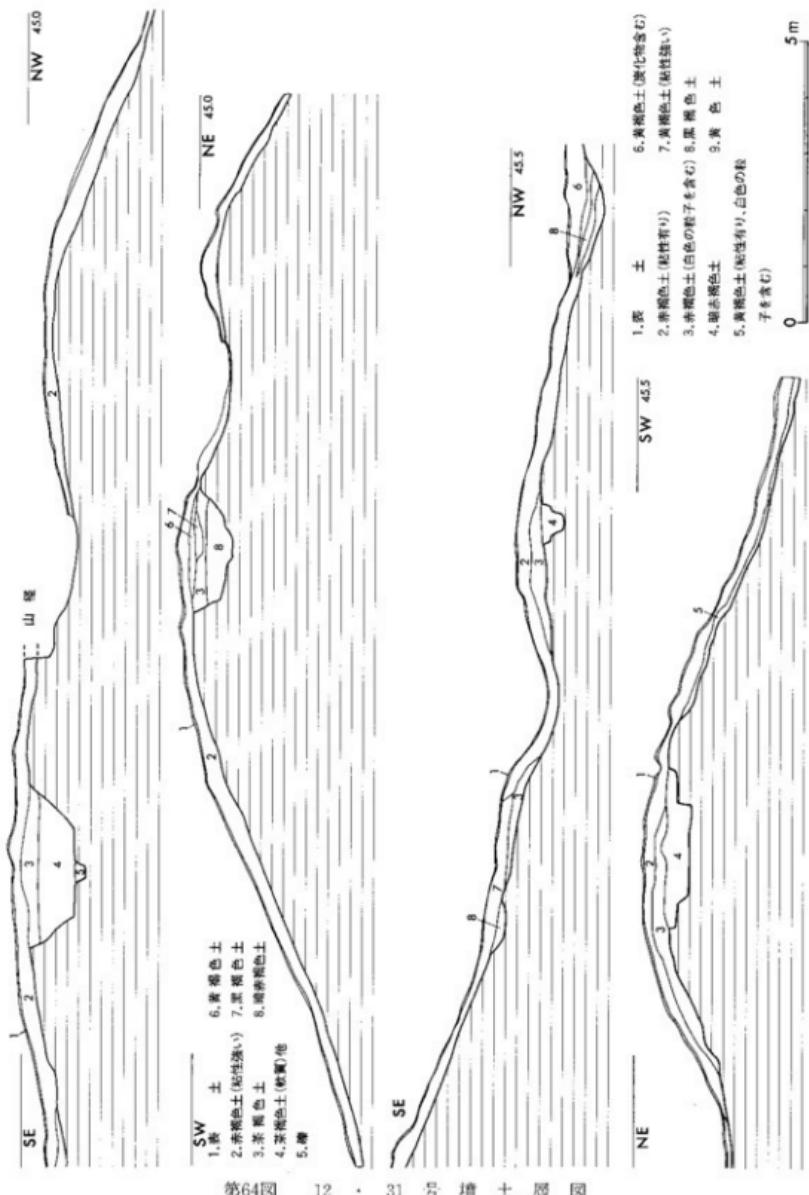
**出土遺物** 土師器は高杯の杯部3、脚部2、碗1である。高杯の杯部(1)は体部から口縁部の境で屈曲し、口縁部へ向け外反して立ち上がる。端部は丸味をもち、内外面ともナデ調整を施す。推定口径16.5cm、高さ7.0cmを測る。(2)・(3)も杯部で、体部でやや屈曲し、口縁部へと続く。内外面とも風化が著しく調整は不明である。(4)は杯部から脚部にかけての破片で、杯部は体部途中で屈曲し口縁部に至る。推定口径17.5cmである。(5)は脚部の破片で、脚部径11.5cm、筒部径3.4cmである。(6)は筒部のみが残ったものである。(7)は碗と考えられ、口径10.5cm、残存高4.2cmを測る。体部に丸味をもち、口縁部も内湾気味に立ち上がり、罐部に丸味をもつ。底部外面はヘラケズリの後をナデしている。以上、色調はいずれも赤褐色で、焼成はやや甘い。

須恵器は蓋・杯1対が出土している。蓋(8)は、口径に比して器高が高く、稜が明瞭につくり出されており、口唇部はやや肥厚して2段になっている。天井部外面ヘラケズリ、同内面ナデ調整、他は内外面横方向の回転ナデを施す。口径12.0cm、器高6.0cm、色調は淡青灰色、焼成は良好で堅



第63図 38号墳溝内出土遺物実測図 (1/3)

鍵である。身(9)は底部から体部にかけて丸味をもち、受部は外方へのびる。立ち上がりはやや内傾し、縁部はやや肥厚し段を有する。底部外面は回転ヘラケズリ、同内面はナデ調整、他は回転ナデを施す。底部外面に「/」のヘラ記号を施し、口径10.3cm、受部径12.6cm、器高5.9cmを測る。色調は淡青灰色で、焼成は良好である。蓋・身とも胎土には石英・長石をやや多く含む。この杯・蓋は、口径に比して器高が高く、後が明瞭につくり出されており、口唇部はやや肥厚し、2段になっている。これらの特徴から、山陰の須恵器編年<sup>33)</sup>のⅠ期に含まれるものと思われる。また、土師器類も須恵器の杯と出土位置を同じくし、一括して溝内に埋置された状況を示しており、同時期のものと考えらえる。



#### (6) 12号墳

第Ⅳ支群は38号墳の東側、31号墳の北西側に位置している。墳丘を東西方向に山道により削平されており、墳丘中央部は残っていない。前述したように、墳丘の北西墳裾の一部は38号墳の溝により削られてなくなっている。また、南東裾は31号墳と溝を共有しており、墳丘と直交して溝が掘られている。墳丘は地山を切削加工し、長辺18.5m、短辺16.0mのやや長方形の方墳を造り出している。墳頂の標高は44.8m、南東部の溝底からの比高は0.8mである。

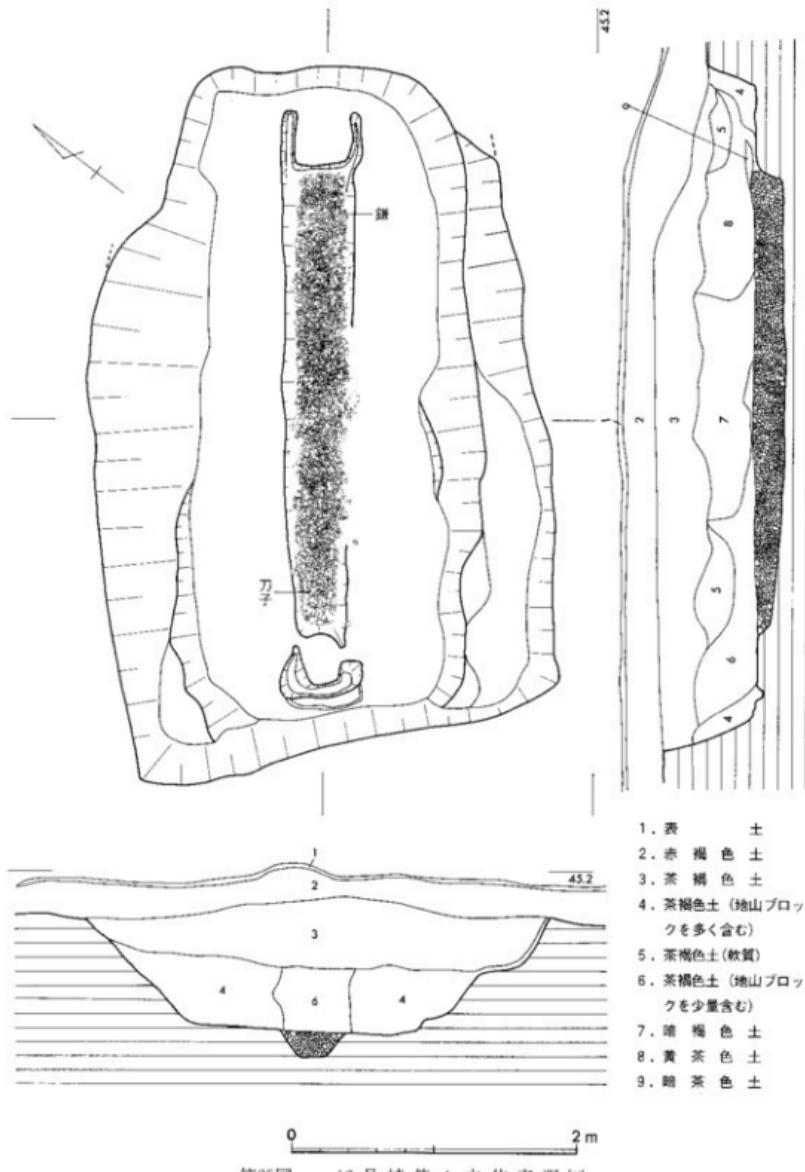
墳頂には12.5×9.5mの平坦面があり、南西方向へ主軸をもつ第1主体部と、それに直交するよう第2、第3主体部が地山に掘り込まれている。また、第1主体部の北側コーナーの土器を埋置した土壤と第1主体との切り合いを示す部分は、道により削られており、両者の新旧関係は明確にしえなかつた。

**第1主体** 墳頂に堆積する土砂を約20cm除去して地山面を精査したところ、南東部で長方形の上墳掘方を検出した。土壤は2箇所にステップをもつ素掘りの墓壙で、上面で標高44.8mを測る。北側の一部は道により削平を受けているが、長辺4.8m、短辺3.2m、深さ0.78mを測り、墓壙の幅としてはこの古墳群中最大である。墓壙壁は逆台形状に立ち上がる。墓壙の北西および南西部には階段状のステップが掘り残されており、墓壙内におりる際の段と考えられる。深さは0.8mあり、大人でも一息に登れないことから、削り残されたものと思われる。このような施設は第2主体でもみられるほか、14号墳第1主体、17号墳第1主体でも認められている。土壤底面は極めて平坦に削られており、床を平坦にすることにかなりな意識がはらわれている。

墓壙中央では長さ3.2m、幅0.4mを測る礫床が検出された。礫床主軸はE-38°-Nである。礫床のレベルは、両端ではほぼ等しいが、北東側が南西側よりわずかに幅広くなってしまっており、北東を頭位とするものと考えられた。上面は被葬者を横たえるためか若干くぼんでいる。墓壙底面よりさらに0.22m深く、断面逆台形の溝状の掘り込みが認められ、指頭大から径5~6cmの礫がその中にまぎれり詰まっていた。礫床上からは、北東側および南西側で鉄器が1点ずつ出土している。

礫床の四周には地山を掘り込んで木棺板材の痕跡が残っており、南西側では「コ」の字状、北東側では礫床短辺に接して木棺妻板の痕跡が認められた。木棺は長手板の内側に妻板を入れ、その中に礫を敷いたものと考えられる。土壤内覆土中、暗褐色土がほぼ礫床に対応しており、この上層が木棺の痕跡であると判断された。

この主体部の埋葬順序については、まず地山に墓壙を掘り込み、墓壙中央に礫を入れる溝状の掘り込みと木棺板材を受ける溝を穿ち、この溝に合わせて木棺を設置する。次いで木棺内に礫を敷いて被葬者を横たえ、副葬品の鉄器を頭付近と足先に納め、確認はできないが木棺に木板で蓋をする。最後に土を埋め戻して終了することが想定される。

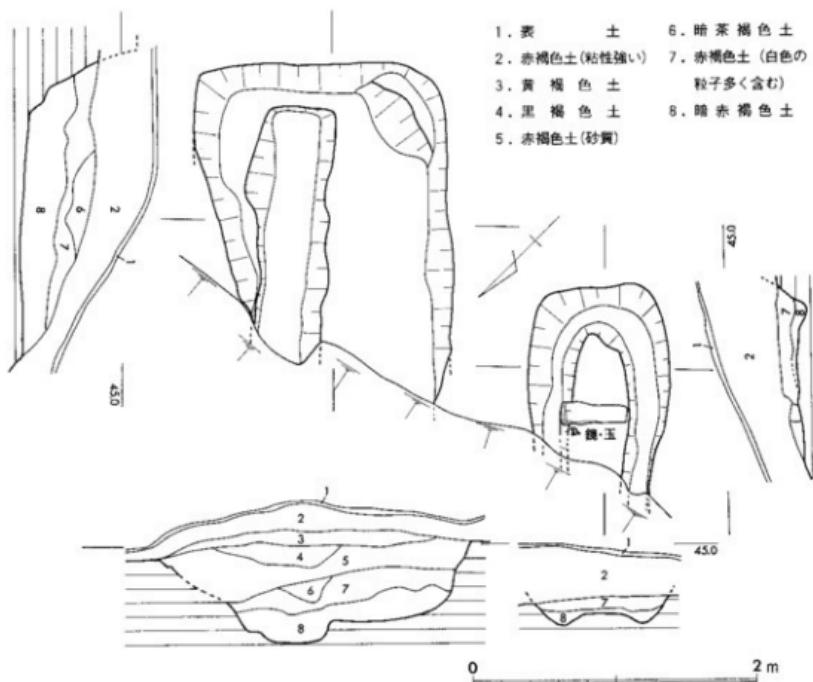


第65図 12号墳第1主体実測図

**第2主体** 第1主体部の北西部に位置する墓壙で、主軸はS-30°-Eで第1主体部とほぼ直交する位置関係にある。主体部の北西部は道により削平を受けており、南東部分しか残っていない。

墓壙は黄色土の地山より掘り込まれており、墓壙内の覆土は暗赤褐色土である。墓壙壁は桃色の地山である。墓壙は二段掘りで、一段目の壁は急な角度で立ち上がり、床面はほぼ水平である。墓壙は残存長2.4m、短辺1.8m、検出面からの深さ0.4m、二段目は残存長1.8m、短辺0.5m、深さ約0.13mを測る。南側コーナーにおいて壁の南側に狭い平坦面が削り出されており、階段状のステップと考えられる。これは、前述の第1主体の墓壙にみられたものと同様な性格を有すると考えられる。二段目の掘り方は細長く、高さも低い。壁が極めて垂直に近く立ち上ること等から、この内側に木棺を入れて被葬者を埋葬したものと思われる。頭位は、墓壙底面の南東部が約0.03m高くなっている、南東を向くものと考えられる。

この第2主体からの出土遺物はなかった。

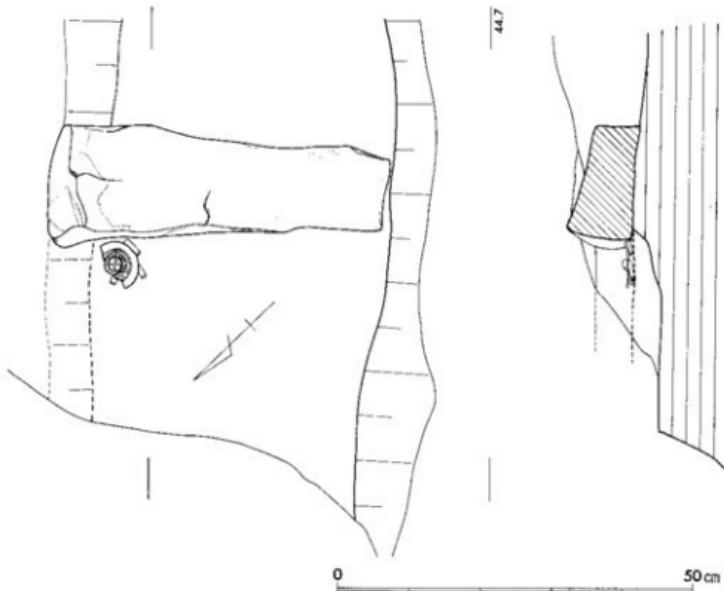


第66図 12号墳第2・第3主体実測図

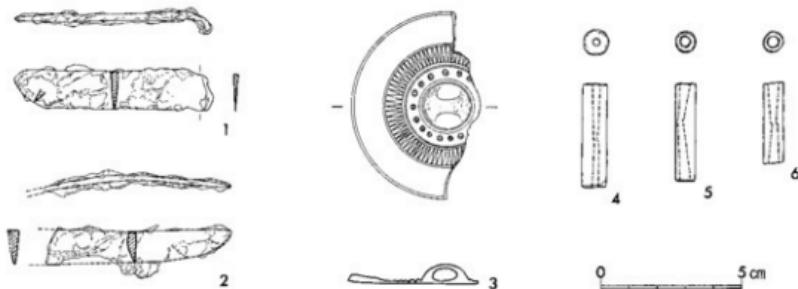
**第3主体** 第1主体の北西部、第2主体の西隣に位置する。主軸はS-44°-Eで、第2主体と平行する位置関係にある。第2主体と同様に北西部を道により削平され、土壙上部も著しく擾乱されており、土壙南東側底部が残っているのみである。土壙は、地山面に掘り込まれる素握りの土壙で、土壙内には赤褐色および暗赤褐色土が堆積していた。土壙は長辺の残存長1.5m、短辺1.0m、深さ0.23mである。

土壙底には幅約0.2m、深さ0.07mの溝が周って穿たれており、この溝に木棺の側板を入れ、棺を組み合わせていたと考えられる。この溝から復元される木棺の幅は0.6m前後である。また、土壙底の中央は方台状に削り残してあり、南東側には主軸と直交して木棺内を区切るように長方形の石が置かれている。この石は長さ48cm、幅13cm、厚さ6cmを測り、地山に密着した状態で検出された。

第3主体からは珠文鏡1、管玉3が出土している。これらの副葬品は、土壙底の石の北側に、地山面から約3cm浮いた状態で、管玉3個の上に鏡が鏡面を下にして出土した。鏡は完形ではなくほぼ半分に割れていた。



第67図 12号墳第3主体遺物出土状態実測図 (1/8)



第68図 12号墳第1・第3主体出土遺物実測図 (1/2、1・2は第1主体、3~6は第3主体出土)

**第1主体出土遺物** 碣床上より鐵器 2点が出土している。

鎌（第68図1）は長さ7.0cm、幅1.3cmを測り、厚さは背部で0.3cmである。端部は折り返しており、刃部の先端へ向けて湾曲している。

刀子片（第68図2）は刃部の破片で、闊の部分を欠いている。残存部の長さ6.5cm、幅1.1cm、厚さは背部で0.4cmを測る。

**第3主体出土遺物** 土壙底の石の北側から鏡1、その下から管玉3が出土している。

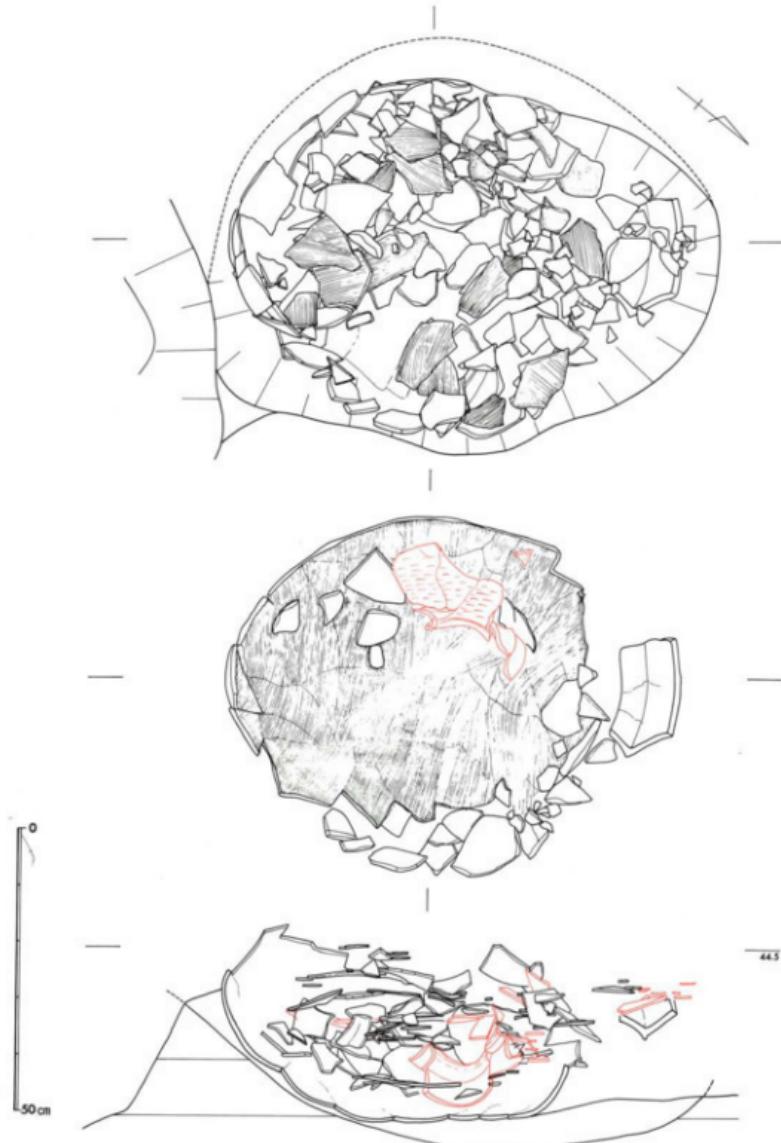
鏡（第68図3）は珠文鏡で、全体の約半分が残っている。主体部の残存状態も悪く、道により半分以上が削られており、本来鏡は完形であったとも考えられるが、鏡の破断面は磨滅が認められ、また鏡の下の管玉が完全に残っており、最初から壊れていたものを副葬した可能性も考えられる。

鏡の復元径は6.7cm、背面構成は、鉢から外方へみていくと銀座、珠文帯、櫛歯文帯、平縁となっている。珠文は、復元すると合計18個からなると思われる。縁は平縁で幅1.0cm、厚さ0.25cmを測る。櫛歯文は中心から外へ向き斜辺が長く、各所に破損部があるため数は不明である。長さは0.6cmを測る。鉢は、径1.6cm、高さ0.6cm、厚さ0.7cmを測る。

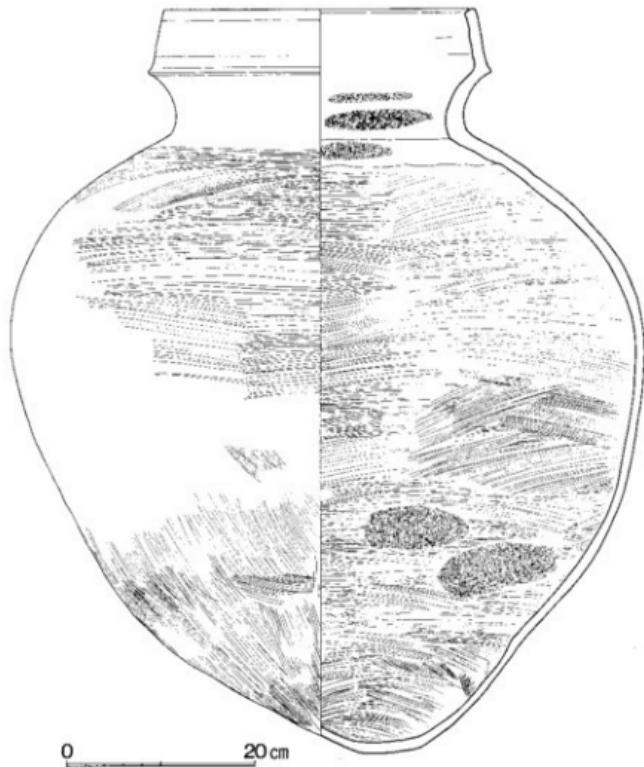
管玉（第68図4～6）は、(4)が緑色凝灰岩、(5)・(6)が碧玉製と考えらえるもので、材質を異にしている。(4)は長さ3.7cm、径0.9cmを測り3本中では最も大きい。(5)は長さ3.5cm、径0.7cmを測る。(6)は長さ2.8cm、径0.7cmを測るものである。3本とも荒磨きの痕跡を残さないほど丁寧に研磨され、碧玉製と考えられる(5)・(6)は現在でも光沢を保っている。穿孔は3本とも二方から行なわれており、注目される。

**土師器壺** 12号墳第1主体部の北西隅に接して壠たれた土壙内に埋置されていたもので、大小各1個が出土した。壺は大形のものを1号壺、小形のものを2号壺と呼称することとした。

検出された土壙は平面橢円形を呈し、長径0.94m、短径0.62m、深さ0.23mを測る。土壙上部は



第69図 12号墳土師器壺出土状態実測図 (1/10)

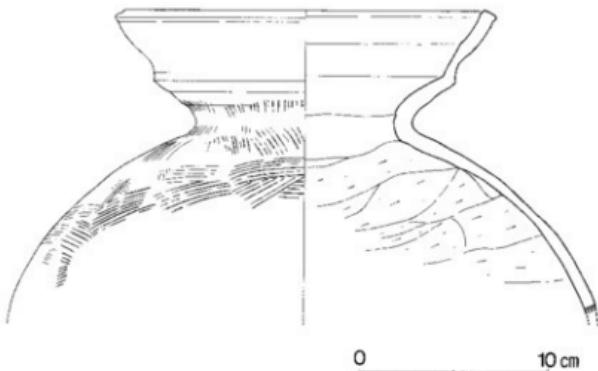


第70図 12号墳 1号壺 実測図 (1/6)

道によって削平されており、第1主体との切り合い関係は不明である。また削平されているため、1号壺の口縁部および胴部の大半も大きく破損していた。

土師器壺は、まず1号壺が口縁部を東に、底部を西に向かって、ほぼ水平な状態で出土した。1号壺の内部上面には陥没した胴部の破片が多数認められた。これらの破片を取り上げると内部には微粒の黄褐色土が堆積しており、その中から2号壺が検出された。2号壺は、1号壺の胴部中央よりやや北寄りで、口縁部を下にする形で出土したが、胴部下半を復し得る破片は認められなかった。

1号壺(第70図)は器高80cm、口縁径33cm、胴部最大径67.5cmを測る。焼成は良好で、大粒の砂粒を多く含んでいる。口縁部は複合口縁となるが、立ちあがり部がやや内傾するところに特徴がある。口縁部は、内外面とも横方向のナデ仕上げとしている。胴部は球形に近い形態で、底部は平底



第71図 12号墳 2号壺実測図

の名残りをわずかに留めている。胴部の仕上げは、外面上半が横方向、下半が縦方向のハケメ、内面が横方向のハケメとなっている。

2号壺（第71図）はL1径21cm、胴部残存最大径32cmを測る。口縁部は逆「ハ」の字形に開く形で、口唇部がやや肥厚し、端部でわずかにう立ちぼみとなる平坦面をなす。内外面とも横方向のナデ仕上げとしている。肩部は球形を呈し、外面は不整方向のハケメを施し、胴部上半から頭部にかけてハケメは斜めから縦方向に変化する。内面は横方向へラケズリの後部分的にナデしており、器表にざらつきがない。

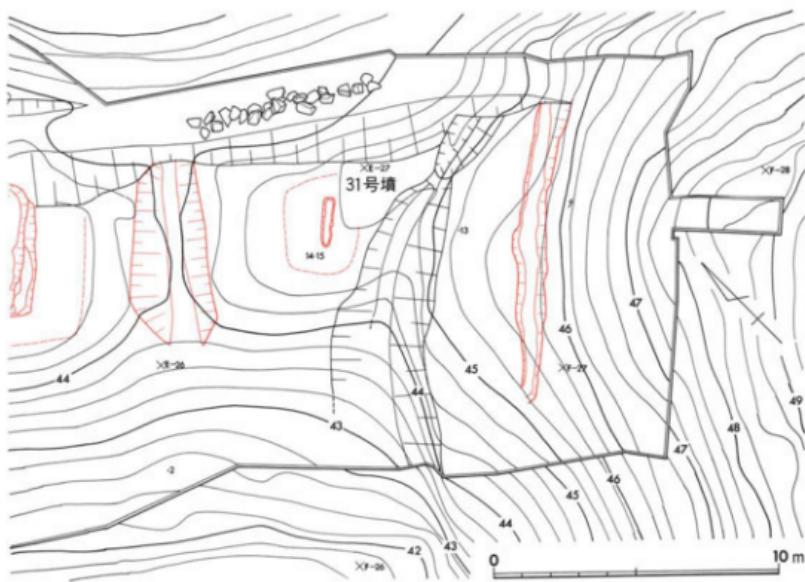
#### (7) 31号墳

12号墳の東辺に接して営まれる方形墳で、第IV支群の東端に位置している。

墳丘周辺の樹木を伐採した時点で、12号墳の墳丘中央を東西に横切る山径の続きが本墳の東北墳裾線をえぐる形で走り、さらに東側墳裾にも、先の山径に直交する別の山径が溝状に認められた。このように、外見から墳形を推すことは困難な状態であった。

表土を除去すると、墳丘の土は赤褐色を呈し、地山との判別が困難で、主体部の掘り込み面もかろうじて確認できるという状態であったが、意外にも損壊部分は少なかった。これは、東側に第V支群の丘陵斜面が立ちふさがって、長年の間に流下する土が墳丘全体を覆っていたため、山径は墳丘を大きく損うまでには至らなかったからであろう。

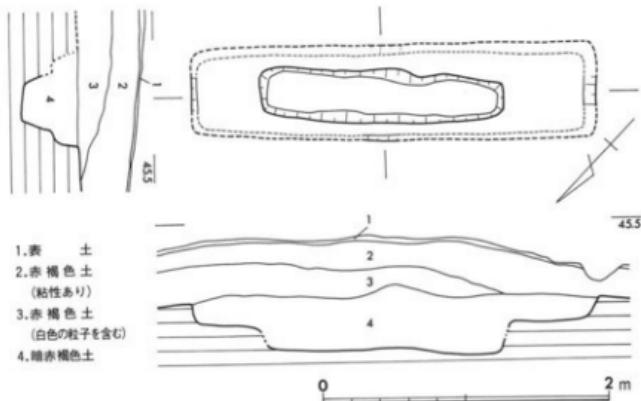
検出された主体部は二段掘り土壤で、長さ2.85m、幅0.70mを測る土壤中央に、さらに長さ1.7m、幅0.4m、深さ0.2mの土壤を掘り込んだものである。しかし、上段の掘方は土層の観察によって確認されたものである。主軸方向はE-44°-Nを測り、下段土壤の北側が南側に比して、幅が



第72図 31号墳 墓丘測量図

やや広く床面も幾分高いので、頭位は北と判断された。また本墳にともなう副葬品はなかった。

なお、墳頂部には最近まで荒神が祭られていたと言われ、上面で散見された土師質土器杯・磁器香炉・幣串、さらに東北辺墳裾に沿っていられた列石等も、それに関係するものであろうと考えられた。(第75図14~18)



第73図 31号墳 主体部実測図

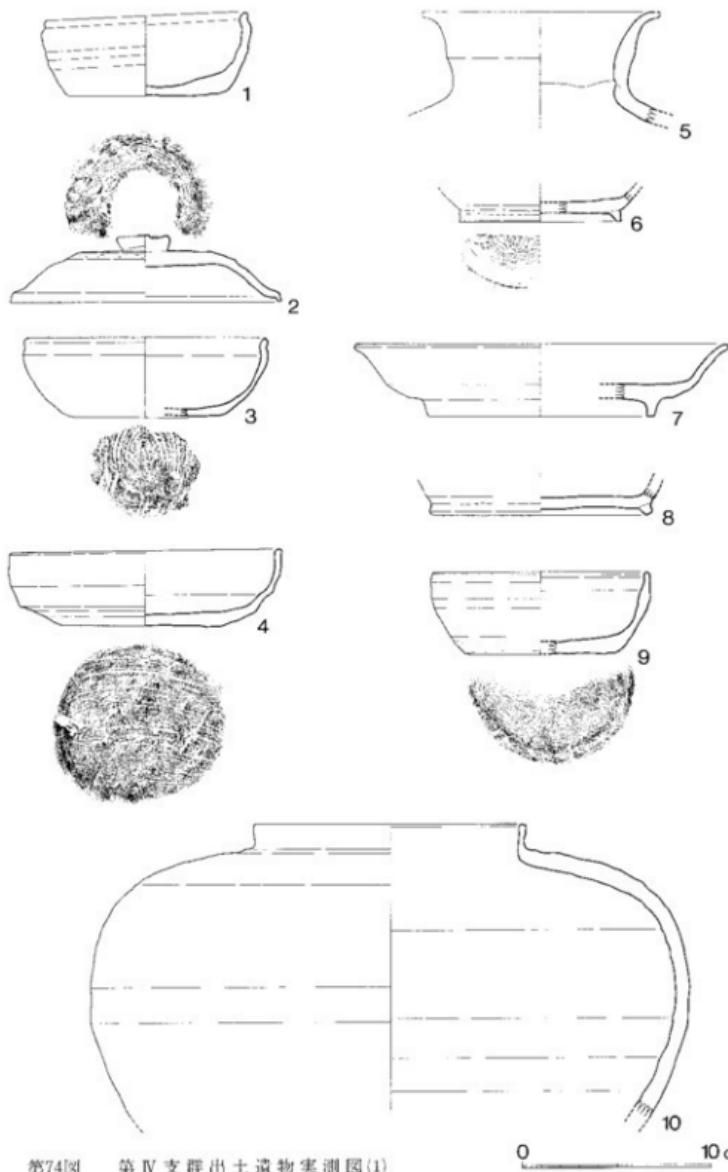
#### (8) 第IV支群出土遺物

遺物は、須恵器・石器・カワラケ・磁器である。(1)は11・29号墳周辺、(2)~(5)は12号墳周辺、(6)・(7)・(13)~(18)は31号墳周辺、(8)~(11)は38号墳周辺、(12)は11号墳北東階段の出土である。(14)~(18)は31号墳東側の荒神の祭祀にともなう遺物である。

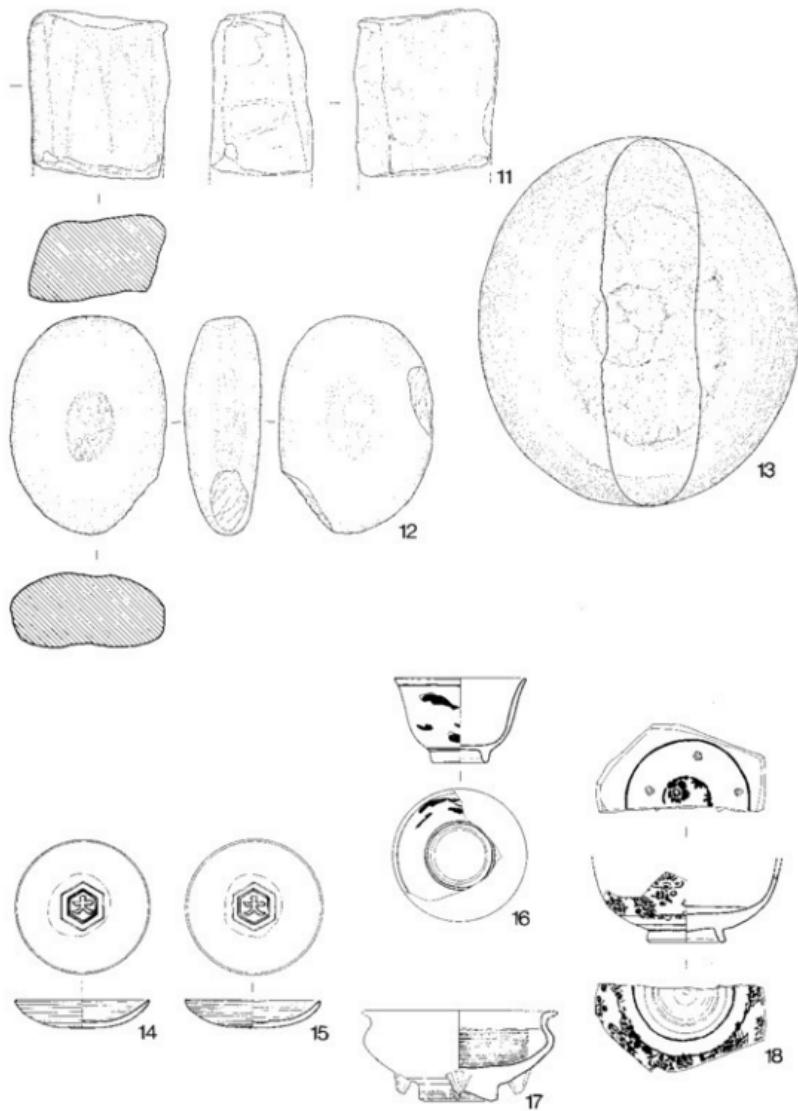
須恵器杯(1)は口径10.5cm、器高4.3cmを測る。体部は内湾して立ちあがるが、端部で外反する。底部は回転糸切りで切り離すが、明瞭には残っていない。蓋(2)は口径14.3cm、器高3.6cmを測る。天井部は回転糸切りで切り離した後に振宝珠状のつまみを貼り付ける。糸切りを施した周辺部は回転ヘラケズリで仕上げている。口縁部は内側に折り曲げている。杯(3)は口径12.6cm、器高4.3cmを測る。体部は内湾して立ちあがるが、端部でわずかに外反する。底部は回転糸切りで切り離している。杯(4)は口径14.2cm、器高4.0cmを測り、口径やや大きい。体部は垂直に近く立ちあがる。底部は静止糸切りで切り離している。蓋(5)は口縁部の破片で、頭部最小径は9.3cmを測る。頭部内面に口縁部と体部の接合痕が残っている。杯(6)は底部の破片で、高台径8.5cmを測る。底部は糸切りで切り離した後、華奢な高台を貼付けている。杯(7)はあるいは皿かとも考えられるが、口径19.6cm、器高3.9cmを測るものである。底部は回転糸切りで切り離した後に、やや高い高台を貼付ける。体部は大きく開いている。杯(8)は底部のみが残存しており、高台径11.8cmを測る。回転糸切りで切り離した後、低い高台を貼付け、糸切り痕をナデによって消している。杯(9)は口径11.1cm、器高4.4cmを測る。内湾する体部は端部でさらに内側に折り曲げる。底部は回転糸切りで切り離している。短頸壺(10)は口径14.4cm、体部最大径31.8cmを測る。ごく短い頸部からタマネギ状の体部に続くものである。体部外面にはかすかにタタキメが見えるが、回転ナデによって消している。

石器(11)は玉砥石と考えらえるもので、残存長8.7cm、幅7.4cm、厚さ4.9cmを測る。両端を折損しており、残る4面は程度の差はあるもののいずれも磨滅している。最も頻繁な使用痕が残る面には2条のくぼみが認められる。石材は砂岩質のものである。石器(12)は<sup>(は)</sup>凹石と考えられるもので、長さ11.7cm、幅8.2cm、厚さ4.0cmを測る。扁平な梢円形を呈し、表裏2面と側面3箇所に敲打痕を残している。この痕跡が残る部分以外は著しい磨滅を示す。石材は砂岩質のものである。石器(13)も凹石と考えらえるが、長さ19.8cm、幅17.1cm、厚さ5.1cmと大形のものである。扁平な梢円形を呈し、1面にのみ面積の広い敲打痕を残すが、中心部のみやや深くくぼんでいる。この裏面は磨滅して半滑な面となっている。側面はなめらかな面をなす。

カワラケ(14)・(15)は全く同巧のもので、口径7.2m、器高1.5cmを測る。内面底部に亀甲形の枠内に「大」の字のスタンプを押して、枠と「大」を浮きあがらせるものである。内面回転ナデ、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。磁器(16)は茶碗で、口径6.9cm、器高4.6cmを測る。やや深い杯部に垂直に近い高台を有する。外面に青・白・黒3色で文様を描き、内面には文様をもたない。磁器(17)は香炉



第74圖 第IV支群出土遺物實測圖(1)



第75図 第IV支群出土遺物実測図(2)

と考えられるもので、扁球状の体部は大きく外反して口縁部をなす。底部は削り出しの高台をもち、外面底部に3本の脚をもつが接地するものではなく、脚として機能しておらず痕跡的なものである。外面および口縁内面には淡い黄緑色の釉薬がかかる。磁器(8)は碗で、丸味をもち、やや深い体部に削り出しの高台を有する。内外面に明るい緑色の染付をもつ。内面見込みには圓線の内側に花文を描く。外面下半には3本の圓線をもち、その上方に草文状の文様を描く。内面底部には3箇所に重ね焼きの時の窯道具の痕跡が残っている。

以上観察してきた遺物の時期は、須恵器では(1)～(3)・(6)・(9)が出雲國府編第4形式、柳浦編<sup>(4)</sup>第4式、(4)が國府第3形式、柳浦第3式、(7)・(8)が國府第5形式に属するものである。(5)・(10)は時期不明である。石器では(2)・(3)が凹石と考えられるもので、古墳の築造に先立つ時期の遺物の可能性がある。(10)については時期の判定は困難である。カワラケ・磁器は荒神の祭祀にともなうもので、時期は近世以降であることを示している。

第4表 第IV支群 遺構に伴わない遺物観察表(1)

番号 番号	器種 口径 口縁 底径 高さ	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
74-1 杯 身	10.6 8.0	4.5 平坦な底部から口縁に向けてゆるやか灰褐色に立ち上がり、端部わずかに外反する。 底部凹板系あり、体部内外面回転ナデ。 内面底部ナゲ調整。	細粉粒含む。	不真 数質		
2 杯 盆	14.5	3.6 平らな天井部から口縁に向けてゆるやかに広がり、端部に内側に折れ曲がる。 端部を擬定束状のつまみを貼り付ける。 天井部外側四角系切り。以下回転ナデ。 天井部内面ナゲ調整。以下円転ナデ。	端部外周の大粒のもの含 み緑灰褐色	良好 整致		
3.5 瓶 身	13.0 8.2	4.3 平らな底部から口縁にかけてゆるやかに立ち上がり端部で外反する。 底部凹板系あり、体部内外面回転ナデ。 内面底部ナゲ調整。		砂粒少ない。	良好	
4	14.2 8.4	4.2 平らな底部からゆるやかに広がり、口縁にかけて直立気味に折れ曲がり立ち上がる。 底部脚に丸切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナゲ調整。壁壁薄い。	口縫部のみ 黒灰色			
5 盆 口	-	1.5 直立気味の頭部から外へ向け広がる口縫部。内面に口縫部と側部の接合部を残す。				
6 杯 身	- 8.6	4.4 弧い高台をもつ。 外側底部系あり底を残す。内面底部ナ ゲ調整。	外周灰黃色 内面灰綠茶 色		やや不良	
7	9.5 11.8	3.9 高台をもち、底部から口縁にわたり直立気味に広がる。 天井部底系切り。体部内外面回転ナデ。 内面底部ナゲ調整。	砂粒少量	良好		

第5表 第IV支群 遺構に伴わない遺物観察表(2)

掲出番号	器種	法 量(cm) 口径 底径 器高	形態・手法の特徴	色 調	釉 土	焼 成	備 考
74-8 杯 身	-	11.2	低い高台をもつ平坦な底部。 底部回転糸切りのちナデ。高台・体部回転ナデ。内面底面弱いナデ調整。	暗灰色	長石など少墨普通	含む。	
9.		11.2 8.0 4.4	平垣な底部から高く立ち上る体部を有し、その襷配で内済する。 底部回転糸切り。体部内外面回転ナデ。内面底面ナデ調整。				
10 短瓶頸	14.5	-	直立する短い口襷をもち、肩部大きく張る。肩部以下底部にむけてゆるやかにせばまってゆく。 内外面とも回転ナデ。外面部下部に消されてしまはるがタタキメを残す。	外面/灰色 内面/灰白色	鐵 青	良好	
75-14 カワク ケ 鼻	7.0	1.5	丸味をもった浅い腹。 外面回転ヘラケズリ。(ロクロ回転左) 内面強い回転ナデ。	灰白色	精選され密		土師質
15			内面底部に六角形の枠の中に「大」の字を浮き彫りにするスタンプによる洋文をもつ。				
16 茶 瓶	6.8 2.8	3.6	ほん小さく、やや高い削り出し高台に浅い体部がつく。 外面部に青・黒・白三色の染付。青色で口襷部と底部にそれぞれ1・2本の線。 黒・白2色で雲形の文様を描く。	白色 青・黒・白の 染付			施 器
17 香 伊		6.2	高台をもつ底部から大きく開く、口襷で及び屈曲して開く。体部下半に3本の文脚をもつが接続しない。 外面部下半回転ヘラケズリ。高台も削り出す。高台には釉薬かからない。 内面/口襷部のみ釉薬かかる。以下は釉薬かからない。この部分回転ナデ。	灰白色 釉薬/ 淡い黄緑色			
18 杯	-	4.2	薄手のやや高い高台をもち、丸味をおびて立ち上がるやや深い体部をもつ。 外面部回転ヘラケズリにより器形を整え、高台も削り出す。 内面/釉薬の下に回転ナデの横跡がある。 明るい緑色で花を密に描く。	灰白色 釉薬/明るい 灰白色 染付/ 明るい緑色			内面底部に3個の円形の盛ね焼痕。香伊様のものを盛ね焼きしたものか。

## 第4節 第V支群

### (1) 39号墳とその周辺遺構

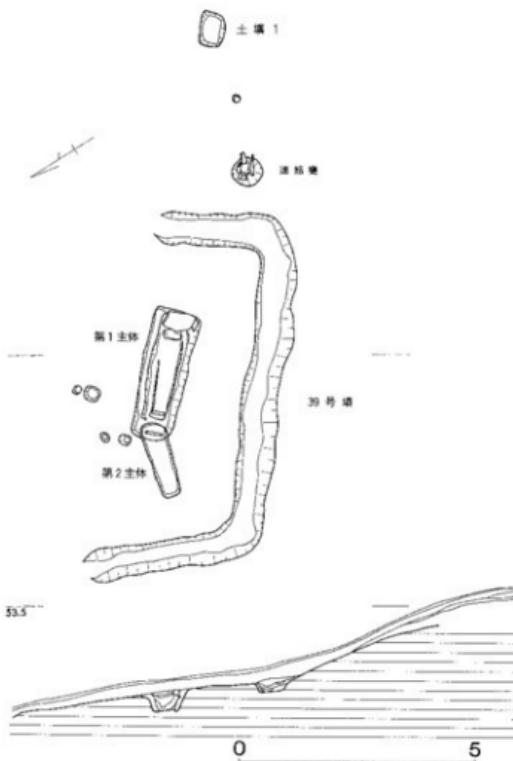
13号墳の東側には墳裾線に沿って比較的平坦なテラスが認められた。このテラスは幅6.0m、長さ20.0mで、13号墳頂部との落差は1.5mを測るものである。

このテラスは平野に向かって張り出す形になっており、当初は、平野から13号墳を仰ぎ見た場合二段塗成に見せるために削り出された加工壇であろうと考えられた。しかし、表土を除去しながら調査を進めていくと、平面「コ」の字状に浅い溝で墓域を画した39号墳、性格不明の柱穴状遺構、さらに性格不明の土壙1、土器をともなう甕棺の一種とみられる遺構を検出した。そこで、このテラスは13号墳の付属施設的な削り出しではなく、独立した墓域として扱うべきものと判断された。

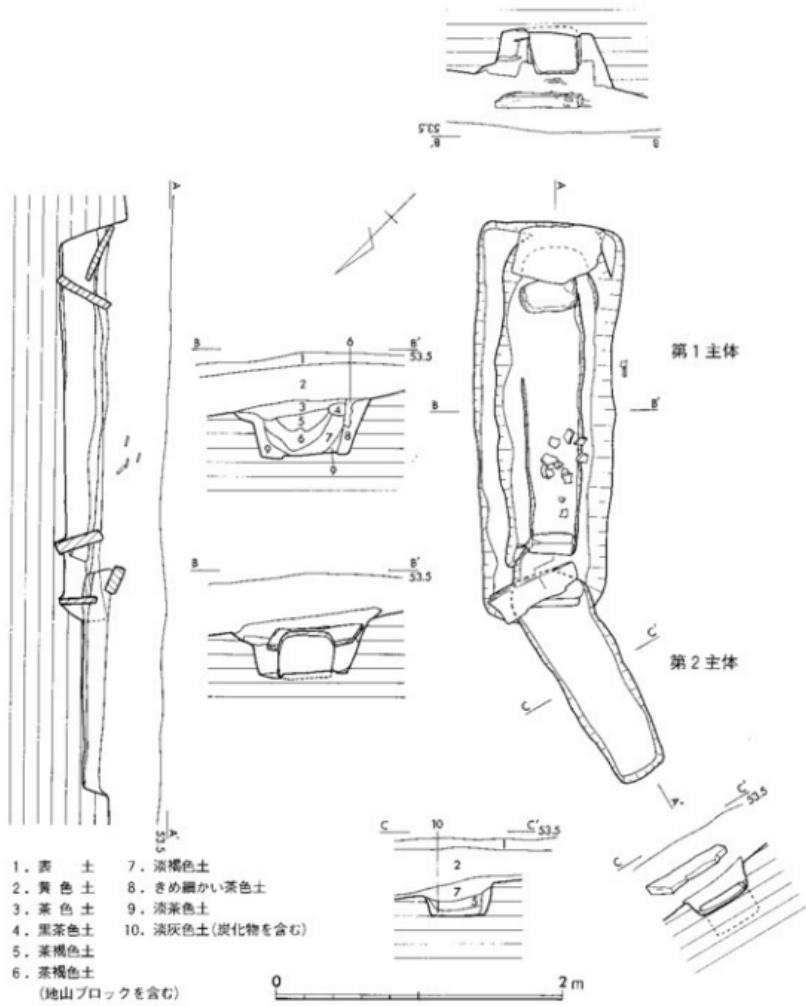
以下、39号墳・甕棺墓・土壙1の順で概要を記すことにしたい。

#### (2) 39号墳

13号墳東側墳裾線に沿って、平面「コ」の字状に深さ0.2mを測る浅い溝を半周させて墓域とし、その墓域内にはほぼ東西方向に2つの主体部を設けている。

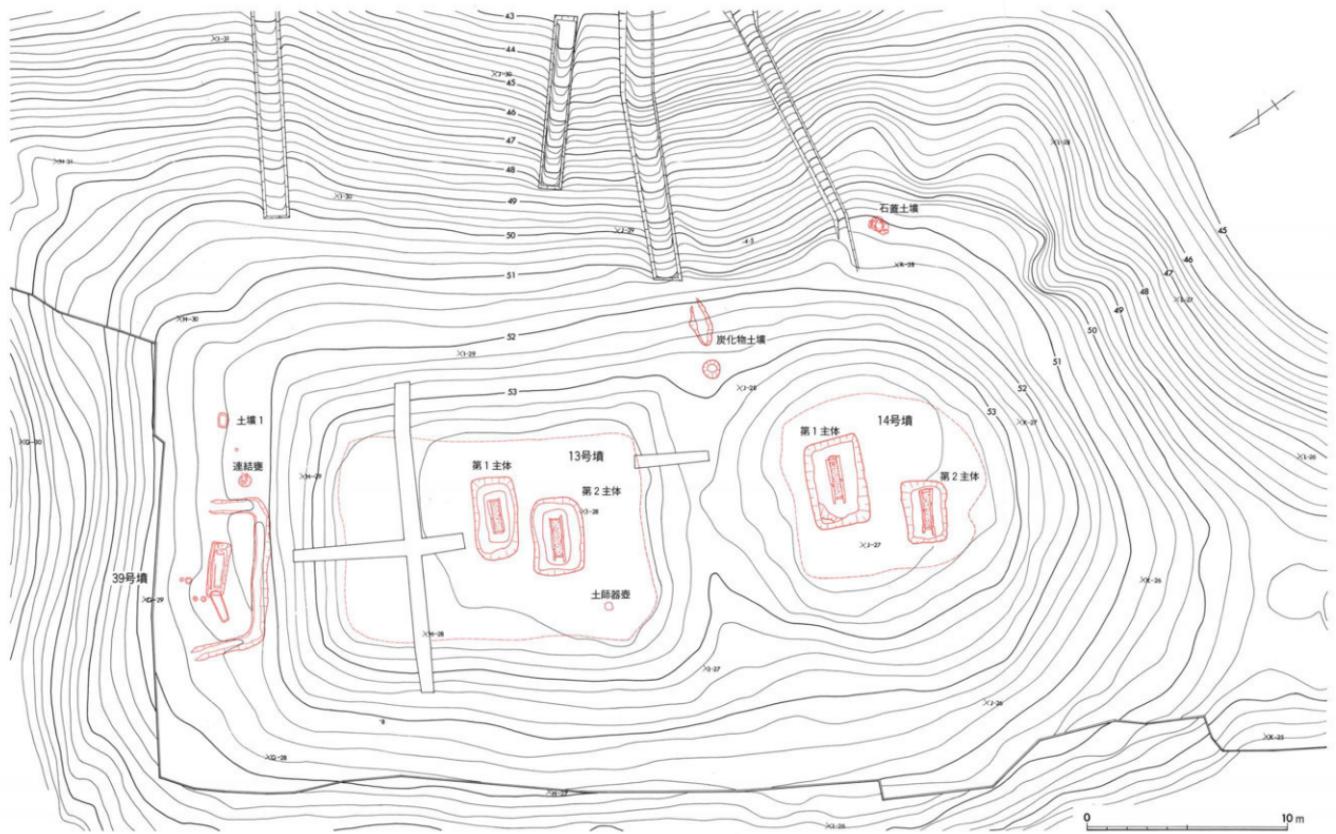


第76図 39号墳とその周辺遺構実測図 (1/120)



第77図 39号墳第1・第2主体実測図

溝の長さは南辺2.5m、13号墳墳裾線に沿う西辺7.5m、北辺3.5mを測る。幅は南辺と西辺が約0.8m、北辺は0.7mとやや狭くなっている。墓域東辺を画す溝は認められない。これは、東辺にあたる部分がテラスの肩にあたり、その東は急斜面となっており設けることが不可能とみられるから



第78図 39・13・14号墳 墳丘測量図

である。あるいは、本来必要を生じなかつたとも想像される。溝の断面は全体に逆台形を呈すが、西辺では13号墳墳丘斜面の角度がそのまま下降して溝底に至り、底はほぼ水平な面を呈した後垂直に近い角度で立ちあがる形となっている。

**第1主体** 墓域の中央やや南寄りで検出した埋葬施設で、主軸方位E-44°-Sを測り、位置等から中心主体と考えられるものである。長さ2.8m、幅1.0~8.5m、深さ0.35mを測る土壌内に、妻板部分のみに板状石材を使用し、長手板は木板を用いている。これは、いわば組合式木棺と箱式石棺との折衷形ともいべきものである。土壌の幅は南東がやや広く、被葬者の頭位は南東を示すものと判断された。

棺について詳述すると、土壌内頭位側の妻部分には0.4×0.3m、厚さ0.05mを測る方形の板状石材を用い、その上に0.6×0.5m、厚さ0.05mを測る板状石材を架構する形となっていた。脚側の妻板には外側と内側0.4mを隔てて板状石材2枚が立てられていた。外側のものは0.4×0.2m、厚さ0.06mを測り、内側のものは0.3×0.3m、厚さ0.09mとやや大きい石材を用いていた。後述するが、第2主体部頭位上面で認められた板状石材は、第1主体脚部の2枚の石材上面に架構されていた可能性が強い。長手板が仕組まれていたとみられる床面には、相対して幅0.15m、深さ0.02mの溝が認められた。このことから、厚さ0.15m前後を測る板材を長手板として用い、先の板状石材を挟む形に仕組まれたものと判断された。

以上記した諸点からすると、この棺は被葬者の納められる中央の部屋と、頭位・脚位の板状石材によって仕切られた小副室から構成されているといえよう。蓋材はみられなかつたが、土壌の上縁南隅や北辺に蓋を架構するための狭いテラスが認められた。よって蓋は長手板と同様木板が使用されたものと推定された。なお、この主体部の上面で手の平人の板状石材が散見された。

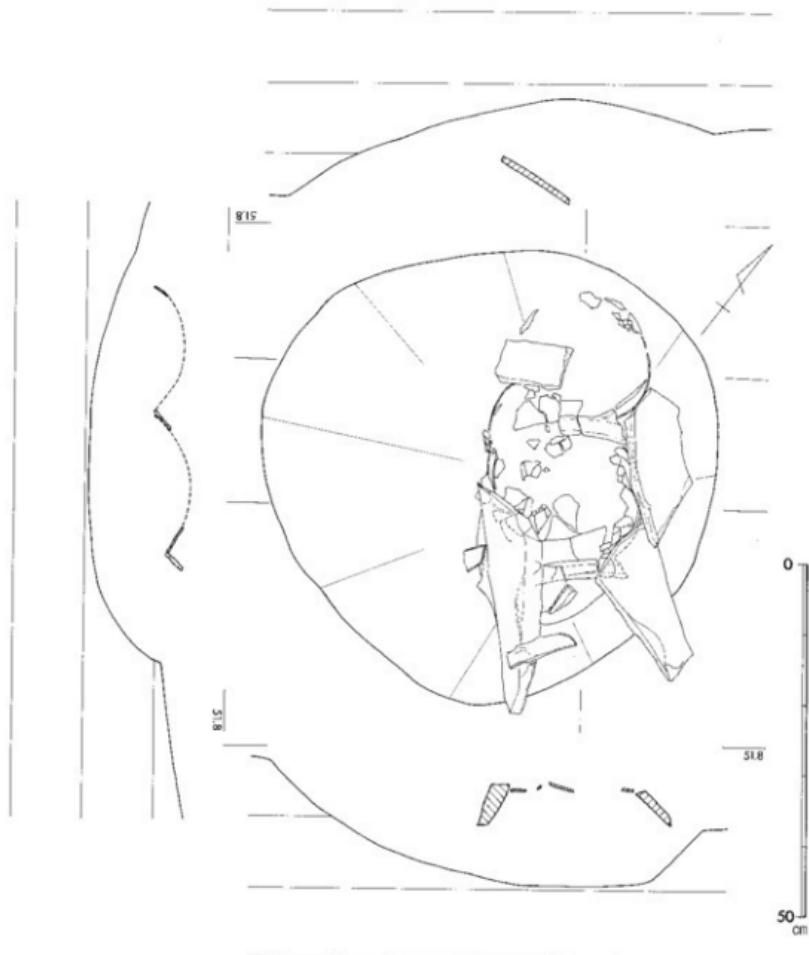
**第2主体** 第1主体の脚部に重複して掘り込まれている素掘りの土壌で、主軸方向はE-16°-Sを示し、長さ1.6m、幅0.5~0.4m、深さ0.2mを測るものである。この土壌の床面は平坦で、棺材を仕組んだ痕跡等は認められなかつた。土壌の幅は東方がやや広く、このことから被葬者の頭位は東を示すものと判断された。ここでも第1主体と同様、蓋材は認められなかつた。

ところで、第1・第2主体の間には、その切り合い関係から第1主体（古）→第2主体（新）という新旧関係が認められた。両者は互いに重複しないよう配慮されていた可能性がある。たとえば第1主体は墓域の中央よりやや南東寄りに穿たれており、これは、おそらくとも第1主体の被葬者が埋葬される時点で、次の被葬者を埋葬する計画があったことを示している。しかし、結果的に一部重複してしまったものと考えられる。

第2主体の頭位上面で板状石材が認められ、あたかもこの主体部にともなうかにみえる。しかし本来は第1主体の脚部に位置する小副室の蓋の一部であったものが、後に第2主体の埋葬に際し、

原位置から移動されたもので、同主体部の埋葬終了後に再び置かれたものと推定される。

なお、39号墳と13号墳との新旧関係については、39号墳の溝が13号墳の墳頂線に沿う形に掘られており、明らかに13号墳に規制されていることから、13号墳(古)→39号墳(新)という関係が考えられる。



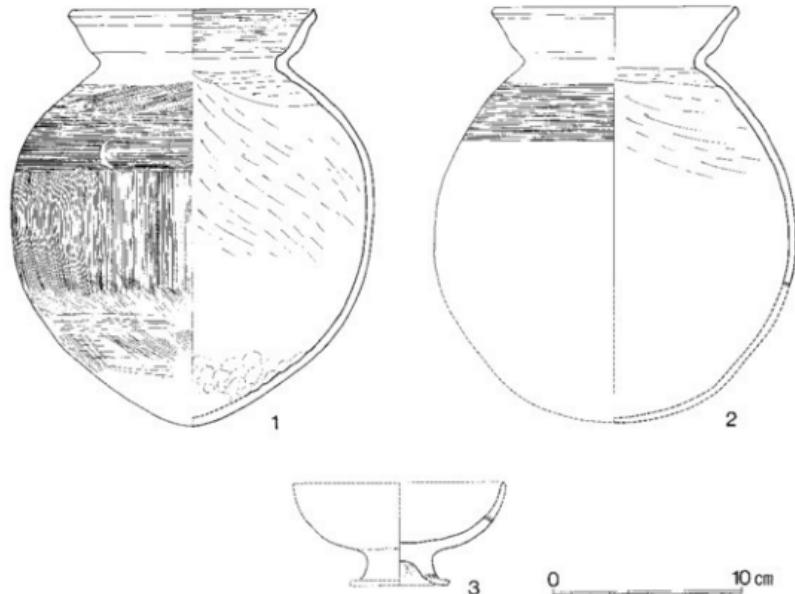
第79図 連結窓出土状態実測図 (1/8)

### (3) 墓棺墓

39号墳の南側に位置する壺棺と考えられるものである。直径0.65m、深さ0.10mを測る平面円形の浅い土壇内に土師器壺を縦並びに伏せ、その向脇を板状石材で覆ったものである。上壇は断面浅い皿形を呈し、土師器は土壇東壁寄りに床面よりやや浮いて出土した。縦に半截した壺を内側を下にしてほぼ水平に伏せ、さらに別の半截した壺の口縁部で先の壺の底部を覆うように伏せていた。検出した時点では、2個体の土師器壺を連結させたもののように思われたが、土壇底面側に壺の破片が認められず、別々に実測した壺1、壺2には類似点が多く、両者は同一個体と考えられる。

土師器壺の両脇は大小6箇からなる板状石材をたてかけ、断面「ハ」の字状に覆っていた。この石材は、本古墳群中で箱式石棺に使用されているものと同様なものであった。なお、上壇の南側掘り込み脇で、櫛床に用いられているものと同様な櫛1箇が出土した。

土師器壺 この壺は焼成も良好とは言いがたく、検出時には上面が著しく損われていた。器壁も薄く破片も小片が多かった。土師器壺1は土壇内南側で検出され、板状石材に覆われていた。器高22cm、口縁径13cm、頸部径10cmを測る。口縁部の形態は単純に屈曲するいわゆる「く」の字口縁と称されるものである。肩部は全体に球形に近いもので、肩部はゆるやかに曲線を描いて下降する。



第80図 連 結 壺 実 測 図

底部は逆円錐状にとがる形となっている。

口縁部内外面とも横ナデで仕上げており、胴部外面ハケメで仕上げられているが、上・中・下とその方向を異にしている。肩部付近が横、胴部中央が縱、胴部下半から底部にかけて斜め方向のハケメとなっている。内部は斜め方向のヘラケズリ、底部付近に指頭圧痕が認められる。

土師器甕2は1の北にあったもので、胴部下半が変形しているが、その点を除けば形態、仕上げ等細部にわたって1に酷似している。

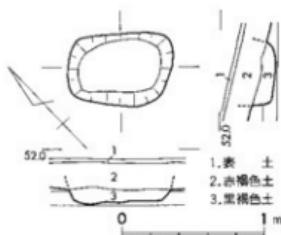
この造構にともなうと断言はできないが、13号墳墳頂線付近で低脚杯1を得ている。全体に風化が著しく、比較的小形の部類に属するものであろう。

#### (4) 土壙1

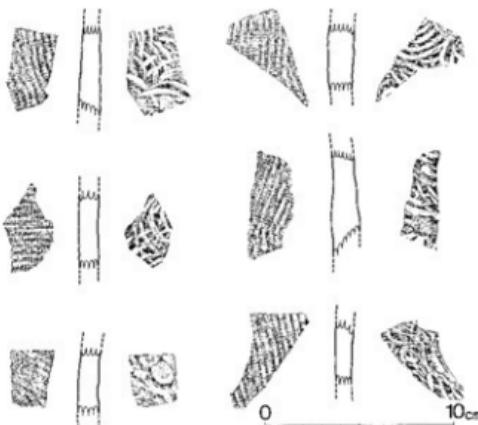
13号墳の北東部にあるテラス上の平坦面、標高51.7mに位置する。表土除去後、須恵器甕の破片が出土し、精査を行なったところ、地山面に掘り込まれた土壙を検出した。平面隅丸方形を呈し、長辺0.7m、短辺0.5m、深さ約0.05mで床面はほぼ平坦である。壁は逆台形状に緩やかに立ち上る。土壙の覆土は炭化物・焼土粒を多く含む黒褐色土で、床・壁が焼けている。

須恵器甕は、すべて胴部の破片である。外側は平行タタキメ、内側は同心円状のタタキメを施している。胎土、焼成、器厚から、破片は同一個体と思われ、テラス上の埋葬主体よりは新しいものと考えられる。

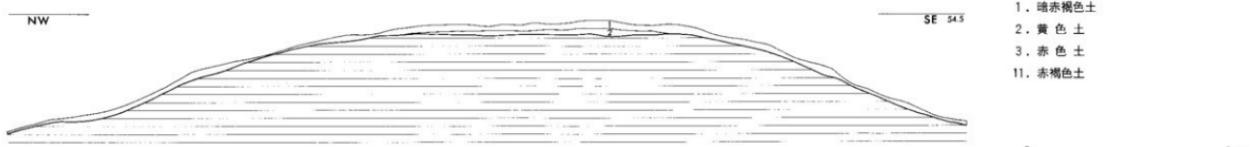
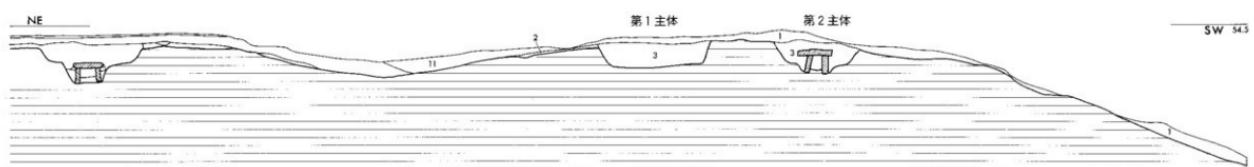
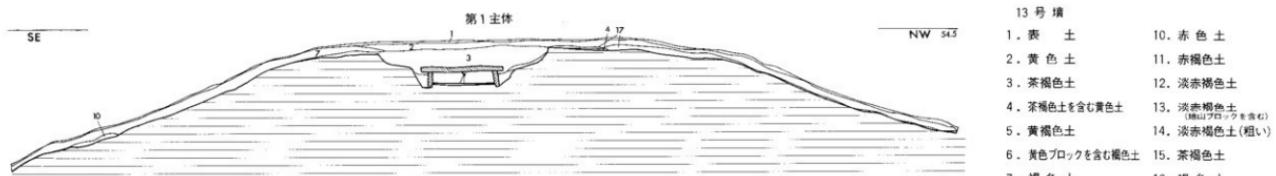
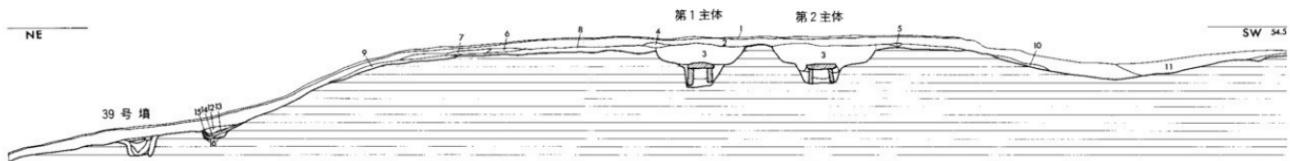
その他、土壙1周辺および39号墳周辺で5穴の土壙が確認されている。土壙1に隣接する土壙は径0.15m、深さ0.15mを測り、底部は平坦である。土壙1と同様、黒褐色土が充満している。柱穴様を呈するが、1穴しか検出されず、その性格は不明である。



第81図 土壙1実測図



第82図 土壙1出土遺物実測図



第83図 39・13・14号填土層図

### (5) 13号墳

本古墳群中最高所の標高53.9mにあり、各支群の配置からみても扇の要的位置に當まれている。整美な墳丘で、 $23 \times 19 \times 1.5$ mの墳丘規模は方墳で本古墳群中最大である。主軸はN $-34^{\circ}$ —Eである。墳頂部からは北側眼下に展開する溝武平野が眺望され、被葬者の盟主的要素を窺わせる。

墳頂部が極端に平坦であることから、後世削平された可能性も考えられたが、約30cm表土を除去すると、墳丘は丘陵頂部の高まりを削り出して成形されていることが知られた。しかし39号墳側は丘陵が平野に向かって緩やかに下降するため、わずかな盛土によって平坦面が確保されていた。なお、調査終了時に行なった墳丘の断面調査の結果から盛土の下には暗茶色の旧表土が認められたので、墳丘成形時に旧表土を除去する作業は行なわれなかつたものと判断された。

主体部は墳頂部中央より南に偏った位置に、2基の箱式石棺が埋置されていた。また、南西隅から上部器の大壺が1個体分出土した。

**第1主体** 墳丘の中央で検出した中心主体と考えられる箱式石棺で、主軸はE $-27^{\circ}$ —Sを測り、中央短軸線とほぼ一致している。この石棺は長辺4.2m、短辺2.2m、深さ0.8mを測る隅丸方形二段掘土壙の中央に埋置されている。土壙は緩やかな傾斜で掘り込まれ、幅約0.35mのテラスを周らした後、垂直に近い傾斜でさらに掘り込まれている。

石棺の蓋石には2枚の板状石材が用いられ、東側の蓋石は長さ1.10m、幅0.60m、厚さ0.12mを測り、西側のそれは長さ0.90m、幅0.65m、厚さ0.10mとやや小さいものであった。両者の接する面以外の側面は敲打法によって面取り加工が施され、横断面はかまぼこ形を示す形となっていた。蓋石裏面の長手板と妻板が接する部分にはつり加工が施され、両者の間に隙間が生じないよう考えられている。蓋石の隙間は青灰色粘土による入念な被覆が施されていたが、棺内には暗茶色の微粒土が若干流入していた。石棺は内法長1.55m、幅0.38m、深さ0.26mを測り、東西の妻板を各2枚の石材で一辺を構成する長手板で挟む形となっていた。妻板は長手板両端よりわずかに内側に入った位置に仕組まれており、妻板が接する長手板内面には、両者を固定するために浅い溝状の切り込みが施されていた。また、棺を構成する石材と同質の破片が土壙内のテラス上に浮いた形で散見された。なお、棺上面を覆う土壙内の土質は一樣で腐蝕土等が混入していなかったことから、石棺の埋め戻しは短時間に行なわれたものと推定される。

棺内の床面には指頭大の礫が厚さ0.09mに渡って敷き詰められており、その上面は東方が若干高く、被葬者の頭位は東方を示すものと判断された。

棺内からの出土遺物はなかった。棺外の東側蓋石直上で指頭大の土師器片を得たが、これが棺上にあったのは意図的なものか否かは速断できない。また、土壙南西隅から30cm離れた地山面で、直径約15cmのほぼ円形で比較的密な感じの炭化物の塊を採集した。

**第2主体** 第1主体の南側で検出した箱式石棺で、主軸はE-30°-Sを測り、第1主体とはほぼ平行である。ただ第1主体がやや東寄りの中央部に位置しているのに対し、本主体中央は13号墳の長軸線が横断する形となっている。つまり第1・第2主体の間に互いに棺身約半分ずつのずれが生じている。同様なずれは14号墳でも認められ、このことは注意すべきことと言えよう。

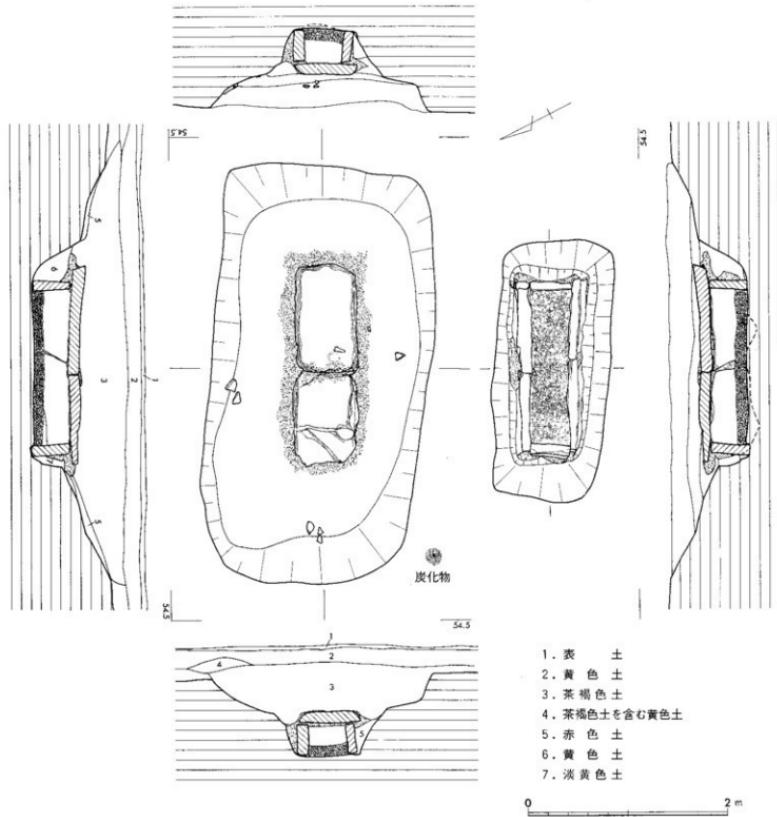
調査は表土除去から着手したが、腐蝕土に鉄を入れた直後に手の平大の板状石材が多数出土した。結果的にこの石材は墳丘加工面より約20cm上層に浮いた形で出土した。この石材は箱式石棺の棺材として使用されることが多く、後世石棺が破壊されたためその残骸が出土したものと考えていた。しかし周囲を精査するにしたがって、これら石材の下に長辺3.9m、短辺2.5m、深さ約0.7mを測る隅丸方形二段掘墓塙が検出され、その中央に箱式石棺が埋置されていることが判明した。土壤は第1主体と比較するとやや幅広くなっているが、形態はほぼ同様で、第1主体より若干鋭角に拗り込み、幅0.2~0.6mのテラスを周らした後、垂直に近い傾斜でさらに拗りこんでいる。

石棺の蓋石には2枚の板状石材が用いられ、東側の蓋石は長さ1.60m、幅0.75m、厚さ0.09mを測り、西側のそれは長さ0.66m、幅0.70m、厚さ0.09mと極端に小さいものである。2枚の蓋石は表裏とも顕著な加工痕は認められないが、東側の蓋石は14号墳第1主体の蓋石と形態が酷似していることが注意される。つまり方形に近い形を呈している蓋石の角および長辺等の曲線に共通したものが認められ、両者は同一母岩から板状節理を利用して削出されたことを示唆するものである。よって、両被葬者の埋葬はさしたる時間差を経ずして行なわれたものと推定することができよう。蓋石の隙間は第1主体と同様、青灰色粘土による入念な被覆が施されていたため、蓋を除去した折、内部には若干の微粒土の流入が認められたに過ぎなかった。

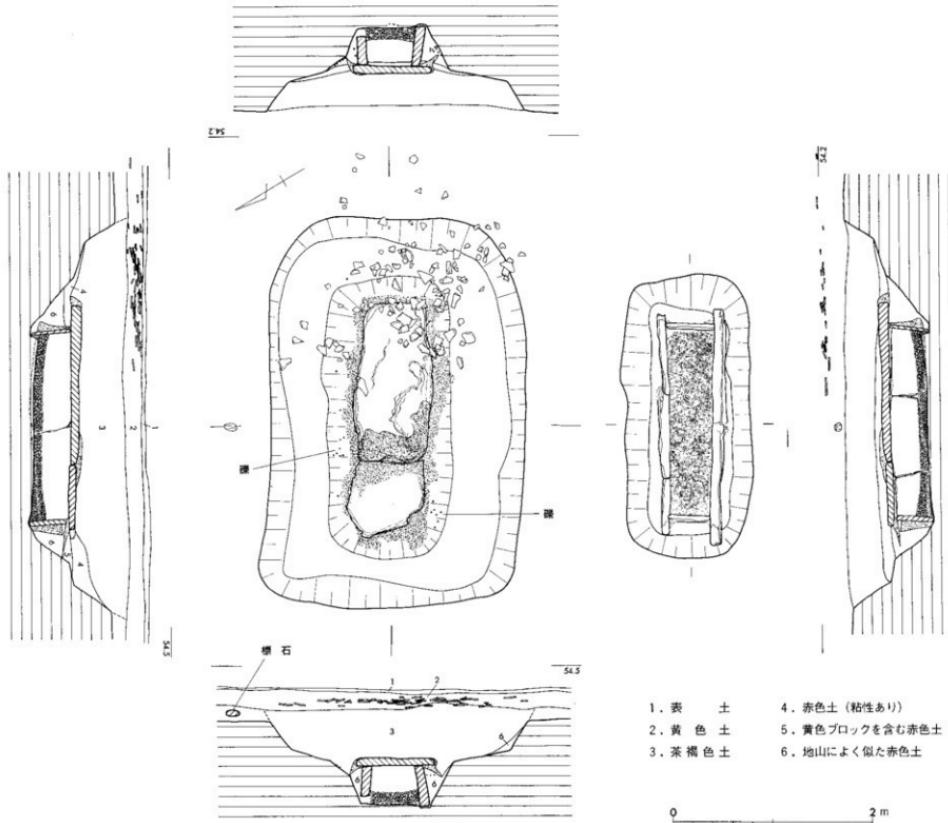
石棺は内法長1.85m、幅0.42m、深さ0.26mを測り、東西の妻板を各2枚の石材で一辺を構成する長手板で挟む形となっている。妻板は長手板両端より若干内側に入った位置に仕組まれており、妻板が接する長手板内面には、両者を固定するために浅い溝状の切り込みが施されていた。なお、北側長手板が3枚の石材を纏いで一辺を構成しているかに見えるのは、各個板が棺の規模のわりにやや薄い石材が使用されたため、長手板の西側沿いに亀裂が生じたからである。

棺内の床面には指頭大的蹠が厚さ0.10mに渡って敷きつめられ、中央がやや低くなっていた。蹠床は東側が西側よりやや高く、また幅も東側が0.08m広いことから、頭位は東方を示すものと判断された。棺内床面に敷きつめられたと同様な蹠が棺外の西側で散見されたが、これは石棺埋置に際し、床面に敷く蹠が飛散したものと考えられる。

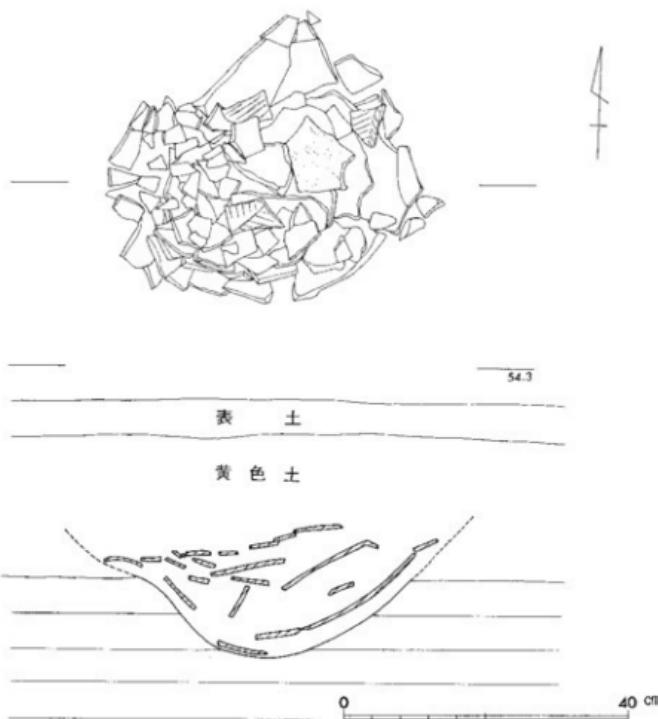
第2主体の北側墳丘加工面直上で、長辺14.4cm、短辺8.2cmを測る鳩卵形の礫が1個出土しており、これはいわゆる墓標とされるものであろうと考えられる。しかし、出土地点が第1主体と第2主体との間に位置しているため、どちらにともなうものかは速断の限りではない。



第84图 13号墳第1主体実測図



第85図 13号墳第2主体実測図



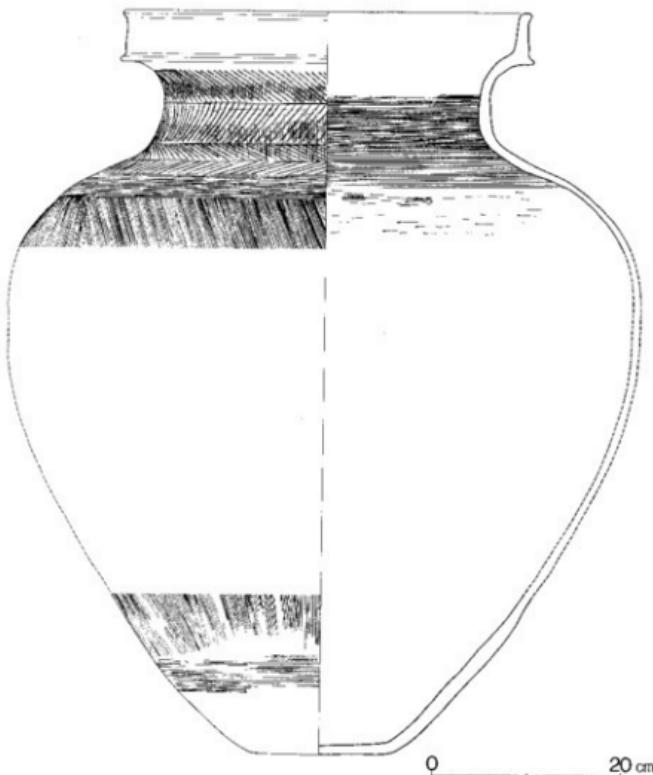
第86図 13号埴土師器壺出土状態実測図 (1/8)

**埴頂出土遺物** 第2主体から約4m南で上師器壺が検出された。壺は地山面に底部を沈め、その内部に口縁部・肩部等の破片が集積する形で出土した。この出土状態から、壺は成形を終了した埴丘上面を径約41cm、深さ約12cmの捕鉢状に掘りくぼめ、その中に正位置に置かれたものと考えられ、長年の風雨によって肩部・口縁部が破損し、その破片が内部に落下したものと判断された。当初、大形の壺であったことから壺棺の可能性も考えられたが、出土状態から壺は地上に出ていた部分が大部分あったと想定され、埋葬施設と考えるよりは一種の供献形態を示すものと推定された。

この土師器壺は胴部を欠損するものの、一応の形態をうかがうことができた。体部は倒卵形を呈し、破損をしているが個々の破片の焼成は比較的良好で、器壁は厚く胎土は大粒の砂を含んでいる。推定器高約79.5cm、口縁径44cmを測り、肩部残存最大径66cm、底部径14cmとなっている。

口縁部外面下  
端は突出し横ナ  
デに仕上げられ  
ている。ほぼ垂  
直に立ち上が  
り、口唇端はや  
や肥厚する複合  
口縁を呈する。  
内面には著しい  
風化が認められ  
た。

頸部は径35cm  
を測り、口縁か  
ら下降する曲線  
は弧を描いてす  
ばまた後、大  
きく開いて再び  
下降する。頭部  
外面には3条の  
平行沈線があげ  
られ、この平  
行沈線によって  
作り出された4



第87図 13号埴土師器 簪実測図 (1/6)

帶の空間には、縱方向のハケメ調整の後板状工具による綾杉文が施文されている。一帯内の施文間  
隔は1~2cmで、比較的不揃いである。綾杉文の最下施文部から肩部にかけて風化が認められ、著  
しい部分はあばた状となっている。肩部には幅2.5cmにわたって横方向のハケメ調整が認められ、  
その下は縱方向のハケメ調整となっている。頸部内面は幅約10cmにわたって横方向のハケメ調整が  
認められ、肩部内面はハケメ調整の後、横方向のヘラ削りが施されている。<sup>35)</sup>

胴部下半から底部は地山面に固定されていたこともある、その破片はほとんど接合された。復  
元された胴部下半は一見深鉢形を呈し、外表面は上部が縱方向、下部が横方向のハケメ調整となっ  
ていて、なお、底部から約7cmにかけての部分は肌がやや荒れていた。

13号墳斜面出土遺物 13号墳墳丘南側斜面で、板状石材とともに石器が出土した。出土位置は同墳の東コーナーよりやや南寄りで、東側テラスとほぼ同レベルで、このことからこの石器の上限は同墳築造時期を遡らないものと判断された。形態は円柱形を呈し、長さ18.4cm、断面は長径8.4cm、短径7.0cmを測る。端部は、上部とした方はやや丸みをもち、下部とした方は平坦に近い形となっており、敲石に見られるような使用痕跡が認められた。何かを打撃する用途に使用されたものと推定される。

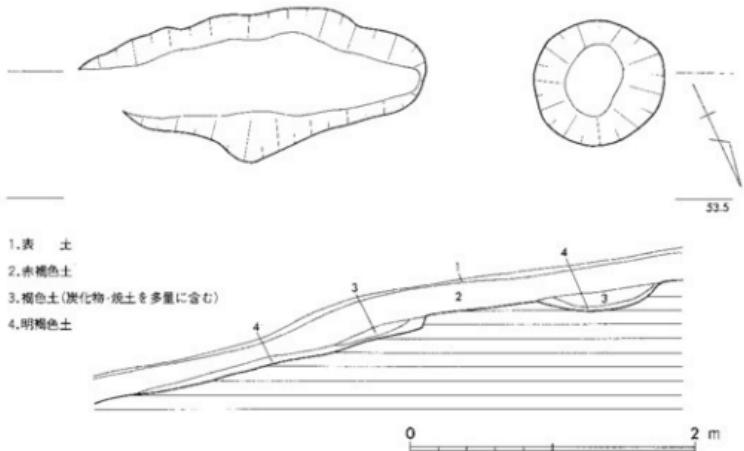
#### (6) 炭化土上塙

13・14号墳中間の鞍部南東側で、平面円形の土壙と溝各1が緩斜面の傾斜に沿う形で検出された。円形の土壙は直径0.92m、検出面からの深さ0.15mを測り、覆土は炭化物や焼土を多量に含む。溝は長さ2.45m、幅は最大で1.05m、検出面からの深さは0.10mを測り、横断面は逆台形を呈している。覆土は、炭化物や焼土を多く含む褐色土層とその下層の明褐色土層からなっている。

この遺構に含まれる炭化物・焼土から火が燃やされたことは明らかだが、遺構にともなう遺物はなく、時期は不明である。



第88図 13号墳出土  
石器実測図



第89図 炭化物土壙実測図

#### (7) 14号墳

古墳群が形成される丘陵の東側、最も高所の標高54.3mに位置する。尾根上、北東側に13号墳と溝を共有して隣接している。西側は尾根が約4.5m低くなり33号墳へと続いているが、調査前の地形測量図によると、墳丘と尾根の境は明確でなく、墳丘から尾根の斜面へと続いており墳裾は明確でない。周溝内に墳丘の土が流れ込んでおりコンターも乱れている。墳丘は直径約18mの円墳で、北西部の墳裾もあまり明瞭ではないが、北西墳裾からの比高は約2mである。南西部16号墳上より見ると、墳丘と尾根が一体となって見えるため一層大きく感じられる。北西部の谷を隔てた10号墳上より見ると、墳丘の盛り上がりや平坦面、13号墳との間に溝を切った様子が明確にうかがえる。

調査は、13号墳の長軸方向に設定した基準線を延長し、中心点でこれと直交するように基準線を設け、それに沿って幅0.2mのベルトを残して掘り下げた。表土の除去作業の段階で指頭大の礫が散在して出土したため、礫のレベルを測りながら精査を行なった。

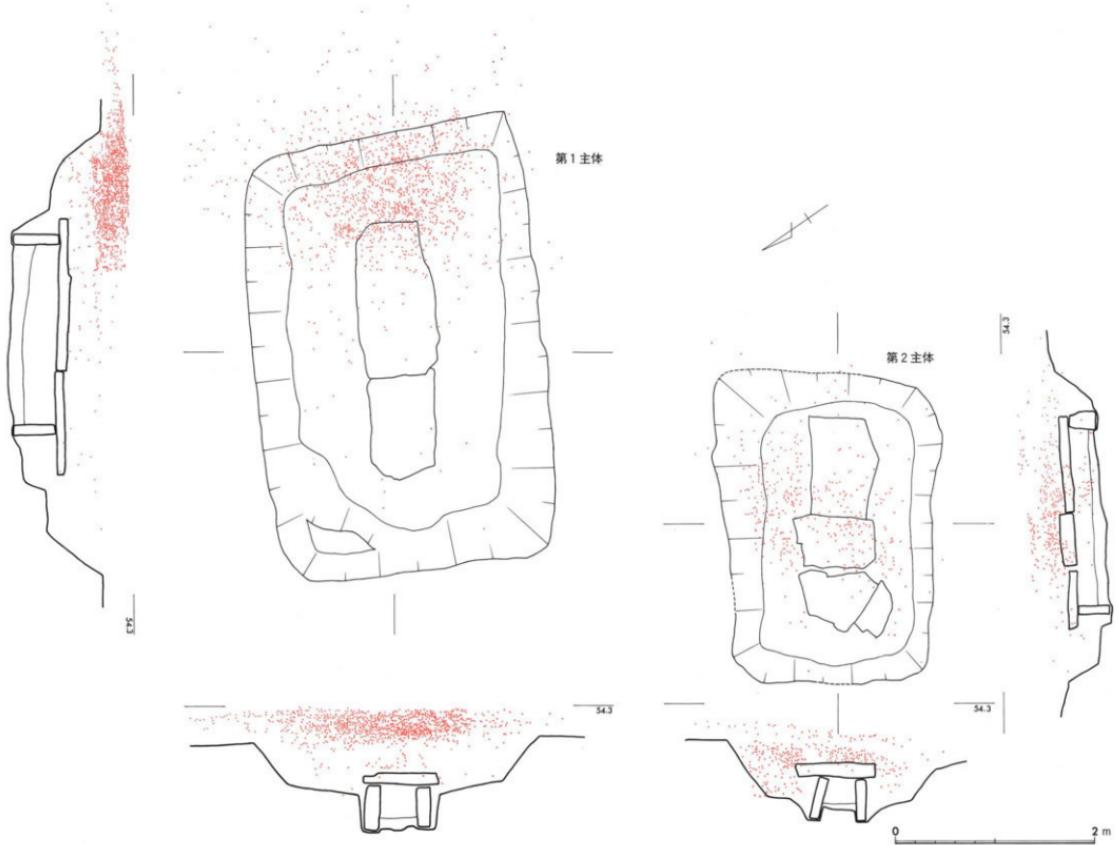
表土下20cmの黄色系の地山面に、13号墳と同様の墓壙が大きく掘り込まれていた。主体部は2基で、共に箱式石棺を埋葬主体としていた。2基は主軸方向を同一にしており、南西部に位置する第2主体部の方が南西側へ約4m寄っている。この主体部のあり方は、隣接する13号墳の2基と同様の位置関係にある。13・14号墳の各主体部は、ともに同様にずれた配置を示すとともに、頭位も東から30度南へ偏った向きにそろえられており、主体部の向きを意図的にそろえていることを窺うことができる。

14号墳北東側の側溝は13号墳と共有しており、丘陵地山面を掘り込んでいる。13号墳の主軸方向のベルトに沿った位置での周溝は幅約4m、表土からの深さ0.4mである。断面は緩やかな孤弧を描いている。周溝内の土層の観察によると、13号墳が14号墳より古い時期のものと考えられる。

周溝内からは土師器片1が出土している。また、周溝東側には炭化物の混じった土が堆積しており、その下部には土壙が掘り込まれていた。

**礫出土状態** 14号墳の第1、第2主体部ともプラン確認のため表土を除去した段階から礫が散在して出土しており、主体部掘り方内の覆土にも多量の礫が含まれていた。この礫は主体的の箱式石棺内の礫と同様のものであり、出土量は第1主体部の方が多い。

垂直分布を見ると、第1主体部では上部から下部までまんべんなく分布しているが、特に上部に多いようである。第2主体部では掘り方の内部に多く、その中でも下部に集中している。水平分布を見ると、第1主体部では頭位のある東側に集中しており、第2主体部では中央部から東側にかけて分布している。これは、埋葬時の掘り方を埋める際に、意識的に東側に多量の礫を混入したためと思われる。なお、13号墳の第2主体部覆土上に散在していた石棺と同一の10cm前後の石材片も、主体部東側に集中して出土したことが注目される。



第90図 14号墳 罐出土状態実測図

第1主体 14号墳の中央やや北寄りで検出した箱式石棺で、中心主体と考えられるものである。主軸方位はE-31°-Sを測る。この石棺は長辺4.4m、短辺2.9m、深さ0.5mを測る隅丸方形二段掘墓塙の中央に埋置されている。墓塙はやや急な傾斜で掘り込まれており、墓塙中段の北西隅の斜面に長さ約0.5m、幅約0.3mを測るステップが認められる。同様なステップは12号墳第1・第2主体、17号墳第1主体でも検出されている。

石棺の蓋は2枚の板状石材を用いるもので、東側の蓋石は長さ1.54m、幅0.70m、厚さ0.11mを測り、これは前述したように、13号墳第2主体の箱式石棺の蓋材と同一母岩から切り出された可能性が大きい。西側の蓋石は長さ1.00m、幅0.62mを測り、やや小さいことは13号墳の各主体部と同様である。蓋石の隙間は青灰色粘土で入念に被覆されていたにもかかわらず、石棺内には外部から流入した土が充満していた。石棺は内法長1.80m、幅0.46m、深さ0.34mを測り、東西の妻板を各2枚の石材で一辺を構成する長手板で挟む形となっている。石棺の側板は厚さ0.10~0.14mを測るもので、上面は敲打法によって全面がほぼ平坦になるように仕上げられ、蓋石裏面との間に隙間が生じないよう配慮されていた。長手板内面も敲打法によって平坦にするとともに、厚さを均一にしている。また、2辺の長手板の内面の妻板が接する部分には、それを固定するための浅い溝状の削り込みが施されていた。

棺の西側端部には小副室が認められた。それは長手板の端から約0.4mも内側に妻板を仕組み、南北2辺の長手板端を利用して三方を外界から仕切り、残りの一方は地山に粘土を塗布して壁とするものである。内法は長さ0.30m、深さ0.35mを測り、幅は石棺の内法幅と同様0.46mである。なお、副室の蓋は石棺の脚方向の蓋石端部が兼ねる形となっている。

棺内の床面は指頭大の礫が厚さ0.1~0.2mにわたって敷きつめられていたが、副室内には認められなかった。礫床上面の高さは東方向が0.13m高く、頭位は概ね東にとるものと思われる。

この石棺は、他のものと構造上やや異なる点が認められるので列記する。

石棺の長さは古墳群中の他の例と大きく変わることはないが、内法の幅は第2主体のものも含め、14号墳のものは狭いことが指摘できる。さらに、この種の棺では被葬者の頭位方向をやや幅広に、脚方向を狭くするのが一般的であるが、この石棺では両者に差がほとんど認められないばかりか、逆にわずかではあるが脚方向が広くなっている。注意される。

このような棺の形態は、石棺を埋置する2段掘り墓塙下段の掘り込みがほぼ垂直に、かつ石棺の外法に合わせて正確に掘りこまれていることから、偶然生じたものではなく、当初から計画的になされたものと考えられた。特に下段の掘り込みは、13号墳第1・第2主体や14号墳第2主体が40~60°と緩やかな傾きで掘り込まれるのに対して、ほとんど垂直に掘り込まれており、特異である。そのほか、用途は不明であるが、礫床下部の地山面には棺の中央に縦に走る長さ1.40m、幅0.20

m、深さ0.05mを測る浅い船底形の溝が認められた。

また、棺材各所には敲打法による入念な表面の整形が行なわれ、使用石材も質が均一で、慎重に吟味されたことがうかがえるものであった。

この第1主体とともにうなう遺物は棺外から出土した鉄剣・鉄槍・素環頭大刀・鉄鎌・鉈・鉄製刀子・用途不明鉄器各1と、棺内から出土した鏡2面・紡錘車形石製品1のほか、被葬者の歯牙等がある。以下、棺外の遺物から順次、出土状態等を記すことにする。

棺外北側長手板沿いに、鉄剣が切先を被葬者の脚方向に向け、刃を上下に立てた状態で検出された。その上面は、灰白色粘土で被覆されていた。

棺外南側長手板沿いで、鉄槍をはじめとする鉄器類が検出された。これら遺物の置き方は、まず用途不明鉄器を被葬者の脇腹にあたる位置に置き、さらに切先を脚方向に向けて鉄槍を水平に重ね、その切先に大刀の環頭部が重なるように添え、刃は棺身へ向ける形となっていた。鉄鎌・鉈・刀子は、被葬者の脚の脇にあたる位置に先端を脚方向に向け、重ねて置かれていた。これらは鉄剣と同様に上面は灰白色粘土で被覆され、検出時には鉄槍の茎と素環頭大刀の環頭の一部が認められるに過ぎなかった。

棺内の遺物はいずれも被葬者の頭位とみられる東側の床面に、まとまった形で検出された。

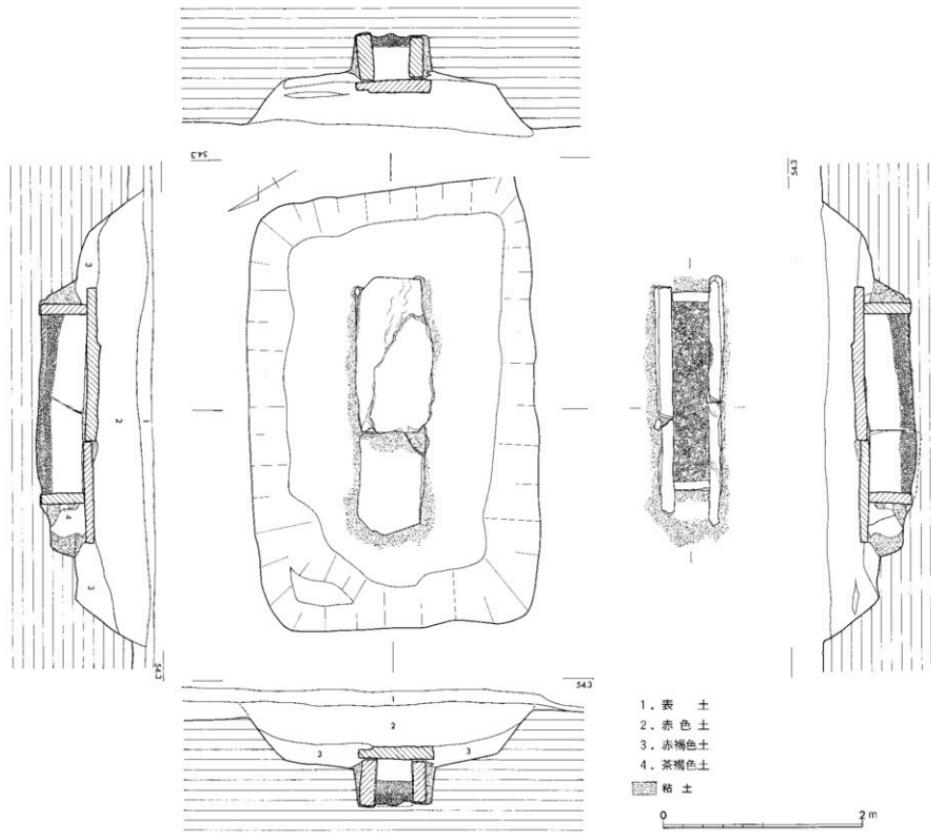
北側長手板と妻板内面に接するように、内行花文鏡が鏡面を上にして、その下でわずかに両にずれた位置に、方格渦文鏡が鏡面を下にして、いずれもほぼ水平な状態で出土した。内行花文鏡の一部には布目が認められることから、副葬の際には、布にくるまれていたものと判断された。

南側長手板と妻板が接する隅では、紡錘車形石製品が平坦面を上面にして出土した。鏡と紡錘車形石製品との間の疊床面には被葬者の歯牙が5本認められ、内行花文鏡上面の一端に人骨の一部とみられる骨片があった。

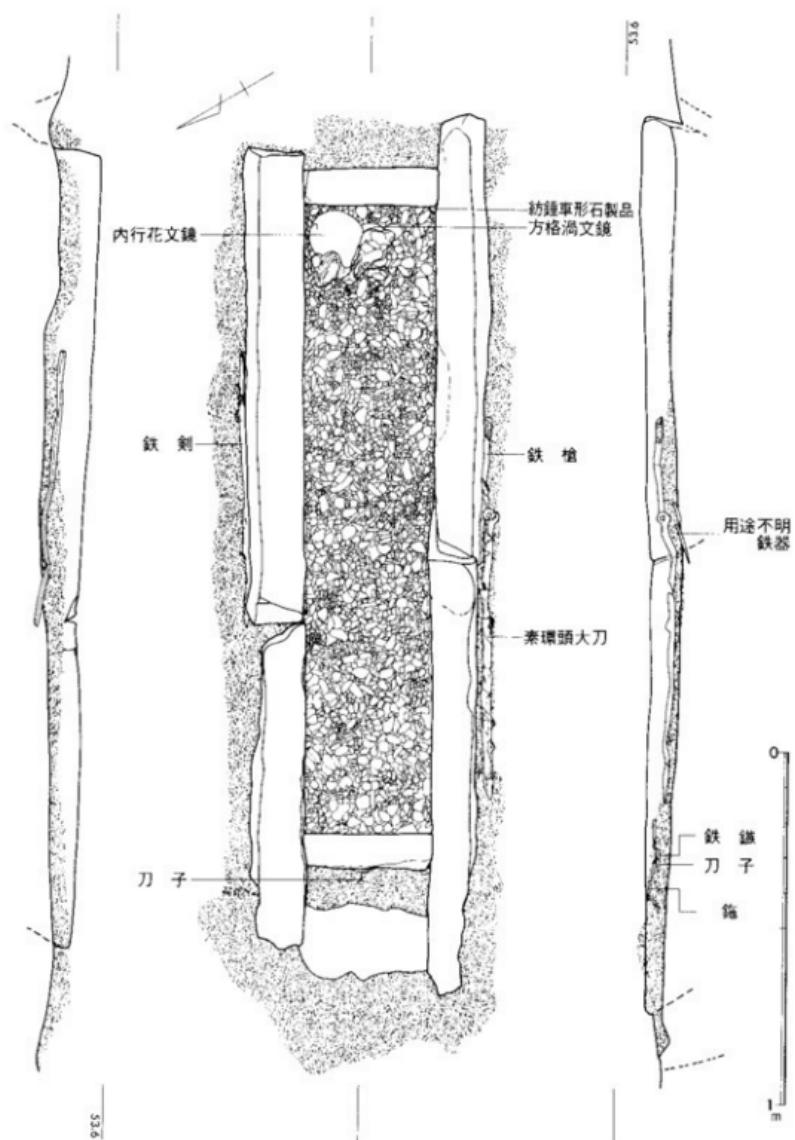
棺の西側端部に設けられた副室内からは、鉄製刀子1を検出した。この刀子は妻板に塗布されていた粘土中に、切先を北に刃を下に向けた状態で出土した。副室内では、小さな副葬品を納めるには十分な空間があるにもかかわらず、副葬品は認められなかった。

**第1主体出土遺物** 鉄剣（第93図1）は残存長77cm、茎部は長さ12.5cm、幅2.0～2.7cmを測る。断面は方形を呈し、目釘1が認められる。剣身は64.5cmを測るが、切先を破損しているので本米は1cm前後長かったものと考えられる。剣身幅は刃闊付近で3.4cmを測り、切先に向かって序々に細くなってしまい、切先付近で2.3cmを測る。剣身断面は、鎬の頂稜が明瞭なアクセントとして認められず、薄い菱形を呈している。

剣身には大小8箇所の人為的な破損部分が認められた。その最も著しいのは闊から29cmの位置と、それよりやや切先寄りの闊から40cmの位置である。両者とも刃が大きくえぐれた形となってお



第91圖 14號墳第1玉體夾測圖



第92図 14号墳第1主体遺物出土状態実測図 (1/16)



第93图 14号墓第1主体石棺外出土遗物实测图(1) (1/4)

り、とりわけ切先寄りの破損部分は、本来3cmほどあったとみられる劍身幅が約半分に減じるほど損われ、刃筋もこの部分から約5度の角度をもって屈曲している。以上記した2箇所の破損した部分は、いずれも一方の刃部に上方から大きな衝撃が与えられたものと考えられ、それに対する他方の刃部の破損は、下にあてがわれたものと刃が接することによって生じたものと判断された。なお、外装等に関する痕跡は認められなかった。

素環頭大刀（第93図2）は全長81.5cmを測る平造り鉄製大刀で、全体に錆化が認められるが、保存状態は良好である。素環の柄頭は背部側からのびる茎尻を環状に曲げる造りとなっており、一部に著しい錆化があってやや変形しているものの、平面形が横長の楕円形に近いものである。

素環部の法量は長径4.6cm、短径3.8cmを測る。茎部は長さ12.4cm、幅2.0cm、厚さ0.6cmを測り、断面は方形を呈し、背部がやや厚くなっている。刃間は明瞭であるが背間は認められない。刀身は刃渡り64.5cmを測り、内反り1.0cmが認められる。背は角背で、切先へ向かって序々に薄く加工されている。刀身幅は刃間付近で0.7cmを測り、断面二等辺三角形を呈す。切先は刃の線が緩やかに弧を描いて背の先端と交わる形となっている。

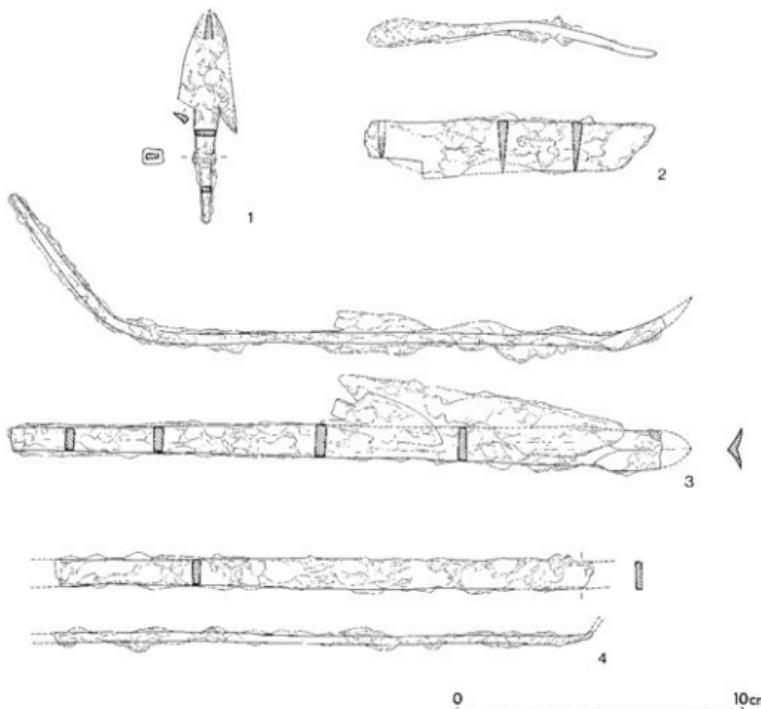
なお、茎部に柄外装等に関する痕跡はみられなかつたが、中央部で目釘穴1が認められた。刀身には精、金具等の痕跡は認められなかつた。

鉄槍（第93図3）は残存長41.5cmを測る。槍身の刃渡り36.8cm、厚さ0.6cmを測り、鎬造りの細長い柳葉形を呈す。全体に錆化は認められるものの残存状態は良好である。鎬の頂稜は明瞭なアクリセントをみせず、そのため断面は薄い菱形となっている。切先は鋭くとがらず、序々に細くなり、丸味をもっておさまる形態となっている。

この槍先について特筆すべきは、黒色漆を塗布した柄の一部が極めて良好な状態で残存し、いわゆる垂口式の形態が確認できることで、柄の繋結方法を検討する格好の資料を提供している点であろう。漆の塗布された柄先端は、検出時に上面となっていた部分では当初の形態を保つものの、下面となっていた部分では土圧のために潰れている。

一部破損した漆膜の下には、木質と槍の関節が観察できる。これによれば槍身の関節は弧を描きながら幅を減じる形となっており、茎の断面は方形を示す。この木柄の着挿、繋結に際しては、①柄の先端部を茎部の長さはどを縦割りとする。②先端部を約100°の角度にとがらせる。③縦割りした隙間に槍茎部を着挿する。④着挿した槍先を固定するために柄先端を細糸できっちりと巻きしめる。⑤その上に黒色漆を数度塗布し繋結を終了したものと推定される。

なお、柄は石棺外の粘土内に密封されていたにもかかわらず、実測図に示した部分以外はそのスタンプさえも検出できなかつたこと、柄の大半が欠損していることを考えあわせると、埋納にともなつて意図的に切断されたものと判断された。



第94図 14号墳第1主体石棺外出土遺物実測図(2)

鉄鎌（第94図1）は長さ7.5cmを測り、身の形が二等辺三角形を呈す。脇抜は片方を欠損しているが、切り込みは比較的深い。身は片面がややふくらみをもち、他の面が平坦になっている、いわゆる片丸造である。茎部は身に近い部分の幅が0.7cm、厚さ0.2cmとなっている。茎部の中ほど、幅が細く変化する位置に、幅0.5cmを測る帯状の錫が認められる。一見金属のようでもあるが、桜皮の痕跡である可能性も考えられる。

刀子（第94図2）は鉄鎌、錠等と折り重なる状態で納められていたため、刃筋等に若干変形した部分が認められるが、概ねその形態をうかがうことができる。長さ10.2cm、身幅1.7cm、茎の長さ2.0cmを測る。背はいわゆる角背で、刃闊は明瞭だが背闊は認められない。全体に、長さに対して幅が広い觀がある。

刀（第94図3）は刃部先端を欠損しているが、残存長25.5cmを測る。茎部は長さ23.0cm、幅

0.8~1.4cm、厚さ0.3cmを測り、刃部に向かって序々に幅広の造りとなっている。身は両刃を有し、表中央に鎌がはしる。裏面は鎌に沿って浅い溝があり、断面逆「V」字形を示す。身は茎部に対し約25°の反りをもっている。

なお、茎部は端から6cmの位置が約55°の角度をもって背の方向に曲がっていることが注目される。これは、埋納に際して意図的に曲げられたものと判断された。

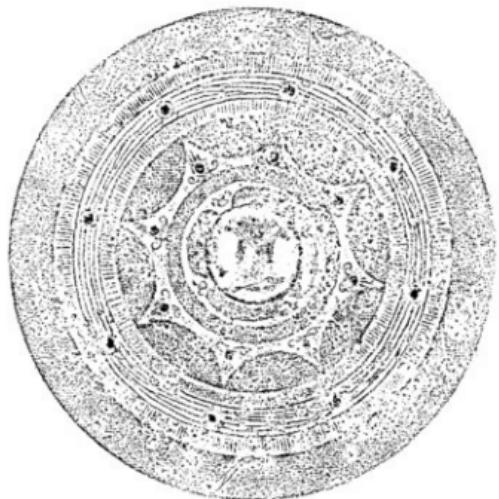
用途不明鉄器（第94図4）は残存長19.0cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る細い板状の鉄器である。両端部は欠損しており、全容を推することは無理である。一方がやや薄く、比較的急角度で屈曲する形となっていることから、鎌の茎部かとも考えられたが、刃部らしいものは認められなかった。よってここでは一応用途不明鉄器としておいた。

内行花文鏡（第95図1）は面径17.9cm、厚さは鍔の部分で0.3cm、縁の部分で0.5cmを測る完形品である。鏡面、鏡背の一部は錫化が進み、明緑色を呈している。鏡面はほぼ半凸だが、鏡縁近くでわずかに反りがあり、鏡縁の方へ向けて厚さを増している。

背面の文様は鍔から外方へみていくと、鍔、鍔座、圓線、内行花文帯、柳葉文帯、雲雷文帯、柳葉文帯、平縁へと続いている。鍔は高さ1.3cm、径2.9cmを測る。鍔座は径4.9cmを測り、四葉形を呈する文様が中心から外へ向け4個配されており、それらの間には4個の単位文を配している。この単位文は、小円の外側にわらび手状の文様が2本表現してある。四葉形は幅0.6cm、長さ2.3cmで、幅に対し長さのある扁半な形である。鍔座の外周には幅0.7cmの一段と高くなった圓線がめぐっている。内行花文帯は8個の花文から成り、各花文の間には8個の単位文が配されている。単位文は小円の内側にわらび手状の文様が2本、外側に紐状の線が中央に長く両側に短く3本表現されている。花文は長さ3.6cm、幅1.5cmを測る。花文外周には幅0.6cmの狭い柳葉文帯がめぐっている。その外周には8個の乳文を配し、その間を平行三角文の組み合わせにより雲雷文帯がめぐる。雲雷文帯の幅は0.9cm、長さ4.5cmで、文様は4本の突線により表わされている。最外周には、幅0.7cmを測る柳葉文帯がめぐる。縁は幅1.5cmを測り、鏡面の反りのために0.4cm反っている。鍔を中心として外へ見ていくと、内行花文帯の単位文と雲雷文帯の乳文が一直線上に並び、四葉形の中心と内行花文帯の単位文、雲雷文帯の乳文も一直線上に並んでおり、整った文様構成となっている。

縁の一部と鍔の上部には布目が見られることから、この鏡は副葬時に布に包まれていた可能性が考えられる。また、各文様の端には部分的に赤色顔料の付着がみられることから、副葬時に顔料が全体に薄く塗布されたものと思われる。

この内行花文鏡と良く似た文様の鏡は、福岡県の沖ノ島19号遺跡より出土している。<sup>37</sup> この鏡は径がやや異なり、同範ではない。



第95圖 14號墳第1主体石棺內出土遺物實測圖 (1/2)

方格渦文鏡（第95図2）は面径11.0cmを測る小形の銅鏡で、鏡背には方格渦文を鋳出している。鏡面・鏡背とも銹化がかなり進んでおり、暗緑色を呈している。厚さは鉢の部分で0.2cm、平縁の部分で0.4cmを測り、平縁上の外側で厚くなっている。

背面の文様は鉢から外方に見てゆくと、鉢、鉢座、圓線、方格文帯、櫛齒文帯、錐齒文帯、複線波文帯、平縁へと続いている。鉢は径1.6cm、高さ0.8cmを測る。鉢座は方形で、鉢座内には退化した四葉文とみられる文様を配している。

内区は方格が二重の突線で描かれる。この内面に円座を有する低い8乳が配される。この乳は突線で表現される乳座を有している。この8乳の間に鉻帶となっているが、銹化の進行もあって読みうるものは「未」1字で、「巳」らしき字は明確な判読はできず、本来の十二支を記した銘文の意味が忘れられて文様化したものようである。方格外には円座をもつやや高い8乳が配され、方格各辺に接して「T」字状の規が突線で描かれ、乳と規の間を渦文で埋めている。この外側に櫛齒文帯が描かれ、小斜面をへて外区にいたる。外区はやや大ぶりな櫛齒文、圓線で区切られて、やはり大ぶりな複線波文帯が描かれ、平縁に至っている。

この鏡に似た文様構成をもつものは、静岡県磐田市神明神社古墳出土鏡、熊本県玉名市繁根木古墳古墳出土鏡などがある。<sup>33)</sup>

紡錘車形石製品（第95図3）は全体に緑灰色を呈する、いわゆる碧玉製紡錘車と称されるものである。上径1.1cm、最大径5.0cm、厚さ1.1cmを測るもので、中央には貫通孔がうがたれている。下面は平坦だが、上面には3条の割りこみが継ぎもって周っている。周縁部は厚さ0.2cmを測り、底辺から各継までの距離はそれぞれ0.6cm、0.9cm、1.1cmを測る。

貫通孔は上面で径0.6cm、中央で0.4cm、下面0.7cmを測り、中央部の径がやや小さくなっているため、穿孔は上下両面から行われた可能性が強い。

平面は正円を呈し、研磨が全体に入念で加工工具痕跡は認められない。石材は比較的硬質で光沢があり、淡黄色のしまが走る。上面では、割り込みや継ぎに妨げられてはいるものの目の細かい板目紋様が、下面では緑灰色に淡白色の細い板目紋様がみられる。作製に際し自然のしま紋様を見せることは一種の加飾として計算されていた觀がある。

この紡錘車形石製品は、岩崎卓也氏の分類によれば、大阪府北河内郡四条畷町岡山所在の忍岡古墳出土のものに、穿孔方法を不問とすれば外形は大阪府河内長野市三日市大師山古墳<sup>34)</sup>のものに類似している。なお、県内での出土例は安来市荒島町所在造山1号墳に次いで2例目である。

刀子（第95図4）は副室内から出土したもので、長さ8.7cm、身幅1.4~1.6cm、厚さ0.3cmを測る。背はいわゆる角背で、刃闊は明瞭であるが背闊は認められない。長さに対し幅が広い鍔があることは、指外から出土した刀子と同様である。

第2主体 第1主体と主軸をほぼ平行にしており、主軸方向はE-34°-Sである。第2主体の方が約2m西側に寄っている。

墓壇の割り方は、上面で長辺3.1m、短辺2.3m、下面で長辺2.6m、短辺1.5m、深さ0.5mを測る。墓壇床面はほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。墓壇は第1主体と同様に緑灰色の地山に掘り込まれており、覆土は赤褐色である。

墓壇には箱式石棺が埋置されている。石棺の長手板は上仄により内側へ傾いている。墓壇床面に長手板側は深く、妻板側は浅く溝を掘り、長手板を深く埋め込み妻板を固定している。石棺の内法は長辺1.8m、東側の短辺0.4m、西側の短辺0.3m、深さ東側0.25m、西側0.30m、東側短辺の幅がやや広く組み合わせである。

石棺の組み合わせは妻板が長手板に挟まれている。長手板は隅辺とも3枚の石を使用しており、南東側は長手板が小口の石と辺がそろっているが、北西側の長手板は妻板より端がはみ出している。これは、第1主体でみられた小副室の石の組み方と似ている。また、長手板の石の継ぎ目は互いに斜めに加工している。南東側の蓋石は長方形を呈し、石棺の長辺に沿って置かれ、他の2つの蓋石は長辺と直交して置かれている。直交して置かれた蓋石は、後世松の根により破壊されている。各石の継ぎ目には粘土で被覆している。粘土は第1主体ほどは徹底しておらず、継ぎ目をわずかに覆う程度である。石棺内には、土が流入し蓋石の裏面まで堆積している。

長手板、妻板の蓋石との接合面には加工時の工具痕が残っており、特に内側には明瞭に残っている。工具痕の幅は約3.0cmである。

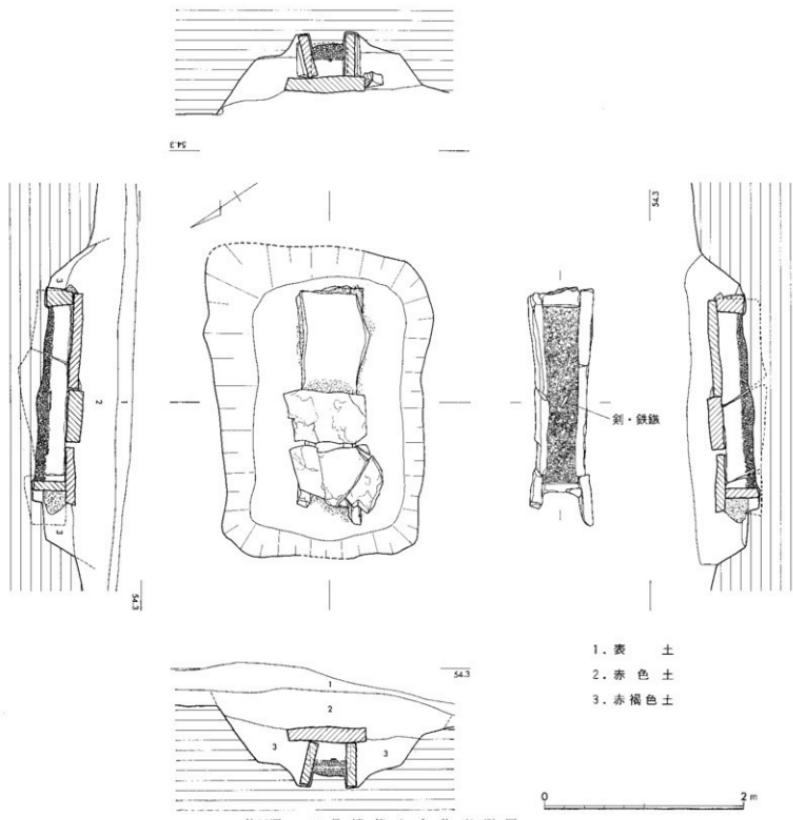
石棺床面には第1主体と同様に指頭大の礫が厚さ0.08mで敷きつめられている。礫床は、南東側の方がやや高くなっている、中央部分がややくぼんでいる。

遺物は、礫床上より鉄剣、鉄鎌、刀子各1点が出土している。鉄剣と鉄鎌は、石棺中央部において鋒先を西側に向け、平行に置かれている。刀子は中央よりやや西側寄りで、同じく鋒先を西側に向けた状態で検出され、錆とともに鉄針が付着していた。

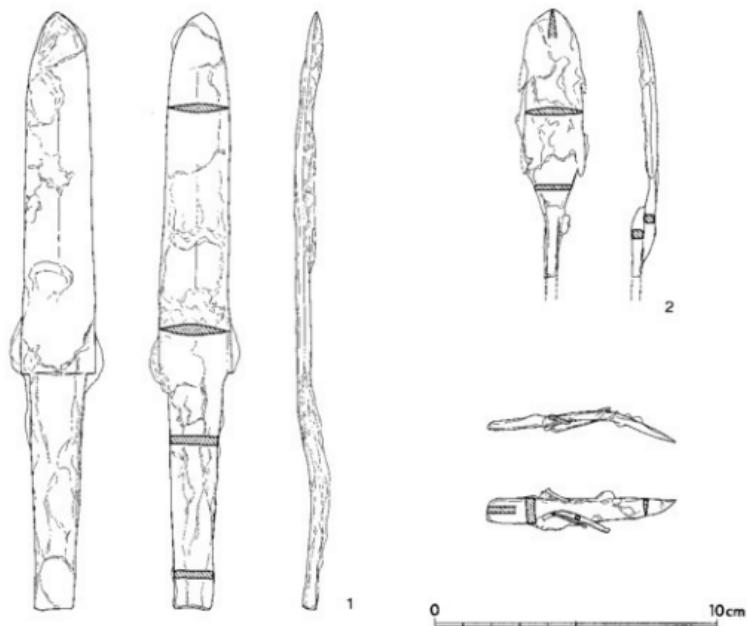
第2主体出土遺物 第2主体石棺内からは、鉄剣1・鉄鎌1・刀子1・鉄針2以上が検出された。

鉄剣（第97図1）は、長さ21.2cmと剣としてはやや小ぶりのもので、刃部長12.8cm、茎長8.4cmを測る。刃身幅は2.4cmで、刃部断面は厚い部分で0.4cmのレンズ状を呈するが、中央でかすかに稜をもち、鎧となっている。刀身と茎の境の、錆が著しくない部分では闇が認められる。茎は長く、目針穴などは有さないので、断面方形を呈する。闇の部分で幅1.9cm、端部で1.4cmで先にゆくほど幅は狭くなっている。厚さは0.3cmで刃身よりも薄いため、闇の部分でかすかな段がつくように観察できる。装具などの痕跡は認められない。

鉄鎌（第97図2）は平根式のもので、<sup>222</sup>葉の一部を欠失しているが、残存長9.5cmを測る。大形



第96圖 14號墳第2主體實測圖



第97図 14号墳第2主体出土遺物実測図

の短い棘を2段2対に有すると考えられるが、3本は欠失している。刃部横断面はレンズ状を呈する。笠被は断面約0.4cmの方形を呈し、折損した部分と重なりあうようにもう1本の笠被が銹着しているように観察できる。全体に大形のもので、戰闘に使用されるものというよりも、多分に儀仗的な性格をもつものと考えられる。

刀子（第97図3）は、長さ6.7cmとやや小形のものではあるが、「へ」の字状に曲がっている。銹化が進んでいるため、闇の部分は確認できない。身幅は0.8cm前後であり、先端にゆくほど幅を減じている。断面は絶縁の三角形である。茎はしっかりしたもので、幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る。背は平峰で直線的になっている。装具の痕跡などは認められないが刀身に針状鉄器が銹着している。

針状鉄器は、太・細の2種類3本が刀子に銹着している。少なくとも2本以上の鉄針が副葬されていたものと考えられる。鉄針（太・細）各1本は刀身側に、鉄針（細）1本は刀身峰に銹着している。鉄針（太）は曲がっているものの残存長2.4cm、太さ0.2cmを測り、これに接する鉄針（細）は残存長1.3cm、太さ0.1cmに満たないものである。刀身峰に銹着する鉄針（細）は長さ0.9cm、太さ0.1cm程度のものであろう。

#### (8) 石蓋土壙

14号墳の南東墳裾付近で検出されたものである。14号墳の南東側は同墳の墳丘が緩やかに下降し、一旦墳裾あたりでその傾斜角度を急にして再び下降するが、一部崖状を呈する部分も認められた。傾斜変換点には14号墳の裾に沿って南北に走る山径があり、石蓋土壙はその南脇にあって、崖上に位置している。

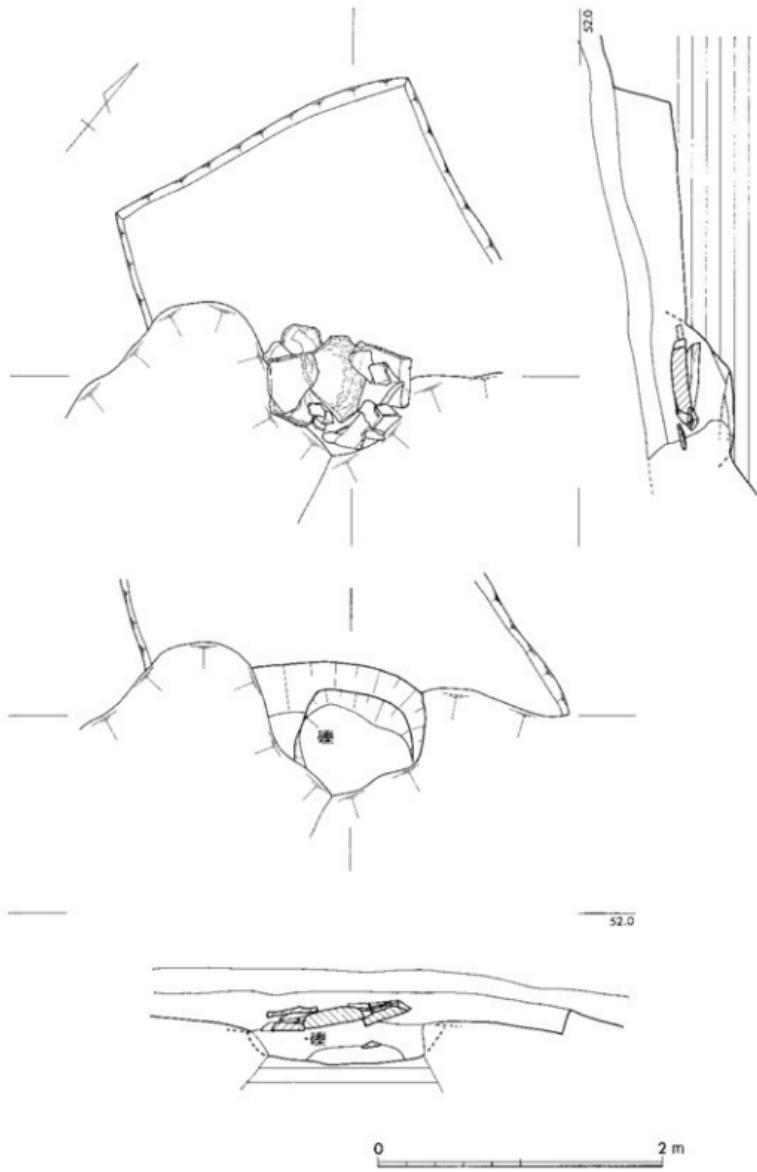
検出時の石蓋土壙は、箱式石棺に用いられているものと同様な大小の板状石材が整然と積み上げられているように見えた。この出土状態から推すと、主体部の石棺に使用された石材の余りをここに置いたというようなことも予想された。そこで、急遽調査区を拡張し、関連遺構の検出に努めたが他に遺構は認められなかつたため、石材周辺に調査の手力を注ぐことにした。石材は大小計18個を数え、大きいものは40×50cm、厚さ約5cmを測り、小さいものは掌大のものであった。これらの石材を除去すると、下に深さ0.3mを測る土壙が穿たれており、石材はこの浅い土壙を覆う形で置かれていることが知られた。土壙は崖面に接しているため南東側の壁面の崩壊が著しく、かろうじて底面・北側壁面が残存している状態であった。

土壙はやや浅い鉢形を呈し、底は径0.8×0.7mを測る楕円形の平坦面となっており、北側壁面は緩やかに内湾しながら立ちあがり、中ほどでわずかに屈曲した後、外反して腐植土に至るものである。本来の土壙がどのような形態であったかは南東側壁面が崩壊しているため不明とせざるを得ないが、崖側の土壙の底面が立ちあがる直前とみられる曲線を認めることができ、この部分が底面と壁面の境線に近いことを推定させている。また、元の地形がこれ以上東側に突出していたとは言い難いことを考え合わせると、それに制約され、長大なものはつくり得なかつたと判断された。板状石材を除去した土壙内には茶褐色土が充满していた。この土中には副葬品等は認められなかつたが、礫床等に使用されているものと同様な指頭大の礫1個が、底面から浮いた状態で出土した。

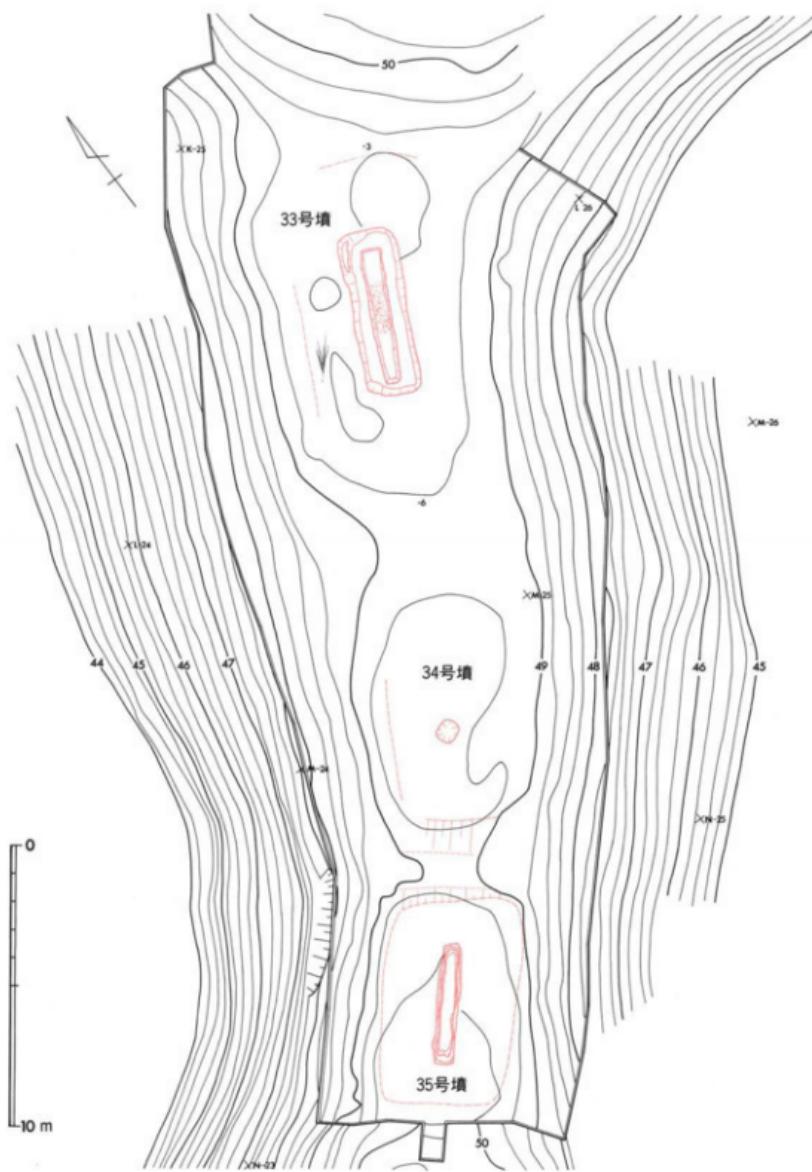
なお、崖下の獣の巣となっていたくぼみに、横穴の閉塞石と見まちがうような石材が認められたが、距離等から考えれば、本土壁上面に使用されていたものが崖面の崩壊によって落下したものであろう。

この土壙の性格については、確たる根拠はないが、埋葬にかかる遺構であろうと推定される。本古墳群中における埋葬遺構は溝によって墓域を画すものが大半を占めているが、13号墳東側テラスで検出された蓋棺墓、あるいは16号墳西側墳裾で検出された土蓋墓等は溝を設けないと認められ、この石蓋土壙もその1例を加えたものであるとしておきたい。

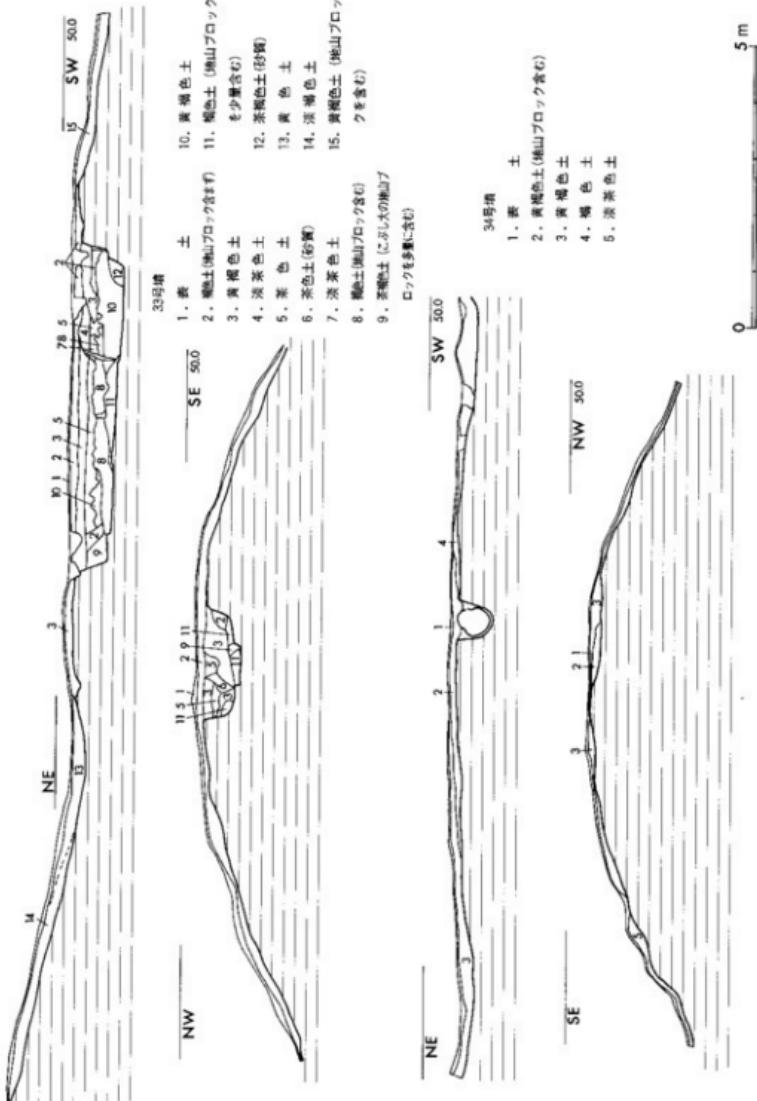
ところで、土壙内の土に礫が混入していたが、これは意図的に入れたものではなく14号墳墳頂部で散在していた礫が流入したものであろうと考えられる。したがって、石蓋土壙は、14号墳第1主体・第2主体のいずれかが埋葬された後に穿たれたものであろうと推定される。



第98図 石蓋土壌実測図



第99図 33・34・35号墳 墳丘測量図



第100図 33号墳 土壙図

#### (9) 33号墳

33～35号墳が営まれている馬背状の尾根は、14号墳と15・16号墳の鞍部に位置し、33号墳と14号墳との比高は調査前で約4.5mを測る。33号墳は14号墳の南に接する南北14m、東西6mを測る方墳で、第V支群のはば中央に位置し、標高は約50mである。主軸はN-28°-Eを測る。

調査は尾根筋中央とそれに直交する土層観察用畦を設定して実施した。表土を約25cm除去すると下は明褐色の地山となっており、尾根に直交する形で2本の溝が検出されたが、この溝はあまり明瞭ではない。北域を画す溝は幅約2.5m、深さ0.25mを測る。溝の中央には尾根方向に長さ4.3m、幅約0.35mにわたって細長い落ち込みを想わせる土の変化が認められ、主体部の形態は狭長な木棺であることが予測された。

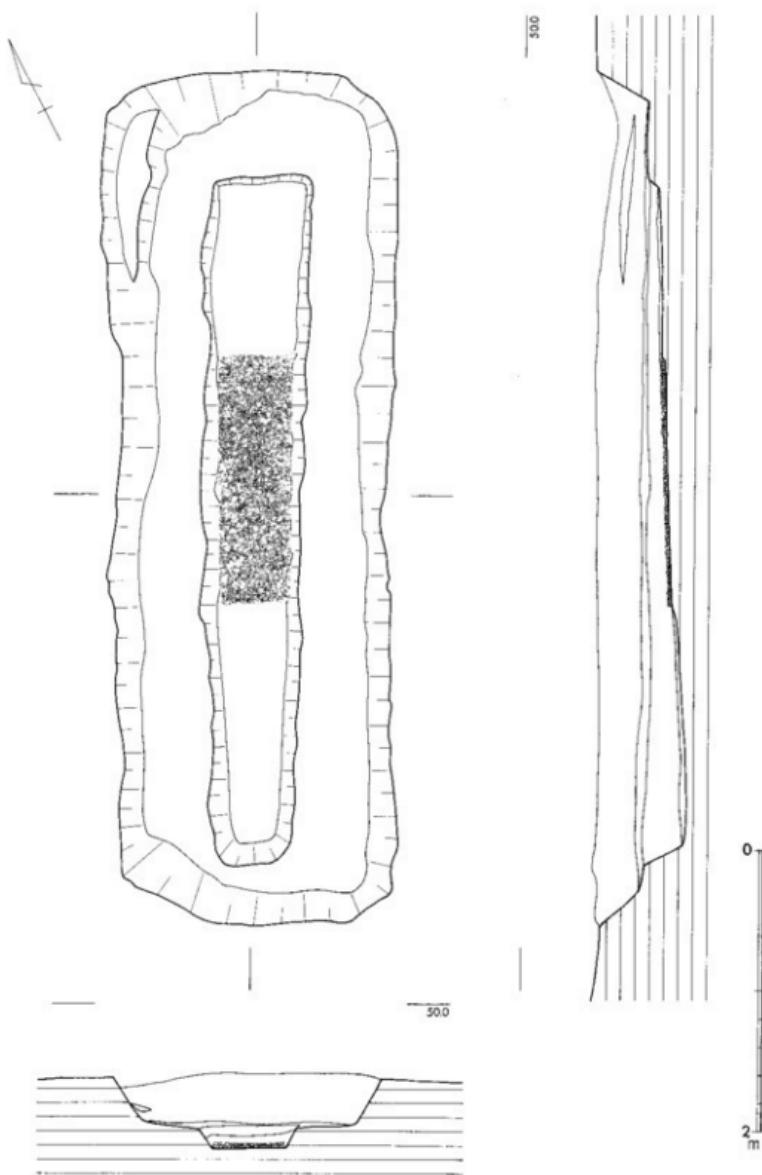
完掘した主体部は長さ6m、幅2m、深さ0.37mを測る墓壙を掘り、さらにその中央に長さ4.85m、幅0.60～0.75m、深さ0.12～0.22mの墓室を設け、その中ほどに砾を敷きつめるものであった。墓壙内のテラスはほぼ水平に掘っていた。木棺床面は北側がやや高く加工されており、また幅も北側が0.2m広いことから、被葬者は北を頭位として埋葬されたものと判断された。

墓壙中央に敷きつけられた砾は指頭大のもので、長さ1.75m、幅0.50m、厚さ0.04mを測り、被葬者はこの上に横たえられたものと考えられた。砾床も北側がやや高かった。

砾床の南北両端は一直線状になっており、乱れが認められないことから、砾に接して仕切り板が使用されていたものと考えられた。また、両側辺と墓壙壁との間には幅0.05m前後の溝状の隙間が認められ、これは棺の長手板の痕跡であろうと判断された。棺の両端部に仕組まれた妻板の痕跡は認められなかったが、前述した細長い土の変化は棺の蓋材が腐蝕したために上部にあった上が陥没したもので、埋葬当時は明らかに空間をなしていたものと考えられる。上の変化の範囲と完掘した墓壙の規模はほぼ一致し、棺の内法に近いものとして大過はないと思われる。これらを考え合わせると、この棺は長さ4.65mを測り、2枚の仕切り板によって北から内法約1.20m・1.75m・1.70mの長さの小室に分けられていたものと推定される。幅は北側で0.6m、南側で0.28mを測る。

この33号墳にともなう遺物は認められなかった。表土除去時に主体部上面で、棺内精査時に土壤内東側テラス中央部で、それぞれ数個の砾が出土したが、これらの砾はいずれも砾床の砾と同大同質のものであり、床面に敷きつめる際の取り落としであろうと考えられた。

以上のことから、埋葬にあたっては次のような方法がとられたものと思われる。①6×2mの土壙を掘る。②その中央に長さ4.85m、幅0.75mの土壙を掘る。③木棺板材を受ける溝を穿ち、この溝に合わせて仕切り板で三室に区切る狭長な木棺を設置する。④中央の部屋に砾を敷きつめる。⑤土壙内のテラスに土をつめる。⑥被葬者を中央の部屋に入棺し、木棺に木板で蓋をする。⑦上面にも土を埋め戻して埋葬作業は終了する。



第101図 33号墳主体部実測図

## (II) 34号墳

33号墳の南に接して當まれているもので、本墳の北側溝は33号墳の南域を画す溝と、南側溝は35号墳の北域を画す溝をそれぞれ共有している。南北11m、東西8mを測る方形壇状を呈している。外見は33・35号墳と何ら変わることはないが、以下記すように、中央で検出された遺構が極めて特異なもので埋葬施設とは断定できないため、「墳」を記すことは躊躇されるところである。しかし、一応便宜的に当初の呼称方法をそのまま用いることとした。墳頂の標高は49.6mである。

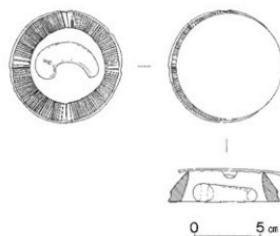
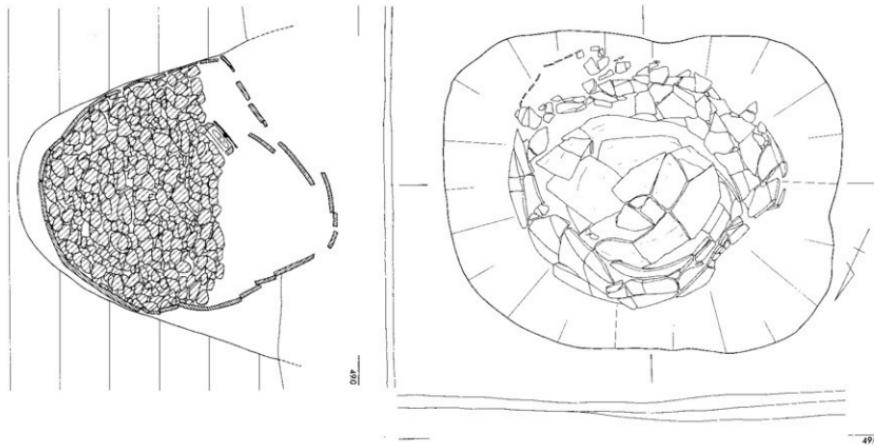
調査は尾根筋中央とそれに直交する土層観察用畦を設定して実施した。表土を除去すると下は赤褐色の地山となっており、墳丘のほぼ中央で、土師器壺を検出した。この壺は鉢を伏せたような状態で、底部を上にして出土した。土師器壺の出土から、本墳は、山陰地域に多く認められる土壙墓上面に各種土器を供獻する類例に1例を加えるものと考え、土壙墓の掘り方を検索した。しかし、土師器の周囲を精査しても全面地山となっており、他に掘り込まれた遺構は認められなかった。そこで、先に検出した土師器を取り上げ、その後再精査を試みることとした。

土師器が埋置されていた土壙は、上面0.8×0.6mの隅丸方形を呈し、深さ0.27mを測る。当初上面で認められた鉢形土器の下には別の土師器壺が正位で埋置されており、先の鉢形土器は蓋として使用されていることが明らかになった。下部の壺は頸より上部は意図的に欠損され、内部には径5cm前後の礫が肩部まで詰めこまれていた。その上面には碧玉製とみられる石釧1の他、捩文鏡1、碧玉製勾玉1、琥珀製勾玉1が納められていた。碧玉製勾玉は礫上に直に置かれていたが、琥珀製勾玉は石釧の中に入れられ、その上は鏡面を上にした捩文鏡を蓋とするものであった。なお、詰め込まれた礫の上面のものには赤色顔料が、下部のものには黒色の付着物が認められた。

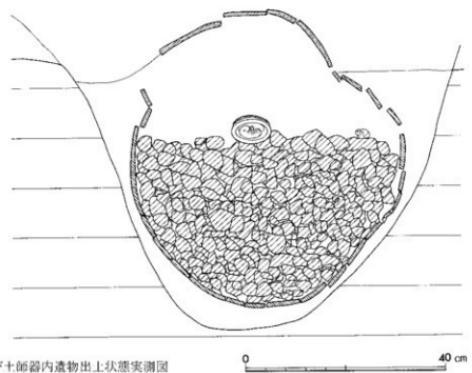
この土師器壺の埋納は次のような順序によって行なわれたものと推定される。①墳丘中央に隅丸方形の土壙を掘る。②土壙の中に上部を意図的に欠いた壺を据える。③壺の中に礫を詰める。(礫の上面に見られた赤色顔料が中ほどまで及んでいることから、礫を少量ずつ詰めながらその都度顔料を散布あるいは塗布したものと思われる。)④礫を肩部あたりまで詰めた時点で、壺の器壁に接する礫上に石釧を置き、その中に琥珀製とみられる勾玉1を納め、捩文鏡で蓋をする。またその対面の器壁附近に碧玉製勾玉1を置く。⑤焼成前に切断された壺の下半分と考える深鉢形を呈す土器をかぶせ、礫を詰めた壺の口を塞ぐ。⑥土を埋め戻し、壺の埋納は終了する。

調査時の土層の観察では、壺の上部に土を盛る行為は認められなかった。特に深鉢形を呈す土器の底部外面が下の土器の器表と比較すると、肌が異常に荒れていることが注意され、あるいはこの部分が埋置後風雨にさらされる機会があったのではないかと想像される。

なお、これらの遺物を取り上げた後、周辺にサブトレンチを設定して精査を実施したが、他の遺構は認められなかった。



第102図 34号埴土器および土器内遺物出土状態実測図



土師器壺 34号墳中央の土壙内において、壺2の上に壺1をかぶせた形で出している。

壺1は、壺2の上に乗った状態であったため破損が少なく、破片も大きく容易に完形に復すことができた。壺2は、壺1の重みにより肩部から崩れ中に落ちこんだ状態にあり、側部も後世樹根により圧迫を受けたため破損し、全体的に細片化している。土圧等により個々の破片が小さく接合が困難な部分もあり、特に胴部中間の破片は未接合の個所が多い。

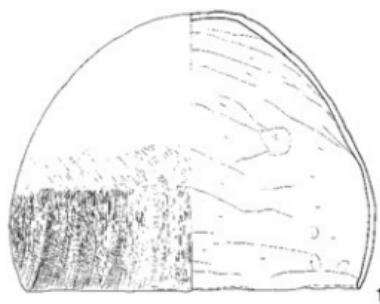
壺1（第103図1）は胴部より底部にかけての破片で頭部、口縁部を欠いている。底部より胴部下半外周は風化が著しく、調整痕等は残っていない。壺の埋置後一定期間風雨にさらされていたためと思われる。頭部より口縁部にかけては焼成前に切りとられており、端部はヘラ状工具により平坦に切られ、その後なめらかにナデ仕上げがなされている。胴部は肩がややなで肩で底部へ向け緩やかに統き、底部はやや平底気味である。外面の胴部中間に斜方向に粗めのハケメを施し、上半には細かいハケメを施している。胴部下半は、ハケメの後ナデで消している。内面は、下半が斜方向のヘラケズリ、上半は横方向へのヘラケズリを施し、その後に一部指頭圧痕が残っている。

胴部下半には焼成後に穿孔が行なわれたようで、径0.5cmの穴があいている。内面は一回3cmの方形に剥離しており、断面には赤色顔料が付着していることからも埋置前の穿孔と考えられるものである。

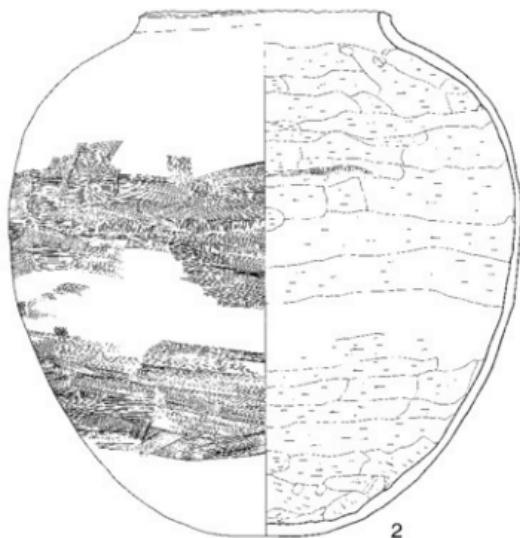
肩部の径は35.6cm、胴部最大径39.0cm、残存高30.0cmを測る。器壁は薄く均一に作られており厚さ0.7cmを測る。胎土は石英、長石を少量含み密で、焼成は良好、色調は外面の一部分が黒色、他が黄褐色を呈している。内面も黄褐色を呈している。

壺2（第103図2）は大形の壺で、頭部中間部分で焼成後打ち欠いている。壺1と合わせ口にするために、両方の壺とも頭部より上を欠いている。肩部と底部を別個に取り上げたために、胴部の中間は破片が細片となっていることもあり接合不可能な部分が多かった。しかし、一部だけ底部と胴部が接合したため器高を知ることができた。肩はややなで肩で肩部に丸味をもち、緩やかに底部へと統いでいる。底部は丸味をもった平底を呈している。頭部外面はヨコ方向のナデ調整を施し、胴部には縦方向のハケメの後に横方向のハケメを施し、ナデ調整により部分的にハケメを消している。底部外面はナデ調整を施し、ハケメを消している。内面頭部は指頭圧痕の後、ヨコ方向のナデ調整を施し、胴部下半は斜方向のヘラケズリ、上半は横方向のヘラケズリを施した後に一部指頭圧痕が残っている。

口径は26.8cm、胴部最大径54.6cm、残存高56.4cmを測る。器壁は、頭部が厚く1.3cm、胴部中間はややうすく0.6cm、底部は1.3cmと厚くなっている。胎土はやや大きめの砂粒を少量含み密で、焼成は良好である。色調は赤褐色で外面は一部黄白色を呈している。内面頭部には黒色の付着物がかなり厚く付着している。胴部、底部の内面にはこの付着物は認められない。



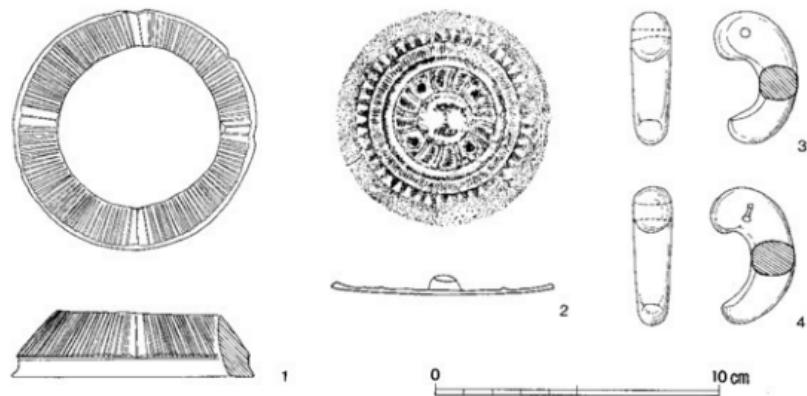
1



2

0 20cm

第103回 34号填土器壺実測図 (1/6)



第104図 34号墳土師器竪内出土遺物実測図 (1/2)

**土師器内出土遺物** 石劍（第104図1）は淡緑色のいわゆる碧玉製で環状を呈している。上方から見ると、円周を四等分する位置に2条の幅広の切り方を入れ、その間の四区画には各31条の細い切り方を入れている。側面には1条の匙面取りがある。断面の下部は平坦面をなしている。外径8.5cm、内径5.7cm、高さ2.2~2.4cmである。

鏡（第104図2）は残存状態の良い完形の擬文鏡である。しかし鏡背は銹化が進み、緑色を呈している。面径は7.8cm、厚さは鉢の部分で0.15cm、縁の部分で0.2cmを測る。背面の文様は鉢から外方へ覗いていくと、鉢、鉢座、捩文帯、圓線、櫛齒文帯、鋸齒文帯、平縁へと続いている。擬文帯には圓線をめぐらす乳座があり、乳を4個対角線上に配することで内区を4等分している。その1区画を孤状の複線により2区画し、その中に櫛状の文様を連続し擬文をなしている。擬文は合計8個からなる。櫛齒文の幅は0.4cm、鋸齒文は中心から外へ向けて描かれており、幅0.4cmである。鉢の径は1.2cm、鉢座は2重の圓線をめぐらすもので、その径は1.9cmを測る。縁は平縁で幅0.6cm、反りは0.2cmを測る。

碧玉製勾玉（第104図3）は濃い緑色を呈し、頸部に丸味をもち、胴部・尾部に向けて次第に細くなっている。断面は梢円形で、側面は平坦面をなしている。長さ4.7cm、厚さは頭部で1.4cm、胴部で1.3cm、尾部で1.1cmを測る。孔は2方穿孔によるもので、孔径は0.4cmと0.3cmである。

琥珀製勾玉（第104図4）は赤茶色を呈し、頭部から尾部へ向けて細くなっている。断面は梢円形で、側面は平坦面をなしている。長さ4.8cm、厚さは頭部で1.4cm、胴部で1.2cm、尾部で1.0cmを測る。孔は横長の細いもので、孔径は0.3×0.1cmである。

その他、図示できないが針状の鉄製品がある。

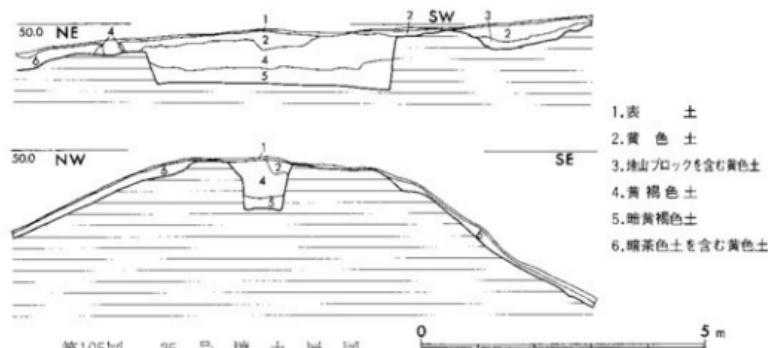
(1) 35号墳

第V支群中の北東側から33・34・35号墳と続き、これらは同標高に位置している。33号墳の北東側へ向け丘陵がやや高くなっている。調査前の状況は、雑木が残っていたこともあり墳丘の高まりは際立ったものではなかったが、地形測量図により、墳形は長方形を呈し方墳であると判明した。尾根の両斜面には加工が認められず、墳裾線は不明であった。調査後、北西側の10号墳上から遠望すると、33～35号墳は尾根上に溝を切ってつくられた低墳丘の古墳であることが明瞭に確認できた。

調査は、33号墳から35号墳まで1本のラインを通し、各区画の中心でそれと直交するラインを設けて行なった。墳丘は地山を方形に削り出しており、長辺10.0m、短辺8.0mで、北東側の周溝からの高さは0.4mを測る。墳丘が削り出された地山は、墳丘中央で土層が変化しており、北東側は赤色土層で、南西側は黄白色土層となっていた。

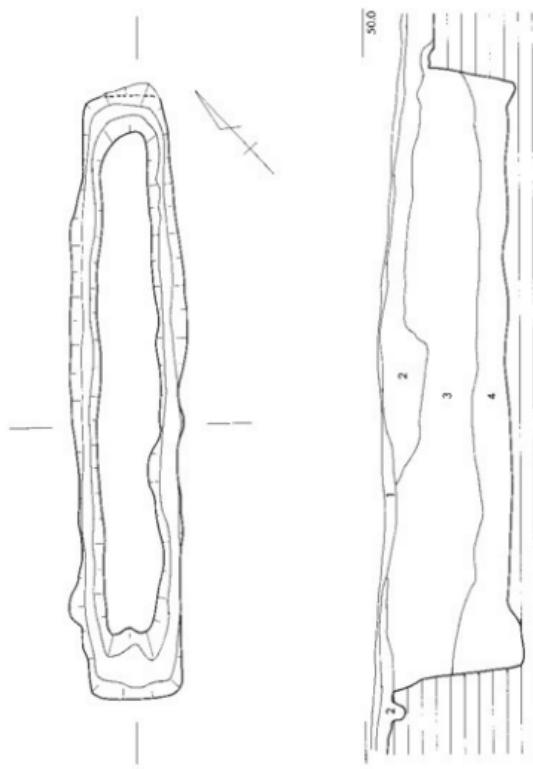
主体部は地山の上面より掘り込まれており、素掘りの土壙で極めて細長い長方形を呈している。主体部の主軸は墳丘の主軸と同一方向でN-42°-Eである。上端部での規模は長辺4.4m、短辺0.8m、南西部での深さは0.6mである。墳頂平坦面は7.5×5.0mで主体部の長さがかなりあり、墳頂平坦部を端まで使って穿っている。上端の底面は周囲が深く掘り込まれており、中央部分には地山が高さ0.1mほど掘り残してある。土壙の各壁もほぼ垂直に近く立ち上がっており、底面の溝は箱形の木枠を組み合わせるためのものと思われる。上端内の段上は2層から成り、上層は黄白色のかなり硬い土で、周囲の地山とは同様の土であった。下層は暗黄褐色のかなり柔らかい土であった。土壙を埋める際に、上層には地山を掘った土を入れたものと思われる。土壙の底面はほぼ水平で、土壙の上縁部も幅に大きな変化がないことより、頭位の推定は困難であった。

なお、主体部から遺物等は検出していない。



第105図 35号墳土層図



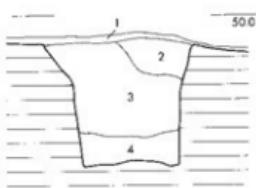


1. 表 土

2. 黄 色 土

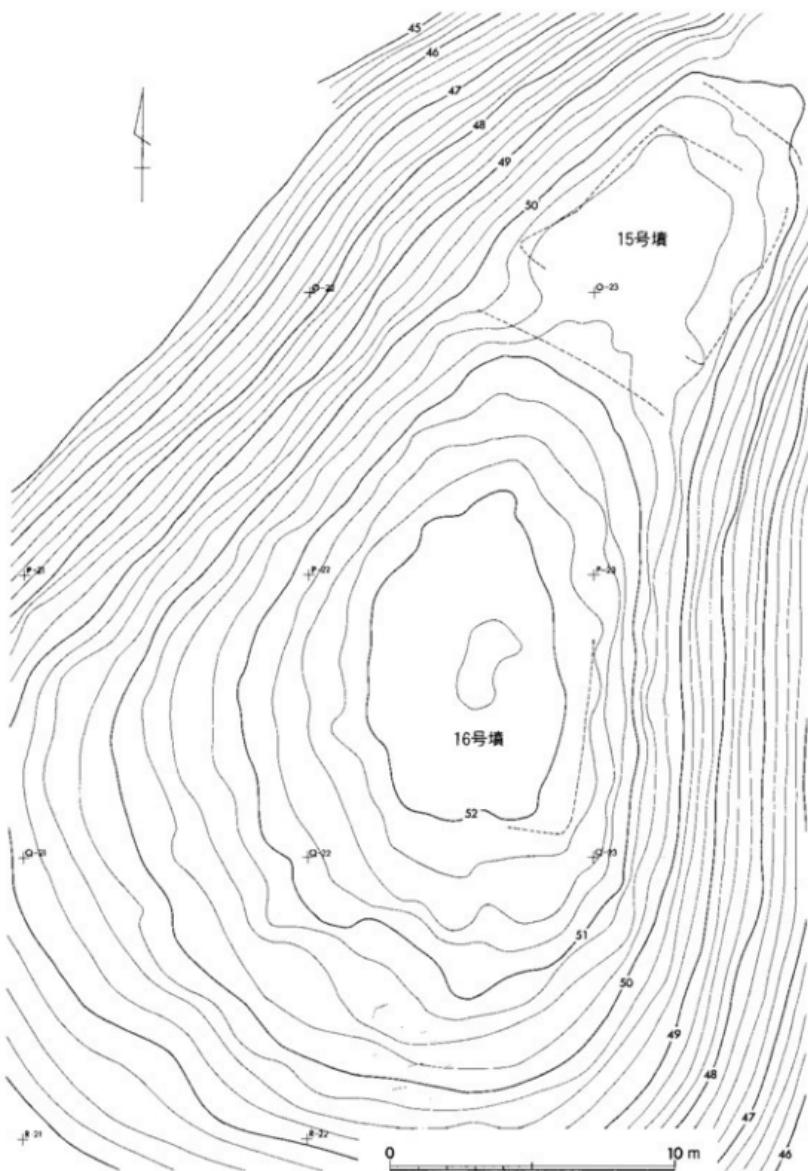
3. 黄 棕 土

4. 暗黄棕色土

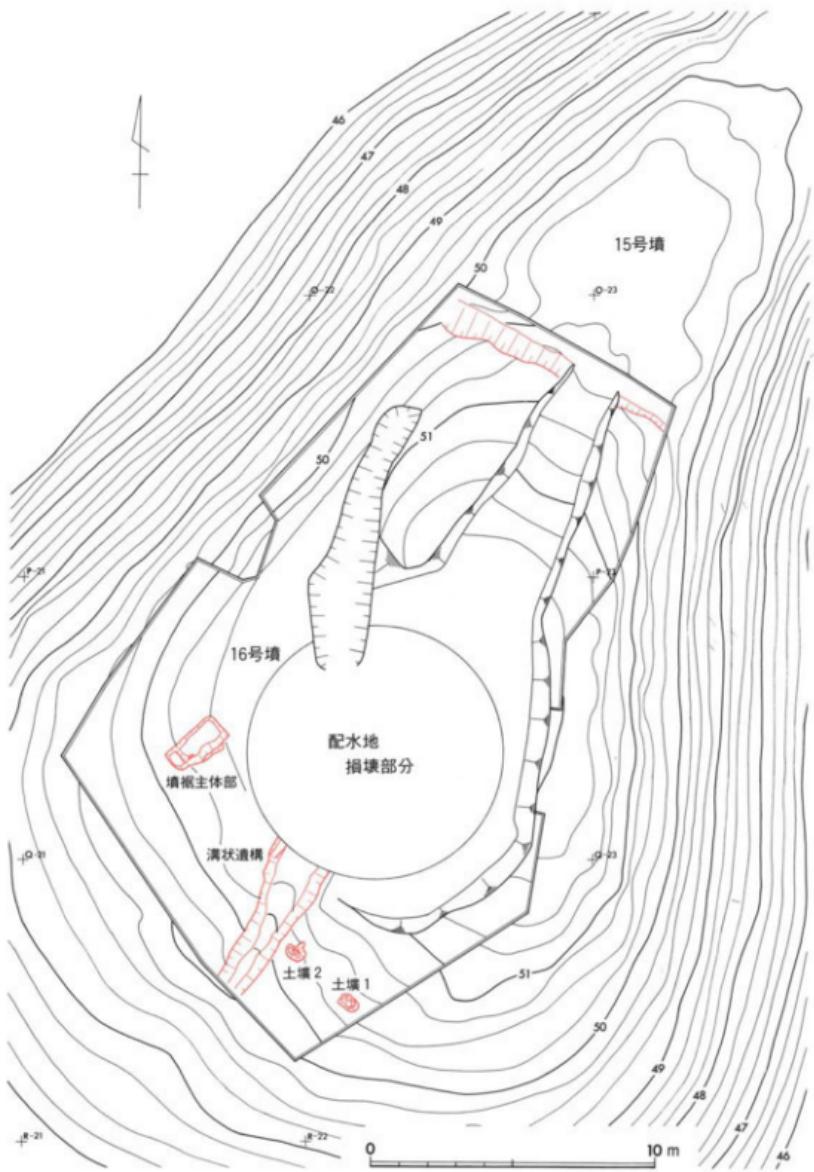


0 2 m

第106圖 35號墳主體部實測圖



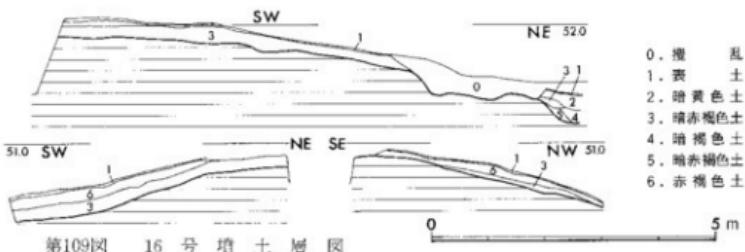
第107図 15・16号墳調査前墳丘測量図



第108図 16号墳調査終了時墳丘測量図

(2) 16号墳

第V支群の南西端、標高52mに位置する。当初本墳は緑地帯として保存される計画であったが、'83年6月、町教委に何の連絡もないまま墓域に重機が侵入し、墳丘大部分を削平してしまった。調査は残存部分についてのみ行なわれたが、大部分が破壊されている上、東側は未買収地で調査区か

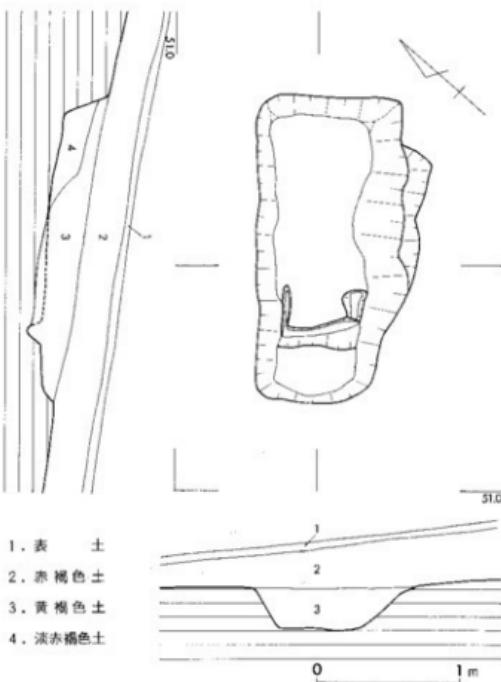


第109図 16号墳 土層図

ら外さざるを得なかった。本来は長辺約20m、短辺約15mの不整形な方墳であったと考えられる。

**墳壙主体部** 墳丘西側で素掘りの土壠が1基検出され、その位置から16号墳墳壙の埋葬施設と考えられる。主軸をN-49°-Eにとり、長辺2.2m、短辺1.0mを測る。緩やかな傾斜面に掘られているため、北東側では深さ0.3m、南西側では0.1mの掘方しか検出できなかったが、本来はさらに上層から掘り込んでいたものと考えられる。

墓壙は緩やかな傾斜をもち、黄褐色の覆土が充満しているが、北東側でのみ淡赤褐色土が

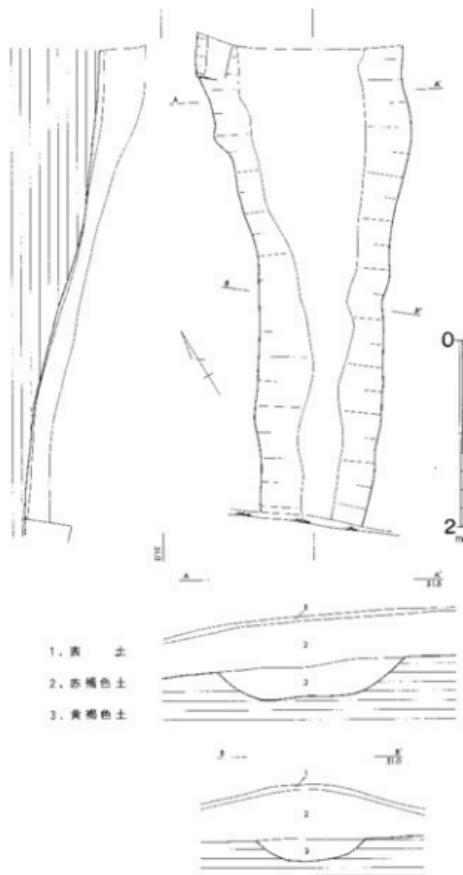


第110図 16号墳墳壙主体部実測図

含まれていた。墓壙底面は北東から南西にかけて緩やかに降り、両端部は0.15mの高低差があり、北東に頑位を有する墓壙と考えられる。壙底やや南西寄りに「コ」の字状の浅い溝が掘られている。主軸に直交する部分は壙底と長さがほぼ一致し、幅0.15m、深さ0.1mを測り、平行する部分は墓壙底面長辺沿いに短く検出されている。この溝は一部しか検出されなかつたが、墓壙内に仕組まれた木棺の痕跡と考えられ、棺の長さは約1.5m程度のものと推定される。この溝から北東の壙底は検出時にやや掘り過ぎてしまったが、南西側とはば等しくなっていたものと考えられる。この墓壙からの出土遺物ははい。

溝状遺構 調査区内南西側の緩斜面に、下に降るに従って幅を減じるように掘られている。北東側は配水地用の穴によって破壊されているが、南西側は調査区外までさらに続いている。検出できたのは長さ約5mで、幅は北東側で2.2m、南西側で1.1mを測る。検出面からの深さは北東端付近が最も深く0.45m、南西端で0.25m、溝底両端の高低差は0.8mである。溝内には黄褐色土が堆積し、この土は粘性強く固くしまっている。溝底は平坦面で、この部分も溝上面と同様上方が広く、下方に向くほど狭くなっている。

この溝状遺構は上半部分以上が墳丘の削平により破壊されており、その上16号墳も存在しない現在、16号墳にともなうものか否かという点も不明のままに終わってしまった。また、溝内からの出土遺物も見ていないので、時期についても定かではない。従って、奥才古墳群中に何例か確認されている階段状遺構と類似していることを指摘するにとどめたい。



第111図 16号墳溝状遺構実測図 (1/60)

土壤1・2 16号墳調査区南隅で2基素掘りの土壌が検出されている。

土壌1は、長辺0.72m、短辺0.45mの梢円形の土壌で、検出面からの深さは約0.15mを測り、底部は比較的平坦である。覆土は暗褐色を呈し、炭化物、焼土を著しく含んでおり、この上塙で火を燃やすようことがおこなわれたのは明らかである。また、覆土中には須恵器片も含まれており、この須恵器（第114図9）は、糸切り底を有するもので、この土壌は古墳群の築造よりもおくれて掘られたものと考えられる。類似の遺構は、13号墳北東のテラス上の土壌1、32号墳墳丘上の土壌など、墳丘各地点で見受けられている。

土壌2は、長辺0.72m、短辺0.52mの梢円形状を呈し、北東側がわずかに張り出している。検出面からの深さは約0.35mを測り、中央部は一段深くなっている。土壌覆土は黄褐色を呈し、土壌1とは異なり炭化物や遺物等は含まれていない。この覆土は、隣接する溝状遺構や、墳頂主体部のそれと類似しており、その時間的な近さを暗示するかもしれないが、断定するまでは至らない。

### 〔3〕 15号墳

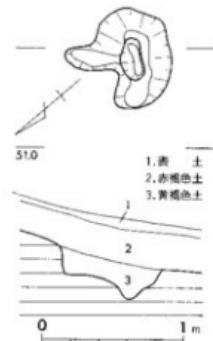
16号墳の北側に位置する古墳で、緑地として現状のまま保存されることになっている。

墳丘は、13・14号墳から16号墳に至る丘陵鞍部に溝を共有して並んでいる33～35号墳と一連のものとして捉えることができる。北側の35号墳、南側の16号墳と相接しており、35号墳よりわずかに1.0m高い立地で、墳頂の標高は50.5mである。小規模な方墳と考えられ、長辺10.5m、短辺約10m、高さ0.5m程度のものと考えられる。墳頂平坦部もかなり明瞭に残っており、長辺6.5m、短辺5.0mを測る。35号墳調査に際して、墳丘を区画する共通の溝が検出されている。また、16号墳の調査に際しても、約半分ではあるが、溝が検出されており、この溝は推定幅1.6m、深さ0.5mの狭いが深いもので、長さは8.8m以上になると考えられる。

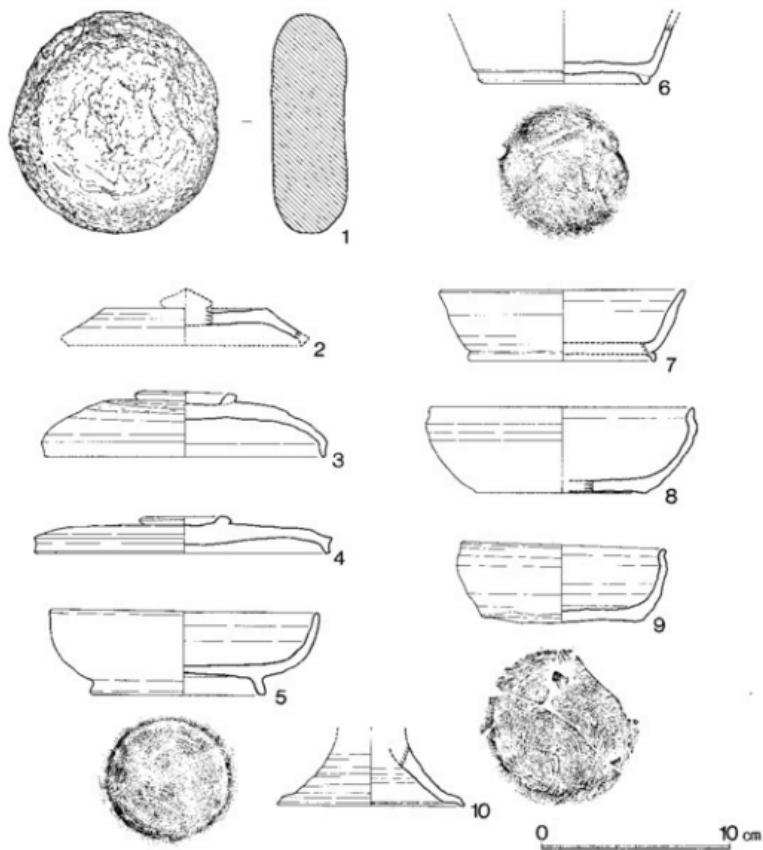
小規模とはいえ、墳丘南北を整然と溝で区画し、34・35号墳より墳丘がやや大きく、33号墳と肩を並べる規模をもつ上に、これら3古墳よりはわずかに高い立地であり、注目される。



第112図 16号墳土壌1実測図



第113図 16号墳土壌2実測図



第114図 第V支群出土遺物実測図(1)

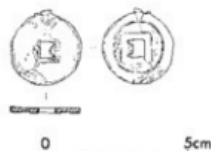
#### (14) 第V支群出土遺物

遺物は、須恵器・石器で、支群中各地点からの出土である。(1)・(2)は14号墳周辺、(3)・(6)は33号墳周辺、(4)・(5)は13号墳南側斜面、(7)は39号墳周辺、(8)・(10)は13号墳周辺、(9)は16号墳の土壤1の出土である。古銭状鉄器は14号墳南側斜面から出土した。

石器(1)は径11.8cm、厚さ3.9cmの平面円形の平らな石で、一方の表面中央が径4cmにわたって凹んでいる。

蓋(2)は口径12.2cm程度のもので、擬宝珠つまみをもつと考えられるものである。天井部はヘラおこしの後、つまみをはりつける。胎土は密、色調は外面灰味赤、内面明るい青味灰、焼成は良好である。蓋(3)は口径14.7cm、器高3.5cmを測る。しっかりした輪状つまみをもつもので、口縁端部の屈曲は長い。天井部は回転ヘラケズリの後、つまみを貼り付ける。胎土は砂粒多く、色調は灰色、焼成は良好である。蓋(4)は口径15.3cm、器高2.0cmを測る。低い輪状つまみをもつもので、口縁端部の屈曲はやや短いが、稜はシャープにつくる。天井部はヘラケズリの後に、つまみを貼り付ける。胎土は砂粒多いが密、色調は灰色、焼成は良好である。杯(5)は口径14.1cm、器高4.5cmを測る。高く外方にふんばる高台を有し、体部は内湾して丸くおさめる。底部は静止糸切りで切り離すと考えられ、高台を貼り付けてなでて糸切り痕を消している。胎土は粗、色調は灰色、焼成は良好である。この杯は(4)の蓋と一括出土したものである。杯(6)は高台径8.6cmを測るもので、高台は低い。体部は高台からわずかな屈曲を経て直線的に立ちあがるものである。底部は回転糸切りで切り離している。胎土は砂粒を少量含み、色調は灰色、焼成は良好である。杯(7)は口径12.7cm、器高3.8cmを測る。華奢な高台を有し、体部は直線的に立ちあがるが低い。胎土は密、色調は暗灰色、焼成は良好である。杯(8)は口径13.9cm、器高4.6cmを測る。体部は内湾して口縁部にいたり、口縁はくびれて外反する。底部は静止糸切りで切り離す。胎土は粗、色調は青灰色、焼成はやや不良である。杯(9)は口径10.5cm、器高4.2cmを測る。やや小ぶりの杯である。体部は内湾して口縁にいたり、口縁はくびれて外反する。底部は回転糸切りで切り離す。高杯(10)は脚部の破片で、脚径9.8cmを測る。ラッパ状にゆるやかに開くもので、端部でわずかにアクセントをもつ。

これらの遺物はその特徴から、(3)・(5)が<sup>(3)</sup>出雲国序編<sup>(4)</sup>牛の第2形式、柳浦編<sup>(5)</sup>牛の第2式、(4)が<sup>(6)</sup>國府第4形式、柳浦第3式、(2)・(6)・(7)・(8)・(9)が<sup>(7)</sup>國府第4形式、柳浦第4式と考えられる。<sup>(10)</sup>は時期不明である。



第115図 第V支群出土  
遺物実測図(2)

## 第5節 第VI支群

第V支群の南西端に位置する16号墳からさらに南西に降る尾根は、標高41.5mの鞍部を経て17号墳で再び44.5mのピークをむかえ、ここで西と南に分岐する。この高所に位置するのが17号墳であるが、そのほか遺構の存在が推定された丘陵尾根上にも調査区を設定した。それは、17号墳北東区、16・17号墳中間鞍部のK区、17号墳西側尾根上のE区、18号墳南側のF区である。

17号墳は径約20mの円墳で、裸床をともなう箱式石棺の第1主体、裸床をともなう箱式木棺の第2主体、素掘りの墓壙の第3主体が検出されている。

18号墳は17号墳の南に隣接する小円墳と考えられ、素掘りの墓壙の主体部1が検出された。この主体部からは臼玉36個の出土をみている。

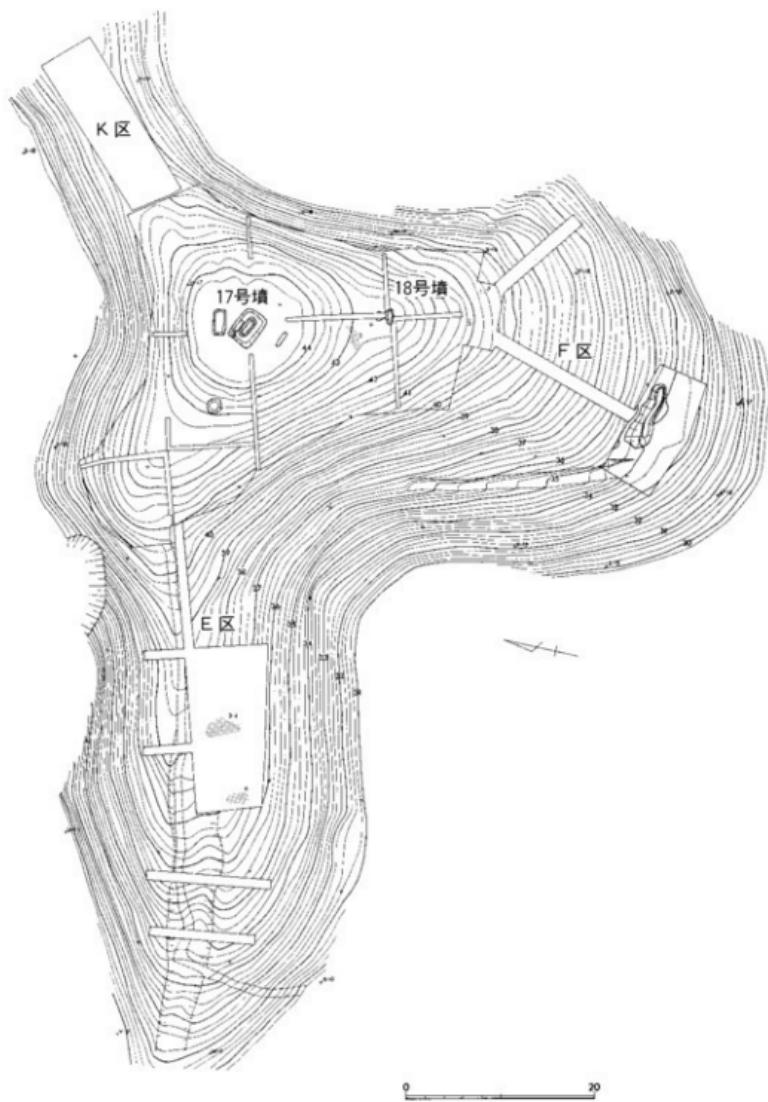
17号墳北東区では、17号墳以外遺構・遺物は検出されず、16・17号墳中間の鞍部平坦面に設定した18×6mのK区でも遺構・遺物は検出されなかった。

17号墳西側尾根上のE区では、尾根に直交して設けた4本のトレンチのうちの2本で須恵器片が検出されたため、調査区を拡大して調査を行なった。その結果、調査区中央および南西隅で須恵器細片多数と鉄斧1の出土をみた。これらの須恵器は蓋が宝珠状あるいは輪状のつまみ、杯が回転糸切り痕を有するもので、17・18号墳築造より後世のものと考えられる。鉄斧は錫化が著しい上に一部欠損もあるが、鉄板の両端を折り曲げて袋状の笠を造り出すものである。

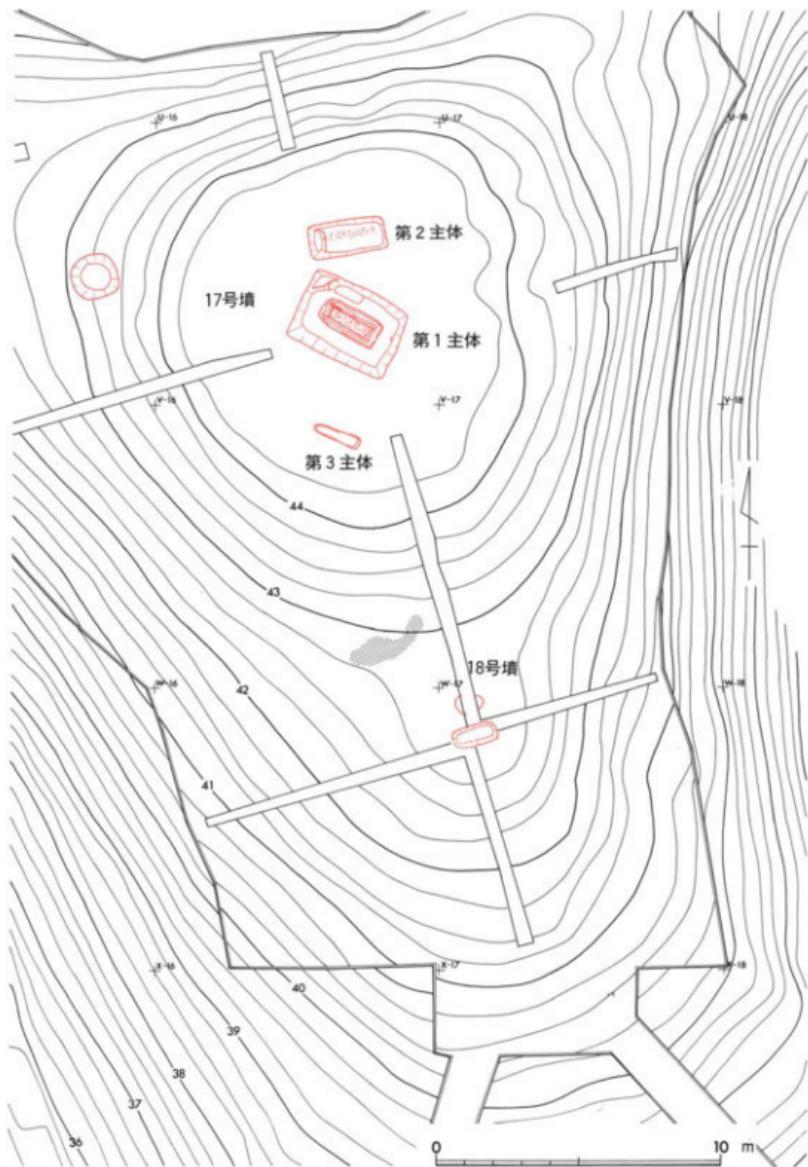
18号墳南側のF区は急傾斜の斜面となって降ってゆくが、その斜面中途で1箇所傾斜が緩やかになる部分が認められていたので、この地点に向けて1本(F-1)と、比較的緩やかな斜面に向けて1本(F-2)の計2本のトレンチを設定して調査した。その結果、F-1トレンチ先端断面で溝状遺構を確認できたため、この地点で調査区を拡大した。この溝状遺構は長さ7.5m、幅2.5m、深さ約0.5mを測るものであった。しかし、検出地点から他の遺構との関連がつかめない上に出土遺物もなく、遺構の性格は不明であった。また、F-2トレンチの基部、18号墳墳裾で須恵器片および臼玉1が検出されている。ここでも須恵器は古墳にともなうものとは考えられない。

そのほか、17・18号墳中間でも須恵器蓋1が細片になった状態で出土した。この部分では須恵器片は炭化物をともなっているが、遺構として検出することはできなかった。この蓋も、17・18号墳にともなうものではない。

以上のように、第VI支群各調査区で須恵器片が多量に検出されているが、それらはいずれも遺構はともなわず、細片に破碎されたような状態での検出であった。これら遺物は奈良時代以後のものと考えられ、このような遺物の出土は奥才古墳群全域で認められるところであり、奈良時代以後に、尾根上で祭祀の行なわれたことが想定できるようである。



第116図 第VI支群地形測量図 (1/600)



### (1) 17号墳

尾根が三方に分岐する地点に位置し、標高は42.5mから44.5mにかけてである。わずかに盛土を施してはいるが、墳丘のほとんどは地山を削り出すことによって造られている。地形に制約されて不整形ではあるが、径約20mの円墳と考えられる。高さは約2.0mである。墳頂には径約11mの平坦面が残っており、この面から礫床をもつ箱形石棺の第1主体、礫床を有する第2主体、素掘りの土塙の第3主体が検出されている。

**第1主体** 墳頂平坦面に位置する墓壙内には礫床を有する箱形石箱を仕組んでいる。墓壙の長手板は3.8m、妻板は2.8m、検出面からの深さは約0.5mを測る。主軸はE-29°-Sにとる。壙内におりるためのものか、墓壙北西隅には階段状に2段のステップが削り残してある。さらに壙底には石棺側石を受ける溝が「ロ」字状にめぐっている。この溝は幅、壙底からの深さとも約0.2mを測る。

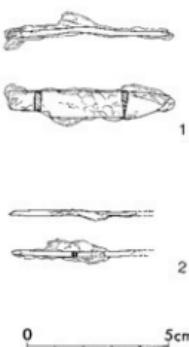
石棺は10枚の板石が使用され、北側3枚、南側2枚、東西各1枚、蓋石3枚で構成されている。石棺側石下端では石材を安定させ、石材接合部では継目をおおうように、石棺材と同様な石材片が検出されている。石材の継目は、わずかだが粘土で目ばりをしている。石棺内法は主軸方向に1.63m、幅は東側で0.49m、西側で0.41mとなっており、東側が若干広くなっている。蓋石は2枚の石材で石棺を覆い、その石材の継目をもう1枚の石材でふさいでいる。石棺南側長手板の石材には、合欠継の手法が認められ、長手板と妻板の組み合わせ部では長辺の石材をわずかに削る削込みが見られる。また石材各所に、ノミによる加工痕が比較的良好に残存している。

石棺床面には礫が敷きつめられており、この礫床は東側が西側より約0.06m高くなっている。礫床の厚さは0.03~0.08mで、床面がわずかにくぼんでいる。

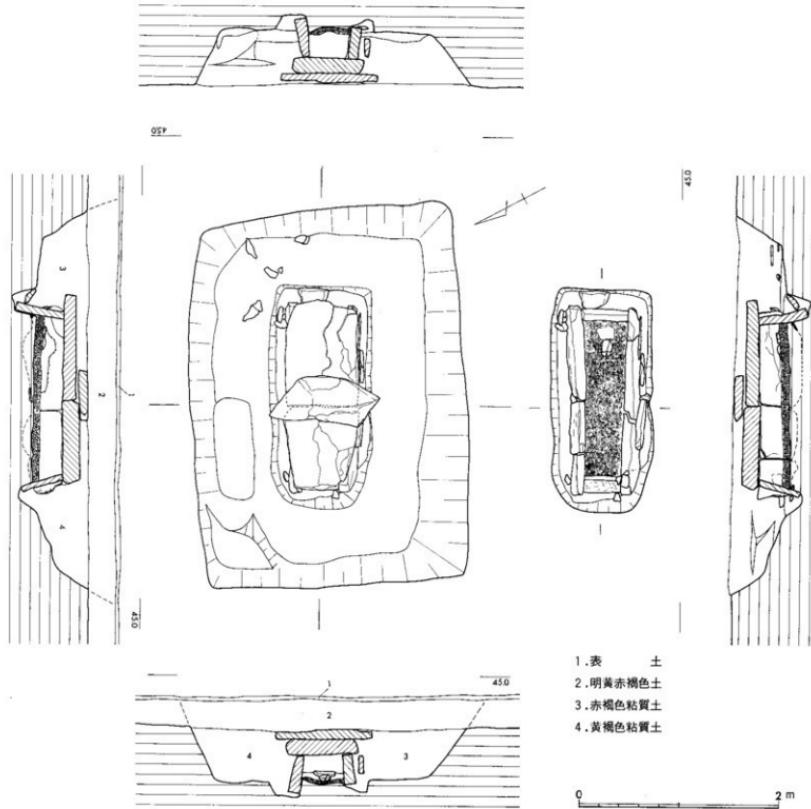
また礫床東側寄りには19×12cm、厚さ4cmの、枕に使用したと考えられる板石が置かれ、この石の西側で頭頂骨が検出され、頭位を東にとっていたことが知られた。

礫床上面、被葬者のはぼ胸に相当する付近南側から鉄器片2点が検出されている。その他の遺物は見当たらなかった。

**第1主体出土遺物** 検出された鉄器片は刀子と鉄針と考えられる。刀子（第118図1）は長さ5.7cmの小形のもので、刃部長4.2cm、茎長1.5cmを測る。身幅は1.0cm、断面は細長の三角形である。装具などの痕跡は認められない。鉄針（第118図2）は一部折損があるが残存長4.4cmを測る。断面は一辺0.1cmの断面方形を呈し、先端は片刃状に尖る。



第118図 17号墳第1主体  
出土遺物実測図

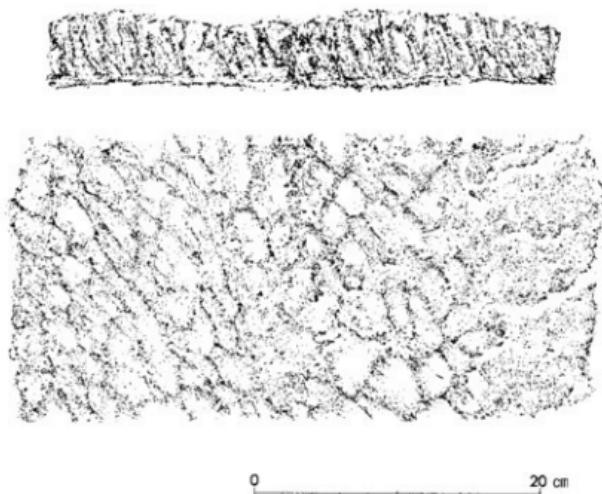


第119図 17号墳第1主体実測図

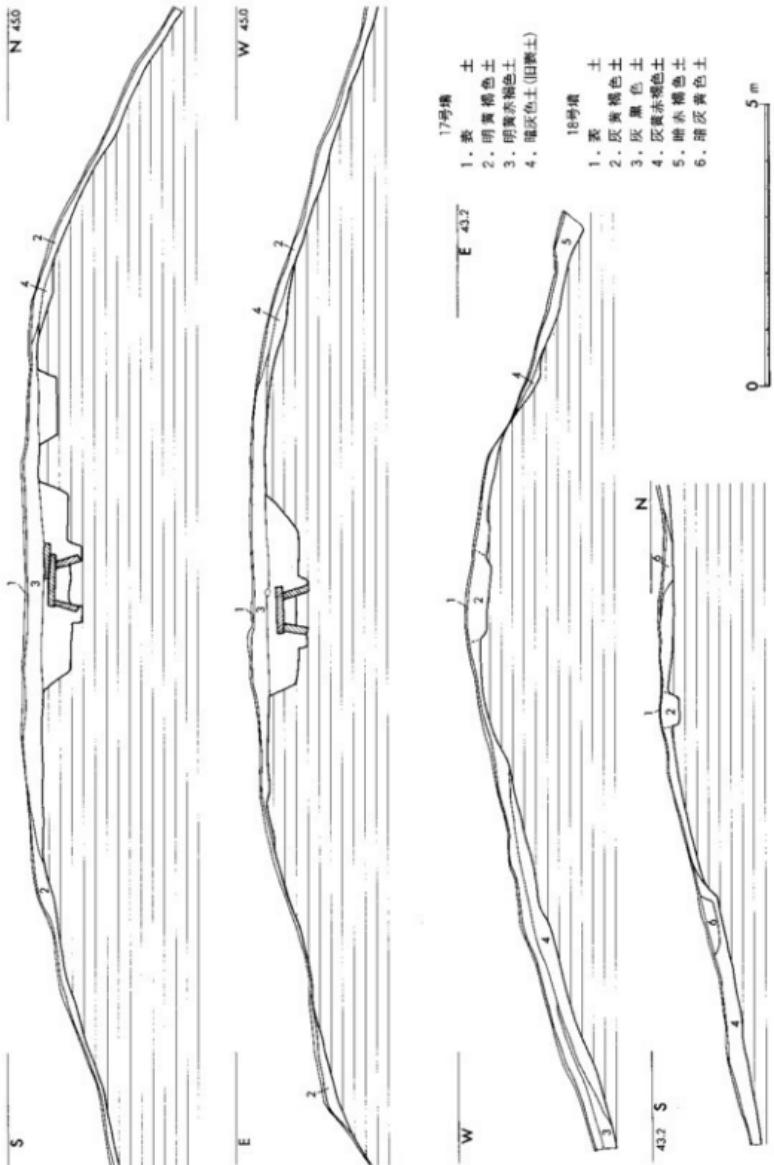
17号墳第1主体石棺材はいずれも刃のある工具による加工痕をとどめている。ここでは比較的良好にその痕跡を残す南側壁の1枚を紹介する。この石材は棺内に面して幅4cm前後の浅いサジ面をなす痕跡をとどめ、これらはチョウナ削り<sup>(6)</sup>によるものと考えられる。この痕跡のうち、最も幅の広いもので約6cmを測り、これがほぼ工具の幅を示すものであろう。この面での工具の動きは、右上り斜めの方向を基本とするが、進行方向は不明である。工具は1打で1~3cm進んでいる。しかしこのサジ面は後述する32号墳石棺で認められたものほど連続しない。

棺身の上面となる面にもやはり工具痕が残っている。ここでは同様のチョウナによる加工と考えられるものの、その痕跡はいさざか異なる。つまり、工具痕はサジ面をなさず、浅い線状の痕跡の連続として残っており、チョウナの刃部で削るのでなく、敲打するように使用している。この面の長軸方向に刃部を直交させ、長軸方向に連続する敲打をくりかえしたものと考えられる。

こういった加工痕は、32号墳石棺と工具の幅、加工の方法で類似しており、両古墳の時期的な近さを窺わせる。17・32号墳の石棺材の加工痕は、チョウナ削り技法によるものであり、13・14号墳石棺でみられたような最終的に敲打して仕上げるものとは技法を異にしている。



第120図 17号墳第1主体石棺材加工痕拓影図 (1/4)

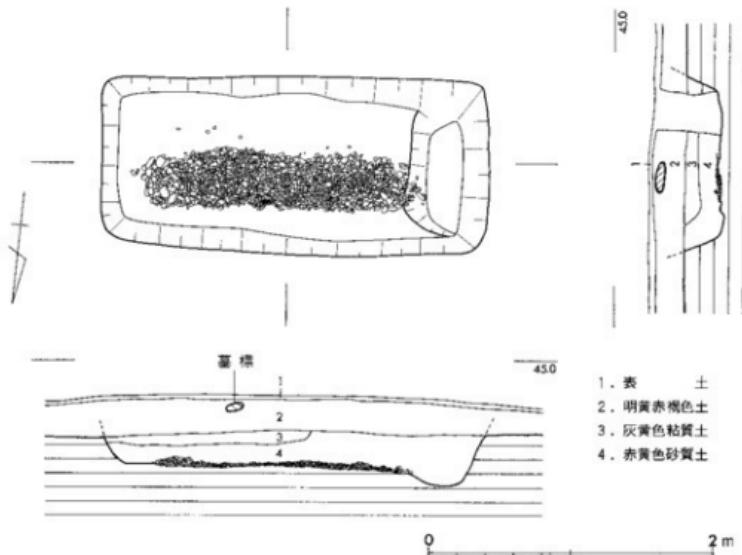


第121図 17・18号 壁 土 層 図

**第2主体** 墳丘平坦面上、第1主体北側に隣接する主体部で、主体部床面に疊床を有している。墓壇は索掘りのもので、壇底西隅はやや深い造りとなっている。墓壇上面で長辺2.7m、短辺1.2m、墓壇底面で長辺2.4m、短辺1.0mを測る。検出面からの深さは0.22mを測る。墓壇上面での標高は44.5mである。主軸はE-11°-Nとほぼ東西を向くもので、第1・第3主体と主軸を約40°異にしている。

墓壇覆土は2層からなり、上層は灰黄色土層、下層はほとんどやや砂質の赤黄色土層が堆積している。墓壇のほとんどは灰黄色土が充満している。

墓壇底面で棺の痕跡は検出できなかったが、疊の分布から、墓壇内に箱形木棺を組み、その床面に疊を敷いたものと考えられる。木棺は墓壇内北側長辺寄りにやや偏して据えられている。この疊床は長さ1.9m、幅0.4mの範囲内に分布していることから、これが木棺の内法に一致するものと考えられる。疊床の疊は全体に第1主体で使用されているものより大きく、なかでも東西両端部付近では大粒のものが使用されている。疊床下の地山のレベルは東側が西側よりも0.07m高くなっている。また疊床上面は東側でわずかに盛り上がり、この部分では西側より若干大粒の拳大的疊が使用されており、被葬者の枕にしたものであろう。地山の傾斜や枕状の盛り上がりから、第2主体は東



第122図 17号墳 第2主体実測図

に頭位を向けるものと考えられる。主軸はやや異にするものの、第1主体とともに、おむね東に頭位をとるものといえる。

墓壇内西側底面には、短辺に沿って落ちこみが検出された。幅は0.55m、墓壇底面からの深さは0.08mを測る。この部分でも墓壇内覆土と何ら異なることはない。

この主体部検出面より0.15m上で平らな石が検出されており、下部の墓壇との関係からこの主体部の標石と考えられる。この石は長さ26.7cm、幅15.5cm、厚さ6cmのもので、表面はなめらかな河原石である。加工痕などは認められない。

この第2主体からの出土遺物は認められなかった。

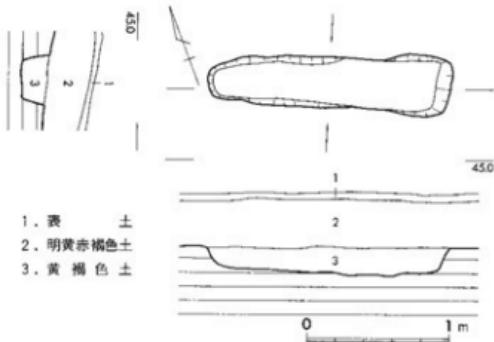
**第3主体** 墳頂平坦面上、第1主体南側約2mの地点に第1主体と平行するように検出されたもので、平坦面南隅に近い地点にある。墓壇は葬床などの施設は有しない素掘りのものである。規模は墓壇上面で長さ1.7m、幅は東側で0.4m、西側で0.3mで、下面では長さ1.55m、幅は東側で0.35m、西側で0.20mを測り、東側の幅を広くとっている。検出面からの深さは東側で0.17m、西側で0.14m、墓壇上面の標高は44.4mである。主体部の主軸はE-22°-Sと、ほぼ東西をむき、第1主体とはほぼ平行となっている。

墓壇内には黄褐色土が充満している。この土層は若干粘性を有し、白色や桃白色の地山ブロックを含んでいる。

墓壇壁は垂直に近い傾斜をもって立ち上がっている。墓壇床面で棺の痕跡などは検出できなかつた。この主体部の頭位方向は、平面形で見る限り第1・第2主体と同様東に向くものと考えられるが、墓壇底面では西側が東側

より約0.05m高くなつており、墓壇平面形で得られた所見と矛盾する。しかし、第1主体とはほぼ平行する点、平面形で東側の幅が明らかに広くなる点を重視して、頭位方向は東をとるものと考えておきたい。

この第3主体からの出土遺物もなかつた。



第123図 17号墳第3主体実測図

(2) 18号墳

17号墳から南にのびる尾根上に、隣接するように存在する古墳である。墳丘は、わずかに施された盛土がほとんど流れているよう判然としないが、直径10mに満たない小規模な円墳と考えられる。墳頂は17号墳よりも1.7m低く標高は42.8mであり、17号墳墳裾とほぼ等しい。墳丘の高さは北側の17号墳との鞍部からは0.3mにも満たないが、東・西墳裾からは1.2~1.4mを測る。墳丘は17号墳墳裾のレベルで水平に地山を削って基盤を造った後、盛土を施したものと考えられる。残存する盛土は約20cmで、上層から灰黄赤色土層、灰黄褐色土層の2層からなっている。

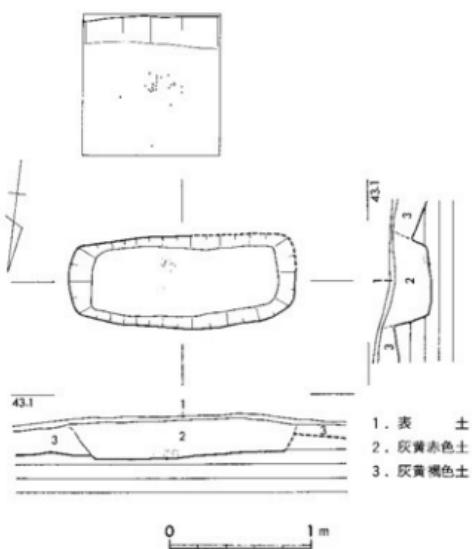
墳頂中央で素掘りの墓壙1が検出されており、これがこの古墳唯一の主体部と考えられる。主体部は盛土中から掘り込まれ、下半は地山に掘り込まれている。規模は墓壙上面で長さ1.55m、幅0.65m、底面で長さ1.30m、幅0.50mを測るものである。検出面からの深さは0.20mで、墓壙上面での標高は42.9cmである。主軸はW-17°-Sとほぼ東西にとる。

墓壙覆土は1層から成り、底面では木棺などの痕跡は検出できなかった。壁はかなり緩やかな傾斜で底にいたっている。この主体部の頭位方向は、平面形ではいずれとも決し難いが、墓壙底面では西側が東側より0.04m高くなっている、頭位は西を向くもの可能性もある。こう考えると隣接する17号墳各主体部頭位とは

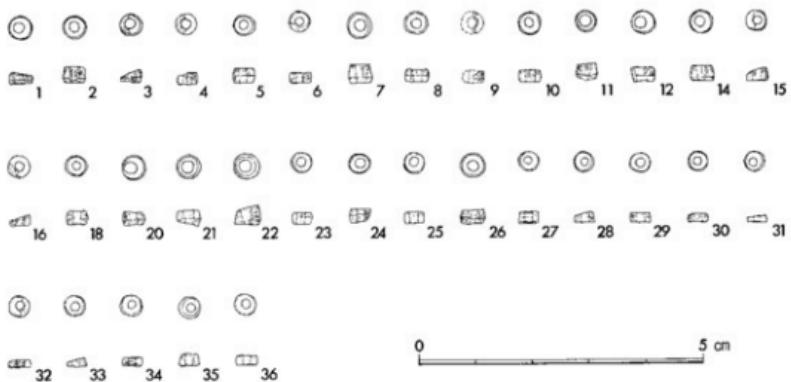
全く逆の方向をむくことになる。

墓壙内のはば中央部南寄りで白玉36個が検出された。玉は床面に接して約0.2×0.2mの範囲内に分布していた。被葬者の頭位を決定することはできなかつたが、東西いずれを頭位とするとしても、手首と考えられる部位での出土であり、腕輪として装着しているものと考えられる。

17・18号墳鞍部須恵器片が採集されているが、古墳とともになうものではない。



第124図 18号墳主体部実測図（枠内は1/16）



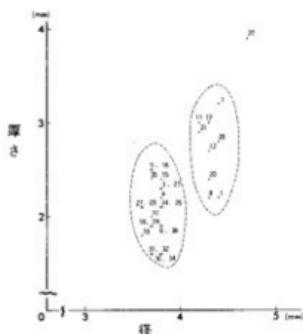
第125図 18号墳主体部出土白玉実測図（原寸）

出土遺物 主体部から検出された白玉は36個を数える。材質はいずれも緑色凝灰岩と考えられる。ただし、質感によって硬・軟2様に分類できそうである。

形態は平面円形を呈して扁平である。しかしそれぞの玉で個体差が認められ、径・厚さにはばらつきがある。また、外面に稜を有して算盤玉に近い形態のものもある。径と厚さでみると、径3.6～3.8mm、厚さ1.6～2.5mmのものと、径4.2～4.4mm、厚さ2.2～3.2mmの2群に比較的明確に分類できる。1例だけ例外として径4.5mm、厚さ3.9mmの大きな玉がある。

製作は、錐状の工具で穿孔を行なっており、いずれも一方穿孔と考えられる。外面は丁寧な研磨で平滑に仕上げられている。側面はタテ方向の研磨を主とするが、一部にヨコ方向の研磨で仕上げられるものもある。ヨコ方向の研磨をもつものは厚さが薄く、側面に稜をもたないものに多いようである。

色調は、緑色凝灰岩を材料とするため緑色系を呈するが、個体によって若干の差がある。数の上では灰味黄緑が最も多く、次いで緑味白、暗い緑、明るい緑味灰が少しある。



第126図 18号墳主体部出土白玉法量分布図

第6表 18号噴出土白玉計測表

No.	厚さ (mm)	径 (mm)			孔径 (mm)		重さ (mg)	穿孔方法	色 彩	備 考
		最大	上	下	上	下				
1	2.2	4.4	3.9	4.2	2.0	1.5	63	一方	灰味黄緑	
2	3.0	4.3	3.9	4.0	2.0	1.6	81	タ	タ	
3	2.3	3.8	—	—	1.5	1.5	35	タ	タ	外径の上下は計測不可能
4	2.2	3.8	3.3	3.7	1.4	1.4	37	タ	綠味白	
5	2.5	3.7	3.5	3.6	1.4	1.2	59	タ	灰味黄緑	
6	1.9	3.8	3.5	3.4	1.4	1.2	35	タ	タ	
7	3.2	4.4	3.9	4.1	2.0	1.6	84	タ	タ	
8	2.4	4.3	3.8	3.7	1.8	1.8	53	タ	綠味白	
9	—	—	—	—	—	—	—	—	灰味黄緑	大部分破損
10	2.0	3.7	3.4	3.2	1.4	1.2	43	一方	タ	
11	3.0	4.2	3.6	3.9	1.8	1.4	65	タ	タ	
12	2.7	4.3	4.0	3.8	1.8	1.6	65	タ	綠味白	
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破損
14	3.1	4.4	3.5	4.2	1.9	1.6	79	一方	灰味黄緑	
15	2.4	3.8	3.3	3.4	1.3	1.5	47	タ	タ	
16	1.9	3.7	3.6	3.4	1.2	1.2	30	タ	綠味白	
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破損
18	2.5	3.7	3.3	3.4	1.5	1.4	46	一方	灰味黄緑	
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	破損
20	2.4	4.3	3.6	3.7	1.6	2.1	59	一方	灰味黄緑	
21	2.9	4.2	3.7	3.8	2.0	1.5	64	タ	タ	
22	3.9	4.5	3.9	4.2	2.2	1.5	84	タ	タ	
23	2.3	3.8	3.1	3.2	1.5	1.2	44	タ	暗い緑	
24	2.1	3.8	3.4	3.3	1.5	1.4	40	タ	タ	
25	2.1	3.8	3.4	1.4	1.4	1.4	35	タ	灰味黄緑	
26	2.8	4.4	3.6	4.0	1.8	1.5	77	タ	タ	
27	2.1	3.6	3.1	3.4	1.2	1.3	39	タ	タ	
28	2.1	3.6	3.5	3.4	1.2	1.2	38	タ	明るい緑味灰	
29	1.9	3.7	3.4	3.4	1.4	1.3	38	タ	タ	
30	1.6	3.8	3.5	3.6	1.4	1.3	27	タ	灰味黄緑	
31	1.6	3.7	3.1	3.4	1.3	1.2	30	タ	暗い緑	
32	1.6	3.7	3.3	3.6	1.4	1.2	26	タ	綠味白	
33	1.8	3.6	3.4	3.4	1.3	1.2	24	タ	明るい緑味灰	
34	1.6	3.8	3.6	3.3	1.2	1.1	24	タ	綠味白	
35	2.4	3.7	3.7	3.2	1.3	1.2	40	タ	灰味黄緑	
36	1.9	3.8	3.7	3.6	1.3	1.3	43	タ	タ	

色彩はNIPPON SHIKISAI CO.,Ltd.「実用 today's COLOR/300」(商標登録 48-020856)による。

### (3) 第VI文群出土遺物

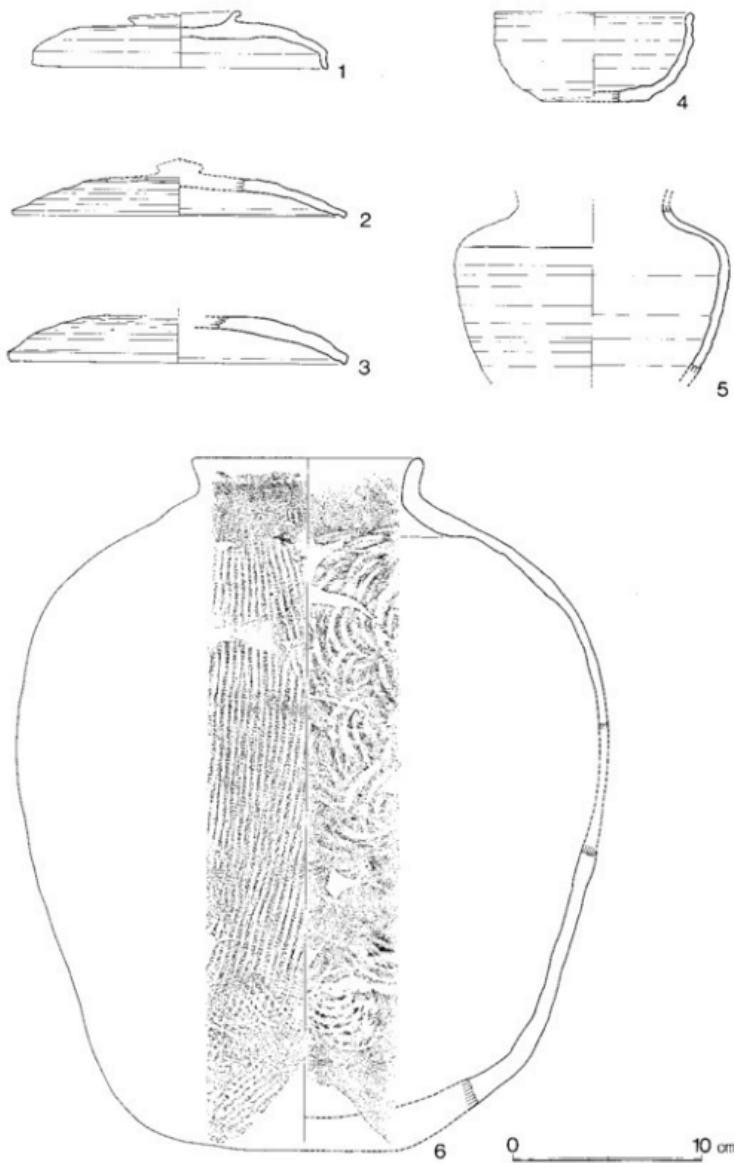
遺物は須恵器・棗玉・鉄斧である。(1)・(5)・(7)はF区、(3)・(4)・(6)・(8)はE区、(2)は17・18号墳中間の鞍部で検出された。

須恵器蓋(1)は口径15.7cm、器高3.0cmを測る。輪状つまみを有するもので、つまみは高く、端部は大きく外反する。口縁端部は直立し、わずかに外方に折れ曲がる。天井部は回転ヘラケズリの後に輪状つまみを貼付けている。胎土は粗で、焼成は良好で外面に自然釉がかかり、色調は灰褐色を呈している。蓋(2)は口径17.5cmを測る。擬宝珠状つまみがつくものと考えられる。器高は低く、口縁端部にアクセントをもつが屈曲はない。天井部に回転ヘラケズリの痕跡を残す。胎土は砂粒がやや多いが密で、焼成は良好で、色調は黒灰色を呈する。蓋(3)は口径17.7cmを測る。擬宝珠状つまみがつくものと考えられ、全体に厚手である。口縁端部は断面三角形を呈するが、鋭いものではない。大井部には回転ヘラケズリの痕跡を残している。胎土は粗で、焼成は普通、色調は暗灰色を呈する。杯(4)は口径10.2cmを測り、器高は4.8cmとやや深い。内湾して立ち上がる体部は、端部でわずかに外反する。底部は回転糸切りで切り離している。胎土は粗で、焼成は良好、色調は黒灰色を呈する。壺(5)は小形のもので、肩部に最大径をもち、14.6cmを測る。内外面とも回転ナデの痕跡を残す。胎土は密で、焼成は良好、色調は一見備前焼風のえび茶色を呈する。壺(6)は短く小さい径の口縁部をもち、体部は丸味をもつやや長いもので、底部はわずかに平底状を呈し、この部分の器壁は厚い。口径11.8cm、推定器高37.5cm、体部最大径31.0cmを測る。体部内外面にはタタキメを残し、外面には縱方向の平行タタキメを施した後、かすかにカキメを施す。内面には同心円状のタタキが残っている。胎土は砂粒少なく黒色の粒子を含んでおり、焼成は良好で肩部に自然釉がかかる。色調は青灰色を呈している。

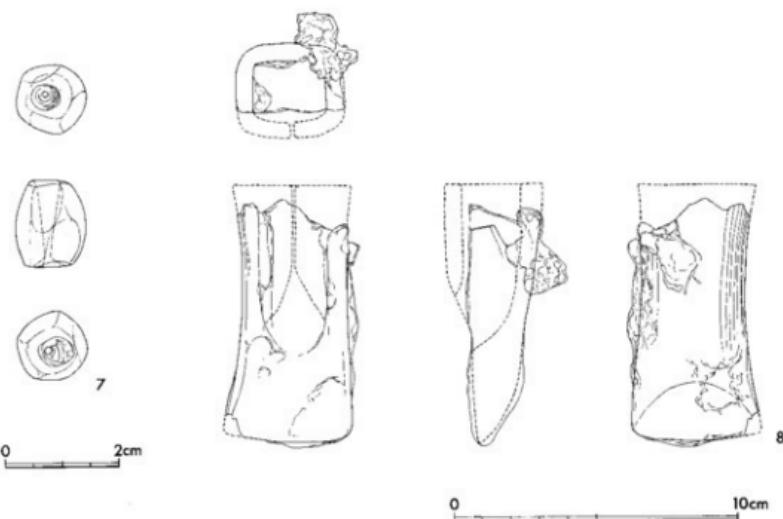
これらの遺物はその特徴から(1)が国庁編年<sup>17</sup>の第2形式、柳浦編年<sup>18</sup>第2式、(2)・(3)が国庁第4形式、柳浦第4式、(4)が国庁第3形式、柳浦第3式に属するものと考えられる。(5)・(6)の時期は不明である。

棗玉は良質の碧玉を使用するものと考えられ、暗い青緑色を呈する。全体に丸味を帯びた扁球形のもので、長さは1.36cm、径は最大で1.28cmを測る。穿孔は一方からのもので、穿孔側で孔径0.43cm、貫通側で0.12cmである。壠部径は穿孔側で0.83cm、貫通側で0.89cmを測る。外面は丁寧に研磨され、簡部は縱方向の研磨、両端付近は横方向の研磨が施されている。

鉄斧は、袋部付近が欠失している上、全体に錆化が進んでいるが、袋状の基を有する鍛造無肩式のものである。全長は9cm程度のものと考えられ、刃部幅は残存長4cmである。袋部からゆるやかに開いて刃部にいたっている。刃部断面は片刃状となっており、あるいは手斧様の用途をもつものかと考えられる。



第127図 第VI支群出土遺物実測図(1)



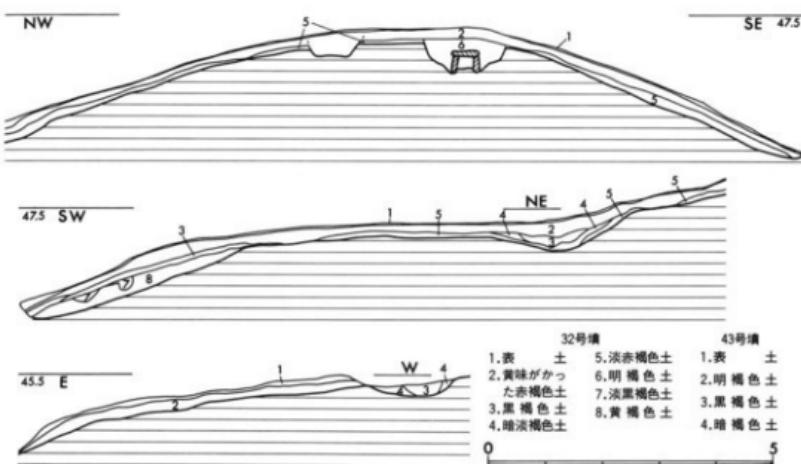
第128図 第VI支群出土遺物実測図(2) (7は原寸、8は1/2)

## 第6節 第VII支群

13・14号墳などの第V支群から東へ延びる斜面から鞍部にかけて位置し、標高は44.0mから47.5mにかけてである。調査の対象は32・43号墳だが、さらに東の尾根にも古墳が数基分布している。



第129図 32・43号墳 墓丘測量図



第130図 32・43号墳 土層図

### (1) 32号墳

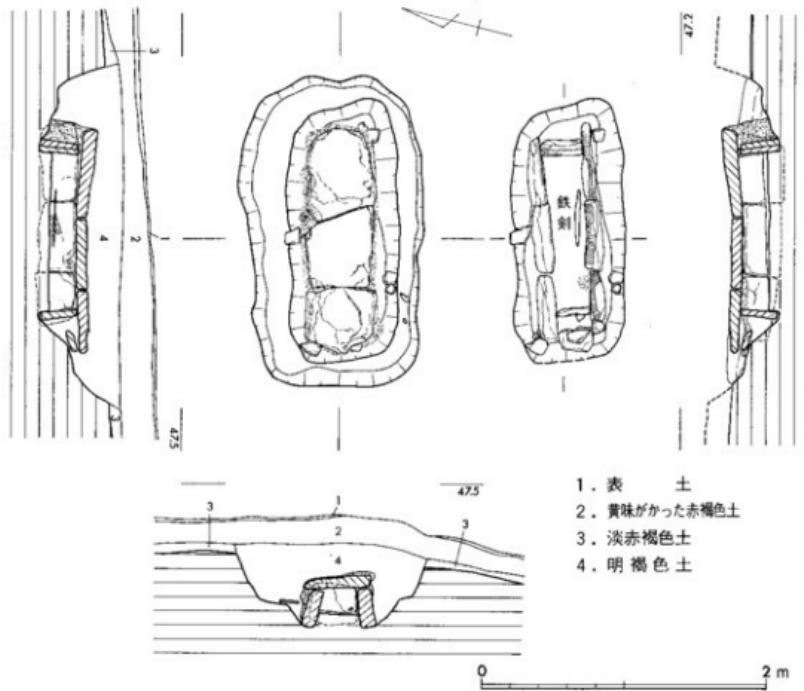
第V支群から東へ降る尾根を横断するように溝を設けることによって墳丘を区画した古墳である。墳丘北側斜面を後世の道で削られており、墳形は判然としないが、溝は直線的に掘られたもので、当初は方墳を意図していたことが知られた。斜面に整かれた墳丘で規模なども明瞭ではないが、溝の長さが墳丘一辺の長さ9.5mの墳丘と考えられる。また斜面下方では地山の上層に約0.25mの盛土層が確認され、地山の切削だけでは墳丘を完成できなかつたと考えられる。墳丘の高さは、墳頂での土砂の流失が著しいため不明だが、溝底と調査前の墳頂との比高は0.6mである。遺構検査面の標高は約47mを測る。また、墳丘に須恵器を伴う小土塚があったが、これは後世のものである。

墳頂平坦面のやや南寄りで箱式石棺1基を検出した。主軸はE-14°-Nとおおむね東西にとり、丘陵尾根方向と平行する。石棺は長辺2.2m、短辺1.2mの墓壙の中に組まれるもので、内法長1.11m、同幅は東側で0.31m、西側で0.26m、深さ0.18mと小形のものである。底面は東側の方が西側よりも0.04m高くなつておらず、棺内法が東で広くなることと合わせて頭位は東にとるものであったことが知られる。この古墳群の他の石棺例と異なり床面には櫛床がなく、削り出された地山が直接棺床となっており、床面南側側壁寄りで、切先を西に向かた状態で鉄剣1が検出された。この主体部は内法長1.1mという規模から、再葬の可能性がないとすれば、小児の埋葬のためのものと考えられる。

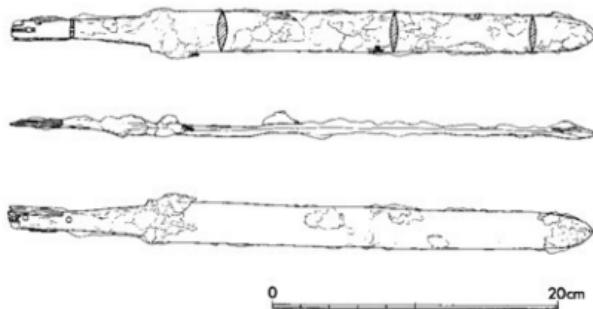
石材は、長辺に各3枚、短辺は西側では1枚、東側では2枚を重ねて使用している。蓋石は幅のほぼ等しい板材を3枚架けるものである。石材には、いずれもノミ状工具による加工痕が明瞭に残っており、幅は5cm前後である。石棺は組み立てられた後を粘土で被覆しているが、13・14号墳の石棺と比較するとその使用量は少ない。石棺と墓壙壁の間には石棺材と同様の石材片が詰められており、石棺を組み立てる際に、このような石材で棺材の安定を図ったものと考えられる。

墳頂北側では、炭化物を含む土塚1が検出されている。平面形は不整形な梢円形を呈し、長辺0.80m、短辺0.64mを測る。この土塚上面から須恵器杯を浮いた状態で検出した。また、墳丘斜面をめぐるように、径0.2m前後の小土塚12を検出している。墳丘上面と斜面の土塚はいずれも炭化物を含む同様の覆土で、時期的に近いと考えられ、ともなう須恵器から古墳築造後の遺構と思われる。

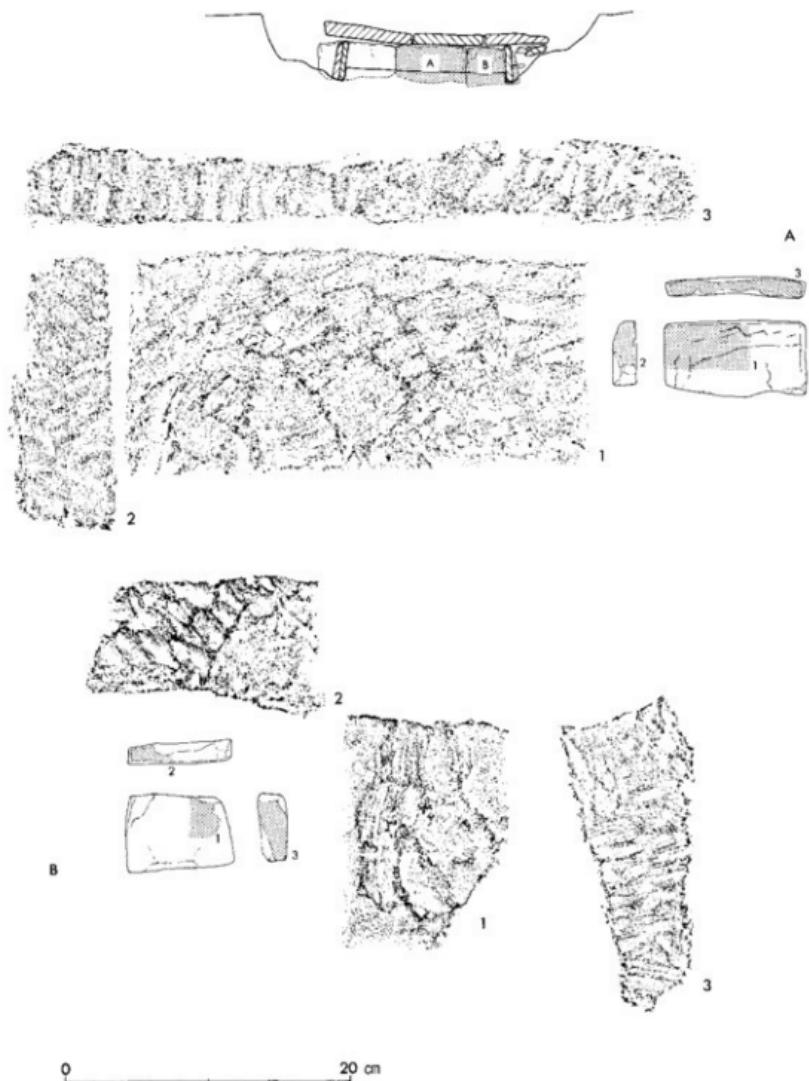
出土遺物 鉄剣(第132図)は、石棺内南側の側壁寄りで、切先を西に向けて検出された。全体に錆化が進んでいるが、全長41.0cm、刃部31.2cm、茎10.0cmである。刃部の幅は切先近くで2.6cm、茎近くで2.9cm、厚さは錆のためややふくらんでいるが、0.4~0.7cmを測る。茎の幅は刃部近くで2.1cm、端部で1.3cm、厚さは0.2~0.3cmである。茎には2個の目釘穴があり、いずれも径0.4cmである。刃部、茎部とともに木質の付着が認められ、埋納時には木製の装具をもっていたものと考えられる。



第131図 32号墳主体部実測図



第132図 32号墳主体部出土遺物実測図 (1/4)



第133図 32号墳石棺材加工痕拓影図 (1/4)

られる。

32号墳石材はいずれも工具による加工痕を残しているが、ここでは比較的良好に工具痕を残す南側壁2枚を紹介する。石棺側板中央のものをA石材、その西側に隣接するものをB石材とする。

A石材の石棺内に面するA-1面は、幅5cm前後の工具痕が残るが、最も幅の広いもので6cmを測り、これがほぼ工具の幅を示したものと考えられ、A・B両石材とともに最終的な加工はチョウナ削り<sup>(4)</sup>によると考えられる。この面での工具の動きは左上がり斜めの方向を基本とするが、進行方向は不明である。工具は1打で1~2cm進んでいる。A-2面は東側の側板と接する面で、石棺組立て後は隠れてしまう面である。A-1面と同様、幅5cm前後の工具痕が残っている。工具の動きはこの面の長軸方向で、1打で1~2cm進む。A-3面は側板上面で、上面の平坦面は幅5cmしかないため工具の幅は知り得ない。工具の動きは面の長軸方向で、1打で1~2cm進んでいる。

B石材はA石材の西に隣接しており、各面に工具痕を残している。B-1面は石棺妻側の石材と接する部分で、右上がり斜めの方向が工具の動きである。工具痕は幅5cm前後であるが、工具は1打で3~4cm進んでおり、粗い工具痕となっている。この部分はわずかにくぼんでおり、妻側の石材を受けるかすかな溝をつくるために荒い加工を加えたものと考えられた。B-2面は側板の上面で、工具痕は幅2~3cm、1打の動きで1~2cm進んでおり、丁寧な仕上げになっている。工具の動きは、この面の長軸方向に対して斜めである。B-3面は棺外に露出する面で、工具痕は幅3~4cmで2列に並んで残っている。工具の動きはこの面の長軸方向で、1打で1.0~1.5cm進む。

A・B両石材を通じて、棺の入日につるる面と他の石材と接して見えなくなる面とでは、仕上げにそれほどの精粗は認められない。ただし、石棺長手板と妻板との接合部は、長手板側に荒い加工を施し、わずかにくぼめて妻板を受ける部分を設けている点は、他の部分と異なっている。

## (2) 43号墳

32号墳の東側斜面下方で墳丘を区画する溝の検出によって確認された古墳である。しかし、墳丘や主体部は後世の道によって削りとられており、溝が残存するにすぎない。墳丘は明褐色土が1層堆積するのみで、精査したが構造は検出できなかった。溝は直線的であり、この古墳は方墳であった可能性が強く、溝の残存長は5.8m、幅1.4m、検出面からの深さ0.3mを測る。溝覆土は黒褐色土、明褐色土2層が堆積していた。

遺物は、溝覆土中にわずかに須恵器小片を含んでいたに過ぎず、時期を考えうる資料はない。

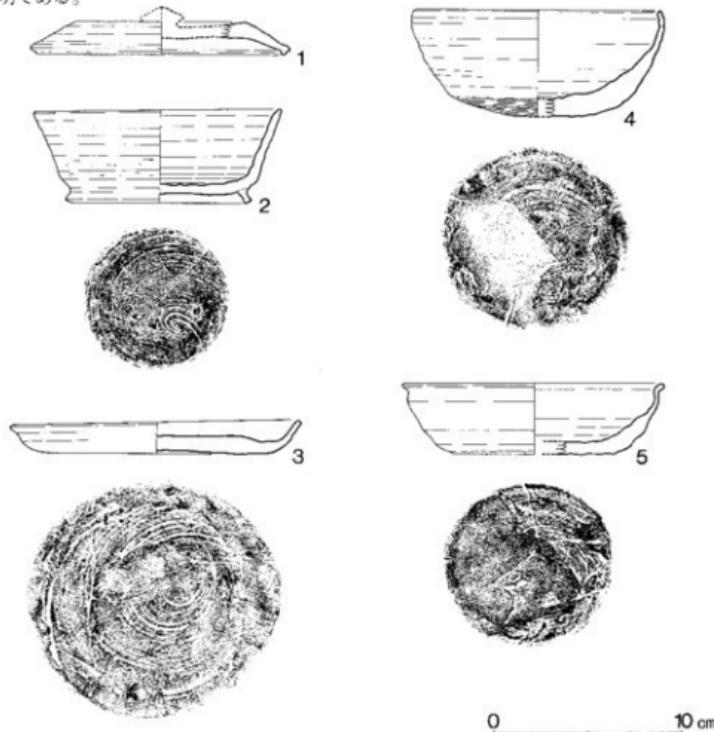
## (3) 第VII支群出土遺物

遺物は全て須恵器で、(2)は32号墳墳丘上面の炭化物上墳、他は西側溝北端付近の出土である。

蓋(1)は径13.0cmを測る。擬宝珠状のつまみがつくものと考えられ、口縁端部は断面三角形を呈する。天井部は回転糸切りで切り離した後丁寧にならでる。胎土は粗、焼成は普通、色調は暗青灰色で

ある。杯(2)は口径13.0cm、器高5.0cmを測り、低い高台、直線的に立ちあがる体部を有する。底部は回転糸切りで切り離した後なでる。胎土は砂粒が多く焼成は普通、色調は淡青灰色である。皿(3)は口径15.2cm、器高1.8cmを測り、短い口縁部をもつ。底部は器壁厚く、回転糸切りで切り離した後なでる。胎土は全体に砂質で焼成はやや不良、色調は淡青灰色である。杯(4)は口径13.1cm、器高5.7cmを測る。全体に丸味を帯びた器形で端部は内側に折り曲げ、底部付近で器壁厚い。底部にはカキメ痕を残す。胎土は密で、焼成はやや甘く、色調は褐色がかった灰色である。杯(5)は口径13.8cm、器高3.8cmを測る。やや浅い杯部は内済して口縁部にいたり端部は外反する。底部は回転糸切りで切り離した後なでる。胎土は砂質で焼成はやや不良、色調は淡青灰色である。

これらの遺物はその特徴から、(1)が国庁編平<sup>(5)</sup>の第4形式、柳浦編平<sup>(6)</sup>の第4式、(2)が国庁第3形式、柳浦第3式、(3)が国庁第4形式、(5)が国庁第3形式、柳浦第4式のものと考えられる。(4)は時期不明である。



第134図 第VII支群出土遺物実測図

## 第7節 第I支群

第I支群は当初の開発計画の対象とはなっていないと思われたが、工事が進む過程で、同支群の西端にある19号墳も計画に含まれていることが明らかになった。そこで、工事によって損われる西側墳裾部分の調査を急遽実施することとなった。

ところで、各支群構成上の特徴として、丘面的に際立った墳墓と平面的に墓域を画すのみの墳墓とが1つのセットとして存在する点を掲げておいたが、この第I支群もこの特徴を備えている。19号墳の一部が工事によって損されたとはいいうものの、ほぼ無傷の状態で残存している支群は、本古墳群中この第I支群が唯一となってしまった。そこで、19号墳の墳裾の調査結果を述べるに先立つて、第I支群の様相等についてふれておきたい。

第I支群は本古墳群が営まれている丘陵の西側端部に位置している。支群は、西方に舌状に延びる尾根の端部に営まれている19号墳、その東方へ続く42・20・21号墳、そして北方へ続く22・23・24・25・26号墳の計9基から構成されている。中でも中央に位置する21号墳は尾根全幅を占める径26m、高さ4mを測る円墳で、本古墳群中最大規模のものである。

21号墳以外はほとんど盛土を施さない、平面的に墓域を画したものである。その顕著な例は、21号墳の北に連なる22~26号墳である。これら5基は、ほぼ南北に走る馬背状の尾根をそれに直交する数本の浅い溝によって墓域が画されている。これらの溝は発掘調査によらなくても確認できるほど明瞭で、21号墳の北側墳裾に沿って1本、22~26号墳の間に4本設けられている。各溝の両脇の古墳が互に共有する形となっている。但し支群の北側端部に位置する26号墳の北辺は丘陵の鞍部をそのまま利用し、支群境線と兼ねているように思われる。外観では明らかではないが、後述する19号墳西側墳裾の処理方法から推すと、深い溝を施さず墓域北辺の形を整える程度のものであろうと思われる。

溝で区画された22~26号墳の各墓域は、おおむね尾根幅を1辺とした正方形に近いものとなっている。これらは今回工事の対象とはならなかったため調査を実施しなかったが、このような支群の様相は第III支群・第V支群にも認められたことである。

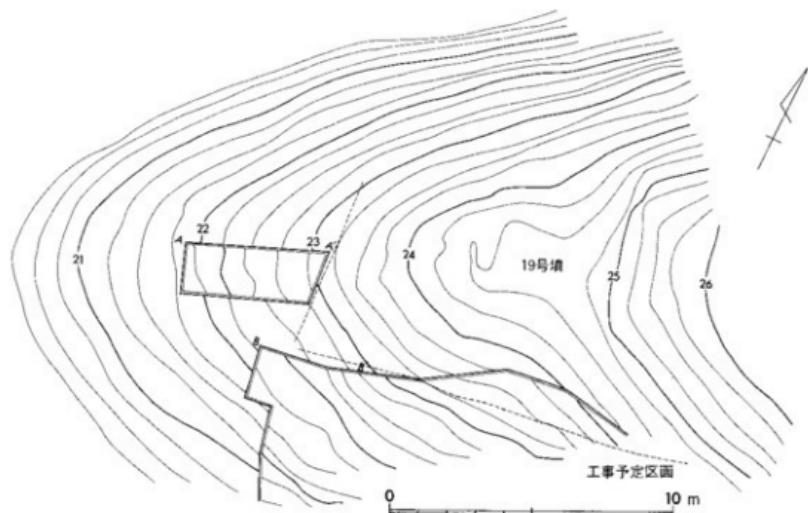
なお、19号墳・42号墳は見方によれば立面上に見えなくもないが、これは、傾斜する尾根に溝で墓域を画したため、結果的にそのように見えるに過ぎないと解される。同様な例は第IV支群の29・30・38号墳が顕著である。

このように、第I支群は調査を経ていないものの、その内容は調査を実施した他の支群の資料からおおむね予想されるものである。しかし、21号墳が他支群の盟主的なものと比較した場合きわだつて大きいことは、その内部構造・築造時期等とともに検討に値する内容といえよう。

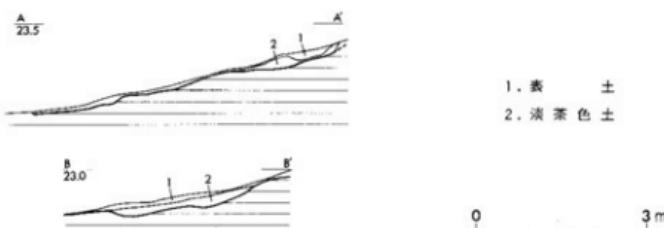
(1) 19号墳

本墳は第Ⅰ支群の中央に位置する21号墳から西に延びる舌状の尾根と、それと直交する2本の浅い溝によって方形墓域を画すもので、一辺10m、高さ1.5mを測る方墳である。

トレンチは掘削される南裾と西裾に各1箇所設定し、前者を第Ⅰトレンチ、後者を第Ⅱトレンチと呼称することとした。各トレンチとも、表土を厚さ10~15cm除去すると下は黄褐色の地山となっていた。第Ⅰトレンチでは人為的な加工は明らかにしえなかつたが、第Ⅱトレンチでは幅2.0m、深さ0.2mを測り、ほぼ南北に走る浅い溝を検出した。この溝は本墳の西域を画すものであろうと判断された。



第135図 19号墳 墓丘測量図



第136図 19号墳 土層図

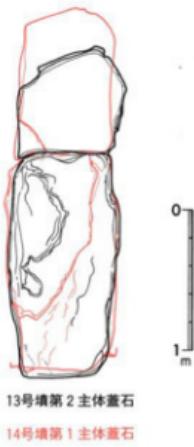
## 第5章 小 結

奥才古墳群の調査では26基の古墳を発掘したが、これらについて若干まとめておくこととする。

### 群構成

奥才古墳群の所在する丘陵尾根には自然地形によって尾根が途切れる部分が何か所かある。この地形をめやすに古墳群を7つの支群に分けることが可能である。各支群にはそれぞれ盟主墳とでも称すべき、かなり大きな墳丘をもつものがあり、こうした立面上に目だつ古墳を中心として小形の古墳がこれにつき従うような格好で各支群は構成されている。この形が最も明瞭に認められるのが第Ⅰ支群で、盟主墳と考えられる径26m、高さ約4mの円墳である21号墳を中心に、一辺約10m前後の方墳が8基つき従っている。基本的には他の支群でも同様と考えられるが、盟主墳的な規模のものが複数あったり、盟主墳に準ずる規模のものがあったりして、やや複雑な様相を呈している。各支群毎に盟主墳と考えられるものを挙げておくと、第Ⅱ支群で27号墳、第Ⅲ支群で2・3号墳、第Ⅳ支群で12号墳、第Ⅴ支群で13・14号墳、第Ⅵ支群で17号墳、第Ⅶ支群では52号墳であろう。以上の盟主墳と考えられるもののうち、調査を行った第V・VI支群の盟主墳である13・14・17号墳では主体部に箱式石棺を採用し、第Ⅳ支群の12号墳では、箱式木棺ではあるものの、大きな掘方をもつものであり、箱式石棺に準ずる主体部と考えられた。このように、支群の中心となる古墳は、墳丘だけでなく、主体部についてもその他のものを卓越する傾向がある。

各古墳間の新旧関係 遺構によって、古墳間での新旧関係が認められるものがあり、整理すると、墳丘の切合関係により、1号墳が2号墳を、38号墳が12号墳を、それぞれ前者の築造に際して後者の墳丘を削っており、明らかに前者よりも後者が古いことが判明している。また、39号墳の周溝は明らかに13号墳墳裾を意識して設けられており、39号墳を築造する際にはすでに13号墳が存在していたと考えられる。13号墳と14号墳の両墳丘の間に堆積した土層の観察によれば、13号墳覆土を切るようにして14号墳覆土が堆積しており、13号墳よりおくれて14号墳の築造がおこなわれたと考えられる。しかし、13号墳第2主体の箱式石棺蓋石の1枚と14号墳第1主体の蓋石が同一の母岩を2つ割りにしたもの的可能性が高く、これが認められるならば、土層では14号墳が新しい



第137図 奥才13・14号  
墳蓋石比較図

ことを示しているものの、その時間差はさほどのものではないと考えるのが妥当である。

#### 主体部の分類

26基の古墳について行った調査で明らかになった主体部は35基で、そのうち箱式石棺は6基、素掘りの土壙は15基を検出している。その他としては、槧穴式石室が1基、土師器の壺・甕を使用した埋葬施設が2基ある。素掘りの土壙の多くは、上槽底面で棺に使用した木棺の痕跡と考えられる溝が検出されているので、土壙内で木棺を仕組んだ箱式木棺とでも称すべき主体部であったのであろう。箱式石棺は1例を除いて、その棺底面に礫が敷かれていた。また、箱式木棺のうちでも礫床をなすものは8例が認められる。その他例外として、39号墳第1主体、34号墳がある。39号墳第1主体は、棺妻側にのみ板石を使用しており、石棺と木棺の折衷構造のものと考えられる。34号墳は、墳丘中央に掘った土壙内に頭部を切断した壺を埋納し、別個体の土器底部で蓋をしたものである。壺内には肩部まで礫がつまっており、この壺を棺として使用することは不可能と考えられ、礫とともに出土した石鉗、碧玉製および琥珀製の勾玉各1とともに注目すべき遺構となっているが、果たしてこの施設が埋葬に伴なうものか否か明らかではない。今後類例を持って検討すべきもの一つであろう。

**箱式石棺** 箱式石棺は、いずれも板状に節理する石にさらに加工を加え、それらを組み合わせて棺としている。17号墳第1主体長手側の石材のように相欠きに組み合わせたり、13号墳第1主体蓋石のように棺身と接する部分を削って段とするなど、入念な造作を施した例がある。このうち、14号墳第1主体石棺は、頭部と足部で殆ど幅が異ならず、他地域のものを含めて考えると、複数埋葬の可能性<sup>39)</sup>もあるが、全体に幅が狭く、断定するには至らない。

周辺部で箱式石棺の類例を求めるに、山形市西谷番外2号<sup>40)</sup>、邑智郡瑞穂町御草山遺跡<sup>41)</sup>、同町順庵原1号墳第1・2主体など、弥生時代に遡る可能性のあるものもあるが、これらはいずれも出雲地方西部および石見地方のもので、出雲地方東部では、弥生時代にまで遡る例は現在までのところ知られておらず、本古墳群のような箱式石棺の祖型をこの地域内で求めることはできない。

下限については、古墳時代に入ってからの類例はかなり多く、須恵器を副葬するものも知られており、古墳時代後期にまではくだることが判明している。

14号墳でみられたような整美な箱式石棺は他地域でもかなり認められ、兵庫県豊岡市カチヤ古墳<sup>42)</sup>、鳥取県鳥取市生山29号<sup>43)</sup>、京都府与謝郡加悦町作り山古墳<sup>44)</sup>、広島県安佐郡高陽町上小田古墳<sup>45)</sup>などを類例として挙げることができる。これらの箱式石棺は、板石を丁寧に加工し、棺長手板と妻板の組み合わせおよび、棺長と棺蓋の組み合わせに段あるいは、溝を掘り込む手法で、奥才古墳群の例と非常に似ている。

奥才古墳群で認められた箱式石棺6基の石材にはそれぞれ加工痕が残っている。13・14号墳では

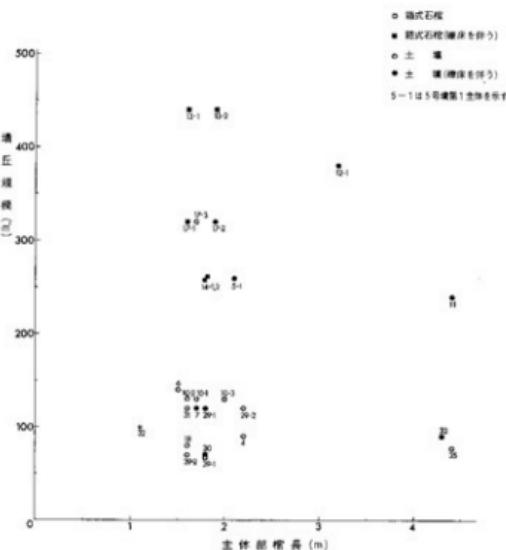
刃のある工具の痕跡をとどめず、表面平滑に仕上げられているのは、加工痕を最終的に敲打具で敲きつぶしているためと考えられる。13号墳斜面で発見された棒状の石器（第88図）は、こういった用途に使用されたものの可能性がある。17・32号墳石棺石材には刃のある工具の痕跡が残っている。これはチョウナケズリによる痕跡と考えられる。

**礫床** 石棺・木棺の床面に礫を敷きつめて礫床としたものは、13例を数える。これらは3~4mに及ぶ長いものと、2m前後のものとに二分することが可能である。これらの礫床も、その棺の構造に注目すると、ほとんどが單室の石棺や木棺の床面に礫を敷くものだが、33・11号墳では3室に区切った木棺の床面に礫を敷いたものである。また、これら礫床に敷かれる礫は、その径で大・中・小に分類することも可能である（第6章第3節参照）。礫床をもつ主体部は、比率からいえば、第IV・V支群に多いが、これはIV・V支群で支群を構成する古墳のほとんどを発掘していることによるためと思われる。

**主体部と墳丘の関係** 奥才古墳群の主体部をその墳丘の規模との相関関係で表わすと、下図のようになる。墳丘の規模を面積で表わすのは若干の問題があるが、一応の目安にはなるものと思う。この図によれば、墳丘基底面での面積が200m<sup>2</sup>以上の墳丘をもつ古墳の中心的な主体部には必ず礫床がしつらえられ、箱式石棺

も32号墳を除くすべてが、この範囲内に納まっている。また、礫床をもつ木棺でも3m以上になる長いものをもつ古墳は、33号墳を除いて墳丘規模はこの範囲内に含まれる。このように、箱式石棺および長い木棺は、一定規模以上の墳丘に伴なうようである。このことは、無作為に主体部を設けるのではなく、墳丘・主体部両者はある規格のもとに造られていることを暗示する。

**主体部の墳位** 主体部のうち墳位方向のわかるものについても、若干の例外はあるものの、



第138図 奥才古墳群墳丘・主体部相関図

規則性を認めることができる。すなわち、主体部はおおむね東を頭位としようとしていること、また6基の石棺のうち5基までが東から30度南を指向していること、砾床を有する木棺も1例の例外を除けば、真東からその北65度のうちに納まってしまうことが指摘できる。特に石棺の設置にあたっては、被葬者の頭位に強い意図があったことを窺うことができる。

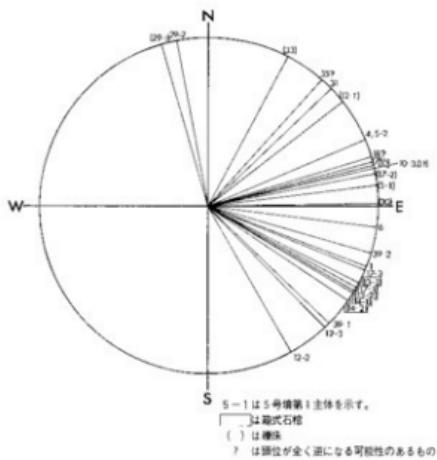
**周辺部の様相** 周辺部に目を転ずると、箱式石棺あるいは砾床をもつものは確実なものだけでも、かなり多くが知られている。鹿島町内でも砾床を有する箱式石棺では、狐堀古墳<sup>①</sup>、秋葉山

3号墳、白畠古墳<sup>②</sup>などが知られている。このことは、島根半島部において板状に簡理する緑色凝灰岩の露頭が随所に見られ、石棺に使用する石材が入手しやすかったことも一因と考えられる。砾床を有する箱式木棺では、松江市金崎6号墳、月廻2・3・7・20号墳、中竹矢S K27などが知られており、ひとり奥才古墳群だけでなく、出雲地方東部の傾向として捉えることが可能である。

#### 遺 物

奥才古墳群での遺物のうち、時期を判定しうる土器の出土は少ないが、12号墳、13号墳、34号墳から土師器壺、13号墳墳頂に連続壺として土師器壺、38号墳から土師器高杯・碗、須恵器蓋杯、1号墳から須恵器蓋杯の出土を見ている。また、古墳には伴なわないが、8～9世紀頃のものと考えられる須恵器が墳丘周辺でかなり採集されており、注意をひいた。

古墳群に伴なう土器は、その他の遺物も含めて考えると、13号墳出土の土師器壺が飯石郡一ノ刀屋町松本1号墳<sup>③</sup>前方部出土の土師器壺に形態および細部の手法で類似しており、時期的な近さを窺わせる。松本1号墳からは小形丸底壺が出土しており、畿内布留式に併行することを示すが、脚はつくものの類似した小形丸底壺は奈良県桜井市メスリ山古墳<sup>④</sup>から出土している。メスリ山古墳から出土した遺物のうち、紡錘車形石製品、鉄槍、刀子などは、奥才14号墳第1主体出土の遺物と組成で非常に似かよっている。また、これらと同様の遺物の組成をなす古墳には、三重県上野市石山古墳<sup>⑤</sup>、東京都大田区田園調布宝来山古墳<sup>⑥</sup>などがある。



第139図 奥才古墳群主体部頭位一覧図

一方、12号墳出土の上師器1号壺は、13号墳出土のものに較べて、胴部の球形化の進行、底部の丸底化、複合口縁部の突出度の低下といった点で、やや後出的なものであるといえる。また、1号墳、38号墳では須恵器の出土を見ており、この遺物が本古墳群の示す最も新しい時期の遺物といえる。

**碧玉製品** 奥才14号墳第1主体出土紡錘車形石製品、34号墳出土石劍はいわゆる碧玉製品と称されるもので、県内における類例は、前者は安来市造山1号墳出土のものが知られているが、後者については初見のものである。東接する鳥取県においても前者は最近、鳥取市生山29号墳例<sup>31)</sup>が知られるのみで、後者は東伯郡羽合町馬ノ山4号墳出土例があるにすぎない。いずれにしても山陰両県においては稀有な遺物といえよう。こうした碧玉製品については、かつて古墳時代前期の碧玉製腕飾類の分布として論じられたことがある。つまり「鍬形石・車輪石・石劍の3者の分布を比較すると、あたかもこの順に、すこしづつ、その分布はひろがっているといえる。しかも、そのひろがり方は、西の北九州地方においてよりも、東日本のはあいの方が境界線の振幅が大きい。<sup>32)</sup>」との指摘がされている。そこで、それらの分布に、これまで知られている紡錘車形石製品39例を付加してみると、この石劍の分布とはほぼ重なることが注意される。のことから紡錘車形石製品は石劍と同様な役割をもって配布された可能性がうかがえる。

**埴輪** 奥才1号墳で検出された埴輪は須恵質のもので、本古墳群では最も新しい時期になって初めて埴輪が採用されたことになる。それ以前の古墳には埴輪は全く使用されておらず、須恵質の埴輪以前のものの使用例に乏しい島根県下の状況に大約一致するものと思われる。1号墳の埴輪は窯窓で焼成されたもので、窯変が著しい。この埴輪のプロポーションや、タテハケを主体とする点、突出度の高いタガなどの特徴は、松江市岡田山1号墳、鳥取県米子市陰田35号墳出土のものに類似している。しかし、岡田山1号墳の埴輪は、2次調整としてのヨコハケをもつ個体がかなりあり、若干後出的な様相を示すものと考えられる。一方、陰田35号墳出土のものは、各部の寸法、調整の手法で酷似する個体がある上、本古墳群例のように著しく窯変したものもあり、同一の工人の手になるもの可能性がある。

#### 古墳群形成の年代観

これまでみてきたように、13号墳土師器壺は、松本1号墳出土の壺に類似し、松本1号墳の小形丸底壺に類似した脚付小形丸底壺を出土しているメシリ山古墳の紡錘車形石製品、鉄槍、刀子は、その組成で14号墳の遺物に近い。これら遺物の示す時期は、古墳時代を3期区分した際の前期後半と考えられる。13号墳と14号墳は、13号墳第2主体と14号墳第1主体の蓋石が同一の母岩を2つ削りにしたものと考えられるので、ごく近い時期に造営されたものと判断できる。この両古墳は、出土遺物に乏しい本古墳群中にあっても一応最も古い様相を示す遺物を出土している上、立地におい

ても最も眺望に秀れた古地であり、この時期をもって本古墳群の上限と考えることが可能であろう。これにひき続いて尾根上に各古墳が築造されたものと考えられるが、こういったものの一つとして、13号墳土師器壺より若干新しい特徴をもつ12号墳の土師器壺を位置づけることができよう。

本古墳群の時期の下限については、1号墳から須恵器が出土しており、これが示す時期、すなわち山陰の須恵器編年Ⅱ期<sup>35)</sup>、古墳時代後期初頭と考えることができる。なお、調査区城外の21号墳は墳丘の立ちあがりが急で高く、周辺の地形からは、墳丘のかなりの部分を盛土していると思われ、本古墳群で検出した主体部とは異なるものである可能性があることを付記しておく。

このようにみてくると、本古墳群は古墳時代を3期区分した際の前期後半に築造が始まり、少なくとも後期初頭までは築造が続いたものと考えられる。

主体部・遺物からみた被葬者の系譜と階層 本古墳群で検出された主体部のうち、箱式石棺は6基であるが、さきにもふれたように出雲地方東部では現在までのところ、奥才古墳群をさかのぼる時期の箱式石棺の例は知られていない。よって、この地域内でその祖型を求めるることは困難であり、本古墳群で箱式石棺を採用するにあたっては、他地域の影響を受けている可能性がある。また、本古墳群でみられたような狭長な箱式木棺は、但馬、丹後地方などでも認められており、こうした類例も含めて今後検討する必要がある。

遺物については、14号墳出土の方格渦文鏡と同巧の鏡は九州に分布の中心があるが、紡錘車形石製品、石剣は畿内を中心とした配布が想定される遺物である。紡錘車形石製品は、安来市造山1号墳、石剣は鳥取県東伯郡羽合町馬ノ山4号墳に類例があり、さらに14号墳出土の素環頭大刀は、安来市大成古墳、大原郡加茂町神原神社古墳<sup>36)</sup>でも出土している。これらの類例がある古墳は、山陰でも屈指の前期大形古墳で、奥才古墳群の遺物は、こういった大形古墳被葬者を経由したものか、畿内の政治勢力からの直接的な配布を想定すべきかは現段階では明らかにできないが、こうした遺物について渡辺貞幸氏はすでに「これらのうち石製品（＝紡錘車形石製品、石剣；引用者）は、古墳時代前期の後半の時期に畿内の政治勢力の手によって作られ、地方首長に配布された宝器であり、鏡についても同様のことが言える。従って、鹿島町域の小首長がこの時期に直接畿内の政治勢力と結びついたことを示して」いるという評価を下しておられる。

一方、奥才14号墳で検出されたような整美な箱式石棺は、他地域にも類例が求められ、広島県安佐郡高陽町上小田古墳、京都府与謝郡加悦町作り山古墳、兵庫県豊岡市カチヤ古墳、鳥取県鳥取市生山29号墳などをあげることができる。これらはいずれもその時期を前期末から中期前半に求めうるもので、槨床を伴ない、比較的豊富な副葬品を有する点で共通する。こうした各地での様相を勘案するならば、直接か間接かはわからないものの、畿内から配布された遺物をもつ整美な箱式石棺が、一地域をこえて広い分布を示すのは、ただ遺物のみの配布があったのではなく、箱式石棺とい

う墓制も同様にもたらされるものであったという可能性が指摘できる。こうした石棺の被葬者は、その有する遺物も内行花文鏡など小形の鏡や紡錘車形石製品、石劍などといったもので、同時期の竪穴式石室や粘土壺の被葬者の彷彿三角縁神獸鏡や獣形石、車輪石といった遺物には及ばないものの、地城の中では相対的に高い位置を占め、その基盤とする単位地域では卓越した階層の者であったと考えられる。

#### 周辺の集落遺跡・古墳群との関係

現在知られている周辺の集落遺跡で、奥才古墳群と同時期に営まれているのが判明しているのは佐太前遺跡<sup>101</sup>のみであるが、奥才古墳群からの眺望はこの遺跡の方向には悪く、むしろ講武平野の方に秀れでおり、未確認であるが、丘陵の縁辺部や微高地に当時の集落が存在したものと考えられる。奥才古墳群が存在することから推測されるこうした集落は、少なくとも古墳時代前期後半までには、講武平野の水田化によって、かなりの生産力をもちうるまでになっていたのであろう。そして、奥才古墳群の築造が始まる前期後半には、直接もしくは間接に畿内勢力のもとに組みこまれたものと考えられる。しかし、遺物は採集されていないものの、古式の前方後方形を呈する名分丸山<sup>1</sup>号墳、柄鏡形の前方後円墳である鶴瀬山<sup>6</sup>号墳などが知られており、これらが奥才古墳群に先行するものならば、これら集落群が畿内勢力に組みこまれた時期はもう少しさかのほる可能性も残している。いずれにせよ、今後は集落遺跡の動向をふまえた古墳群の検討が大きな課題であろう。

#### その他

以上記してきた事実・展望以外に調査・整理中に注意されたことを列記しておくこととする。

○14号墳第1主体出土の内行花文鏡の鏡面に虹の蟠が付着しており、被葬者を石棺内に葬ったのがこういった虫の成長する季節であったことが推測できる。同様に虹の蟠の付着していた例として、岡山県勝田郡勝央町落山古墳の箱式石棺、群馬県群馬郡箕郷町の天の宮古墳出土の桂甲<sup>102</sup>が知られており、特に後者では蟠から繩の同定が行われ、埋葬の季節についても言及されている。

○38号墳副溝底で発見された須恵器蓋杯、土師器高杯、碗の出土状態は、他の調査例でもしばしば認められている。八束郡東山雲町守床<sup>1</sup>号墳、同八束村増福寺<sup>2・23・24</sup>号墳、鳥取県倉吉市上神西山<sup>1</sup>号墳などが知られており、墳丘への土器の供獻形態として指摘できるとともに、それぞれがごく近い時期のものであることも注意されてよい。

○第Ⅲ支群7号墳の南側斜面で検出された竪穴住居状遺構は、その覆土内に多くの炭化物を含んでいたにもかかわらず、全く遺物の出土を見ておらず、この遺構での生活の痕跡は甚薄である。遺物がないため、時期については不明であるが、あるいは、古墳群での埋葬にかかわる儀式を行った場である可能性も考慮される。

第7表 奥才古墳群遺構一覧表(1)

支群	名 称	墳丘		施 装		出土遺物(数量)	備 考
		墳形	規模(m)	構	規 模 (m)		
	19号墳	方	辺7	溝			
	42号墳	方					一部調査
	20号墳	円	径11.5				未 調査
1	21号墳	円	径26				
	22号墳	方	8×9				
	23号墳	方	8.5×9				
	24号墳	方	8×9				
	25号墳	方	7×9				
	26号墳	方	8×9				
	27号墳	方	16.5×15				
	37号墳	方	10×7				
II	40号墳	円?	12×11				
	41号墳	方	6×5				
	36号墳	方	8×5.5				
III	1号墳	円?	径10	溝	整穴式石室	3.2×11 E-21°-S	石室内／須恵器蓋 杯3対、管玉3、 切子玉1、鍬刀1、 刀子1 壇内／埴輪8個体 以上、須恵器甕1
	2号墳	方	17×11.5	チラス			
	3号墳	前方	全長19m	後方			
IV	4号墳	方	11×8	溝	墓 墓	2.2×1.2 E-23°-N	
	5号墳	方	16×16	溝	①箱式木棺(櫛床) ②墓 墓	2.1×0.6 E-23°-N	棺内/刀子1
	6号墳	方	13×11	溝	箱式木棺	1.5×0.4 E-7°-S	棺内/鉄片1
	7号墳	方	12×10	溝	箱式木棺(櫛床)	1.7×0.5 E-15°-N	石枕(八の字)
	28号墳	方?	径10m 以下	溝			
	8号墳	方	12×10	溝	櫛床か		
	9号墳	方	11×10	溝			
	10号墳	方	14×9	溝	①墓 墓 ②墓 墓 ③墓 墓(二段掘り) 吉 墓	1.8×0.5 2.0×0.7 2.4×1.1 1.2×0.8×0.5	E-5°-N? E-7°-N? E-13°-N 五輪塔を伴う
	整穴住居 状遺構		11×4				
V	11号墳	方	16×15	溝	箱式木棺 (櫛床、3室)	4.4×0.5 E-13°-N	棺内/刀子片2、 鐵錐片1
	29号墳	方	12×10	溝	①箱式木棺(櫛床) ②墓 墓	1.8×0.5 2.2×0.8	N-16°-W N-11°-W
	30号墳	方	8×8	溝	箱式木棺? (櫛床)	1.6×0.5 E-1°-N	
	38号墳	方	8×7.5	溝			石枕(八の字)
	12号墳	方	21×18	溝	①箱式木棺(櫛床) ②墓 墓(二段掘り)	3.2×0.4 2.4×1.8(残存)	E-38°-N S-30°-E
							棺内/鉄錐1、 刀子片1

第8表 奥才古墳群遺構一覧表(2)

支群	名 称	墳 丘		埋 施 設			出土遺物(数量)	備 考	
		墳形	規 模(m)	外觀 構造	様 造	規 模 (m)	主 隊		
IV 文群	12号墳	方	21×18	溝	③箱式木棺	1.5×1.0(残存)	E-44°-E	棺内/珠文鏡1、管玉3 埴立/土師器器2	
	31号墳	方	12×10	溝	墓壙(二段掘引)	2.9×0.7	E-44°-N		
	44号墳	方?	6×5						未調査
	45号墳	方	15×15						
第V支群	46号墳	方	9×6						
	39号墳	方	近8	溝	①箱式木(石)棺	2.8×1.0	E-44°-S		木棺・石棺折衷 墓壙上面に石材破片
	妻挖基				②墓 壁	1.6×0.5	E-16°-S		
					上塙内で窓2を連結する				
VI支群	13号墳	方	23×19	溝	①箱式石棺、磯床	1.6×0.4×0.3	E-27°-S	埴丘/土師器壹	
					②箱式石棺、磯床	1.9×0.5×0.3	E-30°-S		墓壙上面に石材 破片
	14号墳	円	径18	溝	①箱式石棺、磯床	1.8×0.5×0.3	E-30°-S	棺外/鐵劍1、素環 鐵大刀1、銅鏡1、 鐵鏡1、鍔1、刀子1、 用途不明鐵器1 棺内/内行花文鏡1、 方格通文鏡1、 軸錐車形石製品1、 齒牙、骨片 調査/刀子1	
					②箱式石棺、磯床	1.8×0.4×0.3	E-34°-S	棺内/鐵劍1、鐵劍 1、刀子1、鐵鏡3	墓壙上面に銀
VII支群	石蓋土壙				土壤	0.8×0.7			14号墳墳體
	33号墳	方	14×6	溝	箱式木棺 (櫛床、3室)	4.3×0.4	N-28°-E		
	34号墳	方	11×8	溝	土壤内に土師器壹 を埋納する	0.8×0.6		土壤内/土師器壹2 壙内/石鏡1、勾 矢2、鏡文鏡1、針	
	35号墳	方	10×8	溝	墓 壁	4.4×0.8	N-42°-E?		
第VIII支群	15号墳	方	11×10	溝					未調査
	16号墳	方	20×15	溝	不 明				溝状通構
					埴壙、箱式木棺	2.2×10	E-41°-N		
	17号墳	円	径20		①箱式石棺、磯床	1.6×0.5×0.2	E-29°-S	棺内/刀子1、 鐵針1、頭頂骨	石枕
IX支群					②箱式木棺、磯床	1.9×0.4	E-11°-N		標石あり
					③墓 壁	1.7×0.4	E-22°-S		
	18号墳	円	径10以下	溝	墓 壁	1.6×0.7	W-17°-S	墓壙内/白玉36	
	32号墳	方?	9.5	溝	箱式石棺	1.1×0.3×0.2	E-14°-N	棺内/鐵劍1	
X支群	43号墳	方?		溝					
	47号墳	方	近12						未調査
	48号墳	円?	径6						
	49号墳	方	近5						
群	50号墳	方	近5						
	51号墳	方	7×5						
	52号墳	方	16×10						

## 注

- 1) 「センサス結果等から見た市町村の構造変化」 島根県農林統計協会 1982年
- 2) 山本清「佐太講式貝塚」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
- 3) 山本清「佐太前遺跡」(同上)
- 4) 金剛丈夫「島根県八束郡古墳遺跡」(『日本考古学年報』 16 1963年)  
金剛丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の顔面」(『人類学雑誌』 第63巻3・4号 1962年)
- 5) 「志賀奥遺跡」 鹿島町教育委員会 1976年
- 6) 『吉田考古』 16 島根大学考古学研究会 1983年
- 7) 『名分丸山古墳群測量調査報告書』 鹿島町教育委員会 1981年
- 8) 山本清「山陰地方村落古墳の様相」(『島大論集』 7 1959年)
- 9) 注 8) と同じ。
- 10) 『吉田考古』 15 島根大学考古学研究会 1979年
- 11) 注 10) と同じ。
- 12) 1978年鹿島町教育委員会発掘調査。
- 13) 注 6) と同じ。
- 14) 加藤義成「校注出雲國風土記」 1965年
- 15) 中澤四郎「講武村條里の研究」(『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年)
- 16) 非上寛司「佐陀莊」(『島根県大百科辞典』 山陰中央新報社 1982年)
- 17) 『氏穴通跡発掘調査概報』 鹿島町教育委員会 1983年
- 18) 香川正矩「陰徳太平記」 1712年
- 19) 多久和文書。勝田勝年編「鹿島町史料」 鹿島町 1976年
- 20) 「萩浦廻間跡、天正6年2月3日の条」 注(19) 訳。
- 21) 『清原太兵衛』 清原太兵衛顕彰会 1948年
- 22) 類例に京都府竹野郡紙野町の岡2号墳がある。「岡第2号墳」(『京都府文化財調査報告』 第22号 京都府教育委員会 1960年)
- 23) 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』 所収 1971年)
- 24) 川西安平「円筒埴輪伝説」(『考古学雑誌』 第64巻2号 1978年)
- 25) 注 24) と同じ。以下埴輪の調整方法も同氏の分類に準じている。
- 26) 注 24) と同じ。
- 27) 注 23) と同じ。
- 28) 注 23) と同じ。
- 29) 注 23) と同じ。
- 30) 岩井清足、町田章「奈良時代の遺物」(『出雲国序跡発掘調査概報』 松江市教育委員会 1970年)
- 31) 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」(『松江考古』 3 1980年)
- 32) 注 23) と同じ。
- 33) 注 30) と同じ。
- 34) 注 31) と同じ。
- 35) 『松本古墳発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1963年 P22第12図1のものに類似点を認めることができ  
る。
- 36) 第3次学術調査隊「宗像沖の島」宗像大社復興期成会 1979年

- 37) 松浦省一郎「いわゆる彷彿方格丁字鏡について」(『小山市史研究』第5号 1983年)で集成がこころみられ、九州に出土例が多いことを根拠に「九州に同式鏡の製作地を求める可能性を示唆しているのはなかろうか」とされている。しかし、西田守夫、花谷清両氏からは、中国製の可能性もあるとの教示をいただいた。西田氏には、東京国立文化財研究所の馬淵久大氏の分析結果として、14号墳出土の方格渦文鏡は、中国華南の鉛を使用しており、中國製のものの可能性が高く、今後、種々の方法で分析する必要があろうとの教示をいただいている。
- 38) 岩崎車也「いわゆる韓玉製筋縫車について」(『木代作・先牛喜寿記念論文集』3 1974年)
- 39) 注 38) と同じ。
- 40) 注 38) と同じ。
- 41) 山本清・岩成博『新修島根県史 通史編1』島根県 1968年 P87岡版。
- 42) 室賀照子氏の教示によれば、琥珀製とは遠隔しないとのことで、今後の分析結果をまつこととしている。
- 43) 注 30) と同じ。
- 44) 注 31) と同じ。
- 45) 和田晴吾「古墳時代の石工とその技術」(『北陸の考古学』 石川考古学研究会会誌第26号 1983年)
- 46) 白玉36個を連鎖したとしても7.5cmを測るにすぎず、腕をめぐらせるることは不可能である。同様な事情は、岡山県総社市殿山古墳群でも認められ、「もしめぐらすとすれば組ばかりが目立つことになる。」とし、石製玉類との間に竹製玉が存在したことを想定されている。(『殿山遺跡・殿山古墳群』 岡山県文化財保護協会 1982年)
- 瀬川芳則「竹珠考」(『古代学研究』94 1980年)
- 47) 注 30) と同じ。
- 48) 注 31) と同じ。
- 49) 注 45) と同じ。
- 50) 注 30) と同じ。
- 51) 注 31) と同じ。
- 52) 岡山県総社市殿山古墳21号墳第1主体部や鳥取県鳥取市糸谷3号墳2号石棺などでは、石棺内に複数の人骨が遺存していた。前者は『殿山遺跡・殿山古墳群』 岡山県文化財保護協会 1982年、後者は『糸谷古墳群 第2次発掘調査概報』 国府町教育委員会 1980年による。
- 53) 門脇俊彦「西谷古墳群」(『出雲・上総治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』 島根県教育委員会 1980年)
- 54) 「御幸山弥生式墳墓調査概報」 塙町教育委員会 1969年
- 55) 門脇俊彦「順慶原1号墳について」(『島根県文化財報告』第7集 1971年)
- 56) 『半坂吉古墳群・辻遺跡 兵庫県文化財調査報告』第18冊 兵庫県教育委員会 1983年
- 57) 『生山古墳群発掘調査現地説明会資料』Ⅲ 鳥取市教育委員会 1984年 ただし、この例は竪穴式石室内に納められた箱式石棺である。
- 58) 梅原末治「桑村飼底子山・作り山古墳の調査(下)」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊 京都府教育委員会 1933年)
- 59) 本村栄章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳調査報告」(『広島考古研究』第2号 1960年)
- 60) 注 6) と同じ。
- 61) 「御津貝塚横穴群発掘調査報告書」Ⅰ 鹿島町教育委員会 1984年
- 62) 注 6) と同じ。
- 63) 『史跡金崎古墳群』 松江市教育委員会 1976年
- 64) 松本岩雄「寺床1号墳開拓資料一覧」(『松江考古』5 1983年)
- 65) 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ 島根県教育委員会 1983年

- 66) 注 35) と同じ。
- 67) 「メスリ山古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第35巻) 横原考古学研究所 1977年
- 68) 注 38) と同じ。
- 69) 沢田咲光・西岡秀雄「山岡調布宝来山古墳の研究」(『史誌』15号 1981年)
- 70) 注 41) と同じ。
- 71) 注 57) と同じ。
- 72)『山陰の前歴古墳文化の研究』1 山陰考古学研究所 1978年
- 73) 小林行雄「古墳文化とその伝播」(『帝塚山考古学』No.1 1968年)
- 74) 注 24) と同じ。
- 75) 鹿田35号墳出土の埴輪については、米子市教育委員会杉谷愛象氏の御好意により、実見させていただいた。
- 76) 注 23) と同じ。
- 77) 小林行雄「福岡県糸島郡一戸山村田中鏡子塚古墳の研究」福岡県教育委員会 1952年
- 78) 落岡法暉「第2編 加茂町の古代」(『加茂町誌』 加茂町 1984年)
- 79) 渡辺真幸「守床1号墳の諸問題」(『松江考古』5 1983年)
- 80) 注 3) と同じ。
- 81) 注 7) と同じ。
- 82) 注 6) と同じ。
- 83)『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会 1983年
- 84) 小林晴治郎・上田宏亮「上野箕輪天の宮古墳出土の埴について」(『古代学研究』6 1952年)
- 85)『守床遭跡 発掘調査の概要—A地区—』東出雲町教育委員会 1982年
- 86)『昭和56年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う 増福寺古墳群発掘調査報告書』八云村教育委員会 1982年
- 87) 倉吉市教育委員会森下哲哉氏の御教示による。

#### 増刷補注

1. 報告書刊行後、34号墳出土遺物の琥珀製勾玉の産地と土師器壺内に付着していた赤色顔料について化学的分析を行った。結果、琥珀製勾玉は岩手県久慈市産の琥珀と同定され、土師器壺内の赤色顔料はベンガラで、遺物の周辺には少量の水銀朱が散布された可能性が指摘されている。詳しく述べは、赤沢秀則・西山要一・室賀照子・竹中 亨・安田博幸・土井礼子「島根県鹿島町奥才34号墳出土遺物の化学的分析」(『島根考古学会誌』第3集 1986年)を参照いただきたい。
2. やはり報告書刊行後実施した奥才古墳群主体部壺の水洗選別作業において、29号墳第1主体部壺中から下図の勾玉が出土したので掲載する。勾玉はわずかに緑色を帯びた灰色を呈し、碧玉製と考えられる。頭部にわずかに丸味をもち、胴部・尾部に向けて次第に細くなつており、尾部の先端を欠く。断面は橢円形である。長さ1.52cm、厚さは頭部で0.47cm、胴部で0.45cm、尾部で0.31cmを測る。孔は2方穿孔によるもので、孔径は0.17cmと0.18cmである。



29号墳第1主体部壺上勾玉(1/1)

# 第6章 特別寄稿

## 第1節 出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室助教授 井上 晃考

### (1) 14号墳第1主体部 残存骨

残存骨をみると、骨盤（仙骨）と四肢骨があり、骨の大きさ、厚さから大腿骨と上腕骨の一部（いずれも左右の別不明）と歯牙片が少数ある。一般的には、鏡の付近には埋葬者の頭部がきて、下方に四肢骨が残存して異例である。

被葬者は、石棺内に死後間もなく伸展位で埋葬されたものであるならば、保存の良否は別として骨は骨格順に一定の長さと間隔をもって散在する。残存骨の配置具合から、恐らく、死後ある場所で一定期間「<sup>15</sup>」の後で、残存骨をこの石棺内に再埋葬した疑いがある。

#### 残存骨

1. 四肢骨 1) 大腿骨の一部（左右不明）  
2) 上腕骨の一部（左右不明）
2. 骨盤（仙骨）の一部
3. 歯牙片 少数

歯牙は定形のものは1個もなく、破損した歯牙片が少数あるが、部位は同定できない。これらの歯牙はすべて永久歯である。破損した歯牙片の特徴から、ある程度判明するのを列記すると、次の通りである。

上 下 頭	歯牙名	左右別	部 位	歯牙の咬耗度
上	大臼歯	左	第1か第2の大臼歯	咬頭はなく歯冠部は水平化
不明	大臼歯	不明	不明	々
上	小白歯	不明	不明	咬頭の摩耗は軽度
下	小白歯	不明	不明	々

#### 1. 性 別

性的特徴を示す部位が残存していないので、全く不明である。

#### 2. 年 齢

年齢推定は頬蓋冠の縫合、下顎骨の縫合、歯牙の崩出とその咬耗（摩耗）度、恥骨結合面の年

歯的変化らを総合的に加味してなされる。本資料は、破損した歯牙片しかない。

これらの残存歯牙の歯冠部の咬耗度をみると、大臼歯の咬頭はすべて摩耗して水平化しているが、小白歯では咬頭の摩耗は極めて軽度である。一般に、加齢について歯牙は全般的に摩耗していくものであるが、本資料の大臼歯はかなり摩耗しているが、小白歯では摩耗が極めて軽度であることから、ある程度の個体差を考慮しても、高齢者ではなく壮年者が推定される。

### 3. 身長

完形の四肢骨（上肢骨、下肢骨）が、全くないので不明である。

### 4. 血液型

完形の歯牙がなく、破損した歯牙片のみであり、また残存骨も風化が著しく、脆弱化してもろく、かかる資料は血液型活性の消失がみられるので、血液型検査には不適であるため割愛する。

### 5. その他

特記すべき事項はない。

以上から、次のように鑑定する。

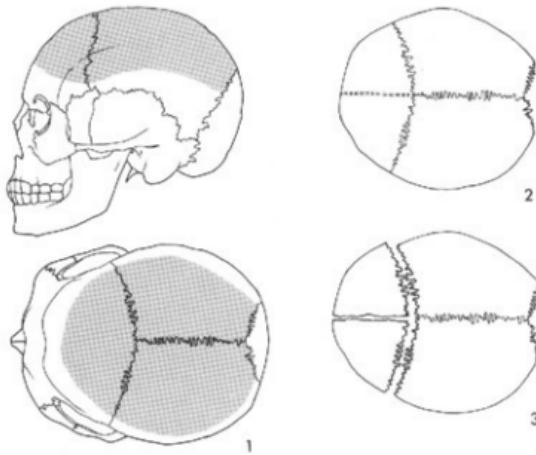
性別は不明、年齢は壮年者が推定される。身長、血液型は不明である。

(2) 17号墳第1主体部 残存骨

石棺内には4個の骨と多数の歯牙が残存していた。残存骨は頭蓋骨の一部で、残存歯牙はすべて永久歯であるが破損したものが多い、骨質はかなり厚いが、風化のため脆弱化しており、骨の海綿組織内には植物の毛細根毛が無数浸潤している。歯牙は歯冠部のみ残存するが、かなり破損、消失して部位の不明のものが多い。骨の色調は黄褐色～茶褐色調を呈し、歯牙は茶褐色調を呈し、きわめてもろい。

被葬者は石棺内に仰臥位の状態で埋葬されたことが推察され、残存骨の位置と石棺の大きさ、さらに残存歯牙に重複した歯牙がみられないことから、恐らくは1体が埋葬されたものと考えられる。

残存骨は第140図1に示す部位に相当し、第140図2に示す前頭部の正中部が破線の所で左右2つに破損して、第140図3のようになつたものである。頭頂部の矢状縫合が離開しており、頭頂部からの左右の側頭部、後頭部にかけての部位を示している。また、前頭部の冠状縫合面のきれこみがはっきりしないが、ここで前頭部と頭頂部が大きく離開した状態になっている。頭蓋骨の前頭部から左右の側頭部にかけて、植物の毛細根毛が無数付着し、頭蓋骨の外側と内側の海綿組織にも毛細根毛が一杯浸潤している。頭蓋骨の厚さは0.4～0.6cmである。矢状縫合面の距離（前頭部の冠状縫合との交叉点から後頭部の人字縫合との交叉点までの距離）は9.2cmである。



第140図 17号墳第1主体部出土頭蓋骨図

## 1. 性 別

資料の頭蓋骨と歯牙は、肝心の性的特徴を示す部位が残存していないので不明である。

## 2. 年齢

本資料には完形の骨、歯牙がないが、検討することにする。

### 1) 頭蓋冠の大きさ、厚さ

頭蓋冠の厚さは0.4~0.6cmであり、厚さは充分あるが、全体的にみて残存頭蓋冠の大きさは小さく、年少者のものと推定される。

### 2) 頭蓋冠縫合

とくに頸頂部の矢状縫合は離開しかけているが、その縫合面の切れ込みが鋭く、年少者のものと推定される。矢状縫合面の距離は、成人では約11cm前後であるのに、本資料骨では9.2cmと短く、年少者のものと推定される。

### 3) 歯牙の萌出からの年齢推定

残存歯牙は破損歯牙が多く、特に歯根部はほとんど消失しており、歯冠部が残存していく部位のはっきりしているのをあげると、第9表に示した通りで、すべて永久歯である。生後5~6年で乳歯と交代して永久歯が萌出し始め、乳歯は脱落していく。12~15才ですべて永久歯となる。しかし、第三大臼歯（智歯）は通常18~25才位までに萌出するが、中には欠如することもありうる。第三大臼歯の萌出があれば一応成人域と見なされる。本資料で確認できたのは第二大臼歯の萌出までであり、この萌出時期は平均13~14才（10~14才）とされている。残存歯牙の咬耗（摩耗）はほとんどみられない。これは永久歯が生えかわってまもないことを意味する。

第9表 残存歯牙とその歯列

歯式	8 7 6 5 4 3 2 1	上	1 2 3 4 5 6 7 8
施	第一	第二	第三
第一	第二	第三	第四
第二	第三	第四	第五
第三	第四	第五	第六
大	大	大	大
大	小	小	小
大	小	切	切
大	小	切	切
白	白	白	白
白	白	白	白
齒	齒	齒	齒
齒	齒	齒	齒
齒	齒	齒	齒
齒	齒	齒	齒
8 7 6 5 4 3 2 1	下	1 2 3 4 5 6 7 8	
8 7 6 5 4 3 2 1	右	1 2 3 4 5 6 7 8	
8 7 6 5 4 3 2 1	左	1 2 3 4 5 6 7 8	

さらにこれを番号だけにすると、

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

右	上	顎	左
8 (7) (6) 5 (4) 3 2 1	1 2 (3) 4 5 (6) (7) 8		
8 7 (6) 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8		

○：部位が明確な歯牙

以上、頭蓋冠から年少者が推定され、歯牙からは永久歯の生えかわった時期に相当し（第三大臼歯は未だ萌出せず）、推定年齢は13～14才位である。

### 3. 身長

完形の四肢骨が1つでも残存していればその者の性別・左右別の一定の係数を乗じて身長推定は可能であるが、本資料からは不可能である。しかし、先に年齢推定の項で歯牙の萌出程度から13～14才位と推定したので、これから身長を推定することにする。

年齢と身長とは一定の相関関係がある。古墳時代人の小児の年齢と身長に関する文献がないので、参考までに、現代人の小児の年齢と身長を列記して検討することにする。

被葬者は13～14才と推定したので、現代人の小児では平均で、13才の男子155.3cm、女子150.6cm、14才の男子161.9cm、女子152.6cmである。初葬者が、死後まもなく伸展位で埋葬されたと仮定すれば、石棺の大きさ（内径、長径）155cmに入る程度の身長を有する者となる。伸展位の場合、上下にある程度の余裕を考慮すると、一応、155～（10～15）とすると、140cm前後となる。

身長は時代によってかなりの差がみられる。古墳時代人は縄文時代人よりも高く、

先史時代、歴史時代を通じて一番大きい身長をもつ（平木 1972年）といわれ、現代人とはほぼ同程度か、それよりも少し低い程度である。小児の場合文献がないが、ほぼ同じ傾向がみられるものと考えられる。しかし、戦後の小児の身長は著しく増加しているが、古墳時代人の小児の場合、発育環境は決してよいとは考えられず、同年齢の場合でも、現代人の小児の身長よりもさらに1～2才低くみた方が妥当かも知れない。

こう考えると、被葬者は現代人の小児の11～12才に相当し、身長は140cm代（程度）になる。この場合、石棺内に伸展葬の場合でもある程度の余裕をもって安置できるし、石棺の大きさから検討しても矛盾しないように思われる。

### 4. 血液型

陳旧資料の場合、硬組織の骨、歯牙から血液型の判定がなされるが、特に歯牙は堅く骨よりも一般的に保存がよく、型判定が可能なことが多い、本資料の頭蓋骨と歯牙は風化が著しく脆弱し

第10表 性別・年令別の身長（cm）

才	男	女	才	男	女
1	80.8	79.1	9	131.0	130.6
2	89.3	88.5	10	137.5	137.3
3	96.0	95.2	11	141.2	141.0
4	102.7	102.5	12	148.0	146.7
5	108.7	107.4	13	155.3	150.6
6	114.6	114.2	14	161.9	152.6
7	120.9	119.2	15	166.3	153.8
8	125.8	125.0	20	167.7	153.5

（厚生統計〔25(9)：昭和53年〕による）

ており、歯牙は歯冠部と歯根部が離断しており指圧にて容易にこわれる位もろい。かかる資料では経験上、血液型資料が消失していることが多く、血液型判定には全く不適当であるので割愛する。

### 5. 発光分光分析による朱の分析

石棺壁、骨等に朱の付着の有無を検査するために、石棺内外の資料（No.1～13）について検討した。結果は第11表に示すように、朱の主成分として考えられる水銀・鉛・鉄のうち、水銀・鉛は全く検出されず、鉄はいずれの資料からも検出されたが含量が少なく、特に有意の差は認められない。結論として、有意の差は認めたいが、風化による朱（酸化鉄・ベンガラ）の消失をある程度示唆する成績が得られたにとどまる。

第11表 発光分光分析による多元素同時測定

	Hg	Cr	Al	Ca	Ni	K	Co	Tl	Zn	Na	Sn	Cd	Ag	Cu	V	Pb	Mg	Fe	Mo	Mn	Se	P	Si	B	As
水	ク	ア	ル	ニ	カ	コ	チ	電	ナ	ス	カ	鋼	バ	鉛	マ	鉛	モ	マ	リ	ケ	ホ	ヒ			
口	ミ	シ	リ	ミ	ク	リ	バ	タ	ト	ド	ド	ナ	ダ	ジ	ネ	リ	ン	ジ	ネ	ン	チ	イ	ウ		
墨	ウ	ム	ム	ム	ム	ム	ケ	ウ	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム		
1) 第一主体 石棺内碌床の土	-	-	#	tr	-	tr	-	-	tr	tr	-	-	+	-	+	-	+	-	+	+	+	+	+	-	
2) 第一主体 石棺内碌床の土	-	-	#	tr	-	-	-	-	tr	+	-	-	-	-	tr	+	-	+	+	+	+	+	-		
3) 第一主体 石棺内碌床の土	-	-	#	+	-	tr	-	tr	-	+	-	-	+	tr	-	+	+	tr	tr	-	+	+	-		
4) 第一主体 石棺壁面	-	-	#	tr	-	-	-	tr	+tr	-	-	-	tr	-	-	+	-	+	-	tr	+	+	-		
5) 第一主体 石棺壁面	-	-	#	-	-	tr	-	-	tr	+tr	-	-	+	-	-	tr	+	+	+	+	+	+	tr		
6) 第一主体 石棺壁面	-	-	#	+	-	+	-	+	tr	tr	-	-	tr	-	-	+	+	tr	+	-	+	+	-		
7) 第一主体 石棺周囲の土	-	-	#	tr	-	-	-	-	tr	-	-	tr	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	-		
8) 第一主体 石棺主体部周囲の土	-	-	#	-	-	tr	-	-	tr	-	-	-	-	-	tr	-	+	+	+	+	+	+	-		
9) 第一主体 石棺内頭蓋骨表面 (頭頂骨部)	-	-	#	-	-	-	-	-	+	1	4	-	tr	tr	-	-	+	tr	#+	+	#+	+	-		
10) 第一主体 石棺内頭蓋骨内面 (頭頂骨部)	-	-	#	+	冊	-	tr	-	tr	tr	tr	-	-	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+		
11) 第二主体 碳床の土	-	-	#	#+	-	-	-	tr	+	-	-	-	tr	-	#+	+	-	+	#+	+	+	+	-		
12) 第二主体 碳床の土	-	-	#	-	-	tr	-	tr	+	-	-	-	tr	-	+	-	1	-	tr	#+	tr	-	-		
13) 第二主体 拡内の土	-	-	#	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	+	tr	#+	+	#+	tr		
鉄 Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	-	-	#	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	#+	-	tr	-	tr	#+	#+	-		

注：表中、含有量の多いものから「#」「#」「+」「+」の順で「tr」は痕跡的に認められるもの、「-」は全く検出されないものを示す。

以上から、次のように鑑定する。

性別、血液型は不明、年齢は13～14才位と推定される。身長は不明であるが、あえて推定すれば140cm程度となる。

## 第2節 出土鏡の非破壊分析

奈良国立文化財研究所 遺物処理研究室 沢田正昭

青銅鏡を非破壊的方法で分析する場合には、表面を覆う綠青サビを通して測定することになり、さびでない地金部分だけを測定することは容易ではない。したがって、非破壊分析といえば、青銅鏡の表面サビの分析を意味し、それは遺物本来の組成を示すとは限らない。しかし、青銅鏡表面のサビの特性を事前に検討することによって、かなり信頼できる測定値が得られる。<sup>(1)(2)</sup>

奥才古墳群出土の青銅鏡は、12号墳第3主体から出土した①珠文鏡、14号墳第1主体出土の②内行花文鏡、③方格渦文鏡、34号墳出土の④捩文鏡の4面である。これらの青銅鏡を覆っているサビは、大きく次の2つのタイプに分けられる。ひとつは、塩基性の炭酸銅を主体とするサビで、青銅鏡表面を被覆している。他のひとつは、非晶質のサビで青銅鏡の主要成分となる銅、鉛、そして錫を含んでいる。この種のサビ部分では、銅成分が外表面に溶出して含有量が低くなっている。そのため、銅に対する鉛や錫の相対量は多くなってあらわれる。実際には、錫の含有量が20%であった青銅鏡でも、サビの周辺では40~50%などと高い数値を示すことになる。銅のほかに、鉛・錫成分も含まれる後者のタイプのサビでは、錫の含有量が極端に多くなってあらわれるものの、それは青銅鏡本来の組成の特長を表現し得ることがわかっている。

奥才古墳群出土の青銅鏡にみられるサビには、鉛や錫をほとんど含まないタイプのサビもみられるが、それらは比較的少なく、青銅鏡表面をうすく覆っているにすぎない。そのため、大半の測定箇所は鉛・錫成分を含んだサビ部分や腐食があり進展していない部分である。したがって、本試料の場合、螢光X線分析法によって青銅鏡本来の組成成分の特長を知ることができると判断した。

測定の方法は、青銅鏡表面に直径20mmの円形窓の付いたチタン製の板を密着させてX線の照射範囲を一定に保つようにした。また、各試料については複数箇所を任意に選んで測定した（第13表参照）。なお、螢光X線分析の測定条件は次のとおりである。

印加電圧-電流：40kV-20mA

X線管球：タンゲステン対陰極

検出器：シンチレーションカウンター

分光結晶：フッ化リチウム

走査速度：1°/min

螢光X線分析では、銅(CuK $\beta$ 線、87.44°2θ)、鉛(PbL $\gamma$ 線、24.07°2θ)、そして錫(SnK $\alpha$ 線、14.03°2θ)のX線相対強度比を求め、試料相互を比較検討した。第12表は、青銅鏡試料②内行花文鏡における11箇所からの測定値を示している。また、11箇所の鉛-錫成分の測定値をX-Y座標

に描くと、第141図のようになる。測定点はほぼ比例的な関係を示している。この回帰直線（すべての測定点からの距離の和が最小になるような原点を通る直線  $y = ax$ ）を求め、その勾配  $a$ （回帰係数）を得た。それは、青銅鏡の主要成分のうちの鉛に対する錫の含有量比を表現し得る数値に近い。

各試料におけるすべての測定値について、試料②内行花文鏡の場合と同じように回帰直線を求め、第13表に示した。表には、各々の試料について測定された箇所の数、螢光X線分析による鉛成分 ( $PbL\gamma / CuK\beta$ ) と錫成分 ( $SnK\alpha / CuK\beta$ ) の全測定値の平均、および、第141図に示すような回帰直線の勾配  $a$  値を示している。第13表によれば、青銅鏡試料①、③は勾配  $a$  値が大きく、鉛に比して錫の含有量がかなり多いことを示している。勾配  $a$  値が最も低いのは試料②の場合で、錫の含有量が他の試料にくらべて少ないことがわかる。このように、勾配  $a$  値から、試料の組成成分を相対的に比較することができる。

なお、第12表における測定値に近い値を持つ青銅鏡を参考資料として取りあげた。第14表には、京都府出土の⑥捩文鏡と⑧獸首鏡についての螢光X線分析の測定結果を示している。これらの資料は原子吸光分析法による定量分析もおこなわれている。⑥捩文鏡の場合には、11箇所の測定値から算出した回帰直線の勾配  $a$  値が3.14であった。鉛-錫成分を示すX線強度の全測定値の平均は、1.41-3.61である。また、同試料の原子吸光分光分析法による組成成分は、銅：61.6%、鉛：5.1%、錫：21%である。これと近似の螢光X線分析結果を示す青銅鏡は①珠文鏡と③方格渦文鏡で、これらの錫含有量はかなり多いことが推測される。また、参考資料⑩に近い測定値を示したのは、②内行花文鏡、④捩文鏡であり、これらの試料に含まれる錫の量は他の試料にくらべてかなり低いことがわかる。

以上のように、非破壊的手法による分析でも、ある程度まではその材質的特長を推定することが可能である。青銅鏡の表面にあるサビの種類やその腐食の度合などを考慮に入れて、さらに、測定試料数を増やして統計的な処理をおこなえば、非破壊分析の精度も増し、信頼性もいちだんと高めることができる。

箇所	鉛成分 ( $PbL\gamma / CuK\beta$ )	錫成分 ( $SnK\alpha / CuK\beta$ )
1	0. 7 0	0. 4 0
2	0. 2 8	0. 1 9
3	0. 3 4	0. 2 0
4	0. 6 4	0. 5 6
5	0. 3 7	0. 2 2
6	0. 2 4	0. 1 6
7	0. 3 8	0. 2 5
8	0. 4 1	0. 2 8
9	0. 6 3	0. 4 2
10	0. 3 0	0. 1 8
11	0. 1 9	0. 1 1

第12表 内行花文鏡のX線分析

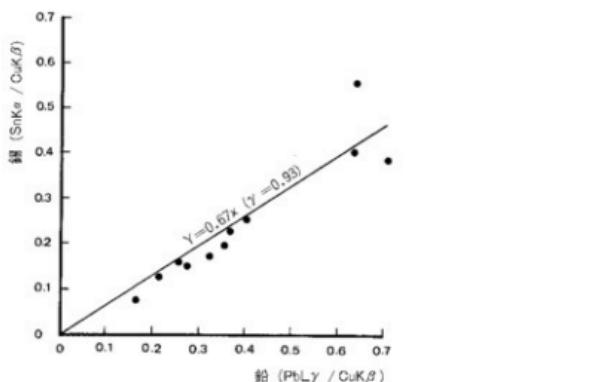
但し、 $PbL\gamma$ 、 $CuK\beta$  のフルスケール  $1 \times 10^5$  C.P.S.  
 $SnK\alpha$  のフルスケール  $2 \times 10^4$  C.P.S.

試料名	測定箇所 (n)	鉛成分平均値 (PbLγ / CuKβ)	錫成分平均値 (SnKα / CuKβ)	回帰直線Y=ax (勾配a値)
①珠文鏡	6	1.62	5.23	3.31
②内行花文鏡	11	0.41	0.27	0.67
③方格渦文鏡	13	0.39	1.76	4.47
④捩文鏡	9	0.31	0.61	1.89

第13表 X線強度比と回帰直線

試料	組成成分(%)			螢光X線分析			勾配(a)
	(銅)	(鉛)	(錫)	測定箇所(n)	鉛成分(PbLγ / CuKβ)	錫成分(SnKα / CuKβ)	
捩文鏡	61.6	5.1	21.0	11	1.14	3.61	3.14
獸首鏡	73.2	5.3	11.7	13	3.73	6.14	1.65

第14表 参考資料2面の組成とX線分析値



第141図 内行花文鏡のX線分析

注

- 1) 沢山正昭「青銅遺物の組成とサビ—サビ層と地金層における主要成分の変動—」(『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983年)
- 2) 沢山正昭「青銅鏡にみられるサビの構造と組成」(『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』—総括報告書— 1984年)

### 第3節 奥才古墳群の石材について

島根県立松江北高等学校教諭 三島 欣二

#### 1. 1号墳竪穴式石室の石材

サンプルは、下記に示す5点についてであるが、ほとんどが凝灰質砂岩でしめられていることから、石質を構成する石材もほぼこれによると考えられる。この凝灰質砂岩は、島根半島一帯に広く分布する堆積岩で新生代新第三紀（約1,000万年前）に海底火山活動によって噴出した火山灰を主体にして、軽石や火碎物が混じるいわゆる緑色凝灰岩（グリーンタフ）の一部である。この石材は、やや砂粒が多く含まれるので凝灰質砂岩とした。この種の岩石は柔らかくて加工しやすく、成形したときにきれいに仕上がる。ただし、風化作用に弱いので変色（白～灰色）したり、表面からぼろぼろと崩れる欠点をもっている。

第15表 1号墳石室石材一覧表

サンプル番号	岩 石	特 徴
1	凝灰質砂岩	転石、黒色頁岩蹠を含む。硬い。
2	頁 岩	灰色で硬い。
3	凝灰質砂岩	
4	タ	粗粒で部分的には礫岩状、風化が著しい。
5	タ	細粒である。風化が著しく赤褐色。

#### 2. 箱式石棺の石材

13号墳、14号墳、17号墳、32号墳の5基の古墳に納められた7基の石棺より取られたサンプルについて調査した。前述の1号墳石室を構成する石材と同一の緑色凝灰岩（グリーンタフ）が用いられている。石棺によって若干の差異が認められるのは、石材が切り出された場所の違い、また同じ場所でも岩体の部分による違いから生じたものであり、本質的には同一とみなしてよい。

第16表 箱式石棺石材一覧表(1)

古 墳	石棺番号	石棺部位	岩 石	特 徴
13号墳	1	蓋 石	凝灰質砂岩	硬いが変色が進んでいる。
タ	タ	棺 身	タ	細粒で緑色をしている。
タ	タ	タ	タ	細粒で層理が明瞭である。表面は風化が進んでいる。

第17表 箱式石棺石材一覧表(2)

古墳	石棺番号	石棺部位	岩 石	特 徵
13号墳	2	蓋 石	凝灰質砂岩	やや風化が進む。
タ	タ	棺 身	タ	軽石・礫を含む。
14号墳	1	蓋 石	タ	細粒で層理が明瞭。
タ	タ	棺 身	タ	
タ	2	蓋石・棺身	タ	
タ	タ	棺 身	細粒硬砂岩	頁岩の熱変成による。
17号墳	—	棺 身	凝灰質砂岩	細粒で軽石を含む。
32号墳	—	棺 身	凝灰岩	風化が進んでいる。
39号墳	—	棺 身	凝灰質砂岩	細 粒

## 3. 主体部床面の円礫

主体部に円礫が敷かれていたのは、10基の古墳に納められた13の主体部である。この礫についての特徴は、1～2cm程度の小礫を中心とする主体部、径2～3cm程度の中礫を中心とする主体部、径4～5cmの大礫からなる主体部の3グループに大別できる。

次に礫を構成する岩石は、黒色頁岩が主体をなし、全体の70%強を占める。次いで流紋岩で約20%、その他は玄武岩や不明のものである。この礫質からみると、鳥根半島の海岸で拾い集められたものであることは間違いない。

第18表 主体部床面の円礫一覧表

区 分	礫の直径	特 徵	古 墓 (主体部番号)
小	1～2cm	円摩がよくて丸い。	5号墳(1)、13号墳(1)・(2)、14号墳(1)・(2)、17号墳(1)、33号墳
中	2～3cm	円礫に円板状のものが混じる。	12号墳(1)、17号墳(2)、29号墳、30号墳
大	4～5cm	厚さ1cm程度の円板状のものが中心となる。	7号墳、8号墳、11号墳

## 4. 34号墳の土師器壺中の礫

礫は角礫が主体であり、石棺・土壤底面の円礫とはその様相を異にする。礫質は、流紋岩、緑色凝灰岩、網紋砂岩、黒色頁岩等であり、主体は流紋岩である。粒径は2～3cm程度から5～7cm程度のものまで混じる。

第19表 34号墳土師器壺中の礫質一覧表

礫 質	体積比(%)	特 徹
流 紋 岩	約 60	比較的角がとれて円滑のすんだものがみられる。優白色で表面の凹んだ部分は褐色のものが付着。
緑 色 凝 灰 岩	約 15	風化がすんでいるが、凝灰岩の特徴が少し残っている。ほとんどが角礫である。
細 粒 砂 岩	約 15	優黑色であるが表面は風化している。硬い。
黒 色 真 岩	約 8	黒色頁岩の特徴がよくみられる。表面は新鮮である。

# 図 版





航空写真 奥才古墳群周辺



1 · 2 · 3 · 4 · 5 · 6 · 7 · 8 · 28号填迄景



1 · 2 · 3号填近景



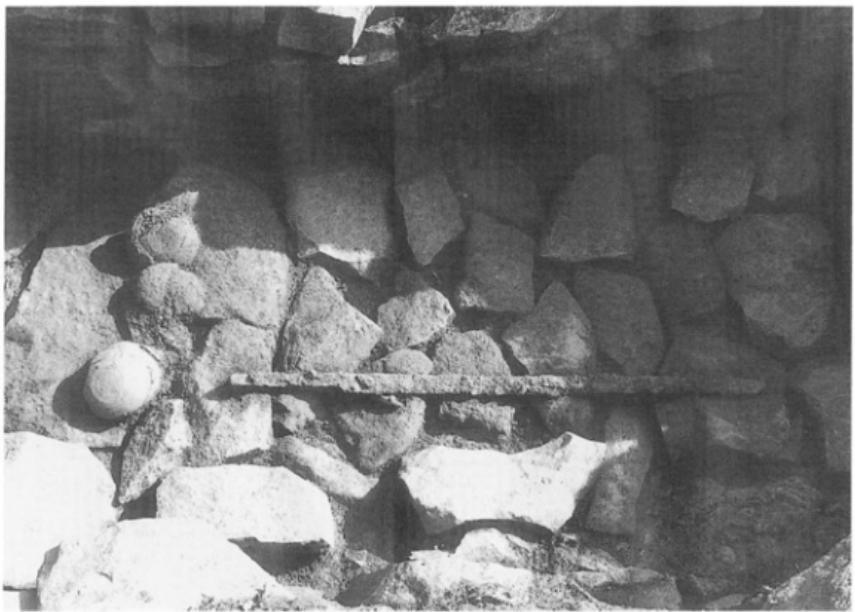
1号墳全景 北より



1号墳周溝内須恵器出土状態



1号墳竪穴式石室 西より



1号墳竪穴式石室内遺物出土状態



1号墳竪穴式石室構築状態①



②



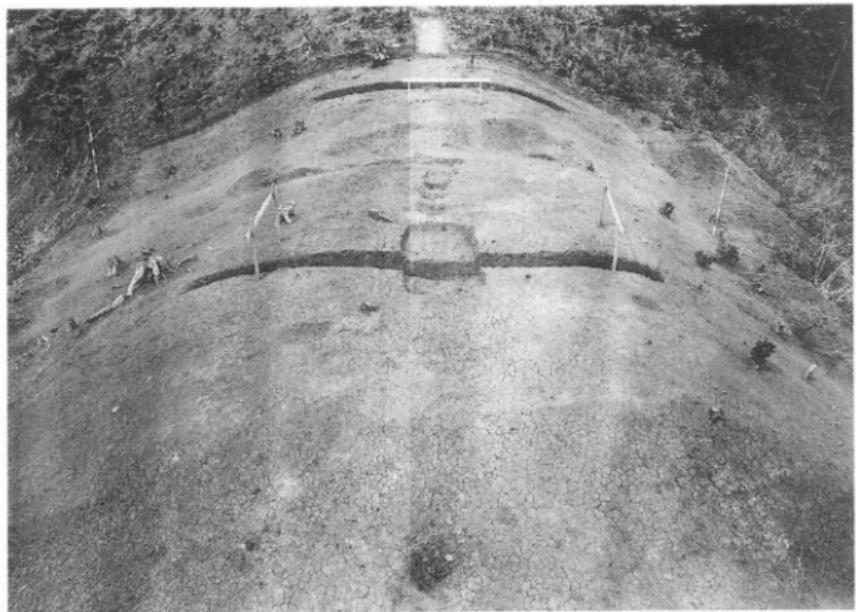
③



4・5・6・7・8・28号墳遠景 調査前



4・5・6・7・8・9・10・28号墳遠景 調査後



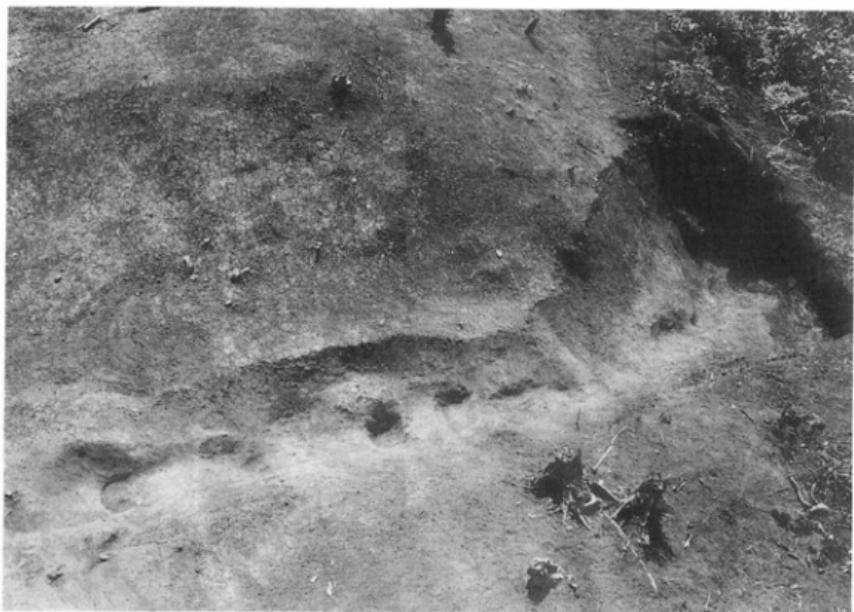
4号墳全景 東より



4号墳主体部



5号墳第1・第2主体部



階段状遺構



6号墳墳丘土層断面



6号墳主体部